別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（教育学部学校教員養成課程）

科目区分				授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通教育科目	教養科目群	基礎教養科目	初年次演習	初年次演習	大学での自律した学修へ転換を図るため，市民社会の形成者として求められるコミュニケーション能力，論理的思考や情報検索の方法をはじめとするスタディスキルを習得するとともに，４年間の専門的職業人に向けた学修をどう捉えて意味づけ，意欲的・計画的・反省的に進める必要性を理解することを目指す。多様な知見や経験，能力を持つゲスト講師により提供される全学共通での講義と，それと系統性を持たせた教育単位毎の専門性に根ざした講義・演習活動を通して，学生の言語的表現力，情報読解・分析力，集団討議力，協働作業力などを育む体験的な学修を展開する。	
			キャリアデザイン科目	キャリアデザインⅠ	自分のキャリアをデザインすることの意義や目的を理解するとともに，これからどのようなキャリア形成をしていきたいのか，他者との対話など活動を通して考えていきます。また，いくつかのワークを実施したりビジョンを可視化することを通じて，これから４年間の生活を自分でマネジメントできる力を身に付けることを目標とします。 キャリア・デザインについての基礎的な知識については，講義形式を中心に学習を進めます。また，自らの経験を振り返ったり将来の目標を描いたりすることに関しては，教員養成課程，教育支援専門職養成課程両者が共に学ぶことやグループワーク形式で講義を行うことを通して，多様な価値観の存在に気づくことを目的とします。 さらに，ゲストスピーカーによる講演や対談，映画鑑賞などを行い，人生の先輩方のキャリア形成についてお話を伺うことで，自らのキャリア形成を考えるヒントとします。	
				キャリアデザインⅡ	「キャリア」（人生･生涯）は，選択および選択の結果生じる役割の連鎖によって形成されますが，それを自律的に構築するためには，自分自身と自分がこれから進む世界を正しく認識して進路（役割）選択を行うとともに，自らが選んだ進路（役割）に適応することが求められます。 本授業では，「キャリアデザインⅠ」を基盤としつつ，「仕事と自分」について考えます。特に，労働・職業世界について多角的に理解した上で，教育専門職の魅力や社会的意義について考え，自らの職業観を形成します。また，グループ・ワーク等を通じて社会人として必要な汎用的能力を培うとともに，教育専門職として求められる資質・能力を把握して自己の課題への認識を深め，キャリア・パスの明確化をはかります。また，キャリア形成に大きな影響を与える要因の１つである「ジェンダー」にも着目し，働くこととの関連から検討します。	
			課題探求科目	市民リテラシー	活気ある市民社会の存立は，それを構成する諸個人の主体性にこそ負うている。そのような主体性ある個人に求められる一連の資質（知識・教養，エートス，知的能力など）を一括りに「市民リテラシー」と称するならば，そのような資質の養成こそが，この市民リテラシー科目の目標とするところである。本科目では，具体例を挙げるならば，倫理・歴史・ナショナリズム・ジェンダー・環境・メディアなど，市民社会で繰り返し問い返されるトピックが取り上げられ，それらのトピックを巡って授業が展開されることになる。	
				多文化リテラシー	「他者」の価値観とその背景にある歴史や文化を学びつつ，「自ら」の価値観を問い直し，客観的に捉えることができるようにするためのスキルを身に付けていく。講義の前半は，生活様式や社会習慣，ものの考え方などについて，日本と異文化との比較も行いながら，文化の多様性や国際性について知見を広げていく。後半では，テーマを決めて，より深く文化や歴史，哲学について追究していくことによって，さまざまな文化における価値観・世界観・歴史観への理解を深めるとともに，それらを通して物事を広く捉える視点や考え方を養っていく。	
				科学リテラシー	本講義は次の３つの側面の能力を身に付けることから構成されている。科学的知識または概念：科学的な思考のあり方の基礎を習得する。数学・物理学・化学・生物学・地球科学・天文学などの手法，論理体系・発想方法を理解する。科学的プロセス（科学的能力）：科学的知識に裏付けられた基本的原理（仮説）から出発し，論理的考察を重ね，結論に到達する思考方法を養う。状況認識と科学的態度：科学と技術が関係する社会や日常生活を認識でき，思慮深い一市民として科学が関連する諸問題を理解する力を養う。	
				ものづくりリテラシー	「もの」を作るときには，「もの」の必要性から（問題発見能力），それを具現化する手段を考察し（論理的思考力），その為の技術を習得して（問題解決力），「もの」を作る。そして，できた「もの」について，批評する事（批判的思考力）で新たな「もの」を生み出す原動力となる。そこで，本講義では問題発見能力→論理的思考力→問題解決力→批判的思考力と言った，「ものづくり」における一連の流れを理解し，経験を通してそれらの能力を習得する。自分の生活を「意識的に振り返り」，自分の行動や判断を倫理的に強化する姿勢を身に付ける事を目標とする。	

（共通教育科目）	（教養科目群）	教育実践教養科目	教職教養科目	教職論	授業目標は，教職の意義や役割を学ぶとともに，職務内容及び現代の子どもや学校の現状と問題を理解して，教職への関心を高め，自分の教職観と将来の教師像を明確化することにある。授業形態は，基本的に講義形式で進める。但し，受講生がグループ討議等を通して自分の意見を発表する機会や，学校や教職の現状に関する映像を視聴して自分の考えをまとめる活動を，適宜実施する。授業計画は，まず，教職の意義について，教職観の変遷や現代期待される役割等を紹介する。第二に，教師の職務内容について，学級経営・学校運営，生徒指導とキャリア教育，多様な児童生徒の理解と支援，いじめ・不登校対応等を紹介する。第三に，教師の現代的課題として，教師の多忙とストレス及び不祥事問題，保護者との連携等を説明する。第四に，チーム学校とキャリア形成について，教師間協働等による研修のあり方を紹介し，これからの教職像・学校のあり方を検討する。	
				教育原論	教育という営みについて，歴史や思想，子どもとの関係，社会との関係などの視点から多角的に講義する。それを通して，教育に関わる専門的知識を修得し，教育に関する思想や歴史等をふまえ，教育の理念について説明できるようになること，および現代の教育のあり方について主体的に考え，意見を述べることができるようになることを授業の目標とする。授業の内容として，教育の基礎概念（教育とは何か，学校とは何か，学ぶとは何か），教育の歴史と学校の役割（前近代と近代以降），教職の意義と役割（教師の仕事，教師としての成長），子どもと教育（子どもへの支援と学校，子どもの生活をめぐる諸問題），現代的な教育課題（学校を支える多様な人々，学校の社会的機能）などを扱う。	
				特別支援教育基礎	本授業は，幼・小・中・高等学校の教員（養護教諭も含む）を目指す全ての学生，および学校教育をサポートする各種専門職を目指す全ての学生が，障害及びその関連領域に関する学びを深めることを目的として開講する必修科目である。本授業においては，障害に関する基本的な知識を学習し，障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児，児童及び生徒への対応も含め，実際の指導・支援の方法を習得することを目標とする。	
				発達障害のある児童生徒理解基礎	発達特性のある児童生徒への支援は，画一的な支援ではなく，個々の特性やニーズに沿った一人一人の支援を検討していくことが求められる。それゆえ，幼・小・中・高等学校の教員，および学校教育をサポートする各種専門職においては，発達特性のある児童生徒の特性やニーズをよく理解し，より適切な対応・支援方法を考えていく力が求められる。この授業においては，１年次に学習した障害に関する基本的な知識を踏まえ，発達障害のある児童生徒のどのような特性によりどのようなニーズが生まれるのか，またそれらに対する教育現場における具体的な支援方法を学ぶ。二次障害の理解と対応，思春期の課題などについても取り上げ，現場経験豊かな教員からの講義，事例検討，討論を通して，発達障害のある児童生徒が抱える困難さやニーズについて理解を深め，自らが支援方法を検討する力を身に付けることを目標とする。	
			現代的教育課題対応科目	ジェンダー・セクシュアリティと教育	現代の教育において，性別，性自認，性的指向にかかわらず誰もが「その人らしさ」を尊重される学校文化を構築することは，重要な課題である。この授業では教育にかかわる仕事をする人を想定した教養科目として，ジェンダー・セクシュアリティの捉え方，子どもの成長・発達及び学校文化とジェンダー・セクシュアリティに関わる現代的課題の理解を通して，性別にとらわれず多様性の感覚を持って子どもを見る視点を得ることを目標とする。可能な限りグループワーク等の時間を設け，受講生同士の意見交換を通して発見的に学ぶことができるように授業を構成する。	
				外国人児童生徒支援教育	日本で最も多くの日本語指導が必要な児童生徒が公立学校に在籍している地域である愛知県では，教員となる学生，子どもに関わる仕事に就く学生すべてに，外国にルーツを持つ子どもに関する知識が求められている。この授業では，様々な教員から実践的なお話を伺うことにより，基本的な知識を身に付け，何を身に付けておけばよいのかを具体的に理解することを目標とします。就学前から高校までの子ども達の現状と課題，連携，言語能力，アイデンティティ，日本語指導の方法，制度など幅広い分野を取り上げ，将来教員や教育支援専門職に必要な知識を身に付ける。	
				情報の活用と管理	本授業の一つ目の到達目標は，Society5.0の趣旨を理解するとともに，ＡＩ等の先端技術と共存しながら膨大な情報の中から何が重要かを主体的に判断し，自ら問いを立てて解決する力を身に付けることである。さらに二つ目の到達目標として，膨大な情報を安全に活用するために必要な危機管理能力を身に付けることを目指す。 （オムニバス方式／全８回） （47 伊藤 俊一・49 松永 豊・121 梅田 恭子・123 齋藤 ひとみ／各１回） SocＩety5.0の趣旨に則って，現代社会の様々な分野におけるビッグデータの活用方法について，テキストマイニング，ＡＩによる知的情報処理，等を題材として用いながら学ぶ。 （46 中西 宏文・48 安本 太一・120 高橋 岳之・122 福井 真二／各１回） 情報を安全に活用するための情報セキュリティについて，個人情報の取り扱い，モバイル機器の活用と管理，SNS上の危険の認識と対策，等を題材として用いながら学ぶ。	オムニバス方式

（共通教育科目）	（教養科目群）	（教育実践教養科目）	**（現代的教育課題対応科目）**	学校保健・学校安全	学校保健・学校安全の意義，目的，内容について，発育発達期にある児童・生徒の健康問題・地域社会との関係について関連法規も含め知識を深める。また学校保健マニュアル・学校防災マニュアルを参考にアレルギーや感染症への対応，地震・風水害に対する防災・減災への対処方法を具体的に判断できる思考の獲得を目指す。学校保健については養護教諭養成担当教員が４回，学校安全については社会科教育および理科教育担当教員が４回，それぞれオムニバス方式で講義を運営する。 （オムニバス方式／全８回） （18 櫻木 惣吉・17 古田 真司　各１回クラス分け 20 福田 博美・19 藤井 千恵　各１回クラス分け 91 山田 浩平・90 岡本 陽／各１回） アレルギーや感染症への対応など学校保健について担当する。 （35 伊藤 貴啓・57 戸田 茂／各２回） 防災・減災への対処方法など学校安全について担当する。	オムニバス方式
			実践力育成科目	学校体験活動入門	出身校や，出身地の学校などで，体験的に学校教育に触れる機会を設定し，１回３時間程度の活動を５回以上を原則として，学校や教育を専門として施設で活動を行う。子ども理解への関心を高め，教職や教育を支える専門職等への意欲を高めるとともに，卒業後の自分の在り方をイメージし，今後の大学での学修を充実させることを目的とした授業である。	
				学校体験活動Ⅰ	「学校体験活動入門」の経験を生かし，教育施設等で継続的に体験活動する機会を設定し，より一層子ども理解を深め，教職や教育を支える専門職等への意欲をさらに高めることを目的とした授業である。学校教育現場での活動は週一回を原則として，１回３時間程度の活動を13回以上実施する。回数的も質的にも教職や教育を支える専門職等への理解が求められる。	
				学校体験活動Ⅱ	「学校体験活動Ⅰ」の経験を踏まえ，学校（園）及び教育施設等で体験活動する機会を設定し，より一層子ども理解を深め，教職や教育を支える専門職等への意欲を高めることを目的としている。学校教育現場での活動は週一回を原則として，１回３時間程度の活動を７回以上実施する。学校体験活動の集大成として，10月前後に予定している教育実習などの各種実習やそれ以降の実習，キャリア実現につながることも視野に入れた授業である。	
				自然体験活動	自然体験活動とは，自然を対象とした様々な取り組みを行う団体と協働し，自然への感性を磨いたり，環境保全についての理解を深め，教育や教育を支える専門職への意欲を高める授業である。 自然体験活動の目的（１）実際に自然に触れ合うことで，実体験を元に自然田に対する感性を磨く。（２）企業やＮＰＯが行う環境保全のプログラムに参加し，環境保全についての知識・技能を養う。（３）環境保全や自然体験に取り組む地域の方との交流を通して，コミュニケーション能力を育む。 コース共通の活動内容（１）事前指導。（２）各コースでのプログラムに沿って活動を行う。（３）地域の方との交流。（４）事後指導。	
				多文化体験活動	多文化体験活動とは，アジアの協定校等で海外の子どもの生活や教育の実態を肌で感じることを通して，子ども理解を深め，教職や教育を支える専門職への意欲を高める授業である。 多文化体験活動の目的（１）自国とは異なる環境や文化，歴史を持つ国を訪問し，教育の原点や価値を自ら見出す。（２）外国の言葉や文化に触れることで，学ぶ必要性を実感し，大学での学びにつなげる。（３）様々な文化・宗教を背景とした人々と交流し，多様性を受け入れる素地を作る。 コース共通の活動内容（１）事前指導・準備：現地の歴史，文化，宗教，教育，社会情勢等について調べ，レポートを作成。（２）現地での学習・体験：教育機関を訪問し，授業や学校生活の観察，現地の文化体験，歴史遺跡・博物館・美術館を見学。（３）現地での交流：日本の文化等の紹介を通して子どもや大学生と交流。（４）事後指導：多文化体験活動を振り返り，アンケートや報告書を作成。	
				企業体験活動	教育施設以外の企業等の経営者等を訪問し取材したり仕事を体験したりする調査活動を通して，将来，教員および教育関係の専門職に就いたときに求められる幅広い人間性や社会性の育成を図る授業である。企業訪問に関しては，食品会社，製造業，サービス業など県内の多種多様な企業から自分の興味関心のある企業を一社選び５～６人のグループを構成する。一回３時間の訪問を３回実施し，そこで学んだ企業の業界について，中学校２年生を対象としたキャリア教育に活用できる動画を作成する。訪問先の企業担当者からも助言をいただき質の高い動画を作り受講生全体で学びを共有する。	
		日本国憲法		日本国憲法	本講義では，①憲法の本質を理解すること，②個人の尊厳と基本的人権の基本的な考え方を理解すること，③日本国憲法の歴史と現在を理解すること，④憲法の中核を為しているのは人権規定であることを理解すること，⑤個々の人権規定の考え方を理解することを目標とする。憲法は，国家権力を制限し，国民の自由・権利を保障することを最も重要なねらいとしている。そうした憲法学の基礎を理解すると同時に，自らがもつ基本的人権について知り，権利を行使することができるようになることは，社会を生きる市民として重要な要素である。 また本講義を通じて，論理的な思考と相手を納得させるための文章を構成する力を養うことを目指す。	

（共通教育科目）	情報教育入門			情報教育入門	本授業の目標は，（1）ICT活用指導力の基礎を学ぶ上で，情報機器やアプリケーション，コンテンツを実践的に活用することで，大学生に必要な「情報活用能力」の基礎を身に付けることである。また，（2）主体的・対話的で深い学びの視点についても，学習過程で体験するなかで，学び方そのものや価値・効果を実感する。 目標を達成するために，教育の情報化の３つの側面について，講義と協同での課題解決を行い，将来教員または社会人として必要な力を自身で学び続けていくための基礎的な力をつける。 （47 伊藤 俊一・46 中西 宏文・49 松永 豊・48 安本 太一・121 梅田 恭子・123 斉藤ひとみ・120 高橋岳之・122 福井真二）メインティーチャーとして授業の主展開を担当する。 （159 野崎 浩成・156 江島 徹郎・189 榎本 康宏・204 小池 あずさ・229 渡邊 良哉・237 堀 和恵）効果的な指導となるよう，個別対応を要する学生の指導を主に担当する。	共同
	外国語科目	英語		英語Ⅰ	受講生は教育大学の学生として，将来的には様々なバックグラウンドを持つ子供たちを対象に，英語を教える可能性がある。また本学で学ぶ学生のバックグラウンドもさまざまである。例えば本学には健聴者のみならず，聴覚に障害を持つ学生も在籍し，同様に学生は卒業後，聴覚に障害を持つ生徒を含む，インクルーシブな環境で英語教育を行う可能性がある。そのため，豊かな自己表現能力の育成を統一の目標して，聞く・話すの音声技能のみならず，読む・書くの技能も含め，特定の技能に偏らない汎用的な英語能力を養うことを目標とする。	
	初習外国語科目	ドイツ語		ドイツ語Ⅰ	ドイツ語Ⅰは，以下のことを口頭で表現，あるいは読んで理解することを目標とする。 ・ドイツ語の発音と綴りを覚え，短い文章を正確に音読できること。 ・基本的な動詞の現在人称変化を覚え，自分や話し相手，あるいは家族，親戚などの名前，出身地，居住地，年齢，趣味など）を口頭で訊いたり伝えたりすることができること。 ・日常よく目にするものを表す名詞と人称代名詞，基本的な形容詞を覚え，物の様子や値段を口頭で訊いたり伝えたりすることができること。 ・直接目的語（４格）と間接目的語（３格）を含む文（「～に・・を与える」など）を読んで理解できること。	
				ドイツ語Ⅱ	ドイツ語Ⅱは，以下のことを口頭で表現，あるいは読んで理解することを目標とする。 ・二桁までの数詞と序数を覚え，日付や時刻をともなう表現（誕生日，電車の出発など）を口頭で言えること。 ・いくつかの助動詞と前置詞を覚え，基本的な動詞と組み合わせた表現（「君とコンサートに行きたい」「もう帰らなければならない」など）を口頭で言えること。 ・時制体系を把握し，特に基本的な動詞の現在完了形の文を読んで理解することができること。そのさい，過去形が少数の例外をのぞき，書き言葉でしか用いられないことを理解すること。 ・副文（従属節）を使った文を読んで理解できること。あわせてドイツ語と英語の語順の特徴の違いについて理解すること。	
		フランス語		フランス語Ⅰ	フランス語Ⅰは，フランス語の基礎を学びます。文法や基本的語彙や実用的表現を習得し，ある程度の文章を読んで理解できるようになるとともに，綴りを正しく発音できるようになるのを目標とします。そこでパリの日本人留学生やフランス人学生らの陽気な日常を描いた会話形式の文章を読んでいきます。授業内容はフランス語のアルファベットの読み方，日本語になったフランス語，綴り字記号，発音，挨拶，数の読み方，不定冠詞・定冠詞，名詞の性と数，飲み物・軽食関連の語彙，主語人称代名詞，二人称，前置詞と定冠詞の縮約，職業関連の語彙，紹介の会話表現，リエゾン，アンシェヌマン，エリジョンです。	
				フランス語Ⅱ	フランス語Ⅱは，フランス語Ⅰを基本に文法や基本的語彙や実用的表現を習得します。授業内容は疑問文，強勢形，形容詞，色・身体の特徴関連の語彙，否定文，否定，家族関連の語彙，体調を聞く会話表現，形容詞の女性形，複数形の作り方，第1群規則動詞，指示形容詞，文具・郵便関連の語彙です。語学力に加えてフランス及びフランス語を日常的に使用している地域への社会，文化理解のための予備知識を学ぶこともめざしたいです。	
		中国語		中国語Ⅰ	中国語Ⅰは，演習形式で行い，中国語の基礎を段階的に習得することを目標とする科目である。最初は発音練習とリスニングテストを繰り返すことによって，発音の基礎を学び，正しくピンインを読む力を身に付ける。次に挨拶ことばや日常的な会話を実践的に練習することにより，話し・聞く能力を段階的に身に付けていく。また中国語の発音・意味・用法の調べ方を学び，簡体字を正しく覚えることによって，基本的な語句を読み・書きできるようになることを目指す。	
				中国語Ⅱ	中国語Ⅱは，演習形式で行い，中国語の基礎を習得することを目標とする科目である。基本的な語彙・表現を覚え，発音練習・会話練習を繰り返すことによって，話し・聞く能力を培う。また基礎的な文法・語法を学ぶことによって，簡易な文章を読み・書きできる能力を身に付ける。さらに用いられる漢字が日本と中国大陸，台湾ではそれぞれ異なることを学び，異文化理解をはかる。最終的には初級の内容を完全にマスターし，中国語で簡易なやりとりが可能となることを目指す。	

（共通教育科目）	（外国語科目）	（初習外国語科目）	ポルトガル語	ポルトガル語Ⅰ	ポルトガル語Ⅰは，ポルトガル語を初めて学習する人を対象に，基礎的な文法を学習し，初歩的なポルトガル語の習得を目標とする。特に，「声にだして読む（話す）」と「聞く」能力の向上に力点を置き，学校や地域でブラジル人とコミュニケーションできるようになることを目指す。基本的な文法をテキストやプリントを用いてじっくりと学び，さらに習熟度を高めるため，授業では毎回確認のための小テストを行う。二人一組となった会話練習を豊富に取り入れながら，授業を進める。具体的な講義内容は，ポルトガル語の文字と発音のルールをしっかりと身に付けた上で，名詞・所有詞・数詞・形容詞・ser動詞や規則動詞，不規則動詞の活用を学ぶ。使用する名詞は，学校に関する単語を中心とする。	
				ポルトガル語Ⅱ	ポルトガル語Ⅱは，ポルトガル語を初めて学習する人を対象に，基礎的な文法を学習し，初歩的なポルトガル語の習得を目標とする。特に，「声にだして読む（話す）」と「聞く」能力の向上に力点を置き，学校や地域でブラジル人とコミュニケーションできるようになることを目指す。基本的な文法をテキストやプリントを用いてじっくりと学び，さらに習熟度を高めるため，授業では毎回確認のための小テストを行う。二人一組となった会話練習を豊富に取り入れながら，授業を進める。具体的な講義内容は，ポルトガル語の文字と発音のルールをしっかりと身に付けた上で，命令形，完全過去形，不完全過去形を学ぶ。使用する名詞は，学校に関する単語を中心とする。	
		英語コミュニケーション		英語コミュニケーションⅠ	The goal of this initial course in English communication is to provide a platform for students to activate their own personal store of vocabulary they have previously acquired in their secondary school English lessons. The initial units focus on identifying the basic macro- and micro-structural elements and strategies that compose conversation. Students will learn to logically construct their own English conversations, and demonstrate their ability to incorporate the various internal features into their own talk-in-interaction. They will also do active listening (i.e. taking notes) to online dialogues and recount these to interlocutors. 英語コミュニケーションⅠでは，学生が中等学校の英語の授業ですでに習得している語彙を活用する基盤をつくることを目標としています。この単元では，会話を構成する基本的なマクロ・ミクロの構造要素と戦略の特定に重点を置いています。学生が自分の英会話を論理的に構築する方法を学び，さまざまな特性を実際に自分の対話に具体的に取り入れるようにします。また，オンラインの会話を積極的に聞き取り（メモを取るなど），対談者にその内容を説明できるようにします。	
				英語コミュニケーションⅡ	This course expands upon EC1 and explores English spoken genres of various types including dialogic (e.g. casual conversations and interviews) and monologic genres (e.g. analytical and hortatory expositions). Teachers are 'presenters' on a daily basis in their professional careers, and this course aims to develop English presentation skills. Students will do active listening (i.e. taking notes) to online English databases such as TED talks, NHK World, and news media sites and orally report on current affairs and issues in class meetings. このコースは英語コミュニケーションⅠの発展として，会話形式（例：カジュアルな会話やインタビュー）や独白形式（例：分析的プレゼンテーションやホルタリープレゼンテーション）を含むさまざまなタイプの英語の話されたジャンルを探究します。 教員はプロとしてのキャリアにおいて日常的に「プレゼンター」であり，このコースは英語のプレゼンテーションスキルを伸ばすことを目的としています。 学生は，TEDトーク，NHKワールド，ニュースメディアサイトなどのオンライン英語データベースを積極的に聞き取り（メモを取るなど），授業で時事問題を口頭で発表します。	
		スポーツ科目		スポーツⅠ	スポーツ科目は，健康とスポーツ科学の学び，健康で文化的なスポーツ活動を営める主体者の形成を目標として開設されている。具体的には，コミュニケーション能力の育成，健康・体力づくり，スポーツ活動のプログラミングに関する能力の育成ならびにスポーツの創造的活動に関する能力の育成を目指すことを目的としている。スポーツⅠではスポーツの交流機能を生かしてコミュニケーションに関する能力を育成することを目的としている。	
				スポーツⅡ	スポーツ科目は，健康とスポーツ科学の学び，健康で文化的なスポーツ活動を営める主体者の形成を目標として開設されている。具体的には，コミュニケーション能力の育成，健康・体力づくり，スポーツ活動のプログラミングに関する能力の育成ならびにスポーツの創造的活動に関する能力の育成を目指すことを目的としている。スポーツⅡではスポーツ活動に関するプログラミング及び創造的活動に関する能力の育成を目指すことを目的としています。	

専門教育科目	専攻基礎科目群	教育科目	発達と学習の心理学	幼児，児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程について，基礎的な知識を身に付け，各発達段階における心理的特性を踏まえた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解することを目指す。心身の発達の過程としては，（1）発達に関する代表的理論を踏まえ，発達の概念及び教育における発達理解の意義，（2）乳幼児期から青年期の各時期における運動発達・言語発達・認知発達・社会性の発達を中心に取り上げる。また幼児，児童及び生徒の学習の過程としては，（1）様々な学習の形態や概念及びその過程を説明する代表的理論，（2）主体的学習を支える動機づけ・集団づくり・学習評価の在り方，（3）幼児，児童及び生徒の心身の発達を踏まえ，主体的な学習活動を支える指導の基礎となる考え方を中心に取り上げる。	
			教育システム論	本講義では，社会（地域社会や労働市場など）とのつながりのなかで学校を捉え，社会のなかで学校はどのような役割を果たしているのか，学校教育を通じて子ども・若者は社会へといかに参加していくのかを学ぶ。具体的には，子ども・若者をめぐる生活環境の変化と教育問題，学校教育の原理及び理念と現代的課題，学校と地域・保護者との関係性及び「チーム学校」など協働の可能性，学校事故の把握と学校安全に向けた対応策などについて概説する。本講義を通じて，将来教員として直面しうる教育課題に対応する際の，基礎的な考え方やスキルを獲得してほしい。なお，講義の進め方は，前半に該当テーマの背景の説明，中盤に該当テーマに関する理論的検討（主に教育社会学），後半に事例にもとづいたディスカッションを行う。出席者には知識を吸収するという消極的な姿勢ではなく，知識を活かしながら発言・記述する積極的な姿勢を求める。	
			教育課程論	講義の到達目標：教育課程の編成に関する基礎的な理論と共に具体的な教育方法を理解し，その成果を発表・論議することができるようになる。 講義の概要：本講義では，教育課程の編成に関する基本的な概念・原理を検討すると共に，日本における教育課程の歴史的変遷や諸外国のカリキュラム改革の遺産に学びつつ，近年の教育課程改革をめぐる課題について考察する。具体的には，次の3つを主な内容として取り上げる。 １．日本における教育課程の変遷，２．教育課程の編成に関する理論と具体的な教育方法，３．教育評価に関するいくつかの課題や近年の動向	
			幼児教育課程論	幼稚園教育要領を踏まえ，各園において編成される教育課程と指導計画について，その意義や編成・作成方法を理解すると共に，各園の実情に合わせてカリキュラム・マネジメントを行う意義を理解することを目的とする。そのためにまず，幼稚園教育要領等の性格及び位置付けを知り，園において教育課程を編成することの意義や目的，社会的役割，機能等について学ぶ。また，編成の基本的原理や保育実践と教育課程・指導計画との関係性を理解し，保育内容等を組織的かつ計画的に編成・作成するための具体的な知識・技能を習得する。さらに，より質の高い保育に改善していくための記録及び評価方法とカリキュラム・マネジメントの考え方について，理論と事例により具体的理解を図る。	
			道徳教育の理論と方法	「特別の教科　道徳」（道徳科）が実施され，学校における道徳教育は新しい時代を迎えている。この授業ではまず，「学習指導要領」や「学習指導要領解説」を正確に理解し，これからの道徳教育とその要としての道徳科に求められる教育内容や指導方法について認識を深める。そのうえで，児童生徒の道徳性の発達に関する理論もふまえ，道徳授業の実践例の検討ならびに教材研究，学習指導案づくりを行い，道徳教育・道徳科の実践（教育実習等）を想定した実践的指導力の基礎を身に付ける。	
			総合的な学習の時間の指導法	総合的な学習の時間は，探究的な見方・考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し，自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す。各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に働かせて，広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え，実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために，指導計画の作成および具体的な指導の仕方，並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。総合的な学習の時間における授業の構成原理及びその具体的な実践について，指導案や実際の授業場面の提示によって具体的に授業を構想できるようにするとともに，総合的な学習の時間に関する授業観，指導観を醸成することができるように導く。体験的な学びを取り入れた教材開発，それぞれの授業づくりを他所評価する討論形式の授業，自己の学びを表出しそれを積み重ねていくような評価ファイルなどを活用する。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（教育科目）	特別活動の理論と方法	特別活動は，集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ，様々な集団活動に自主的，実践的に取り組み，互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して，「人間関係形成」，「社会参画」，「自己実現」を「なすことによって学ぶ」活動である。本授業では，教育課程における特別活動の位置づけや目標および内容について理解するとともに，合意形成に向けた集団活動の意義や指導方法，特別活動の各活動（学級活動，児童会活動，クラブ活動，学校行事）の目標や内容，指導方法を，講義およびグループワークを通じて身に付ける。	
			教育の方法と技術	この授業では，学校教育における「教え」と「学び」を原理的に理解するとともに，授業の目標，内容，展開，評価の設定方法を学ぶことを通して，授業の構想力を形成する。具体的内容としては，「教えること」「学ぶこと」に関する原理的理解を図りつつ，21世紀型能力の類型，対話・討論を深める学び合いといった新学習指導要領を踏まえた授業づくりへと展開する。さらに，発問と教材研究の考え方を理解しながら，指導構想づくりへと発展させていく。	
			生徒指導・進路指導の理論と方法	生徒指導は，児童生徒の人格を尊重して個性の伸長を図りながら，社会的資質や行動力を高めることを目的とする。進路指導は，児童生徒が将来の進路を選択・計画して，よりよく生活を構築できるように，長期的展望に立つ指導を行うものである。本科目では，生徒指導・進路指導の視点による授業改善や体験活動，評価の推進や相談活動の充実，学校内外の組織的体制などについて，実際の諸問題を取り上げて，どのように対応すべきか討論しながら理解を深める。	
			幼児の理解と指導	幼児理解は，幼稚園教育を学ぶ際の基本となる。幼稚園における幼児の生活や遊びの実態に即して，発達段階を見通した幼児理解と，子どもの特性をふまえた適切な支援の態度と重要性について学ぶ。そして，子どもの成長を支える保育者等の人的環境と，保育室の環境等の機能について，実際の保育現場の様子から学ぶと共に，その重要性について理解を深める。さらに，幼児が園生活において経験する様々なつまずきの内容と，その要因を把握するための原理及び対応の方法等について，具体的に考えられる力を身に付ける。	
			教育相談の理論と方法	近年，学校教育において，いじめ，不登校，精神障害，発達障害など特別な援助ニーズを有する幼児，児童及び生徒が増加している。本講義は，このような援助ニーズを有する幼児，児童及び生徒に対する教育相談の意義を理解し，発達的な問題とその支援についての理解を深めることを目的としている。「講義」では，教育相談の理論，カウンセリングの理論，アセスメントの理論，教育相談上の課題の理論等の理解を目指す。「実習」では，教育相談でのカウンセリングの方法，アセスメントの方法等を学び，実際の教育相談活動における教員としての効果的な対応方法を学ぶ。また，構成的グループエンカウンターや社会的スキルトレーニングなど問題発生前の予防的な働きかけ，保護者への支援，スクールカウンセラーや外部専門機関との連携等についても講義や実習を通して学ぶ。	
		保育内容科目	幼児と健康	領域「健康」の指導に関する基礎的な理論を理解し，具体的な事例と理論を関連づけて説明し，課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。 （オムニバス方式／全15回） （14 鈴木 裕子／４回） 第１回：領域「健康」 第２回：現社会における乳幼児期の体と運動発達などの健康課題 第４回：乳幼児期の運動における体・心・環境の関連 第13回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（表現する身体） （14 鈴木 裕子・76 上原 三十三／２回）（共同） 第８回：幼児期達と保育内容 第12回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（マット／縄跳び） （14 鈴木 裕子・４ 鈴木 英樹／３回）（共同） 第３回：乳幼児期の体の発達的特徴 第５回：乳幼児期の体と生活習慣の形成(生活リズム) 第９回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（走跳投） （14 鈴木 裕子・140 寺本 圭輔／４回）（共同） 第６回：乳幼児期の体と生活習慣の形成（肥満） 第７回：乳幼児期の安全教育・健康管理 第14回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（水中動作） 第15回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（野外活動） （14 鈴木 裕子・152 縄田 亮太／２回）（共同） 第10回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（複合的な動作と遊び） 第11回：幼児期の多様な運動経験における運動発達と保育内容（ボール）	オムニバス方式・共同（一部）

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（保育内容科目）	幼児と人間関係	領域「人間関係」の指導に関する基礎的な理論を理解し，具体的な事例と理論を関連づけて説明し，課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。 （16 林 牧子）幼児を取り巻く人間関係の変化と現代における課題を概観し，保育者と信頼関係を構築する過程と，そこから派生する友達との関係性の深まりについて具体的事例を基に理解を深める。 （165 二井 紀美子）現代的課題である，発達の気になる外国にルーツをもつ幼児の教育的支援について，保育現場と行政等が提供する支援内容を示しつつ，具体的に学び，現状の理解と課題の把握を目指す。	共同
			幼児と環境	領域環境に関する基礎となる幼児を取り巻く環境や，幼児と環境との関わりについての知識，技能を身に付ける。具体的には，乳幼児を取り巻く環境の諸側面（物的環境，人的環境，社会的環境）と発達における重要性，乳幼児期における物理的，数量・図形との関わり，生物・自然との関わり，標識・文字の環境，情報・施設への関わりにおける発達的特徴，また幼児期と小学校期の連携・接続の必要性と可能性やアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの背景と実際を理解する。それらを踏まえて，事例と理論を関連づけて説明し，課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。 （8 中野 真志）理論的な視点や教材開発に関わる部分を主に担当する。 （9 加納 誠司）教育実践に関わる部分を主に担当する。 （146 西野 雄一郎）幼小連携に関する部分を西井が主に担当する。	共同
			幼児と言葉	領域「言葉」の指導の基盤となる，幼児が豊かな言葉や表現を身に付け想像する楽しさを広げることができるために必要な，専門的事項に関する知識や理論を学ぶことを目的とする。言葉は乳幼児期に著しく発達するが，それには周囲の大人（保育者）との関わりが非常に重要である。その点を理解し適切な援助ができるようになる基盤として，まず，人間にとっての言葉の意義や機能，言葉の獲得や発達を支える様々な要因，日本語の特性等を学び，生涯にわたる人格形成の基礎が培われる幼児期の援助の重要性について理解する。さらに，言葉の感覚を豊かに育てる児童文化財とその実践方法等についても基礎的な知識や技術を学ぶ。 （13 新井 美保子）メインティーチャーとして幼児教育学・保育学の視点から担当する。 （105 川口 直巳）授業は言語学・日本語学の視点から助言する。	共同

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（保育内容科目）	幼児と表現	領域「表現」に関する内容を扱う。子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにするために，保育者として必要な表現力を高めるとともに子どもたちにとって必要な表現に関する知識の習得並びに指導できる能力の育成を目指す。 （オムニバス方式／全15回） （89 麓 洋介／３回） 第１回：領域「表現」の理解 第４回：音の鳴るものをつくるための理論と実践 第５回：歌を歌うための理論と実践 （64 新山王 政和／２回） 第２回：表現って何？（１）・音楽的な表現について 第３回：音を楽しむための理論と実践 （153 成瀬 麻美／３回） 第６回：表現って何？（２）・身体的な表現について 第７回：音に合わせて身体を動かすための理論と実践 第８回：身体で表現するための理論と実践 （137 杉林 英彦／２回） 第９回：表現って何？（３）・造形的な表現（描画）について 第10回：身近な材料で絵を描くための理論と実践 （15 樋口 一成／３回） 第11回：壁面を絵で飾るための理論と実践 第12回：表現って何？（４）・造形的な表現（工作）について 第15回：授業のまとめ （72 佐々木 雅浩／２回） 第13回：いろいろな素材に触れるための理論と実践 第14回：身近な材料でつくるための理論と実践	オムニバス方式
			保育内容総論	幼稚園における教育は園生活全体を通して総合的に行うという指導の考え方を理解し，具体的な幼児の姿と関連づけながら，環境を構成し実践するために必要な知識・技能を身に付ける。幼稚園教育の基本を踏まえた幼稚園における指導や指導計画の考え方を理解し，幼児の発達過程を見通した指導計画を作成したり，幼児の興味・関心等に応じた具体的な指導の在り方を検討したりすることなどを通して，園生活において総合的に指導することへの理解を深める。	
		保育内容指導法科目	保育内容指導法・健康	領域「健康（健康な心と体を育て，自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う）」のねらい及び内容，育みたい資質能力について，理論や現状の課題と関連させて理解する。具体的には，領域「健康」の全体構造，幼児が身に付ける内容，指導上の留意点，評価の考え方，小学校との連携を，実践の参観や観察，具体例を示した資料やICT教材をもとに理解する。それらを踏まえて，幼児の心情，認識，思考，動き等を視野に入れた指導案を作成し，保育におけるPlan（計画） Do（実行）Check（評価） Act（改善）サイクルの意義と機能を体得する。幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの実現の過程を踏まえた具体的な指導場面を想定した指導方法を身に付ける。	
			保育内容指導法・人間関係	領域「人間関係（他の人々と親しみ，支え合って生活するために，自立心を育て，人とかかわる力を養う）」のねらい及び内容，育みたい資質能力について理解を深める。幼児は，自ら周囲の環境に働きかけて様々な感情を体験し，試行錯誤しながら自らの力で行うことの充実感を得るが，これらの行動は，教師との信頼関係が基盤となっていることを理解し，幼児と信頼関係を築くことの重要性について学ぶ。また，幼児同士が関わりを深めて協同的に遊ぶようになるため力を育成するにあたって必要な教師の関わりについて理解を深める。以上の学びをふまえて具体的な指導場面を想定し，指導方法を計画する力を身に付ける。	
			保育内容指導法・環境	領域「環境（周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり，それらを生活に取り入れていこうとする力を養う）」のねらい及び内容，育みたい資質能力について，その背景にある理論や現状の課題と関連させて理解を深める。具体的には，領域「環境」の全体構造，幼児が身に付ける内容，指導上の留意点，評価の考え方，小学校との連携を，実践の参観や観察，具体例を示した資料やICT教材をもとに理解する。それらを踏まえて，幼児の心情，認識，思考，動き等を視野に入れた指導案を作成し，模擬保育もしくはフィールドワーク，ICT教材活用方法とその振り返りを通して，保育におけるPDCAサイクルの意義と機能を体得する。幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの実現の過程を踏まえた具体的な指導場面を想定して，指導方法及び保育を構想する方法を身に付ける。	
			保育内容指導法・言葉	幼稚園教育要領に示された「環境による教育」「育みたい資質・能力」等の幼児教育の基本を踏まえ，領域「言葉」のねらい及び内容に即した適切な保育実践方法を学ぶことを目的とする。具体的には，背景となる専門領域と関連させながら，幼児の発達に即した各年齢での具体的な指導場面や活動を想定し，主体的・対話的で深い学びが実現するような活動内容や援助等を構想する力を身に付ける。その際，具体的な保育事例や映像資料，ICT機器の活用も取り入れる。また，外国人幼児や言葉の獲得に特別な支援の必要な幼児の事例を取り上げ，個々の特性に応じた適切な援助方法についても理解を深める。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（保育内容指導法科目）	保育内容指導法・表現	幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し，幼稚園教育要領に示された領域「表現」のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに，幼児の発達に即して，主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。領域「表現」における幼児の発達の特性を踏まえ，生活と関連付けた保育を計画するために必要な知識および技能を身に付ける。幼児にわかりやすい教材や言葉掛け，援助等について映像資料などを通して学ぶ。幼児の生活と関連した保育の指導案を作成し，模擬保育を通して幼児の表現活動を援助するための方法について考える。	
		初等教科内容科目	初等国語科教育内容Ａ	初等教育用の国語教科書の教材を取り上げ，個々の教材についてどのようなことを教える必要があるかを議論する。ここでは，学習指導要領における国語科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解した議論が求められる。また，教材研究史や子どもの発達段階を加味し，理念的な文脈における教育内容と，現実的な文脈における教育内容をつきあわせて考えることが求められる。授業は主にグループでの教材分析，発表，討論のかたちで行う。	
			初等社会科教育内容Ａ	小学校の社会科学習を指導するために，基本的な教材とその活用方法を習得するための実践を前提とした指導を行う。まず，学生は初等の社会科教育内容について，それぞれの疑問をもとに主体的に調査・考察に取り組み，一定の知見を得る。その後，講義や演習によって実際の教育現場でのさまざまな初等社会科の学習内容の特徴を考察，理解し，教材開発・模擬学習・指導案作成等の基礎的な授業実践力を身に付けてもらうこととする。	
			初等算数科教育内容Ａ	小学校算数科の５領域（数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用）及び数学的活動に関して，重要な指導内容とそれらの数学的背景について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ，その指導内容の体系と系統，教科書における教材の具体例やその解釈，更には，それらの数学的背景などについて講義する。また，具体的な問題を解いたり，数学的活動を体験したりすることを通して，指導内容・教材・その数学的背景などについての理解を深める。	
			初等理科教育内容Ａ	小学校理科で扱う内容について，その意義と具体的な指導方法を理解するとともに，身近な自然現象の仕組みを探究できるようになることを目標とした解説，演習，実習を行う。理科専修以外の学生に対して，観察・実験を中心とした授業を行い，将来，小学校で理科を指導するために不可欠な基礎的能力と，観察・実験の技能およびその留意点を身に付けることを目的とする。具体的に扱う内容は，物理分野に関しては振り子の運動やてこの規則性，電気・電流の性質など，化学分野に関しては化学薬品や器具の使い方，燃焼の仕組みや水溶液の性質など，生物分野に関しては，顕微鏡の使い方や昆虫の体のつくり，野鳥の野外観察など，地学分野に関しては地球の構造，大気，宇宙の構造などである。	
			初等生活科教育内容Ａ	本授業では，『小学校学習指導要領解説　生活編』（平成29年７月）や最新の論考などを取り上げることにより，教科目標と内容構成への理解を図る。また，受講者自身が具体的な活動や体験を通して生活科の教育内容の理解を深めるとともに，生活科の授業作りへの関心・意欲を涵養することをねらう。授業方法としては，テキストや配布資料，視聴覚教材を活用しながら，生活科の教科目標や内容について具体的な事例を示し解説する。また，個人やグループによる学びの振り返り，それを踏まえたディスカッション，および，それによって深まった学びの構築の省察も取り入れる。	
			初等音楽科教育内容Ａ	ピアノの演奏技術の習得を通して，音楽の内容・教材についての興味をより喚起する。楽譜から音楽の仕組みの基本であるメロディー・リズム・ハーモニーの読み方を理解することにより，基礎的技能を身に付けることを目標とする。授業の概要は，音楽科に必要な読譜について理解を深めるとともに，音だけでなく，様々な用語や記号などを活かして演奏する方法についても身に付ける。また，ピアノの実技が中心となるため個人レッスンとなるが，公開レッスンの形態をとり，全員で確認しながら進める。また，聴きあったり，伴奏と歌を合わせることで個々の習熟度を高めることを目指す。	
			初等図画工作科教育内容Ａ	本授業は，造形的な遊びから造形活動（描画表現，立体表現，平面表現，工作）・鑑賞学習へ展開することを意識した内容としている。受講者に求められることは「子どもになること」である。題材への興味・関心，造形活動での発見や驚き，友達と活動を共有することの楽しさを素直に表情や言動に表すこと。このことが，実際の教育現場で子どもと共感的に学ぶことにつながる。各活動では，授業者として必要な造形的な基礎技能を身に付ける。また，題材は原則として各回で完結する。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（初等教科内容科目）	初等体育科教育内容Ａ	小学校体育科の技能領域について授業実践問題の解決アプローチをテーマとし，基本的な運動の系統的な教材配列や工夫ができること目標とする。 学習指導要領における各種運動領域について段階的な指導の組み立てと展開方法を実技体験しながら，各種運動領域の特性と運動の技術・戦術を理解し，教材づくりの考え方を学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （76 上原 三十三，138 三原 幹生，153 成瀬 麻美／５回） 第１回～第５回　体ほぐしの運動・遊び，多様な動きをつくる運動・遊び，器械運動について学ぶ。 （152 縄田 亮太，139 頼住 一昭，142 山下 純平／５回） 第６回～第10回　的当て遊び，鬼遊び，ゴール型，ネット型，ベースボール型について学ぶ。 （140 寺本 圭輔，４ 鈴木 英樹，75 石川 恭／５回） 第11回～第15回　水遊び（もぐる・浮く・移動する），浮標，けのび，泳法，安全確保の運動について学ぶ。 （234 平川 武仁，208 水谷 未来，213 村山 大輔，195 香村 恵介，214 村松 愛梨奈，235 平野 雅巳，221 中田 有紀）受講者の人数が多いため，安全面に十分配慮しながら，実技内容を充実させるため，実技のアドバイスを行う。	オムニバス方式・共同（一部）
			初等家庭科教育内容Ａ	家庭科は，個人・家族による家庭生活，そこにおける衣食住を中心とした消費生活，家庭生活と環境の関わりを主対象としている。本授業は小学校家庭科で扱う教材理解や教材研究を行う上で重要な生活の現実や課題について多面的に検討することを通して，小学校家庭科の教育内容を理解することを目的とする。授業担当者の専門とする領域を中心に家庭生活，消費生活の現実や課題を取り上げ，小学校家庭科の教材理解，教材研究に資する理論的，実証的，実践的検討を行う。	
			初等英語科教育内容Ａ	授業の到達目標は，小学校英語を教える上で，授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができる素養を養い，初等英語教育の理論と実践を見通した上で，実践ができる素地を養うことである。授業の概要は，教育実践ができるための基礎的な知識として，音声に関する知識，発音と綴り，文構造及び児童文学に関する知識を身に付け，授業者として教室での実践ができることを目指す。	
			初等国語科教育内容Ｂ	小学校国語科の目標を学力とのかかわりにおいて理解したうえで，国語科教育の内容と方法について，具体的に小学校国語教科書に掲載される教材にもとづいて考察していく。次に，国語科の評価についての考え方を養う。理論的な面を把握したうえで，児童・生徒の実態把握をしつつ，単元の計画を立て，教材研究の方法を習得する。実際に，学習指導案を作成し，模擬授業を行うことを中心とする。模擬授業について共同で意見交流しながら，児童・生徒の実態把握や単元の計画などについてフィードバックすることで授業についての理解を深める。	
			初等社会科教育内容Ｂ	本授業の目標は，以下の（１）～（４）のテーマについて，小学校第3学年の児童が社会的事象の見方・考え方を働かせ，学習問題を追究・解決できる社会科授業の構想を提案する能力を身に付けることである。（１）身近な地域や市区町村の様子について・（２）地域に見られる生産や販売の仕事について・（３）地域の安全を守る働きについて・（４）市の様子の移り変わりについて･上記の（１）～（４）のテーマについて，社会的事象の見方・考え方を働かせ，学習問題を追究・解決できる社会科授業を構想し，模擬授業の形式で発表する。	
			初等算数科教育内容Ｂ	小学校算数科の５領域（数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用）及び数学的活動に関して，重要な指導内容とそれらの数学的背景について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ，その指導内容の体系と系統，教科書における教材の具体例やその解釈，更には，それらの数学的背景などについて講義する。また，具体的な問題を解いたり，数学的活動を体験したりすることを通して，指導内容・教材・その数学的背景などについての理解を深める。	
			初等理科教育内容Ｂ	小学校理科で扱う内容について，その意義と具体的な指導方法を理解するとともに，身近な自然現象の仕組みを探究できるようになることを目標とした解説，演習，実習を行う。理科専修の学生に対して，観察・実験を中心とした授業を行い，将来，小学校で理科を指導するために不可欠な基礎的能力と，観察・実験の技能およびその留意点を身に付けることを目的とする。具体的に扱う内容は，物理分野に関しては振り子の運動やてこの規則性，電気・電流のはたらきと利用など，化学分野に関しては化学薬品や器具の使い方，気体の性質や酸・アルカリの性質など，生物分野に関しては，花や昆虫の体のつくり，昆虫と植物の関係など，地学分野に関しては地球の構造，大気，宇宙の構造などである。	
			初等生活科教育内容Ｂ	本授業では，『小学校学習指導要領解説　生活編』（平成29年７月）や最新の論考などを取り上げることにより，教科目標と内容構成への理解を図る。また，受講者自身が具体的な活動や体験を通して生活科の教育内容の理解を深めるとともに，生活科の授業作りへの関心・意欲を涵養することをねらう。授業方法としては，テキストや配布資料，視聴覚教材を活用しながら，生活科の教科目標や内容について具体的な事例を示し解説する。また，個人やグループによる学びの振り返り，それを踏まえたディスカッション，および，それによって深まった学びの構築の省察も取り入れる。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（初等教科内容科目）	初等音楽科教育内容Ｂ	授業の目標 　音楽科の授業の中で取り扱われる活動を体験することで，その難しさや活動に込められた意味等を再確認する。またそれらを指導する際に必要な知識と技術を身に付け，留意すべき点などを理解する。合わせて，教育に関する時事問題や新聞記事，教育相談などの資料に基づき，教育的な話題や教育を取り巻く社会問題に関心を持ち，現状を理解する。 授業計画の概要 　最初にリコーダーの演奏を通じて読譜やリコーダー演奏の技術を身に付けるとともに，小学校で取り扱う楽曲を学習する。続いて，グループ単位で様々な音楽活動を体験する。さらに，音楽や「教えること」に関連した一般的・総括的内容も適宜取り扱う。テキストは，文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社と，ソプラノ・リコーダーを使用する。学生に対する評価は，レポート試験（60%），授業への取り組み（20%），課題研究発表及び課題への取り組み（20%）を総合して判断する。	
			初等図画工作科教育内容Ｂ	本授業は，造形的な遊びから造形活動（描画表現，立体表現，平面表現，工作）・鑑賞学習へ展開することを意識した内容としている。受講者に求められることは「子どもになること」である。題材への興味・関心，造形活動での発見や驚き，友達と活動を共有することの楽しさを素直に表情や言動に表すことが，実際の教育現場で子どもと共感的に学ぶことにつながる。各活動では，授業者として必要な造形的な基礎技能を身に付け，図画工作科が得意な指導者育成として，発展的な技表現への展開を身に付ける。	
			初等体育科教育内容Ｂ	小学校体育科の内容と教材について理解することをテーマとし，様々な学習指導理論を踏まえて教材を構想したり，改善工夫できるようにすることを目標とする。 　典型教材として「なわとび運動」「リズムダンス」「表現」を取り上げて，動きの習得洗練化と表現の追究活動を行うなかで教材を理解し，教え合いや伝える活動を通して教材づくりの基本的な考え方を学習する。 （オムニバス方式／全15回） （76 上原 三十三／８回） 　第１回～第８回　長なわとび運動の基本形態とバリエーション，短なわとびの基本形態とバリエーション，組なわとびの基本形態，なわとび技の創作と演技を行う。 （153 成瀬 麻美／７回） 第９回～第15回　表現運動の特性と導入の工夫，リズム系ダンスの特性と指導，表現の特性と指導（表現遊び，即興的な表現のいろいろ，ひとまとまりの表現の発表）を行う。	オムニバス方式
			初等家庭科教育内容Ｂ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，それらを解決する方法を，諸科学を駆使して探究し，小学校家庭科の教育内容について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題について，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
			初等英語科教育内容Ｂ	授業の到達目標は，小学校英語を教える上で，授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができることである。初等英語教育の理論と実践を見通した上で，実践ができる素地を養うことを目的とする。授業の概要として，教育実践ができるための基礎的な知識を身に付け，教室での英語による実践ができることを目指すために，実践と理論との両面から行う。実践については，毎回の授業内に授業実践で必要不可欠な歌の指導，活動を体験しながら英語のやり取りを行い，加えて絵本の読み聞かせを継続して行う。次に理論について，音声に関する基本知識，発音と綴りの関係，文構造・文法の基本的な知識を身に付ける。さらに第二言語習得に関する知識を学び，異文化理解・異文化コミュニケーションについても深める。	
		初等教科教育法科目	初等国語科教育法Ａ	学習指導要領における国語科の領域構造をもとに，領域ごとに内容を深める。「読むこと」においては代表的な教材ごとに，「書くこと」においては文章作成の段階ごと，「話すこと・聞くこと」においては言語活動の違いごとに授業を行う。また，映像教材やICT活用など，メディア・リテラシー関連の学習内容を取り扱い，最新の教育事情を反映した国語科の授業づくりについて考える。最終的に模擬授業というかたちで講義内容を反映した学習指導の構想をアウトプットする。実際の場面のシミュレーションを行うことで，より現実的なものとして講義内容を理解する。	
			初等社会科教育法Ａ	小学校学習指導要領における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の反省を行い，よりよい授業作りについて考えていきます。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（初等教科教育法科目）	初等算数科教育法Ａ	小学校算数科の５領域（数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用）及び数学的活動に関して，重要な指導内容とその指導方法・評価方法について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ，その指導の体系と系統，教科書における教材の具体例やその解釈，それらの標準的な指導の背後にある教授理論や数学的知識，子どものつまずき，評価方法など，多角的に講義する。また，それらの内容の指導方法については，実践的な検討も行う。	
			初等理科教育法Ａ	小学校理科における教育目標や学習内容，教材研究や授業設計の方法の理解と，児童の自然認識の発達に即した問題解決型の学習指導に必要な技能の獲得を目指す。学年・内容区分と育む資質・能力，見方・考え方に基づき設計された教育課程の特徴，実験観察活動や討論活動の設定，情報機器等の利用，指導や評価の手法等の基本的事項を具体例を含めながら概説する。また，個人及びグループでの教材分析や単元計画立案，学習活動等の検討作業や学習指導案作成，模擬授業実践等を適宜行うことにより，小学校理科の授業づくりについて理論的・体験的に学ぶ。	
			初等生活科教育法Ａ	本授業では，生活科教育に関する理論と実践について学び，生活科の教育実践に意図的・持続的に取り組もうとする意欲と関心をもつこと，生活科の単元を構想し，授業を計画し指導し評価する基本的な能力を習得すること，生活科の特質に関する確かな理解に基づいた教科観及び指導観をもつことを目指す。授業方法としては，テキストや配付資料だけでなく，視聴覚教材も活用しながら，生活科教育に関する理論と実践について，具体的な事例を示し解説する。また，個人やグループによる関連資料の分析・考察，それを踏まえたディスカッション，調査活動や体験活動等の準備と計画，実際の活動，および，その発表と省察も取り入れる。	
			初等音楽科教育法Ａ	学習指導要領に示されている内容を理解するとともに，音楽科における指導上の留意点を理解すること，そして，音楽の基礎的な知識についての確認を行い，実際の指導ができるようになるための方法を身に付けるを目標とする。実際に歌唱や楽器の演奏，鑑賞，音楽づくりを体験することを通して，学習指導要領の内容の理解を深めるとともに，音楽科としての指導の留意点や子供を見る視点について学ぶ。また，実際の指導に必要な知識や技術についても，模擬授業やグループでの検討を通して身に付ける。	
			初等図画工作科教育法Ａ	図画工作科の特質について，その歴史的な背景，学習指導要領の構成や内容，授業実践例の分析，児童の表現の発達，教材開発の事例などを，講義と討議と通して理解する。また，実際に教材を試作してみて，その体験をもとに学習指導案を作成する。受講数に応じてグループで学習指導案を作成し模擬授業も行う。	
			初等体育科教育法Ａ	授業のテーマ及び到達目標は，小学校の体育科教育における授業づくりのイメージを具体的に描けることに重点に置き，体育授業に日々取り組むために必要な理論と実践の具体を理解し，実践的指導力を養うことである。内容は，小学校体育の指導内容と学習指導の具体的な方法について，事例を参考に検討する。学校現場での実務経験を活かし，実践上の課題を踏まえながら，学習指導における「陥りやすい現状の問題点」を見付けるとともに，その改善のアイデア（運動レシピ）を考案・検討する。	
			初等家庭科教育法Ａ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，小学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導ついて，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
			初等英語科教育法Ａ	小学校外国語活動・外国語教育の目標をふまえ，その内容と指導法を理論と実践の両面から講義する。各学年の児童の認識発展に応じた指導内容の特徴を理解し，実践指導ができるための指導計画や学習指導案の作成，クラスルームイングリッシュ，模擬授業などを実施する。実践については，歌やチャンツ，コミュニケーション活動，文字指導，絵本の読み聞かせ等を行う。理論については，第二言語習得に関する知識，異文化理解・異文化コミュニケーション等について学ぶ。	
			初等国語科教育法Ｂ	小学校学習指導要領国語における各学年の「目標」や「内容」を理解したうえで，小学校段階における国語科の目標・内容・方法について，「聞くこと・話すこと」「書くこと」「読むこと」の領域ごとに，実際に小学校国語教科書を参照しつつ，基礎的な理論と方法を習得する。国語科の授業づくりについて，「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」の面すら考えて行く。また，国語科における言語活動・問題解決学習・デジタル教材・メディアリテラシー・幼小連携・初等国語教育の歴史などについても知見を持つ。	
			初等社会科教育法Ｂ	小学校学習指導要領における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の反省を行い，よりよい授業作りについて考えていきます。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（初等教科教育法科目）	初等算数科教育法Ｂ	小学校算数科の５領域（数と計算・図形・測定・変化と関係・データの活用）及び数学的活動に関して，重要な指導内容とその指導方法・評価方法について理解を深めることを目標とする。算数科の重要な指導内容を取り上げ，その指導の体系と系統，教科書における教材の具体例やその解釈，それらの標準的な指導の背後にある教授理論や数学的知識，子どものつまずき，評価方法など，多角的に講義する。また，それらの内容の指導方法については，実践的な検討も行う。	
			初等理科教育法Ｂ	小学校理科における教育目標や学習内容，教材研究や授業設計の方法の理解と，児童の自然認識の発達に即した問題解決型の学習指導に必要な技能の獲得を目指す。学年・内容区分と育む資質・能力，見方・考え方に基づき設計された教育課程の特徴，実験観察活動や討論活動の設定，情報機器等の利用，指導や評価の手法等の基本的事項を具体例を含めながら概説する。また，個人及びグループでの教材分析や単元計画立案，学習活動等の検討作業や学習指導案作成，模擬授業実践等を適宜行うことにより，小学校理科の授業づくりについて理論的・体験的に学ぶ。	
			初等生活科教育法Ｂ	本授業では，生活科教育に関する理論と実践について学び，生活科の教育実践に意図的・持続的に取り組もうとする意欲と関心をもつこと，生活科の単元を構想し，授業を計画し指導し評価する基本的な能力を習得すること，生活科の特質に関する確かな理解に基づいた教科観及び指導観をもつことを目指す。授業方法としては，テキストや配付資料だけでなく，視聴覚教材も活用しながら，生活科教育に関する理論と実践について，具体的な事例を示し解説する。また，個人やグループによる関連資料の分析・考察，それを踏まえたディスカッション，調査活動や体験活動等の準備と計画，実際の活動，および，その発表と省察も取り入れる。	
			初等音楽科教育法Ｂ	授業の目標 音楽科の授業に焦点をあて，その教育理念・教育哲学及び学習指導要領を学習する。具体的な授業方法を考察することにより，音楽教育や音楽科授業がなぜ必要なのか，各自の音楽教育観を培う事を目標とする。また音楽に対する広い見識を持てるようにする。 授業計画の概要 「学習指導要領の変遷及び概観」，「歌唱教材と指導のありかた」「器楽活動の考察」「鑑賞の意義の考察（情報機器の操作も含む）」「音楽づくり（創作活動）」の考察（情報機器の操作も含む）」を扱う。テキストは，文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』東洋館出版社，『はじめて学ぶ教科教育⑦』ミネルヴァ書房，『小学校新学習指導要領の展開・音楽編』明治図書，『小学校教育課程実践講座　音楽』ぎょうせい，最新初等科音楽教育法（改訂版）等を用いる。学生に対する評価は，レポート試験（60%），授業への取り組み（20%），課題研究発表及び課題への取り組み（20%）を総合して判断する。	
			初等図画工作科教育法Ｂ	造形活動における子どもの発達と類型について理解する。そして，図画工作科の教科書を材料に，小学校学習指導要領図画工作科の内容を理解する。受講者は，学習指導要領を理解し，各学年の目標や内容と教科書にある具体的な題材とを照らし合わせることができるようになる。その後，子どもの発達特性を踏まえた教材開発や授業設計の方法を研究し，グループで模擬授業を行う。また，前半の授業時に簡単な造形活動を行う場合もある。	
			初等体育科教育法Ｂ	授業のテーマ及び到達目標は，小学校体育科における単元の構想，計画，実施，評価について実践的な能力を身に付けることである。また，確実に学習指導案を作成できるようにすることである。内容は，小学校体育科における（体つくり運動領域・器械運動領域・陸上競技領域・水泳領域・球技領域・表現運動領域・保健分野）学習指導案の作成とそのピアレビューを学生同士で検討し，単元の構想・計画を重点的に行い，教育実習での実施と評価のイメージをもつ。	
			初等家庭科教育法Ｂ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，小学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導ついて，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
			初等英語科教育法Ｂ	授業の到達目標は，小学校英語を教える上で，授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができることである。初等英語教育の理論と実践を見通した上で，実践ができる素地を養うことを目的とする。授業の概要として，教育実践ができるための基礎的な知識を身に付け，教室での英語による実践ができることを目指すために，実践と理論との両面から行う。実践については，毎回の授業内に授業実践で必要不可欠な歌の指導，活動を体験しながら英語のやり取りを行い，加えて絵本の読み聞かせを継続して行う。次に理論について，音声に関する基本知識，発音と綴りの関係，文構造・文法の基本的な知識を身に付ける。さらに第二言語習得に関する知識を学び，異文化理解・異文化コミュニケーションについても深める。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	中等教科内容科目	国語	国語学概説Ⅰ	ふだん無意識で使用している日本語の特性について，多面的に知ることによって，日本語使用者が，対象世界をどのような方法で把握しているのか，それはどういった特性を意味するのかを理解する。言語研究の基礎を講じたのち，音声音韻・文字表記の特徴について分析，説明する。これらを通じて，ことばに対する関心を深め，言語感覚を鍛えること，自らの力で言語を観察できる能力を身に付けることを目指す。	
				国語学概説Ⅱ	ふだん無意識で使用している日本語の特性について，多面的に知ることによって，日本語使用者が，対象世界をどのような方法で把握しているのか，それはどういった特性を意味するのかを理解する。特に日本語の語・語彙，文法に関する諸特徴について分析，説明する。これらを通じて，ことばに対する関心を深め，言語感覚を鍛えること，自らの力で言語を観察できる能力を身に付けることを目指す。	
				国語学演習ＡⅠ	日本語文法について，学校文法を批判的に捉えながら理解する。言語運用の実際について観察する基本的な方法を身に付けることにより，ふだん，無自覚に使用している言語の約束事を，自覚的に，ことばで整理することができるようにする。具体的には，日本語文法の諸事項について，グループ単位で担当を決め，受講者に対して学校文法の把握方法を確認しながら，基礎知識を整理する。さらに学校文法では説明のつかない言語使用を取り上げ，実際にどのように用いているのか，受講者に考えさせながら問題解決を試みる。	
				国語学演習ＡⅡ	史的文献を取り上げて国語学的な面から分析し，当資料成立期の言語の特色を理解するとともに，資料に描かれる表現世界を正確に理解できる能力を身に付ける。当資料中で担当する範囲を受講生ごとに決め，その範囲の本文の翻刻・品詞分解・現代語訳などを行う。その上で，担当範囲内で日本語学的な課題を見出し，適切な方法設定の上，調査，考察を行う。	
				国文学演習ＡⅠ	本演習では，近現代の小説・詩について専門的に学ぶために，いくつかの基礎的な手続きについて学び，作品を正確に分析できるようになる。その上で，自らの考えを論理的に説明することを目標とする。具体的には，本文の典拠，異同，注釈などについて，具体的に学ぶ。作品の初出，底本，歴史的記述，時代状況などについて調査・検討する。また作家について調査を行う。このような手続きを経た上で，小説を精読して読解を行う。さらに自分の解釈について，論理的に説明する。	
				国文学演習ＡⅡ	本演習では，これまでの演習，講義などで習得した知識をもとに，日本近現代文学の小説について分析する。それと同時に方法論について理解し，その上で作品の分析に応用できるようになることを目指す。具体的には，詩・小説を緻密に読解し分析する。同時に，作家および同時代状況を視野に収める。その上で，方法論を意識した読解を試みる。多様な視点によって，作品の読解を進めていく。	
				国文学演習ＢⅠ	本演習では，これまでの演習や講義などで習得した知識をもとに，日本の近現代の小説・評論について専門的に学ぶ。また演習を通して，近現代の日本文化・社会に対する理解を深めることを目標にする。具体的には，日本語で書かれた小説・評論について詳しく分析する。そのために，近現代の日本文化・社会及び歴史についての認識を深め，問題意識を持ちつつ作品を読解する。その上で，方法論を意識した読解を試みる。歴史的な視点を持ちながら，テキストの読解を進めていく。	
				国文学演習ＢⅡ	本演習では，これまでの演習や講義などで習得した知識をもとに，日本の近現代小説について専門的に学ぶ。また演習を通して，現代日本の文化・社会に対する理解を深めることを目標にする。具体的には，日本の小説について，中長編小説を中心に詳しく分析する。そのために，近現代の日本文化・社会についての認識を深め，問題意識を持ちつつ作品を読解する。その上で，方法論を意識した読解を試みる。広い視野を持ちながら，テキストの読解を進めていく。	
				国文学史概説	諸時代文学の具体例とテーマごとの文学の流れを講義する。上代・中古・近世文学の具体例を精読する回とテーマごとの文学の流れを把握する回を交互に設け，知識暗記型ではない真の国文学史理解を目指す。ちなみに，半期で全時代をカバーするのは至難のわざであるが，第13回では近代に入ってからの明治新曲の歌詞もあつかう。また，第14回では近代文学への流れにも触れ，抜けている中世文学への流れにも同回で触れる。	
				漢文学概説	文字・語彙・音韻・句型など，漢文学の基礎となる中国の言語文化について概説し，合わせて，日本における漢文の受容と現在の漢字・漢文教育との関係について論じる。漢字の構成法，文字の変遷と特徴，辞書の種別と歴史，漢字の字音の理解に必要な音韻学の基礎等について説明し，辞書の機能を十分に活用する方法を紹介する。以上は漢文の読解と漢字漢文の授業に必要不可欠な知識と技術であるため，受講生は授業を通して十分に理解を深め，身に付けることが求められる。	
				漢文学Ａ	著名な歴史故事や諸子百家の議論文など，中学・高校教科書で扱われることの多いジャンルの漢文作品を主な対象として，訓読・日本語訳の実践練習を通して総合的な漢文読解力を身に付ける。先に主な史書の記事によってもともとの歴史故事を読解した上で，それを踏まえた諸子百家の寓話や後世の論評などをとりあげて読解をする。課題文については，漢和辞典を用いて事前に訓読・日本語訳を作成するなど，周到に準備することが要求される。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（国語）	漢文学B	演習形式で漢詩文を精読する。前半は，中学・高校で教材となることの多い中国の散文作品を取り上げる。受講者は予習として辞書引き・訓読・日本語訳を行い，授業では文章を正確に読みとき，作品の背景を理解することを目指す。後半は，グループごとに詩を一首ずつ調べてレジュメの作成と発表を担当し，グループの発表内容を踏まえて全体で解釈についての議論を行う。最後は，議論の中で浮かびあがったいくつかの解釈の妥当性について各自考察し，期末レポートにまとめる。作品の精読と関連文献の調査・検討によって，漢文読解力を高め，中国の詩文に対する知識と理解を深めることを目標とする。	
				書道演習Ⅰ	学校教育の中で行われる書写書道の指導における楷書の基本的な書法について，中国の楷書の名筆の書法についても学習を行うことにより，段階的・系統的に習得する。文字を正しく整えて書くという点を中心に，基本点画の用筆，字形，部分の組み合わせ方や配列法などのポイントについて，講義を交えながら実技指導していく。また，日常の書にも対応できるように，細字（小筆）や硬筆の指導もしていく。なお，毎回の授業は，アクティブ・ラーニングを取り入れた学習や指導法についても触れながら進めていく。	
				書道演習Ⅱ	学校教育の中で行われる書写書道指導における楷書（漢字・かな）の書法について，中国や日本の漢字やかなの名筆の書法の学習も行うことにより，段階的・系統的に習得する。筆順や許容については，楷書と行書との関係にも触れながら，学校教育での取り扱い方や指導の在り方についても考えていく。また，日常の書にも対応できるように，毎回の授業において，毛筆と同時に細字（小筆）や硬筆の指導もしていく。なお，毎回の授業は，ペアやグループでの活動も行い，アクティブ・ラーニングを取り入れた学習や指導法についても考えながら進めていく。	
				書道演習Ⅲ	中学校国語科書写の行書教材，また高校芸術科書道の行書教材を中心に扱う。行書の特徴の適格な理解を図り，効率のよい学習指導を通してその書写能力を身に付けさせるためには，可能な限りの系統的な行書教材が工夫・精選されなければならない。行書の特徴が段階的に理解できるような教材を分析し，その書法技能習得につとめ，有意な「学習指導」「学習支援」ができるようにする。具体的には，行書の基本および行書に調和するひらがな･カタカナの書法，硬筆の書法について理解し，書写技能を段階的・系統的に習得する。また，教材論・指導法等を深く考え，理解する。	
				書道演習Ⅳ	中学校国語科書写の行書教材，また高校芸術科書道の行書教材を中心に扱う。行書の特徴の適格な理解を図り，効率のよい学習指導を通してその能力を身に付けさせるためには，可能な限りの系統的な行書教材が工夫・精選されなければならない。行書の特徴が段階的に理解できるような教材を分析し，その書法技能習得につとめ，有意な「学習指導」「学習支援」ができるようにする。具体的には行書の基本および行書に調和するひらがな･カタカナの書法，硬筆の書法における書写技能の向上を図る。併せて古典（行書）の臨書の研究をする。さらに，身の回りの書に注目し，生活に生かす（実用的な書式）についても考察し，文字文化に関して理解を深める。また，中・高等学校における教材論・指導法等を考え，理解する。	
			社会	史学概論	歴史学は根拠となる史料を読み込み，そこから情報を抽出して，それを論理的に組み合わせることで筋道の通った仮説を形成する作業である。それを，主に日本史上の事例を取り上げながら，具体的に考えていく。通史的な流の中で考察するため，古代史における金石文史料をめぐって学説が対立した事例，中世史において事実と評価が錯綜してきた鎌倉幕府成立の問題，史料の捉え方が変化し，それによって歴史像の見方も変わってきた戦国時代の諸事例などを扱って，実際の歴史研究がどのように行われるものであり，それゆえにどのような能力が要求されるものであるのかを講述していく。	
				日本史概説Ⅰ	天皇と武士という二面から，日本史の特質を考えていく。日本史の中で天皇が果たした役割は，時代によって変化しているが，それゆえに天皇のありようをみていくことで，各時代の政治や社会の様相を捉えることができる。武士は古代末期に登場し，中世から近世の歴史においては主役ともいえるよえな存在となった。その役割や在りようも時代の中で変化しており，この両者の関係をたどることが日本史の流れを理解するうえでの重要な鍵となる。そうした視角から，日本史を通史的に講述していく。	
				日本史概説Ⅱ	日本史を対外関係の側面からとらえていく。日本の歴史は，列島内部の事象からだけでなく，東アジアや世界との関わりの中からも，時代ごとの特質を作り出してきた。そうした多元的な歴史像を学ぶとともに，歴史の学修のためには根拠すなわち資史料に基づく考察が必要であることも受講生には理解してもらう。それは将来の教材研究につなげてもらうためにも必要である。取り上げる出来事に関わる史料を掲げ，その読解技術の習得も重視していく。そのため，古代から近代までの対外関係に関わる重要資料を取り上げながら，日本史の流れを通史的にたどっていく。	
				外国史概説Ⅰ	中国を中心とする東アジアの歴史を，ユーラシア大陸の動向の中で，古代から近代まで講義形式で概観する。世界史における東アジアの位置づけや時代区分を論じた後，中国文明の多元的な起源，中華の出現と拡大，春秋・戦国時代の変革，統一帝国の成立，ユーラシアの古代文明と農耕・遊牧地帯，中華世界の分裂と拡大，隋唐時代の世界帝国の成立と崩壊，唐宋変革と北アジア国家の中国統治，モンゴル帝国と東西世界の結合，明清時代の「大きな中国」と「小さな中国」，清末の危機と中華民族論の出現，台湾の歴史，世界史におけるナショナリズムと近代，といった歴史事象を取り上げる。受講生には，日本を取り囲む東アジアの歴史に関する基礎的な知識を身に付けてもらうとともに，文明・民族やナショナリズムといった普遍的なテーマについても考察を促す。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（社会）	外国史概説Ⅱ	東アジアの歴史上，国際関係に大きな影響を与えてきた中国王朝の対外関係を取り上げ，通時代史的な理解と問題意識を獲得することを目指す。まず前半では，関連する概念定義や華夷思想に関する概説を行った後，前近代の中国王朝と周辺諸国との関係に関する先行研究，特に西嶋定生の「冊封体制」論や栗原朋信の「内臣・外臣」構造論といった古典的な研究の概要と，その後の研究動向を批判的に整理し，それを通じて東アジア外交交流史を概観する。後半では，春秋・戦国時代から秦漢時代を中心に，先行研究の諸論点に対して最新の出土資料を含めた原典史料に基づく検証を行う。これらを通じて，受講生には「冊封体制」や「羈縻政策」といった基礎的な歴史事象に関する包括的な知識を身に付けるとともに，歴史学の批判的な思考力を養成し，歴史のとらえ方について関心を深めてもらう。	
				地理学基礎Ⅰ	本講義では，身近な大都市を事例にしながら，特に歴史地理学と文化地理学の視点から都市の時空間形成を読み解くことで，都市を地誌学的に理解する能力の育成を目指す。(思考/判断)社会科地理の指導における教師の判断や考慮事項について推測ができる。(技能/表現)地理学的なものの見方・考え方を習得し，自らの考えを表現できる。	
				地誌概説Ⅰ	本講義は，現代日本の地域構造を解明することで日本の地域的特色を把握し，あわせて動態地誌的手法の理解をはかることをテーマとしている。中学校社会科または高等学校地理の指導を行う際，地誌学を理解し，地域的特色を当該地域の構造から把握して描き出す能力の育成が肝要である。例えば，それは中学校社会科の学習指導要領において，動態地誌的手法による学びで構成されていることにも示されている。そのため，本講義では，現代日本を事例に人口・都市・産業の各事象にみられる地域性を把握し，それらが有機的に連関して現代日本の地域性が形作られていることを理解すること，さらに地域の構造的把握の手法を学び，一地域を事例にその地域性を動態的地誌の手法で解明できることを目標に講義を行う。	
				地誌概説Ⅱ	本講義では，地誌学の２大類型である，静態地誌と動態地誌とそれらに基づく地域の地誌的考察の理解をテーマとする。それは，中学校社会科地理的分野の学びが学習指導要領において動態地誌的手法で構成され，高等学校地理歴史科の地理探究において地誌的考察が求められているからである。そこで，地誌学及び地域性を描き出す地誌的手法を理解し，一地域を対象にそれを描き出せる能力の獲得を目標とする。そのため，講義前半ではヨーロッパの地域性を静態地誌的手法から描き出し，後半では一国の地誌の事例としてオランダを取り上げて，その地域性を動態地誌的手法から解明していく。これらによって，静態地誌と動態地誌を理解させ，地誌的考察の手法を習得させていく。	
				地誌特論	本授業では，島嶼地域やオーストラリア大陸を中心としたオセアニアの地誌を学ぶ。「地誌学」というのは，およそ当該地域の相貌を「総合的」に把握し，特定地域の「地域像」をおおまかに描きだす地理学研究法のひとつである。本授業を通じて，オセアニアの自然地理（地形，気候，災害など）と人文地理（政治経済活動，社会文化現象，歴史，人口分布，都市形成など）を統合して学んでもらう。	
				自然地理学基礎	本講義では，自然地理学の様々な事象の成り立ちや分布を講義することで，自然地理学の考え方と基礎的な知識を習得することを目的とする。具体的には，地理学的考察のベースとなる地図の見方と考え方，地形，大陸と海洋の影響，気候環境と地域等についてマクロ・メソ・ミクロの各スケールから具体的事例を提示し講義する。また，自然と人間の関係を理解するため，地球温暖化やヒートアイランド等や自然災害についての考察も加える。これらから自然地理学の基礎的知識とともに，地理的見方・考え方を理解し，習得することを本講義の最終目標とする。	
				法学概論(国際法を含む。)	本講義では，まずは法学の基礎を学び，その上で法学分野のなかでも近年話題となっているテーマについて学ぶ。それにより，学生が以下のような力を獲得することを目指す。①自らが生きている社会において，法律は決して無関係なものではなく，様々な場面に関係しているものであることを理解する。②法律情報に自らアクセスできるようになる。③個人の尊厳と人権についての基本的な考え方を理解し，自身の周辺の問題を考える際の指針とする。	
				政治学概論 (国際政治を含む。)	この授業の目的は，アクティブ・ラーニングを通して政治や政治学に親しみ，それらへの理解を深めることである。今日の世界ではグローバル化の進展や内政と外交の連続性が高まっていることなどにより，政治学の議論において国際関係や国際問題を扱うことは当たり前になっている。そこで，近代ヨーロッパで成立した国民国家体系や西欧民主主義の変遷と，現代世界におけるそれらの変容を検討し，権威と権力，バランスオブパワーなど政治学や国際政治学の用語の意味を正しく理解する。	
				公法学概論	本講義では，公法（憲法や行政法）の領域に関わる法原理，歴史背景，現代社会との関係についての基本を学ぶ。そのうえで，具体的な事例の検討を通して，それらの諸原理や歴史的背景が現実の社会制度のなかでどのように機能し，またどのような問題が存在するのかを主体的に考えることを目指す。また，グループワークやプレゼンテーションを行うなかで，論理的な思考能力の獲得に向けた訓練と，法律情報へのアクセスができるようになることも本講義の目指すものである。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（社会）	社会学概論	本講義では，著名な社会学者を時代ごとに取り上げながら，その理論について理解すると共に，そのような理論を構築する背景となった社会的背景や彼らが取り組もうとしていた社会的課題について理解する。時代区分に浮ついては，富永健一の分類を用いて，社会学者を社会の近代化の過程と対応した時代区分と地域に基づいて，第一期，第二期，第三期と区分する。おのおのの時期について，代表的な社会学者を取り上げてその理論について解説すると共に，彼らが生きた社会状況を，社会の近代化の段階として読み解き，その中でどのような社会問題に出会い，それをどう解釈し理論化して，対応しようとしていたかについて理解することを試みる。またそうした中から現代にも通じる課題についても考察できるようにする。	
				経済学概論 (国際経済を含む。)	本講義は，社会の諸問題を経済の側面から分析するための，方法論的基礎を習得することを目的とする。ミクロ経済学の観点からは，消費者や企業の行動，市場の役割と限界等を考察する。マクロ経済学では一般的なIS-LM分析を理解し，マクロ経済政策のモデル上の影響について概略を理解する。その基礎知識を基に，１国モデルの制限を外し，国際経済に関する経済理論を学ぶ。そして，ミクロ経済学・マクロ経済学の基礎理論を習得することによって，金融論，国際経済学，国際金融論など，より専門化されている経済理論の学習への足掛かりとすることを目指す。	
				社会調査論	本講義は，社会調査の基礎知識についての習得を目的とする。社会調査を実際に行うにあたっての問題意識の作成から調査設計，実施の手順から分析までを，質的・量的調査の双方について学習する。社会調査についての教科書として佐藤健二・山田一成の『社会調査論』を用いて，質的・量的社会調査の実施手順に沿って，必要な基礎知識の習得を行う。また同時に，学生それぞれが，半構造化されたインタビュー調査を行って，その結果をプレゼンテーションし，また他の調査結果と比較しながら，考察，分析を行うことで，社会調査の手順を実践的に習得できるように試みる。	
				金融論	金融はあらゆる経済活動に付随するものである。我々が経済活動を通じて財を購入するときには，貨幣の支払いによる決済が行われる。また，預金をはじめとするさまざまな貯蓄手段を我々に提供し，同時に企業等に対しては資金を調達する手段を提供している。そのため，金融は実際の経済活動の円滑化に大きな役割を果たしており，そのありようによって経済の状況にも影響を与える。本講義では，経済活動を支える基盤となっている金融の仕組みについて，貨幣，銀行，信用創造，中央銀行という重要なファクターについての理解を行うと同時に，それらすべての構造的な把握を目指し，経済と金融の関連についての理解を念頭に置きながら学習する。	
				哲学史概説Ⅰ	本授業は，古代ギリシアから中世・近世・近代ヨーロッパへと継承される哲学的思考の展開について説明することができるようになり，主要な論点について批判的吟味を行うことができるようになることを目指している。授業の進め方としては，西洋哲学の代表的な哲学者の著作からの翻訳抜粋を資料として用い，内容を解説していく講義形式をとる。取り上げる哲学者・著作としては，プラトン『国家』，アリストテレス『形而上学』，トマス『神学大全』，デカルト『省察』，カント『純粋理性批判』などである。	
				哲学史概説Ⅱ	古代ギリシアから現代にいたる西洋哲学史の概観をつうじて西洋哲学に関する基礎的な知識を獲得すること，これを本授業の目標とする。しかしながら，西洋哲学史の全体を通覧することは時間的に不可能である。よって本授業は，通史というよりも，むしろ哲学史における重要な諸部分ーたとえば，「古代ギリシア哲学」や「イギリス経験論」や「ドイツ観念論」など―のいくつかにフォーカスした展開となるであろう。	
				倫理思想史概説	この講義では，主に古代ギリシアもしくは原始キリスト教から近現代ヨーロッパに至る西洋の倫理思想史の流れを，代表的な立場や潮流をいくつか取りあげながら，概観する。高等学校公民科の「倫理」の，西洋思想史の部分の内容を，とりわけ重要な哲学者・思想家に焦点を絞ってより深く学ぶとともに，可能なかぎり様々な哲学者・思想家の原典（の翻訳）の文章に触れることを通じて，大学での演習形式での授業に必要な，古典読解の能力を受講者各自が身に付けることを目指す。	
			数学	初等整数論	高等学校までに整数の四則演算および整数の幾つかの基本性質を学んできた。しかし，素因数分解の一意性などを証明しないまま使用している定理が少なくないため，それらに証明を与え整数の正しい知識と理解を身に付けることを目標とする。また，数の合同等の新たな概念を導入し整数のもつ諸法則を理解することを目標とする。前半は素因数分解の一意性を証明することを目標に，除法の定理，ユークリッドの互除法等を学ぶ。後半は，素数についての理解を深めた後，合同の概念を導入し整数の性質を学ぶ。	
				線形数学Ⅰ	線形代数は微分積分と並び，大学で数学を学ぶ上で基礎になるものである。この講義では，行列の定義，演算法則および諸性質，逆行列，連立一次方程式の解法，行列の階数，行列式などの基本的事項を学ぶ。また，２次・３次元空間における直線や平面の方程式を通し，連立方程式や行列式の図形的な性質を学ぶ。定義や定理の定着のための演習問題や，定理の証明を行うことで，線形代数の基礎について理解を深め活用できることを目指す。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（数学）	代数学概論	本講義の目的は，教師として必要な代数学に関する基礎的な事柄を解説することである。「集合と論理」で学習した内容を前提として，広く代数学を学ぶためのステップとなる群，環といった代数系の定義とその基本的性質から始まり，部分群，部分環，正規部分群，イデアル，群及び環の準同型写像といった諸概念を学んだ後，群および環の準同型定理までを，具体的な例を交えながら講義を行う。この授業を通して，自ら考え，論理的に理解する能力を高めることを目標とする。	
				集合と論理	小学校入学以来学習してきた数，方程式，不等式，関数等の基本的概念を集合論の立場から再構築し，それらの理解を深めていく。この講義を通して，基本的な数学の考え方や記号の用い方を学び，教師に必要とされる「ものごとを順序だてて論理的に説明する力」といった基礎的な力を養うことを目標とする。 命題・論証・集合に係る基礎概念を学んだ後，写像や同値関係についての基本事項をふまえ，集合の濃度の概念までの理解を目指す。	
				線形数学Ⅱ	前期の「線形数学Ⅰ」で学んだ行列と行列式の基礎知識を前提に，ベクトル空間の理論と行列の対角化について学ぶ。一次独立なベクトルがベクトル空間の拡がりを決める基本的なベクトルであること，ベクトル空間からベクトル空間への線形写像を行列により実現することができること，座標軸を変換することで，その写像としての行列も対角行列などの単純な形に変換されること，行列式の符号が２次曲線の分類に有効なこと等，「線形数学Ⅰ」で学んだ事柄の幾何的側面を理解することが目標である。	
				幾何学概論	「直線」や「三角形」，「平行線」とは何かを改めて考えると共に，初等幾何の様々な定理，特にユークリッド幾何学における三角形や円の性質を線形代数，微積分，群論の知識を用いてふりかえり，それらを踏まえ，曲線と曲面について学ぶ。まず，パラメータ表示された曲線から，曲率・捩率と呼ばれる量とその計算方法を学ぶ。多くの合同な曲線は，曲率と捩率で特徴付けられることを学ぶ。次に，曲面の第一・第二基本形式と曲面の形状の関係を学ぶ．さらに曲面のガウス曲率・平均曲率とその計算方法を学ぶ．多くの合同な曲面が第一・第二基本形式で特徴付けられることも学ぶ。	
				微分積分Ⅰ	微分積分は線形代数と並び，大学で数学を学ぶ上で基礎になるものである。この講義では，実数と数列・連続関数，および一変数関数の微分法に関わる基礎理論を学ぶ。基礎概念の理解と共に計算技能を修得し，それらを活用できるようになることを目標とする。高等学校の数学Ⅲで学んだ微分積分を振り返りつつ，厳密性に欠けている事柄や取り扱わない事柄を適時盛込み，微分積分の基礎理論について理解を深め活用できることを目指す。	
				微分積分Ⅱ	この講義では，一変数関数の不定積分，定積分の定義・性質，定積分の面積計算等への応用，広義積分，級数の収束・発散について学ぶ。有理関数，三角関数，指数関数や無理関数を含む関数の不定積分の計算技術を学ぶ。その応用として，面積や曲線の長さを定積分を用いて求めることができることを知る。極限によって定義される広義積分の積分可能性を吟味する。また，級数の収束・発散とそれらの判定法を通して不等式により評価することの重要性を認識してもらう。	
				解析学概論	多変数関数の微分法（偏微分法）および積分法（重積分法）の基礎概念とそれらを用いた計算方法および応用がテーマである。偏微分法の意味を理解し，偏導関数の計算，連鎖律，テイラー展開，極値問題，また重積分の基礎概念とそれらの基本性質，累次積分，広義重積分，変数変換公式を用いた重積分の計算方法を修得することを到達目標とする。多変数関数（主に二変数）の微分積分法の基礎概念について，具体例を豊富に盛り込みながら講義する。	
				確率統計Ⅰ	データの整理（記述統計学），及びデータ分析の基礎となる確率論の基本概念について学ぶ。記述統計学については，度数分布表やヒストグラム，データの特性値（平均や分散），散布図や相関係数などのデータの整理の習熟を目標とする。確率論の基本概念については，確率空間や事象の独立性，データの数学的表現としての確率変数やその分布，期待値，分散，さらに様々な確率現象に現れる二項分布や正規分布などの確率分布の諸性質を学ぶ。	
				確率統計Ⅱ	「確率統計Ⅰ」で学んだことを基礎として，独立な確率変数列とそれらの分布， 確率変数の独立性・従属性，共分散と相関係数，合成積，チェビシェフの不等式，大数の法則や中心極限定理を学ぶ。さらに，それらを基礎にした統計的な推測（例えば，点推定，母比率や正規母集団における母平均の区間推定および仮説検定）についての基礎理論を概観し，それらの考え方を理解することを目指す。これらを定着させるため，豊富な具体例と共に学んでいく。	
				プログラミング	ビジュアルプログラミング言語を利用し，プログラムすることを通して「試行錯誤の中から学ぶ」経験を積むことがテーマである。また同時に，アルゴリズム的な発想力や一般的な問題解決において重要な方法となる「解決できる問題に小分けする」「決まった動作はパッケージにして考える」といった頭の使い方をプログラミングで訓練する。最終的には自らの手で数学教材や数理実験のための道具を開発できるようになることで，学校教育現場におけるICTを利用した新たな表現力を身に付けることを目標とする。複数回の講義ごとに内発的・主体的に取り組めるプログラミング課題を設定し，課題作成に必要なスキルを学習・習得する。また課題制作において仲間と試行錯誤する中で発見的に仕組みを理解していく環境と仕掛けを用意する。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	理科	物理学Ⅰ	古典物理学の根幹をなす力学，電磁気学並びに熱力学の基礎について学び，物理学における基本概念や基本法則を習得し，中学校や高等学校で物理の関連内容を教える上で必要な知識基盤を築くことを目標とする。力学については，重力下での物体の運動と単振動の運動を，電磁気学では静電場の性質を，熱力学では熱力学の第一法則を含む熱力学の基礎を理解することを目標とする。力学，電磁気学，熱力学の３つのテーマについて学び，各テーマの主要概念について自ら説明することができるように，グループワークなどの学び合いの時間を設ける。	
				物理学Ⅱ	古典物理学の根幹をなす力学と電磁気学の基礎に加えて，現代物理学の概要について学ぶ。物理学における基本概念や基本法則を習得するとともに，中学校や高等学校で物理の関連内容をより良く教えられるように，学んだ知識を広範囲の自然現象や科学技術と結びつけて理解できるようになることを目標とする。力学については，仕事とエネルギーの関係や質点の回転運動を，電磁気学では静磁場や磁気力の性質を，現代物理学では原子や原子核の構造とそれらの放射現象について理解することを目標とする。力学，電磁気学，現代物理の３つのテーマについて学び，各テーマの主要概念と物理現象との結びつきを自らから説明することができるように，グループワークなどの学び合いの時間を設ける。	
				物理学実験	我々の身の回りで生ずる様々な自然現象は，力学的・電磁気的・光学的な物理現象と密接に関わっている。教育現場において，このような自然現象についての問題を科学的に解決するための資質・能力の育成が重要課題の一つに位置付けられている。本実験を通して，自然現象を理解する上で最も基本的なアプローチとなる実験手法を取得するとともに，科学的なものの見方・考え方を身に付けることを目的とする。さらに，講義形式で学んできた数学的な概念と相補的に結びつけることにより，より深く自然現象を理解することを目指す。本実験では，一般的な科学的問題解決プロセスを体験するために，各自が実験テーマに関連する物理現象の予備調査を行なった上で，実験計画・結果予測・本実験・結果記録・実験考察を行う。	
				化学Ⅰ	本講義では，化学の基礎を修得することを目的として，原子の構造と性質，化学結合による分子の形成，元素の周期律，原子・分子によって構成された物質の状態（気体，液体，固体），酸と塩基の性質，酸化還元反応，化学反応速度と化学平衡，化学反応によって生じる熱，無機化合物の性質，有機化合物の性質，高分子化合物の性質，生体を構成する物質の性質，現代社会を支える機能性材料の化学について説明する。扱った内容に関して演習問題を課し，知識の定着を図る。	
				化学Ⅱ	無機化学・有機化学・高分子化学は，我々の日常生活と深い関わりをもっている。例えば，医薬品，化粧品，高分子材料，染料などの製造において，無機化学，有機化学および高分子化学はその基盤となっている。また，他の領域の科学とも密接な関連があり，例えば，生体現象を分子レベルで理解するためには，無機・有機化学や天然高分子化合物の化学の考え方は必要不可欠となっている。この講義では基礎知識と基本概念の習得に重点をおき，系統的に分類された様々な無機化合物，有機化合物，および高分子化合物について，その構造，性質，合成法および反応について学ぶ。	
				化学実験	本実験は，化学実験を行うための基礎技術を修得することを目的として，化学薬品や実験器具を取り扱うための安全教育，ピペットとキャピラリーの製作をテーマとしたガラス細工法の修得，中和滴定をテーマとした分析化学実験，様々な固体物質の密度測定をテーマとした物性測定実験，計算機シミュレーションおよびコンピュータを活用したデータ処理をテーマとした計算化学実験，エステル化合物の合成をテーマとした有機合成実験，鉄錯体の合成をテーマとした無機化学実験，および実験結果についての討論と講評より成る。	
				生物学Ⅰ	本授業では，生命科学の諸現象を理解するうえで，その基礎となる生命の構造と機能について理解する。生物の基本単位である細胞や細胞小器官などの構造や機能について，具体的な例を提示しながら解説する。また，生物の多様性についても，無セキツイ動物やセキツイ動物を含む多様な生物種の基本的な分類や進化に基づいた相違点と共通点について，実際の事例を確認しながら理解する。生物の進化の道筋をたどり，最終的にはヒトという種に対する生物学的理解を深める。さらに，植物の多様性については，藻類，コケ，シダ，裸子，被子植物等，進化の各段階ごとに講義し，それぞれどのような工夫によって繁栄できたのかを考えさせながら，動物とは異なる植物の生活史について理解する。	
				生物学Ⅱ	本授業では，生命の誕生から始まり，個体が形成され，その後成長する課程や，成熟後の生殖と受精について理解する。また，動物や植物についての生殖様式の違いや遺伝についても考え，生命の連続性について理解を深める。ヒトを中心とした動物の機能やその研究方法，社会とのかかわりについて，最近の技術や話題をとりあげつつ解説する。さらに，私たちヒトと動物や植物との関わりを含めた，生物と環境との関りについて学び，社会で議論となることの多い身近な話題についても触れながらリテラシーを養う。	
				生物学実験	基礎的な生物実験・実習を通して，生物学に関する知識や技能を習得し，結果の整理や表現能力の育成等を図る。様々な生物の細胞について，顕微鏡を用いて観察し，種類ごとの特徴や違いについてまとめ，顕微鏡の使い方や，生物種毎の詳細な構造の違いについて理解する。また，生物の刺激に対する行動観察を通して，生物体内の情報伝達系について理解する。学内外のフィールドでは，特徴的な環境に生息する動物を探索するとともに，見つけた生物を詳細まで観察し，分類する。その他，植物と地質の関係，海岸などの環境に生息する植物についても詳細に観察し，環境と生物の関連性について考察する。さらに，人と自然のかかわりについても考え，生物学に関する理解を深める。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（理科）	地学Ⅰ	「地学的」な自然の事象の特徴は，広大な空間の広がりや長大な時間の流れの中で，様々な形やエネルギーをもち，相互に関連しながら複雑に変化し続けているという点にある。地学分野では，現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため，望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。これら地学特有の手法と物理学や化学，生物学の基礎的な知識を織り交ぜながら，我々の身の回りにある自然を理解し，その成り立ちを探る総合的な学問分野が地学であり，本講義では地学の中でも「固体地球分野」，「岩石・鉱物分野」，「地質分野」に焦点を当て，地球に関する現代的理解を概観する。	
				地学Ⅱ	「地学的」な自然の事象の特徴は，広大な空間の広がりや長大な時間の流れの中で， 様々な形やエネルギーをもち，相互に関連しながら複雑に変化し続けているという点にある。地学分野においては，現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため，望遠鏡による観測や野外における観察・調査を通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。これら地学特有の手法と物理学や化学，生物学の基礎的な知識を織り交ぜながら，我々の身の回りにある自然を理解し，その成り立ちを探る総合的な学問分野が地学であり，本講義では地学の中でも「大気・海洋分野」と「天文分野」に焦点を当てて，その現代的理解を概観する。	
				地学実験	「地学的」な自然の事象の特徴は，広大な空間の広がりや長大な時間の流れの中で，様々な形やエネルギーをもち，相互に関連しながら複雑に変化し続けているという点にある。地学分野では，現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため，望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。これら地学特有の手法と物理学や化学，生物学の基礎的な知識を織り交ぜながら，我々の身の回りにある自然を理解し，その成り立ちを探る総合的な学問分野が地学であり，本実験講義では，それらの「地学特有の方法論」を具体的な実験・観測・フィールドワークを通して学ぶ。小学校，中学校，高等学校の理科（地学分野）で実験・授業を行う際に必要となる基礎的な知識と手法を習得する。	
			音楽	ソルフェージュ	聴音や即興演奏などさまざまな実習を通して，音楽的な反射能力を高めることを目標とする。楽譜を読み書きできるだけでなく，これまで培った音楽理論を鍵盤上で応用する能力を養うことで，各自の音楽的スキルの向上や創意の萌芽の助けとなればと考える。 （オムニバス方式／全15回） （89 麓 洋介／５回） 与えられた旋律に対する伴奏付けを毎回複合的に取り扱う。 （134 橋本 剛／10回） 聴音，即興，初見，リズム読譜，連弾実習などを毎回複合的に取り扱う。	オムニバス方式
				声楽Ⅰ	音楽教師に必要とされるスキルの一つである，人前で声を出す事，歌を歌う事に抵抗なく自信をもって臨めるように，演奏するために必要な基本的な演奏技術と表現の方法を身に付けることを目標とする。 授業の概要と形態は，声楽の初歩的テキストであるイタリア古典歌曲を題材に，発声法，イタリア語の発音の仕方，演奏解釈の理論と方法を学び，個人レッスンの形態で授業を進めていく。授業では個々に歌う形態で進めていくが，グループで同じ曲を勉強するので，お互いに聴きあい，違う視点からも学習を深めていく。	
				声楽Ⅱ	声楽Ⅰで学んだことを基に，自らの歌唱技術だけでなく，どのようにして歌唱指導に結び付けていくか，その理論と方法を学び演習を重ねていく。授業の概要と形態は，ベルカントオペラの代表的作曲家ベッリーニ，ロマン派の作曲家トスティの作品を取り上げながら，声楽Ⅰで学んだ知識と技術を更に深めていく。発声法，イタリア語の発音の仕方，演奏解釈を学び，個人レッスンの形態で授業を進めていく。授業では個々に歌う形態で進めていくが，グループで同じ曲を勉強するので，お互いに聴きあい，違う視点からも学習を深めていく。	
				合唱Ⅰ	小，中学校の音楽教育において合唱は授業はもとより，クラブ活動としても盛んに行われている。この授業では合唱や合唱指導の基礎的な知識や技術を身に付けることを目標とする。授業の形態と概要は，学生が主体となり，指揮者，伴奏者を学生が担当し，他の学生が演奏しながら曲作りに関して意見を出し合い，学校現場で校内合唱コンクールや学外での合唱コンクールでよく演奏される曲を課題曲として，音取りから始め，演奏会で歌うレベルまで曲を仕上げる。	
				ピアノⅠ	主に小・中学校で扱う楽曲の伴奏と古典派の楽曲をテキストとし，それぞれを演奏するために必要な基本的な演奏技術と表現の方法を身に付けることを目標とする。ピアノを弾くことのみにとどまることなく，楽曲を理解し表現することを目指す。個人レッスンを基本とするが，毎回グループでの聴きあいを行い，グループ内での学習曲についても理解を深めていく。前半は，伴奏を中心に進める。伴奏のパートを演奏するだけでなく，テンポをつくること，歌を聴きながら演奏することができる技術の習得を目指す。後半はバッハのインヴェンション，シンフォニアを扱う。実際に楽曲を分析し，演奏することを通して，楽譜から楽曲の理解を深め，演奏に活かす方法を身に付ける。また，グループ活動を取り入れることにより，様々な意見に触れ，自身の理解をさらに深めることを目指す。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（音楽）	ピアノⅡ	ピアノの実技を通して楽譜を深く読み込むこと，自分自身の音をよく聴くことを心がけ，ピアノを弾くことのみにとどまることなく，楽曲を理解し表現できる技術を身に付けることを目指す。また，自分が演奏する曲だけでなく，グループ内のメンバーの曲についても楽譜から分析することや演奏を聴くことを通して理解を深めること，加えて，自分自身の考えを持ち意見交換ができるようになることを目指す。また，音階にも取り組み，調性やカデンツァなどの理解と実際の演奏技術とをつなげることを目指す。楽曲については，個々の分析に取り組みながら，グループ内での意見交換につなげ，実際の演奏に活かす方法を模索していく。楽譜から読み取ったことを音で伝える技術を身に付け，言葉でも伝えることができるようになることで，さらに楽曲に対する理解を深め，表現力を高めることを目指す。	
				管弦打Ⅰ	授業の目標 小学校や中学校の授業，及び部活動等で使用される管打楽器の演奏法を学ぶ。合わせて，将来教員になった際に子どもへ器楽の指導を行う場面を想定して，管打楽器の演奏技法をマスターすることの難しさや，知識として知っていることと音を出せるようになることの違い（知識と技能の相違）を，体験を通じて理解する。 授業計画の概要 管打楽器の中から一つの楽器を選択した上で，その演奏法や取り扱い方を学習する。レッスンは原則として個々に行うが，初心者の場合は基礎練習の段階に限りグループレッスンを取り入れて行うこともある。また管打楽器の経験者に対しては，楽器を通した音楽表現の基本に重きを置いたレッスンを行う。テキストは，授業者が楽譜を用意するが，受講者が取り組みたい曲の楽譜を持参しても構わない。学生に対する評価は，授業への取り組み（30%），曲の個人練習の具合（40%），定期試験発表会の成果（30%）を総合して判断する。	
				管弦打Ⅱ	授業の目標 「管弦打Ⅰ」の延長線上に位置づけられる授業である。「管弦打Ⅰ」に続き，小学校や中学校の授業，及び部活動等で使用される管打楽器の演奏法を学ぶ。合わせて，将来教員になった際に子どもへ器楽の指導を行う場面を想定して，これらの楽器の演奏技法をマスターすることの難しさや，知識として知っていることと音を出せるようになることの違い（知識と技能の相違）を，体験を通じて理解する。 授業計画の概要 「管弦打Ⅰ」と同様に，管打楽器の中から一つの楽器を選択した上で，その演奏法や取り扱い方を学習する。レッスンは原則として個々に行う。また管打楽器の経験者に対しては，楽器を通した音楽表現の基本に重きを置いたレッスンを行う。テキストは，授業者が楽譜を用意するが，受講者が取り組みたい曲の楽譜を持参しても構わない。学生に対する評価は，授業への取り組み（30%），曲の個人練習の具合（40%），定期試験発表会の成果（30%）を総合して判断する。	
				合奏Ⅰ	授業の目標 吹奏楽の活動を通して基礎的な合奏の技術を身に付け，アンサンブル能力を高める。さらに将来学校現場で吹奏楽を指導する際を想定しながら，吹奏楽の演奏や指導に必要な基礎的な知識と技術を理解する。さらに楽器を媒体とした他者とのコミュニケーションを体験する。 授業計画の概要 吹奏楽の合奏スタイルで行う。授業の最初に全員でセッティングを行い，吹奏楽の楽器配置を学ぶ。チューニングを行った後に，ハーモニートレーニングと楽曲の合奏練習を行う。教材曲は，中学校の部活指導を担当した場合を想定して行進曲，吹奏楽コンクール初級レベルの自由曲，ポップス曲を取り上げる。楽譜は，授業者が用意する。学生に対する評価は，セッティング及び片付けも含む授業への取り組み（30%），曲の個人練習の具合（40%），合奏中の“合わせる行為”等のアンサンブルへの意欲や，周囲へのアドバイスや働き掛け等のアンサンブルへ参加しようとする積極性（30%）を総合して判断する。	
				指揮法	本授業は，指揮が現場での生徒の表現活動の支援に大いに役立つものとして，合唱や合奏の指導における効果的な実践法を探り，履修者個々の楽曲分析力と指揮の技術の向上をはかることを目的とする。 （オムニバス方式／全15回） （89 麓洋介／５回） 拍を振る基本動作および表情豊かな上体の使い方を習得する。 （134 橋本剛／10回） 旋律や歌詞の抑揚を振る練習，各パートへの目配り，曲調に応じた振り分け方等，より実践的な指揮の研究実習を，楽曲の分析と併せて行う。	オムニバス方式

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（音楽）	和声学	楽曲の骨子をなす和声に対しての習熟をはかることで，楽曲の展開を反射的に予測する力および自身の実施内容を見直せる推敲力を養うことを目標とする。なお，本授業は学び合いによって理解を深めることを目的として，グループで課題に取り組むＡＬの実践も導入している。 （オムニバス方式／全15回） （89 麓洋介／３回） 和音の配置・連結の基本を習得する。 （134 橋本剛／12回） バス課題・ソプラノ課題の音楽的実施を目指しながら，小曲の和声分析の実践も行う。	オムニバス方式
				音楽理論	本授業では，いわゆる音楽理論を楽曲や音楽史と密接に結びつけ，演奏・鑑賞・創作などと関連させて進めていくことを重視しながら，創造的な音楽表現，能動的な鑑賞および演奏能力等の下地を培うことを目標とする。 （オムニバス方式／全15回） （134 橋本 剛／12回） 各回とも前半は音名，音の振動数，音程，教会旋法などを取り扱う楽典の実習を主とし，後半はこれらの理論の楽曲への応用法について，演習をふまえつつ概説する。 （89 麓 洋介／３回） 各回とも前半はコードネームなどを取り扱う楽典の実習を主とし，後半はこれらの理論の楽曲への応用法について，演習をふまえつつ概説する。	オムニバス方式
				作曲概論	本授業では作曲および編曲に関する基礎知識および簡単な即興演奏の習得を目標とする履修後に少しでも音楽表現のひきだしが増えたことを各自が自覚できたかという点が，本授業における最大の評価の観点である。 （オムニバス方式／全15回） （89 麓 洋介／5回） 和音の補遺，伴奏付けの実習，アドリブ奏法，合唱編曲法等，作編曲に関するあらゆる項目を複合的に取り扱う。 （134 橋本 剛／10回） 楽曲に息づく数々の作曲技法，歌のつくり方，調の選び方，楽式論等，作編曲に関するあらゆる項目を複合的に取り扱う。	オムニバス方式
				作曲法	本授業は，ある制約を設けた中で作曲することを通して，将来現場で起こりうるあらゆる事情に臨機応変に対応できる柔軟さを養うことをねらいとする。 （オムニバス方式／全15回） （134 橋本 剛／10回） 前半は受講生が持ち寄る諸楽器についての研究および編曲実習を行う。 （89 麓 洋介・134 橋本 剛／５回）（共同） 後半は「場面や心情に応じた作曲」を目的としたＡＬとして，オリジナルの台本によるリーディング（朗読劇）に添える音楽の作編曲・実演発表をグループごとに実施する。	オムニバス方式・共同（一部）
				音楽史	中学校，高校の音楽教科書に記載されている程度の音楽史の基礎知識を獲得することを目的とする。文献資料，視聴覚教材を用いながら，西洋音楽の歴史を(１)古代(２)中世(３)ルネサンス(４)バロック(５)前古典派(６)古典派(７)ロマン派(８)19世紀末(９)20世紀に区分し，各時代別の音楽の特徴や，代表的な作曲家と音楽作品について学ぶ。同時に音楽を世界史の観点からグローバルにとらえ，音楽と他の分野との関連性も視野に入れつつ新しい音楽史の学び方を考えていく。授業の後半では日本音楽史及び，諸民族の音楽やポピュラー音楽の変遷についても学びながら，いくつかのジャンルの作品を取り上げ鑑賞する。	
			美術	絵画基礎	学校現場でよく使われる不透明水彩絵具を主に使用して，植物・動物・人工物の見かたと描き方について学ぶ。絵を描く喜びを味わえるように，描き方の基本を知るとともに，応用的な題材にも取り組むことで技能/表現の力を身に付ける。作品の評価は，単に再現の上手や下手ですべきではない。モノの見かたや描き方は，描く対象の種類によって異なることを知り，自他の作品の評価の観点を広げられるように，毎回，１つの題材に取り組みながら，モチーフによる見かた，描き方の違いを理解できるように学習を進める。作品評価のためのルーブリック（観点表）を用いて，目標を持って授業に取り組むようにする。	
				絵画実技Ⅰ	静物，人物，風景をテーマに，紙版画と木版画，ドライポイント等の版表現における製版と印刷について実習を通して学習する。同時に指導法についても修得できるようにする。版表現の特徴は，左右が反転することから，偶発的なおもしろさがあることを知った上で，アイディアスケッチ，下絵作りを行い，紙版画においては，さまざまな紙や布，糸等の素材を用い，木版画ではシナベニヤ，ドライポイントではプラスチック板を用いて製版活動を行う。安全上の理由により中性インクを用いて印刷する。作品評価のためのルーブリック（観点表）を用いて，目標を持って授業に取り組むようにする。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（美術）	彫刻基礎	人物モデルを用いて人体具象彫刻（頭像）の塑造制作を行う。具体的には，人物モデルのスケッチ，芯棒の制作，塑造用粘土による造形の順に取り組み，最後に，各自の造形表現について講評会を実施する。これら可塑性のある粘土による具象彫刻の制作を通して，彫刻表現における基礎的な表現力・観察力・造形的思考力など，造形的諸能力を養う。加えて，自然の造形美のとらえ方，立体表現の基礎，彫刻の造形要素（量感，動勢，構築性）の基礎などを培う。	
				彫刻実技Ⅰ	陶彫による丸彫り作品の制作と，油粘土によるレリーフ作品の制作を行う。陶彫では，陶芸で用いる粘土を使って，20㎝角程度の大きさの作品の制作を行う。油粘土での制作では，手のひらサイズ程度のレリーフ作品の制作を行い，石膏への材質転換に取り組む。本授業を通して，彫刻表現における基礎的な表現力・観察力・造形的思考力など，造形的諸能力を養う。加えて，彫刻の技法，造形要素（量感，動勢，構築性）について見識を深める。	
				デザイン基礎	デザインを平面構成やポスター制作と思い込んでいる人が世間では大部分だと思われている。デザインとは，色や形をまとめる行為（構成や装飾）だけはない。当授業では，高校生までもっていたデザインのイメージは覆るかもしれないが，それらを理解した上で，テーマをあらゆる角度から観察し，形の成り立ち，色彩の理解を深めていく。また「その場で考え，判断する」力を体得することも目標とする。「教育のデザイン」まで俯瞰し，広く「美術」教科の存在意義も考えていく。	
				デザイン実技Ⅰ	教育をする立場・デザイン活動をする立場に共通する「考える力」について考えていく。デザイン活動はFeelingではなく，Thinkingを基底とする。学校教育での「美術・図工」の授業意義がそうであるように，考える力の要素である「市場観察力」「課題発見力」「編集する力」をつけるための基礎的なトレーニングをする。また課題に対しての学生によるプレゼンテーションとして，PC系の基本ソフトの習得も行う。	
				工芸基礎	授業では，前半と後半とで２つの課題を行う。 課題①　１年生前期の最初の実技授業であり，学制同志の自己紹介を兼ねて「自画像」を制作する。自画像は，スマートフォンで写真を撮りＢ３パネルに水張りし図案を完成させる。 自画像は絵を描くのではなく「ひも」のような線材等を張り付けて描く。違った素材を用いて描くことで，絵画とは違った表現方法を知ることができる。また，作品を写真にして鑑賞することも行う。 課題②　「ヒュッゲ」をテーマとして照明器具を制作する。光源は100円ショップで売られているものとし，ロウソク等は使用してはいけない。材料は身近な素材を用いて光をデザインすることで制作の楽しさを知る。 講評会では自分の制作した作品をプレゼンし質疑応答を行う。	
				工芸実技Ⅰ	この授業では主にガラス工芸と陶芸の基礎について学ぶ。課題では花を生ける行為を通して花と器の関係について理解したうえで，道具としての花器制作を行う。ガラス工芸ではグラスを花器に見立て，サンドブラスト技法を用いて表面に装飾を施す。また，陶芸では紐作りによる花器の制作を行う。最終的に制作した作品に花を生けて鑑賞する。素材，テクスチャーなどの違いによる見え方や，花器の形と花材との関係について考察し，作品の在り方について知見を深め，道具における用途・機能や素材の特性及び加工技術を学び，工芸の基本概念について理解する。	
				美術科内容論Ⅰ	平安時代後期に制作された代表的な絵巻である「源氏物語絵巻」「伴大納言絵巻」「信貴山縁起絵巻」を取り上げ，配付資料と画像を示し解説する。物語絵巻と説話絵巻の相違を中心に，作品を相互に比較して造形上の特色を把握して言葉で指摘できるようになることを重視し，詞書に記された内容をどのように絵画化しているのかも含めて表現の特徴や意図について考察する。以上のことを通して，美術作品の造形上の特徴を，作品の相互比較を通して把握し，表現の意図を理解できるようになる。	
				美術科内容論Ⅱ	この授業では，主に19世紀から20世紀はじめのヨーロッパ美術を取り上げ，画家や作品の特徴について説明する。多くの作品を見せることにはこだわらず，できるだけ所蔵美術館で撮影した全体や細部の写真も見せ，作品の大きさを実感させたり，筆のタッチや絵の具の塗り方などにも目を向けさせたりして，多面的な理解をうながす。 美術科の学生は他にも美術史の授業を受けているが，画家の名前や専門用語などをおぼえることが勉強であると思っており，自分自身の意見や感想を持つことに自信を持てないことが多い。美術作品の理解を深めさせることによって，このような傾向を是正し，自分の見解を自信を持って述べられるようにする。また，細部の技法を見せることにより，美術鑑賞だけでなく美術実技の指導にも役立てられるようにする。	
				芸術概論	美術史学に焦点を当てて芸術理論を概説した後，仏像を中心とする仏教美術作品を取り上げ，種類（主題）や時代による様式の変遷を社会や宗教，文化との関係や中国や朝鮮半島からの影響も含めて配付資料や画像により考察する。また，遠近法を中心に日本の絵画表現の特色についても触れる。以上のことを通して，美術史学を中心にした芸術理論の基礎を理解し，美術作品の主題や様式，作品が制作された時代の社会や宗教，文化，近隣諸国との関係などについて考察する方法の基本を習得する。	
				西洋美術史	この授業では，オリエントの古代美術及びヨーロッパを中心とした西洋美術の歴史的展開について理解させるために，学生への発問を含んだ講義を実施する。講義においては，対象となる美術の歴史をいくつかの時代区分に分節し，一つの時代区分について１～２回の授業時間を用いてレクチャーする。学生による講義内容の深い理解と定着を期して，講義の際には重要事項の理解を促す発問を頻繁に行う。 パソコンとプロジェクターを用いた，視覚体験型の授業を展開する。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（美術）	東洋美術史	この授業では，外国美術からの日本美術への影響を理解させるために，中国・韓半島の絵画芸術，およびインド・中国・韓半島の仏教彫刻の歴史的展開について，学生への発問を含んだ講義を実施する。講義においては，対象となる美術の歴史をいくつかの時代区分に分節し，一つの時代区分について１～２回の授業時間を用いてレクチャーする。学生による講義内容の深い理解と定着を期して，講義の際には重要事項の理解を促す発問を頻繁に行う。 パソコンとプロジェクターを用いた，視覚体験型の授業を展開する。	
				日本美術史	この授業では，原始時代から第二次世界大戦後に至るまでの日本美術の歴史的展開について理解させるために，学生への発問を含んだ講義を実施する。講義においては，対象となる美術の歴史をいくつかの時代区分に分節し，一つの時代区分について１～２回の授業時間を用いてレクチャーする。学生による講義内容の深い理解と定着を期して，講義の際には重要事項の理解を促す発問を頻繁に行う。 パソコンとプロジェクターを用いた，視覚体験型の授業を展開する。	
			保健体育	体つくり運動	小中学習指導要領に示された体つくり運動のねらいと内容領域を理解し，体つくり運動のねらいを反映する運動課題を構想したり，アレンジできるための基礎的な知識・技能の習得を目指す。 授業は実技を中心に行う。「多様な動きをつくる運動」「動きを高める運動」のための典型教材の実技実習を通して，運動に馴染んだり，スポーツの基礎的な能力を育てる指導の基本的な考え方を学習する。 各テーマのなかで「運動のバリエーションを知る」「夢中になる運動をつくる」「ミニ指導計画・試行・反省」の順にそれぞれ複数回行う。 （オムニバス方式／全15回） （76 上原 三十三／５回） 第１回目～第５回目「バランスをとる運動系」「体を移動する運動系」のテーマの下に行う。 （138 三原 幹生／５回） 第６回目～第10回目「用具を操作する運動系」「力試しの運動系」のテーマの下に行う。 （223 長坂 直美／５回） 第11回目～第15回目「動きを組み合わせる運動系」のテーマの下に行う。	オムニバス方式
				陸上競技	本授業では，陸上競技に関する技能習熟を引き出せる能力を育成し，併せて子どもに陸上運動を指導する際に有用な技能を養うことを目標としている。そのため，走運動の基本的な動きを，習熟過程を含めて学習し，ハードル走，走り幅跳び，走り高跳びの基礎となる走りのリズムを身に付けると同時に，空中動作に関しても併せて学習する。具体的なには，短距離走の走り方，スターの方法，ハードル走，走り幅跳びの技術，走り高跳びの技術，リレーの技術に関して，実技指導を中心とした授業を行う。なお，本授業は中学校及び高等学校の保健体育の内容に沿って行う計画である。 （4 鈴木 英樹）鈴木がメインティーチャーとして授業を運営する。 （197 黒須 雅弘）受講者の人数が多いため，安全面に十分配慮しながら，実技内容を充実させるため，実技のアドバイスを行う。	共同
				器械運動	器械運動の各種目（マット運動，跳び箱運動，鉄棒運動）について，小中学校学習指導要領に示された技能内容の例示技の習熟を図り，技の正しい運動技術とその指導法を学習する。 実技課題として取り上げられる技は，教員として身に付けておきたい最低限の内容であり既に高い技能水準にある場合もあるが，単に技を成功させられるだけでなく，自己や他者の運動の振り返り（反省分析）を通して運動の観察評価と演示法についても理解を深める。 なお，マット運動では「這う」「転がる」「よじ登る」「支える」など，跳び箱運動では「跳び下り」「シャクトリ虫」「ウサギ跳び」など，鉄棒運動では「いろいろなぶら下がり」「いろいろな支持」などの導入運動から段階的に学習を進める。 （76 上原 三十三）授業担当は，充分な安全配慮と効果的な指導のため共同とし，授業の主展開担当をする。 （138 三原 幹生）個別対応を要する受講生の対応を担当する。	共同
				水泳	教員，水泳指導者としての技能を習得し，体系的に教育する能力を習得することを目標に，水泳の基本的な技能を習得する過程のなかで，段階的な指導の組み立てと展開方法について実技体験を通して学ぶとともに，水中環境の危険性についても理解する。 授業は，水泳の理解と指導における学習規律と安全について（講義），水中遊戯，浮漂とけのび，基本4泳法，着衣泳と時間浮漂，道具とリズムを使った水中運動などにより展開する。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（保健体育）	球技Ａ	本授業は，体育授業における実践を想定し，球技(ハンドボールとバレーボール)の技術の向上と指導法を習得し，生徒の技能的な評価ができるようにする。実践上の諸問題解決のための方法改善の工夫についてアイデアをもつことができるようにする。本授業は，球技（ハンドボール，バレーボール）の指導法を実技で学ぶ。内容は，ゲーム中心で授業を構成することで，多様な学習者に起こり得る諸課題を見つけ，学生同士で意見交換を行いながらその解決方法を深めていく。 （オムニバス方式／全15回） （152 縄田 亮太・142 山下 純平／１回）（共同） 合同でガイダンスを行う。 （152 縄田 亮太／７回） バレーボール （142 山下 純平／７回） ハンドボール	オムニバス方式・共同（一部）
				球技Ｂ	授業のテーマ及び到達目標は，「ゴール型」であるバスケットボール・サッカーの２つの種目について，基本的技能・戦術，及び授業で扱う運動課題，体育授業の計画・実践・評価の基礎的な知識と技能について理解することである。また，「ゴール型」の種目の背景に流れる文化的，科学的知識を学習する。両教員の授業は学校現場での実務経験を活かし，実践上の課題を踏まえながら，工夫改善の視点を提供する。 （オムニバス方式／全15回） （141 鈴木　一成・74 森 勇示／１回）（共同） ガイダンス （141 鈴木　一成／７回） サッカー （74 森 勇示／７回） バスケットボール	オムニバス方式・共同（一部）
				ダンス	ダンスは，原始時代から今日まで，社会生活の中で変化・発展をしながら，様々なかたちで創造され，伝承されてきた。そこで，異文化・自文化の理解と文化的背景の異なる人間間の交流について考え，特に，身体表現文化の理解と指導法について「心・からだ・コミュニケーション」をテーマに実践を行う。 授業では，学習指導要領におけるダンスの創作ダンス，フォークダンス，現代的なリズムのダンスの内容を取り扱い，各々の特性を理解するとともに，実技を通して指導法を学習する。創作ダンスでは多様なテーマ（課題）から即興的に表現すること，フォークダンスでは外国のフォークダンスを中心に音楽に合わせて交流しながら踊ること，現代的なリズムのダンスでは，リズムの特徴を捉えて全身で自由に踊ることを目標に行い，授業最後にはダンス発表会を実施する。学校現場での実務経験を活かし，実践上の課題を踏まえながら授業を行う。	
				武道	授業のテーマ及び到達目標は，教員を目指す人を対象に，自らの剣道の技能力と指導力向上を目標とする。同時に，中学校・高等学校の保健体育の「武道」（剣道））の授業担当者に必要な指導内容を展開する。具体的な到達目標は以下の通りとする。①形（木刀による剣道基本技稽古法）を実践できる。②剣道の基礎的な打突技術を実践できる。③礼法を実践できる。④剣道の基礎的なルールを理解できる。授業では剣道の伝統的特性を理解しながら，技能的特性を「形」と「実技」を通して理解し実践する。	
				体育社会学Ⅰ	体育社会学とは何か，また体育を取り巻くスポーツの概念について説明し，スポーツ社会学の守備範囲について事例をあげて紹介する。そのうえで，スポーツは，本来，遊びの性質を強く持ち，学校体育の中にも遊びの要素を取り入れることの必要性について講義する。さらに，小学校体育において，運動系伝承遊びを取り入れることの意義を提案する。これは，現代の子どもたちが抱える様々な問題を解決することにつながるからである。	
				体育社会学Ⅱ	スポーツの大衆化，国際化が進んだ今日，スポーツは，政治，経済，社会，文化など，様々な領域と関わりをもつようになった。レクリエーションや健康の維持・増進としてのスポーツ，学校体育の一領域のスポーツにとどまらず，現代社会においてスポーツがどのように位置づき，社会との関わりを持っているのかについて，ホイジンガとカイヨワの遊びの論をもとに，いろいろな角度から講義を行う。そして，人生100年時代のスポーツのあり方について考える。	
				スポーツ史	普段なにげなく親しみ・楽しんでいるスポーツにはそれぞれ意外な歴史（誕生・発展）が隠されています。歴史的にみて人間の身体的諸活動は未開時代から今日に至るまで，あらゆる時代のあらゆる人たちに広く愛好されています。しかし，生活や社会が変化するとスポーツもまた変化をしています。例えば，走・投・跳・踊といった運動そのものは今日とまったく同じ形態でも，それを行った人々の考えや態度はその時代によって大きく違っています。 そこで本講義では，実務経験を生かし，スポーツの歴史（誕生・発展・変化）を振り返るとともに，これからのスポーツの在り方を考えます。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（保健体育）	運動学Ⅰ（運動方法学を含む。）	体育において，スポーツにおける様々な動作を理解・指導するために必要なバイオメカニクスの基礎知識を得る。スポーツバイオメカニクスの立場から，力学，生理学，解剖学などの基礎知識を活用して，スポーツに関係する様々な基本動作を理解する。具体的には以下の内容を取り扱う。バイオメカニクスの基礎知識，バイオメカニクスの応用（「立つ・構える」動作，「歩く」動作，「走る」動作，「跳ぶ（前へ）」動作，「跳ぶ（上へ）」動作）である。	
				運動学Ⅱ（運動方法学を含む。）	体育において，スポーツにおける様々な動作を理解・指導するために必要なバイオメカニクスの基礎知識を得る。スポーツバイオメカニクスの立場から，力学，生理学，解剖学などの基礎知識を活用して，スポーツに関係する様々な基本動作を理解する。具体的には以下の内容を取り扱う。バイオメカニクスの基礎知識，バイオメカニクスの応用（「泳ぐ」動作，「投げる」動作，「打つ（遠くへ）」動作，「打つ（狙って）」動作，「蹴る」動作，「回転」動作，「滑る」動作）である。	
				生理学Ⅰ（運動生理学を含む。）	本授業は運動指導の際に必要不可欠な，身体運動に関わる生理的メカニズムについて理解を深めること目標としている。そのため，身体活動の発現，制御，持続に分けて，それらに関連した生理的なメカニズムを最新の研究成果を提示しながら講義を行う。具体的には，身体運動を発現する機能および適応，運動を制御する機能および適応，運動を持続する機能および適応に関して講義を行う。また，健康や体力や運動実践に関する内容に関する講義も併せて行う。なお，本授業は中学校及び高等学校の保健体育の内容に沿って行う。	
				生理学Ⅱ（運動生理学を含む。）	本授業は運動指導の際に必要不可欠な，身体運動に関わる生理的メカニズムについて理解して，指導の際に応用できるようにすることを目標としている。そのため，生理Ⅰで行われた講義内容を基に，その理解をより深めるために，グループ形式のアクティブ・ラーニング用いた授業を行う。具体的には，身体運動を発現する機能および適応，運動を制御する機能および適応，運動を持続する機能と適応に関して，学生が調べた成果のプレゼンを授業教材として講義を行う。なお，本授業は中学校及び高等学校の保健体育の内容に沿って行う。	
				衛生学・公衆衛生学Ⅰ	本授業をとおして，健康の維持・増進と社会および環境との関わりを理解し，健康の現状を捉え，疾病予防対策等について理解することを目標としている。そのために，特に健康問題に関わる社会環境，統計資料，生活習慣について，最新の情報を提示しながら講義を行う。具体的には，健康と社会，健康と環境，子どもの心と身体，安全な社会生活，疾病と医療，健康情報の捉え方，学校保健に関して授業を行う。なお，本授業は中学校，高等学校の保健体育の内容に沿い，小児保健，精神保健，学校安全および救急法の内容に関しても触れる。	
				衛生学・公衆衛生学Ⅱ	本授業をとおして，健康の維持・増進と社会および環境との関わりを理解し，健康の現状を捉え，疾病予防対策等について理解することを目標としている。そのために，衛生学・公衆衛生学Ⅰで行われた授業内容を基に，その理解を深めるために，グループ形式のアクティブ・ラーニングを用いた授業を行う。具体的には，健康と社会，健康と環境，子どもの心と身体，安全な社会生活，疾病と医療，健康情報の捉え方，学校保健に関して授業を行う。なお，本授業は中学校，高等学校の保健体育の内容に沿い，小児保健，精神保健，学校安全および救急法の内容に関しても触れる。	
				学校保健Ⅰ（小児保健，精神保健，学校安全及び救急処置を含む。）	本授業をとおして，心と身体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持し豊かな生活を実現するための資質・能力を育成することを目標としている。そのために，保健の見方・考え方を働かせ課題を発見し，合理的な解決にむけた学習を行うため，学校で行われている実際の保健活動の現状を，最新の情報を用いながら授業を行う。具体的には，現代における子ども健康問題，子どもの発育と発達，子どもの心と身体，学校における保健教育，学校における安全管理，学校保健活動の実際に関して講義を行う。なお，本授業は中学校，高等学校の保健体育の内容に沿い，小児保健，精神保健，学校安全および救急法の内容に関しても取り扱う。	
				学校保健Ⅱ（小児保健，精神保健，学校安全及び救急処置を含む。）	本授業をとおして，心と身体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持し豊かな生活を実現するための資質・能力を育成することを目標としている。そのために，学校保健Ⅰで行われた授業内容を基に，その理解を深めるために，グループ形式のアクティブ・ラーニングを用いた授業を行う。具体的には，現代における子ども健康問題，子どもの発育と発達，子どもの心と身体，学校における保健教育，学校における安全管理，学校保健活動の実際に関してグループ形式のアクティブ・ラーニングを用いて授業を行う。なお，本授業は中学校，高等学校の保健体育の内容に沿い，小児保健，精神保健，学校安全および救急法の内容に関しても取り扱う。	
			技術	木材加工法	中学校技術家庭科，高等学校工業科をはじめ，学校教育の中で木材を取り扱い，木製品の製作に関わる学習活動を計画･指導するための必要最小限の知識を身に付ける。材を安全かつ合理的に加工･利用する上で知っておかなければならない最低限の知識を身に付けることを目的する。授業内容は，日本産業技術教育学会の策定した技術科教員養成基準を踏まえた上で，高等学校工業科向けにも拡張される。まず，材が樹木の生命活動によって生産される生物材料であることを理解し，これに由来する巨視的･微視的な構造と性質の特徴について学ぶ。続いて，かんな･のこ･のみなどの木工具の構造と使用法について理解し，ほぞ接合など木工の基本的な工作法，および製図法について学ぶ。さらに，帯のこ盤などの木工機械を使用して，原材料である樹木からどのようにして板材･角材などの製材品が生産されるかについて理解する。なお，本授業は「材加工実習」 と連動して行われる。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（技術）	木材加工実習Ⅰ	学校教育におけるものづくり学習活動において木材を取り扱う上で必要となる最小限の工具・工作機械の使用方法や木材製品の製作技術を身に付ける。受講者がそれぞれのプロジェクトを構想し，施策やモデル製作などの探究的な設計プロセスを経て，木材加工製品の開発および製作過程を体験的・実践的に学ぶ。まず，手加工によるスライド式本立てに取り組み，木工具の取り扱いや手入れや製作技術を身に付け，次に，構想例が示された小型製作品に取り組み，木工機会を安全に配慮しながら活用し，正確で素早い製作を学び，さらに，一枚板からの自由製作に取り組む。最後に，グループによる共同製作で生活の中で実用的な製作に取り組む。	
				木材加工実習Ⅱ	中学校「技術・家庭」の教育をするに当たり，指導教師の素養として必要となる加工技術を主要な木工具を中心として学ぶ。中学校技術教育でのものづくり学習においては合目的な設計と合理的な製作計画の下に手工具を主とする加工実習が展開される。学習の初期段階では木材を主とした加工が中心的課題になる。その際，工具を主とする加工実習が展開される。そこで実習では基礎的な木製品の製作実習を通して，合目的な加工工程に関する初歩的な捉え方を学習する。本授業は 「木材加工法」と連動され，木材及び加工の科学的合理性を踏まえた加工所作を自覚的に理解しながら各種の手工具の使用能力を高めることを課題としている。	
				製図	授業目標として，（1）設計者の意図を製作者に的確に伝達する「ものづくり」の指令書としての，図面の意義・役割・効果について説明することができる，（2）製図用器具を適切に使用しながら，正しい姿勢と段取りで製図の演示ができる，（3）正確でわかりやすい製図ができる技能を，実習を通して習得する。（4）正確でバランスのとれた図面を作成するために，粘り強く丁寧な取り組みを行う。授業では，基本的な目的・技能・段取りを解説した後，正しい姿勢や進め方を身に付けることができるように，実習を行う中で個別に留意点を指摘する。機会部品の製図を中心とする題材について，立体と平面図の関連を理解し自在に読図とイメージ形成ができるようにする。	
				金属加工法Ⅰ	ものづくり・技術・工業教育において必要となる，金属材料を中心とした工業材料の特性，加工法 について理解する。教科書を中心に，各種材料の特性について講義し，連続する金属加工実習Ⅰの内容と合わせて，製図や実習を含めて行う。金属の結晶構造，拡散，平衡状態図の読み方，鋼の状態図，鋼の製造法，鋼の熱処理，鉄鋼の分類と性質，応力とひずみの関係，塑性加工による金属加工法，鋳造による金属加工法，材料評価法（繰り返し変形と疲労，クリープ，衝撃強さ，摩耗，硬さ測定），材料各論（アルミニウムおよびアルミニウム合金，銅および銅合金，チタンおよびチタン合金，マグネシウムおよびマグネシウム合金，アモルファスおよび準結晶，金属間化合物）	
				金属加工実習Ⅰ	教育現場における金属加工の手工板金を用いた授業を行うために必要な製図，金属加工の加工法，加工工具の取り扱い及び整備について実習する。金属加工法Ⅰで得た知識を実践する。教育現場において授業を行うために必要な実技の能力を修得することを念頭に授業を行う。実習の内容は以下のテーマで行い，３では設計製図に関わるレポートを製作後提出する。 １．四角の浅い皿状の器と製作する　２．ブックエンドを製作する　３．キーホルダーを製作する　４．自由製作コンテスト(習得した技術を活かしてた雑貨を製作する）	
				金属加工実習Ⅱ	鉄は現代文明を支える殆ど全ての装置，機械，構造物の最も重要な素材である。また近代以降は，工作機械を代表とする機械類の発達により，安価に精度の高い物を簡単に作ることができるようになり，生産力は劇的に上がった。その工作機械の中で最も古く基本的なものは旋盤である。そこで本実習では，旋盤を用いた基本的な切削加工を学ぶと共に，鉄（鋼）の特性を実感することにより，その歴史的・現代的意義を知る。	
				材料力学	機械や構造物を構成する各部材オは，例外なくなんらかの力を受けている。 したがって，機械や構造物を設計製作する際には，各部材に生ずる変形および抵抗力などに関する知識を持ち，各部材に求められる剛さと強さが確保されるように，材料および寸法を決めなければならない。もし外力に対する抵抗力に不十分な部分があれば機械はその部分から破損するであろうし，また反対に過大に失すれば不必要に多くの材料を用いることになって不経済であるだけでなく機械等の性能を低下させてしまう。本授業では，外力によって生ずる金属材料の変形および抵抗力を求めるための理論的な取り扱い方を修得することを目標とする。本授業では，外力によって生ずる金属材料の変形および抵抗力を求めるための理論的な取り扱い方を修得することを目標とする。	
				原動機	原動機は，動力発生機関として熱力学，流体力学，材料力学，金属材料などの広い分野の基礎技術の上に成り立っている。ここでは，原動機の基礎について学ぶ。原動機には多くの種類があるが，代表的な原動機であるポンプ，ボイラ，蒸気タービン，内燃機関の作動原理，効率などについてその基礎を理解する。また，環境問題との関係も理解する。	
				機械実験	機械工学特に熱力学の分野では， 熱を運動エネルギーに変換する「エネルギー変換」を取り扱う。また，機械や構造物がその機能を果たす時，それらの構成部材は各種の力を受け変形する。そのため部材には必要にして十分な強度が求められる。最初の実験では歯車伝達実演教材を作成し，エネルギーの伝達についての学習効果のある教材を製作する。次に，試験片を引張試験機で引張変形したときの応力－ひずみ曲線を実際に測定し，材料がどのような機械的性質を持っているかを，実験により明らかにする。さらに，機械材料が熱処理によりどのように変化するかについて，硬さ試験機を用いて実験により明らかにする。最後に形状記憶合金の機械的特性評価の５テーマの内容を理解し，実習を通して機械工学の概要を習得する事を目標とする。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（技術）	電気Ⅰ	電気に関わる諸現象を正しく理解し活用するためには電磁気学を学ぶ必要がある。電磁気学は力学と並ぶ理学・工学の基礎的な学問であり，電気を学ぶ者にとって最も必要不可欠な学問である。本授業では，具体現象の理解から定量化，数式化とその物理的意味を通して，抽象的な概念の理解に努める。クーロンの法則から出発して，ガウスの定理に至り，その間，電荷，電界，電位等の概念の修得を，またビオ・サバールの法則から出発してアンペールの法則に至り，その間，電流，磁界，磁束密度等の概念の修得を目標とする。	
				電気Ⅱ	電気は目に見えない現象であり，電気ならびに電気機器を扱う場合，電気回路学はその理解を容易にしてくれる。電気回路といえば，オームの法則と誰もが頭に浮かべる。オームの法則を作用反作用的な考え方をすることで電気回路の統一的な見方ができる。先ずは，オームの法則から一歩前進したキルヒホッフの法則，重ね合わせの理とテブナンの定理を理解し，使いこなすことを第一段階の目標とする。電気回路を学ぶ者にとって交流理論は最初の関門である。しかし，回路を線形回路に限れば，複素数，ベクトルを使うことによって交流回路の諸問題が明確になる。インピーダンス，アドミタンスの概念を理解し，電気回路の具体的な諸問題を解決する道具として，交流理論を使いこなせることをこの授業の第二段階の目標とする。	
				電気実習	学校教育現場においては，簡単な電気電子回路を生徒たちに実際に設計製作させることによって，電気を学ばせ，理解させることが中心になる。電気電子デバイス（ダイオード，トランジスタ，サイリスタ，フォトダイオード，フォトトランジスタ，発光ダイオード等）を用いた簡単な電気電子回路を設計・製作することによって電気・電子回路につての認識を深め，理解を確実なものとし，学校教育現場での生徒に対する電気技術教育の指導力を身に付けることを目標とする。	
				栽培学	栽培が人間の生きる営みにどのように関わっているかについての理解を深める。そのために，栽培の農業技術としての位置づけと，技術科における意義，栽培の理論を確認する。さらに具体的な作物栽培の事例を通して，栽培についての基本的な技術について学ぶ。前半で，栽培にかかわる概念を技術の問題とかかわらせながら検討する。栽培とは何か？技術とは何か？技術科の中になぜ栽培があるのか？などについて議論することを通じて，人間の生きる営みの原点の技術として，栽培の本質を明らかにし，理解を深める。後半で，栽培に必要な要素について理論的体系的に明らかにした上で，栽培技術について播種から収穫までを具体的な作物の事例に即して解説する。	
				栽培実習Ⅰ	作物を実際に自らの手で栽培し，さらに収穫・調理，鑑賞も含めて，栽培の楽しさややりがいをからだで感じとりながら，栽培に必要な技術の基本を体験的に学ぶ。栽培実習Ⅰでは，主に夏作物を栽培する。畑の露地栽培で，トウモロコシ・エダマメ・インゲンマメ・カボチャ・ナス・ピーマン・サツマ イモなどを栽培する。水耕栽培で，トマト・キュウリ・スイカ・メロンなどを，選んで栽培する。鉢物栽培として，アサガオ・キクを栽培する。水田で，アイガモ放飼稲作を行い，水田の田植え・除草とアイガモの飼育などを行う。	
				栽培実習Ⅱ	作物を実際に自らの手で栽培し，さらに収穫・調理，鑑賞も含めて，栽培の楽しさややりがいをからだで感じとりながら，栽培に必要な技術の基本を体験的に学ぶ。栽培実習Ⅱでは，主に秋冬作物を栽培する。自然条件と作物の生育にあわせて，栽培実習Ⅰに述べたのと同様の計画で作業をすすめる。畑の露地栽培で，ダイコン・ハクサイ・ホウレンソウ・シュンギク・モチナなどを栽培する。前期の栽培実習Ⅰから栽培してきたサツマイモの収穫を行い，焼き芋をして食べる。鉢物栽培として，前期から栽培してきたキクを栽培し，開花させ鑑賞する。水田で，前期から行っているアイガモ放飼稲作を行い，水田の稲刈りを行う。	
				情報Ⅰ	情報をコンピュータで扱うとは，どのようなことなのか，その原理について学ぶ。そのためには，コンピュータがどのような機械であるかについての理解が前提となる。その上で，情報をコンピュータが扱える形に加工し，処理する方法や手順について学ぶ。このことを通して，コンピュータと情報通信がどのような技術によって成り立っているのか，そして，コンピュータが魔法の箱ではなく人間の指示に従って動作する機械であることについて，認識を深めることを目標とする。扱うゲームやワークシートは，現在世界的に注目されている「コンピュータサイエンス・アンプラグド」という手法に基づく。こうした，「体験的に，見えない技術を学ぶ」手法を通して，コンピュータと情報通信に関わる根本的な原理を学ぶ。	
				プログラミング実習Ⅰ	コンピュータは人間が与えたプログラムにしたがって，それを順に実行する機械である。このことを体験的に理解するために，実際にプログラミングを行う。この目的のために，教育用プログラミング言語「ドリトル」を用いる。「ドリトル」は，日本語による命令語や日本語に似た語順をもつといった特徴があり，言語そのものの学習は容易である。授業では，プログラミングの題材として，アニメーションや簡単なビデオゲームの作成，計測制御基板としてmicro:bitを用いた作品の製作を行う。このことで，コンピュータを意図通りに操作する感覚を自らのものとするとともに，計測と制御の意味，計測値の性質とその活用，情報通信など，現代社会で広く利用されている技術の基礎の仕組み理解を深める。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（技術）	基礎情報技術	現代の情報技術について理解し，本質に迫るためには，情報をどのように捉えるか，また処理対象や解決したい問題をモデル化する方法について知り，具体例に基づき慣れておくことが肝要である。その際，数理・理論的なものの見方，考え方は重要な柱の一つである。本演習では，そうした数理・理論に関する基礎的な技能を身に付けることを目的として，高等高校の数学程度の内容から始め，情報技術に関連した話題を例題に基づき演習する。授業では，情報技術の基礎である論理と数学的演算の2つを大きな柱として，最終的にこれらが融合してコンピュータが働いていることを理解する。まず，コンピュータは2進法の値を処理すべきデータとして扱っていることを再確認し，2進数を用いてどのように負の値や小数などが表されているかを演習を通して知る。続いて，もっとも簡単な論理である命題論理の入り口を学ぶ。最後に集合と論理と数値の演算が同じように扱われることを確かめ，電気回路としてのコンピュータへと移る。電気回路の組み合わせとして演算装置，記憶装置，そしてCPUとしてのはたらきがどのように実現されているかを知る。	
			家庭	家庭経営	この授業では，小・中・高等学校家庭科を指導する上で必要な家庭経営領域に関する知識を身に付けるとともに，生活の営みを多面的に把握・理解し，またその現代的課題について考察し，解決のための方策について検討することができる力を養うことを目標とする。そのために，生活時間や家計について，家族の形態，ジェンダー，ライフコースなどの多角的な視点から把握し，その現代的課題について考察し，解決のための方策について検討する。また生活のリスクとこれを支えあう制度及び消費者問題の実態や解決の方策についても考える。	
				家族論	今日，家族にかかわるライフスタイルは多様化し，個人の選択にひらかれる余地が増しており，家族の意味も多義的なものになっている。その一方で，1990年代後半から生じている雇用流動化のなかで，家族生活にかかわる格差が存在している。この授業では，家族論の基礎概念と視角，現代における人生と家族のかかわりの実態，家族にかかわる法や社会制度を学ぶ。それらを通して現代家族を社会と関連させて総合的に理解した上で，教師として家庭科の「家族・家庭生活」分野を教える上での基本的視点を得ることを目標とする。前半では調査活動，映像視聴，グループ討論などの方法を取り入れながら，家族を捉える視点について学ぶ。後半では，人生と家族にかかわる社会制度とのかかわりを考える。	
				生活経済論	この授業では，生活経済において基本となる事項について理解したうえで，これに関連する現代的な生活の諸課題について考察し，解決のための方策について検討する。ここでは現代的な生活の課題として，情報通信技術の発達を背景としたキャシュレス社会の進展や多様なメディア（媒体）から発信されるようになった生活情報，持続可能な社会の構築に貢献する倫理的消費などを取り上げる。またこれらはいずれも平成29，30年告示の学習指導要領で追加，明記された指導項目とつながっており，これらの現代的な生活の諸課題をどのように小・中・高等学校の家庭科の学びとしていくのかについて，実践例などを通して考えていく。	
				被服学Ⅰ	被服学，家庭科教科書の中の被服学，裁縫用具，被服教材について考え，製作も行う。被服実習Ⅰの復習を基に，なぜその道具を使うのか，なぜその方法で縫製したのか，深く追求していく。第10回から第14回までは教材について考え，目的に合った縫製法を学び，縫製実習も行う。	
				被服実習Ⅰ	ポーチ，手提げカバン，エプロン等を教材にし，地直し，アイロンのかけ方，裁断，柄合わせ，裁ち鋏の使い方，しつけ，ミシンでの直線縫い，始末等を正確に行えるよう学習する。ファスナー付きの小物の製作を最終作品として被服構成の基礎理論を把握しながら手縫いの基礎も学ぶ。技術の習得としてはゼロからの出発として，玉結びに始まる手縫いの基礎，ミシンでは上糸のかけ方，下糸の巻き方，糸調子の取り方で基礎を押さえ，理論を踏まえた正確な裁断縫製，始末ができるようにする。	
				食物学Ⅰ	五大栄養素であるたんぱく質，脂質，炭水化物，無機質及びビタミンについて栄養学と食品学の視点から解説し，その知識を今後のより良い食生活にために有効活用できるようになることを主な目的とする。また，五大栄養素以外の食品成分として，嗜好成分（色素・呈味・香気）についても解説を加える。さらに授業の最後には，保健機能食品（栄養機能食品，特定保健用食品及び機能性表示食品）についても言及し，どのような有効成分がどのような機能を発揮しているのかについて，具体例を挙げながら解説する。	
				食物学Ⅱ	授業の序盤では日本食品標準成分表（以下，食品成分表）の利用の仕方について解説し，日常摂取している食品の栄養に関する情報を，食品成分表から正しく読み取れるようになることを目指す。次に中盤では，食品成分表のデータをもとに，植物性食品（米，小麦，大豆など）及び動物性食品（食肉，牛乳，卵など）がどのような栄養素によって構成されているかについて解説する。そして終盤では食品表示について言及し，加工食品，生鮮食品及び保健機能食品の表示の仕組みについて解説する。	
				調理実習Ⅰ	本授業は主体的に食生活を営むために，①調理や食事の役割，②安全で衛生的な食材・調理用具の取扱い，③調理の基礎（計量，調理操作），④食品の調理特性，⑤食事計画と献立作成，⑥日本の食文化の継承に関する必要な基礎的な知識や技能技術を習得し，生活に役立つ実践力を高めることを狙いとする。 ４名ずつ班を編成し，班ごとに教員が指定する献立（第３回～第11回）または自主献立（第12回～第14回）に沿って調理する。指定献立では，教員による示範と配布資料（レシピ）を沿って調理し，自主献立では予めレシピを作成してから試作と調理を行う。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（家庭）	調理学	本授業は主体的に食生活を営むために，①調理や食事の役割，②安全で衛生的な食材・調理用具の取扱い，③食品の調理特性，④食品の栄養素，⑤食事計画と献立作成，⑥日本の食文化の継承に関する必要な基礎的・基本的な知識を習得し，的確に判断できる思考力を育成することを狙いとする。実際にパン，ジャム，豆腐などの食品を加工し，その際に生じる調理科学的現象を体験的に理解したり，食文化の地域性やその特徴について考察したりする。なお，食事計画については食事摂取基準に基づいた弁当作りやテーブルマナー講習などの機会を設ける。	
				住居学	授業の目標は，住まいの問題が生活のさまざまな側面と深く関わりあっていることを学ぶとともに，住生活における問題の解決のための考え方や手法を身に付けることである。具体的な目的は，現代の住生活の特徴と問題を理解し，問題解決のための考え方を学ぶことにある。この 授業では，近年の生活変化と住居の不適合問題(生活様式，建て方，家族関係)や，現在の住居をとりまく社会問題(地球環境 温暖化，住宅 事情)に目を向けながら，住生活の特徴およびその問題の原因や解決策を考える。	
				保育学	現代社会において子どもが生まれ育つこと，子どもを産むこと／産まないこと，子どもを育てること，それらを支える社会関係や制度に関わる現状と課題を総合的に理解し，中学校・高等学校で「保育」の授業を構想するための基礎的な視点を獲得することが授業の目的である。授業担当者による講義，ゲストスピーカーによる講義（家庭看護に関する内容），保育実習と報告会を組み合わせて授業を構成する。実習は，現代の子育ち／子育てに関わる探究課題を各グループで設定し，保育・子育て支援の現場での活動計画をたてて実践するフィールドワーク形式で行う。（ゲストスピーカーによる講義１回）	
			英語	音声学	本授業では，音声学の基礎理論を学び，発音指導に役立つ英語の発音の仕方について学習する。授業の到達目標は，（1）発音記号をしっかりと身に付け，母音・子音の個々の音の特徴や単語・文レベルでの発音や音声の仕組み学び，実際にそれらの発音ができるようなること，（2）英語と日本語の発音の仕方と比較して，その共通点及び相違点を理解できるようになること，そして最終的には（3）それらの学んだ知識と身に付けた技能を発音指導に役立てるようにすること，である。各回，テキストに沿って音声の理論を学び，発音の演習を行う。適宜，国際英語の観点から，多様な種類の英語音声も扱う。	
				英文法	本授業の前半では，言語の特性全般，特に，動物の「ことば」と言語との相違点，言語表現の創造的特性，また言語獲得の生得的側面について理解を深める。後半では，高校までの文法の学習事項を踏まえ，音素，形態素，語，品詞，句構造，変換，意味役割と文法機能等の，文の組み立てに関する基本的な考え方について学ぶ。その上で，発音と綴字，派生語と複合語，主要語を中心とする文法的まとまり，単文と複文，基本文と派生文など学校文法と密接にかかわる各項目について，英語の具体例に基づいた演習を行い，理解の定着を図る。	
				英語学講義Ⅰ	本授業では，これまで学んできた文法事項について，伝統的な言語学，また，認知言語学などの比較的新しい分野に着目しながら，とらえ直しを図る。そのために，まず前半では，主に学校教育において学んできた文法・語法の事例をいくつか取り上げて，英語学的，言語学的にそれらがどのように捉えられ，説明されてきたかを見て，文法理解を深める。また，そのうち一回では，現職の中高教員を交えて，中高英語教育における文法指導の実際に関する知見を得る。後半では最近の主要な言語理論の一つである認知言語学に焦点を当て，その基礎を学ぶとともに，認知言語学に基づいて中高英語教育で学ぶ事項を見直し，理解を深める。	
				英語学演習Ⅰ	（概要）英語の教育・研究の上で基礎となる，文法とその運用についての基礎的な知識を身に付ける。 （オムニバス方式／全15回） （113 濵嵜 通世／８回） 語彙同士の意味的な関係に着目し，語彙力向上を意識したトレーニングを行うとともに，述語を中心とした基本文型の組み立てやテンス，モダリティ，アスペクト，また言語運用に関する基本的な事項として，会話の含意について理解を深める。 （111 ライアン・アンソニー／７回） より実際の言語使用を意識した内容として，談話の種類，談話の構造と言語行為，会話構造分析，会話におけるチャットやチャンクの構造について，演習を行う。	オムニバス方式
				英語史Ⅰ	英語がどのようにして現在のような姿になったのかを学び，英語に対する理解と関心を深める。具体的には，以下の三点を目標とする。 （1）英語を「歴史」という観点から捉えなおし，より深く理解する。 （2）英語の一見不規則，不合理な性質の多くが，その歴史に原因があることを学ぶ。 （3）表現が持つ歴史的背景を知る（考える）ことで，言葉の面白さ，奥深さを感じる。 以上の目的のもと，まず，序盤で，英語の各時代の姿と特徴，また，それに関わる外面史を見て，中盤で，比較言語学の基礎を学びながら，広い視座で英語の歴史を理解する。終盤では，英語のアルファベットの歴史を理解し，その背景にある長い歴史と，各文字の興味深いルーツを知る。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科内容科目）	（英語）	英文学概説	英文学の主だった作品を，時代背景を踏まえて概観し，作品のさわりや文体(style)，語りの特徴(narrative discourse)，ジャンル（genre）について学ぶ。具体的には，アングロ・サクソン文学を代表するBeowulfから始まって，チョーサーのCanterbury Tales，シェークスピアのHamletやMacbeth，ミルトンのParadise Lost，デフォーのRobinson Crusoe，スイフトのGulliver’s Travels，ロマン派の詩人たちの作品，ディケンズのChristmas Carols，世紀末の詩人たちの作品，ジョイスのUlysses，ベケットのWaiting for Godot，およびゴールディングのLord of the Fliesを扱う。	
				米文学概説	米国の植民地時代から二十世紀後半までの時代思潮を概観しつつ，各時代の文学を通史的に概説する。アメリカ文学が抱える特殊性を考察するとともに，個々の文学作品の背景にある社会や文化，歴史に関する知識及び理解を養うことを目的とする。アメリカ文学を語る上で重要なピューリタニズムとフロンテイアの視点からアメリカの文化と歴史について考え，次にクーパー，ホーソーン，メルヴィル，ポウ，ストウ夫人，マーク・トェイン，スタインベック，ヘミングウェイ，サリンジャー，アリス・ウォーカーなど，各時代を代表する作品について紹介し，その現代的意義について考える。	
				英語文学演習Ⅰ	前半回では「英文学」という学問の成り立ち，批評的態度，批評方法などを概観し，後半回では短編小説（キャサリン・マンスフィールドの’Bliss’と余裕があればオスカー・ワイルドの’The Selfish Giant’）を読む作業を通して，英文の正確な読解と批評的視点（’Bliss’では「信頼できない語り手」を，’The Selfish Giant’ではクィア批評の一端）の涵養を目指す。毎回，各グループに配布プリントの和訳・まとめを行ってもらい，それを基に皆で合評する。	
				英語文学演習Ⅱ	短編小説を扱った英語文学演習Ⅰの学びを踏まえ，英語文学演習Ⅱでは長編小説を扱う。具体的にメアリー・シェリーのFrankenstein， or the Modern Prometheusをテクストに小説技法及び（参考文献に挙げている『批評理論入門』と，デヴィッド・ロッジの『小説の技法』を援用しながら）批評理論を学ぶことで，テクストの正確な読解と批評的視点の涵養を目指す。毎回，各グループに配布プリントの和訳・まとめを行ってもらい，それを基に皆で合評する。	
				英語文学講義Ⅱ	二十世紀アイルランド文学を代表する二人の作家，W. B. YeatsとJames Joyceの作品を読み，その歴史的・文化的コンテクストを踏まえたうえで，作品のテーマ，文体，言葉の技法，語りの特質等について学ぶ。具体的には，イェイツの初期の詩集The RoseおよびThe Wind among the Reedsとアイルランド文芸復興運動の関わり，ジョイスの初期の短編集Dublinersにおける植民地支配と麻痺の問題を学ぶ。同時に文学形式あるいは運動としての象徴主義とリアリズム，またモダニズムについて理解する。	
				オーラルコミュニケーションⅠ	（英文）This course will focus on three interrelated aspects of oral communication. First， students will develop the ability to actively negotiate meaning in English in the classroom and in conversations. Second， students will learn about connected speech and demonstrate the ability to incorporate aspects in monologues. Finally， student will learn how to actively take part in conversations and this ability will be tested in a final speaking test. （和訳）本授業ではオーラルコミュニケーションにおいて関連しあう三つの要素に焦点をあてる。第一に学生は，積極的に英語で意味交渉する能力を向上させる。第二に連続音声について学び，個人練習によりその習熟度を見る。最後に会話に積極的に参加できるようになり，最終試験でその力を測る。	
				ライティングⅠ	ライティングの能力向上を中心として，その他の英語技能も視野に入れながら，汎用的な英語スキルを養うことを目標とする。映画のスクリプトを利用したごく日常的な英語表現の理解から始め，徐々に英字新聞や英語雑誌を利用した長めのライティングに進むように授業を構成する。これらの材料を利用した演習を通して，平易な英語表現の中に重要な文法事項や言語運用上のルールを学習者自身が見つけ出していくような，発見学習型の授業とする。	
				異文化理解	（英文）This course will focus on cultural differences and intercultural communication. Classes will be organized around 2 to 3-week themes such as the stages cultural adaptation, verbal and nonverbal communication, and cultural differences among families and the workplace. Students will be expected to read prior to attending class and participate actively in classroom activities and discussions. （和訳）本授業では文化的な差異や異文化間コミュニケーションに焦点を当てる。授業は２－３週間ごとにテーマを変え，その中で文化適応の各ステージ，言語的・非言語的コミュニケーション，家族や職場での文化的差異等について考察する。学生は予習と，教室でのアクティビティや討議への積極的参加を要求される。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	中等教科教育法科目	国語科教育	中等国語科教育法ＣⅠ	中等学校用の国語教科書の教材について，学習指導案のかたちにまで表現できるように教材研究を行う。基本的には指導案のなかでも，「教材観」の記述が中心である。ここには，学習指導要領における国語科の目標及び主な内容並びに全体構造を理解した記述が求められる。授業はひとつの教材につき，教員からの分析の観点の説明およびそれをもとにしたグループディスカッションの回と，グループディスカッションで明らかになったことの発表と総括の回を繰り返すかたちで行う。また文学的文章教材，説明的文章教材それぞれの読み方について，１回を設けて講義を行う。	
				中等国語科教育法ＣⅡ	中等学校用の国語教科書の教材について，実際の研究授業と同じ形式（授業役，授業観察役，生徒役に分け，授業役はグループの代表１名が行う。場合によってはＴＴのかたちでグループの複数メンバーが授業役を務めることもある）で模擬授業を行う。授業役は，事前に，グループでの指導案やワークシート等を作成する。実際に行われている研究授業と同形式として，授業討論会を実施する。各回の前半50分を模擬授業，後半40分を討論会とする。	
				中等国語科教育法ＣⅢ	中学校学習指導要領における国語科の「目標」「内容」を把握したうえで，「知識及び技能」を育てるための国語科の役割を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」において考察し，どのような授業づくりをするかについて考えて行く。そのうえで，現行中学校国語教科書に掲載される小説・説明文・詩を対象として，ジャンルの特性に配慮しつつ，教材研究の方法を習得し，生徒の読みに対応するための教師としての読みを持つことをめあてとする。	
				中等国語科教育法ＣⅣ	高等学校学習指導要領における国語科の「目標」「内容」を把握したうえで，「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を育成するための国語科の役割について理解を深める。そのうえで，現行の高等学校国語教科書に掲載される小説・説明文・詩について，先行研究をふまえつつ，教材研究の方法を習得し，生徒の読みに対応するための教師としての読みをもつことをめあてとする。また，論理的思考力を育てるための評論・論説文の読み方や表現力を養うための文章の書き方の方法について理解する。	
			社会科教育	中等社会科教育法ＣⅠ	中学校学習指導要領（社会，特に公民的分野）における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の振り返りを行い，よりよい授業作りについて考えていきます。	
				中等社会科教育法ＣⅡ	中学校学習指導要領（社会，特に歴史的分野）における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の振り返りを行い，よりよい授業作りについて考えていきます。	
				中等社会科教育法ＣⅢ（地理歴史分野）	中学校学習指導要領（社会，地理・歴史的分野）と高等学校学習指導要領（地理歴史）における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の振り返りを行い，よりよい授業作りについて考えていきます。	
				中等社会科教育法ＣⅣ（公民分野）	中学校学習指導要領（社会，公民的分野）と高等学校学習指導要領（公民）における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の振り返りを行い，よりよい授業作りについて考えていきます。中学校社会科公民的分野と高等学校現代社会の内容を取扱い，その相違や接続を考えるカリキュラムになっています。	
			数学科教育	中等数学科教育法ＣⅠ	数学教師として，数学教育の基本的知識や教育実践に生かせる見識を得る。数学教育の目標となる資質・能力について理解し，指導の際に意識できるようになること，各領域の基本的な内容を理解し，指導の際に留意すべき点を明確化すること，を目標とする。 前半では，数学教育の目標を資質・能力の観点からいくつか挙げ，講義を行う。後半では，各領域の内容についてその背景や問題点と共に解説し，実際に問題を解いてもらったり，指導計画を練ったりしてもらう。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科教育法科目）	（数学科教育）	中等数学科教育法ＣⅡ	数学の特性に応じた情報機器を利用した教材研究・授業設計/研究の方法を習得することを目的とする。教材研究・授業分析・授業設計・模擬授業の実施を踏まえた指導案修正などをテーマとする。 図形を中心的な素材として，コンピュータ・ネットワークを利用した教材研究・授業設計/研究の方法を習得する。毎回，一定量の課題を解決しながら，最終的に自分なりの指導案を作成し，発表する。	
				中等数学科教育法ＣⅢ	中学校・高等学校数学科の学習指導要領における目標の変遷を押さえ，中等数学教育における目標論に関して基本的な知識を身に付けると共に，問題解決を軸にした教授・学習の基本的な考え方を理解することを目標とする。そのために，前半では，算数・数学教育カリキュラムの目標・内容の構造とその歴史的変遷について体系的な講義を行い，後半では，問題解決的な授業の構成方法に関する基本事項について講義すると共に，幾つかの指導内容に関して具体的な授業設計を行う。	
				中等数学科教育法ＣⅣ	算数・数学科の指導内容としては新しい統計領域の指導実践を行う力の習得を目指す。統計領域の指導が重要視される背景や求められる教育像を理解した上で，先進的な教材，授業実践についても体験的に学習する。また自身が担い手として新規の教育実践を展開していけるよう，教材・授業開発力の習得も目指す。資料等を配布しての講義，現在の教育状況に関する調査・レポートの作成，新規の教材を用いた協働的問題解決を取り入れたグループワークなど幅広く展開する。	
			理科教育	中等理科教育法ＣⅠ	中学校・高等学校の理科における教育目標や学習内容に適した授業での指導・評価や，その計画に関わる授業研究の方法等が理解できること，さらに生徒に育成する理科の資質・能力を考え，その達成にむけた授業実践についての意見が持てることを目指す。学習指導要領解説理科編に示される理科の資質・能力やその形成の順序性，生徒の自然認識の多様性や抱える学習困難性，さらに理科指導に向けて教師に必要な資質力量に関わる概説を行うほか，理科授業における指導や評価の技法に関する場面指導の演習を物理・化学・生物・地学の単元に基づき取り入れることで，主体的に理解し，考え，工夫し，表現する体験を重視した学修を展開する。	
				中等理科教育法ＣⅡ	中学校・高等学校の理科の教育課程に位置づけられる科学的な探究活動の実践に関わる教材研究や授業設計，またそれらを基盤にした指導計画を理解できること，また，生徒の活動実態に即した技能指導に必要な能力を知り，演習等を通じて獲得することを目指す。科学的探究能力の育成を重んじる教育課程の在り方，理科学習活動を想定した協働学習の演習とそこでの指導の検討，ＥＳＤ・ＳＤＧｓ（教材やプログラム）の推進，教育実践報告をもとにした学習環境構成等について協議や演習を行うことで，理科学習の場づくりに関するスキル獲得の体験的な学修を展開する。	
				中等理科教育法ＣⅢ	中学校・高等学校の理科授業における単元展開設計やそこでの学習指導計画に関する基本的な理解に基づき，授業実践において教師に必要となる理科指導技術の理解と獲得を，学生グループの協働による学習指導案の作成や模擬授業の実施を通じて目指す。物理・化学・生物・地学に関する学習内容の中から学生グループ毎に選択させた学習単元について，全授業時間にわたる具体的な授業デザインを協働で行わせ，学習指導案としてまとめ，全体での指導案協議の場で発表して意見交換を行わせる。さらに，改善した学習指導案に基づいて模擬授業（マイクロティーチング）を実践したうえで，活動成果と課題に関する協議を通して，実践的指導力を獲得させる。	
				中等理科教育法ＣⅣ	中学校・高等学校の理科で生徒が学ぶ基本的な科学概念とその理解構築のための指導における具体的な留意事項を，教科書分析や教材研究から確認し，探究的な学習過程の論理展開を検討することで，観察実験場面の指導力の獲得を目指す。取り扱い内容として，前半は第１分野・物理／化学系，後半は第２分野・生物／地学系に分けて，中学校から高等学校の学習内容の接続（系統性）も踏まえつつ，教科書や教材のほか，演示実験や生徒実験の分析を行わせる。さらに，観察・実験の場面指導演習の経験を踏まえさせることにより，科学概念と実験操作や実験結果との論理的な関係づくりを意識した指導計画のあり方について追究させる。	
			音楽科教育	中等音楽科教育法ＣⅠ	音楽科の教育目標を理解し，学習指導要領に示してある内容を踏まえて，授業の立案ができるようになること，そして，実際に指導を行うために必要な知識や技能を身に付けることを目指す。現在の学習指導要領だけでなく，学習指導要領の歴史的な流れについて学ぶことにより，学習指導要領の目標の背景についても理解する。また，これまでに培ってきた音楽の力を，教材研究や授業の立案に活かす方法を身に付け，実際の指導を行うための技術も身に付ける。様々なグループで協働作業をしていくことを通して，幅広い意見の捉え方やコミュニケーション能力，意見のまとめ方なども身に付けていく。	
				中等音楽科教育法ＣⅡ	学習指導要領で求められている和楽器の指導，伝統的な歌唱の指導，我が国の音楽（伝統音楽）の鑑賞指導の実践を見据えて和楽器「箏」と伝統的な歌唱を学び，実際に指導ができるための基礎知識を身に付けることを目的とする。実技と鑑賞の往還による演習形式の授業。学習指導要領における日本の伝統音楽の位置付け，日本音楽史との関連も学ぶ。グループワークを通して個人の習熟度を高める。和楽器の伝統的な指導法である「真似」「模倣」，楽譜に頼らない「口唱歌」を用いての指導を取り入れた授業。その際，情報機器や教材の効果的な活用法についても検討する。オンラインコンテンツ映像を活用し繰り返し練習を行うとともに授業の空き時間で自主的に練習すること。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科教育法科目）	（音楽科教育）	中等音楽科教育法ＣⅢ	学習指導要領で求められている和楽器の指導，伝統的な歌唱の指導，我が国の音楽（伝統音楽）の鑑賞指導の実践を見据えて和楽器「三味線」と伝統的な歌唱を学び，実際に指導ができるための基礎知識を身に付けることを目的とする。実技と鑑賞の往還による演習形式の授業。学習指導要領における日本の伝統音楽の位置付け，日本音楽史との関連も学ぶ。グループワークを通して個人の習熟度を高める。和楽器の伝統的な指導法である「真似」「模倣」，楽譜に頼らない「口唱歌」を用いての指導を取り入れた授業。その際，情報機器や教材の効果的な活用法についても検討する。オンラインコンテンツ映像を活用し繰り返し練習を行うとともに授業の空き時間で自主的に練習すること。	
				中等音楽科教育法ＣⅣ	授業の目標 音楽科の授業の中で取り扱われている活動（歌唱，器楽，創作，鑑賞）の指導法について，実習を通じて指導に必要な知識と技術を身に付け，留意すべき点などを理解する。さらに文部科学省の音楽科学習指導要領（小学校，中学校）の内容を理解する。 授業計画の概要 授業の最初に，受講者３名ずつ中学校音楽科教科書に掲載されている合唱曲の指揮実践（指導実習）を行う。続いて，歌唱・器楽・鑑賞の各教材について理解を深めるとともに，それぞれの活動の意義について考察する。創作は，実際に曲を創る活動を通して指導のポイントを実体験する。テキストは，文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社と，文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社を使用する。学生に対する評価は，授業への取り組み（30%），合唱曲の指揮実習への取り組み（30%），創作活動の作品課題作成及び課題への取り組み（40%）を総合して判断する。	
			美術科教育	中等美術科教育法ＣⅠ	中学校美術科及び高等学校芸術科（美術）の教育目標や内容を理解し，関連する理論を踏まえて，単元構想ができるようになる。前半は学校教育における美術教育の意義を歴史やその背景となる理論を学習することで理解する。後半は学校現場で使用されている教科書を材料に，学習指導要領で示されている内容を理解し，単元の構想を目指す。各回において，個人での学習から小グループ（４人程度）での討議・発表をする時間を設け，学習を定着させる。	
				中等美術科教育法ＣⅡ	中学校美術科及び高等学校芸術科（美術）の教育目標や内容を理解し，学習指導案を作成する。また教材研究を通して，具体的に学習内容や指導方法を考察する。 前半は学習指導案の構成の理解と作成を行う。個人での作成を基本とするが，適宜小グループ内で発表・討議を行い，学習内容の共有・定着を行っていく。後半は分野ごとに教材研究とその発表を行っていく。個人または小グループでの活動とする。発表を通して学習内容の共有・定着を行っていく。	
				中等美術科教育法ＣⅢ	３年次の教育実習において行った研究授業に関する発表を行い，授業改善に向けてのディスカッションを行う。 前半は主に教育実習において行った研究授業に関する発表と協議を行う。適宜，授業者から子ども理解や教科指導に関する内容を指導する。後半は，題材・単元事例をもとに，授業に向けた取り組みを行う。個人での作成を基本とするが，適宜小グループ内で発表・討議を行い，学習内容の共有・定着を行っていく。	
				中等美術科教育法ＣⅣ	学習指導要領への深い理解を確認し，主に中学校美術科教育における指導内容や方法，評価について整理し，学習指導に必要な基礎な実践力を確認する。これらを踏まえ，小グループ（４人程度）で模擬授業として単元の導入授業（50分）を実施する。その中で学習指導案の作成や実際の学習指導における指導方法・評価について協議し，実践力の素地を身に付けます。	
			保健体育科教育	中等保健体育科教育法ＣⅠ	授業のテーマ及び到達目標は，保健体育科教育の授業づくりのイメージを具体的に描けることに重点に置き，現場に出て保健体育科の授業に日々取り組むために必要な理論と実践の具体を理解し，実践的指導力を養うことである。内容は，中等保健体育科の3年間の指導内容と学習指導の具体的な方法について，各領域の整理表を参考に検討する。また，学校現場での実務経験を活かし，実践上の課題を踏まえながら，学習指導における「陥りやすい現状の問題点」を見付けるとともに，その改善の視点を検討する。	
				中等保健体育科教育法ＣⅡ	授業のテーマ及び到達目標は，中等保健体育科における単元の構想，計画，実施，評価について実践的な能力を身に付ける。また，確実に学習指導案を作成できるようにする。内容は，中等保健体育科の各領域（体つくり運動領域・器械運動領域・陸上競技領域・水泳領域・球技領域・武道領域・ダンス領域・体育理論・保健分野）における学習指導案の作成とそのピアレビューを学生同士で検討し，単元の構想・計画を重点的に行い，教育実習での実施と評価のイメージをもつ。	
				中等保健体育科教育法ＣⅢ	保健体育科の学習指導計画について，原理的及び構造的な理解を図るための講義と学習指導案作成を実際に行う。学習指導案の構成について，内容項目の関係を考えながら単元構想，単元計画，１時間の展開など，まず事例を参照する。次いで，保健体育の複数領域について実際の学習指導案を作成する。作成した学習指導案について受講者相互にピアレビューをしながら実践的な力量を高める。また，想定される実践上の諸問題を挙げながら，より実践的な学習指導案を作成する能力を高める。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科教育法科目）	（保健体育科教育）	中等保健体育科教育法ＣⅣ	保健体育科の実践上の諸問題と今日的教育課題について理解するとともに，これら問題(課題)解決の方法について考える。実践上の諸問題については，公開授業や教育実習等で経験した児童生徒の学習状況や学習環境の問題を指摘しながら，その改善のためのアイデアを提示しながら受講者相互に話し合う。 今日的教育課題については，過去30年の教育審議会から提示された課題の変遷を系譜するとともに，最新の教育課題について実践による解決を考えアイデアを出し合う。	
			保健科教育	中等保健科教育法ＣⅠ	最終目標　主として初等教育体育科保健領域の基礎知識の形成 １.教科としての初等教育体育科保健領域の意義，目標，内容，指導計画，学習指導方法，評価方法を説明できる　(知識/理解) ２.よりよい授業を展開するために，健康リテラシー(健康についての識字能力→情報を収集し，吟味し，活用する)に寄与できる（思考/判断） ３.保健担当教員に必要な優れた授業観を自ら進んで形成できる（関心/意欲） 保健担当教員の役割と職務内容などに触れながら，教職の意義について理解し，自らの教職への意欲や適性を認識する。更に，教員免許状を習得すること，教育実習を充実したものにするための準備として，保健科の教育内容及び指導法，指導案作成（細案）などの能力を身に付ける。講義形式のほかに各自で内容について思考し，グループで討論をする。講義後は，内容に基づいて課題研究(レポート)を設定する。	
				中等保健科教育法ＣⅡ	最終目標　中等教育保健体育科保健分野の基礎知識の形成 １.教科としての中・高等学校保健体育保健分野（科目保健）の意義，目標，内容，指導計画，学習指導方法，評価方法を説明できる（知識/理解） ２.よりよい授業を展開するために実際の授業を分析し，児童が課題解決をできる授業展開を組み立てることができる（思考/判断） ３.保健担当教員に必要な優れた授業観を自ら進んで形成できる（関心/意欲） 保健担当教員の役割と職務内容などに触れながら，教職の意義について理解し，自らの教職への意欲や適性を認識する。更に，教員免許状を習得すること，教育実習を充実したものにするための準備として，保健科の教育内容及び指導法，指導案作成（細案）などの能力を身に付ける。講義形式のほかに各自で内容について思考し，グループで討論をする。講義後は，内容に基づいて課題研究(レポート)を設定する。	
				中等保健科教育法ＣⅢ	・保健科教育の意義，目標，内容，方法，評価について，保健授業の問題点と関連づけながら説明できる　(知識/理解) ・模擬授業やグループワークを通して，他の受講生と保健科教育の内容や指導方法について討議できる（思考/判断） ・「保健」担当教員に必要な優れた授業観や指導方法を自ら進んで形成できる（関心/意欲）	
				中等保健科教育法ＣⅣ	最終目標　高等学校保健体育科保健分野の実践力の形成 １.保健科教育の意義，目標，内容，方法，評価について，保健授業の問題点と関連づけながら説明できる　(知識/理解) ２.模擬授業やグループワークを通して，他の受講生と保健科教育の内容や指導方法について討議し，保健科の各内容に対して新しい考えを持つことができる（思考/判断） ３.保健担当教員に必要な優れた授業観や指導方法を自ら進んで形成できる（関心/意欲）	
			技術科教育	中等技術科教育法ＣⅠ	１.技術科の単元構成と授業づくりの習得　２.授業検討力の習得　３.技術科の単元構成と授業づくりへの関心　４.技術科の単元構成と授業づくりの技法習得。学習指導要領の４単元内容の理解の上で，典型実践の把握，関連の授業づくりを行い，学びあう。学校教育における技術教育の役割，技術科の単元構成と授業論，授業づくり演習，単元Ａ（材料と加工）の目標と授業例，単元Ａの授業づくり演習，単元Ａの模擬授業，単元Ｂ（生物育成）の目標と授業例，単元Ｂの授業づくり演習，単元Ｂの模擬授業，単元Ｃ（エネルギー変換）の目標と授業例，単元Ｄ（情報）の授業づくり演習，単元Ｄの模擬授業	
				中等技術科教育法ＣⅡ	技術科教育の特徴的な役割と機能について総合的に学習する。最初に，技術科教育で育成する資質と能力を，技術教育の基本的視点から自己教育力，　問題解決能力，創造性の育成について検討する。次に，生徒の発達段階を考慮して，学習心理との関わりについて検討する。また，技術科教育と総合的学習との関わりについて検討する。最後に，技術科教育について国際的な視野から検討する。これらのことから，教師になった際の課題に対応する資質を身に付けることを目指す。本授業科目の内容は，主に，「技術科教育と問題解決能力の育成」を中心に扱うとともに，各受講者に模擬授業を実施する。模擬授業を通して，「問題解決的な学習」を重視した技術科教育の指導技術を身に付けさせる。	
				中等技術科教育法ＣⅢ	授業の目標は，１.技術科の学力論，内容論，方法論，教材論の習得，２.授業構成力の習得，３．技術科の学力論，内容論，方法論，教材論への関心である。技術科の学力論の知見をふまえつつ，技術科の典型的授業を対象にした内容論，方法論，教材論の考察を通して，それら授業づくりの基礎的知見を習得する。内容として，技術科教育の目標・役割，子どもの発達と技術の学力，内容論①技術の科学，内容論演習①技術の科学，内容論②技能，内容論演習②技能，内容論②技術観・労働観，内容論演習②技術観・労働観，教育方法論①技術の科学，教育方法論演習①技術の科学単元，教育方法論②技能，教育方法論演習②技能，教材論①技術の科学，教材論演習①技術の科学を行う。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科教育法科目）	（技術科教育）	中等技術科教育法ＣⅣ	技術科の授業の立案・運用に関する総合的知識を習得させる。活動的な学びの教材例をもとに，授業の立案・模擬授業をもとに，①授業の目標・課題設定，②学びの場面の分節化，③発問と応答について授業実践の課題を学び取る。授業内容は以下。授業のガイダンス，配送計画ゲームの授業を体感する。ルータゲームの授業を体感し，授業の目標，教材の方法的特徴を学ぶ。技術ゲームの授業を体感し，授業の目標，教材の方法的特徴を学ぶ。模擬授業（20分間）の技術科教育における単元上の位置づけを考えるとともに，授業案を考え，模擬授業のシミュレート。模擬授業の実施・授業改善の検討会。技術科の授業論・教材論の動向。成長する技術教師の授業研究とコミュニティ。技術科の授業づくりに関する考察，レポート作成・代表者の発表。成長する教員になるための方策の検討，レポート作成・代表者発表。	
			家庭科教育	中等家庭科教育法ＣⅠ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，中学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
				中等家庭科教育法ＣⅡ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，高等学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導ついて，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
				中等家庭科教育法ＣⅢ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，中学校・高等学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを家庭科と家事・裁縫科の歴史的変遷，ならびに諸外国と日本にみる教育の歴史で課題とされた事柄と関連づけて検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
				中等家庭科教育法ＣⅣ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，中学校・高等学校家庭科で取りあげる教育内容をどのように指導するかを諸外国にみる家庭科的教科，および日本国内における現代的課題等の具体的な事柄と関連づけて検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけた指導について，総合的・理論的・実践的に検討し探究し，今後を展望することを目標とします。	
			英語科教育	中等英語科教育法ＣⅠ	第二言語習得理論，及び，これまでの様々な外国語教授法の理論と実践について学ぶ。具体的には，学習指導要領をふまえ，外国語教育（英語）の目標と小・中・高の連携の英語教育，第二言語習得理論からの示唆と応用，20世紀の言語教育の歴史的流れをたどり，過去に実践されてきた主な教授・指導法の理論的な側面を理解する。そして，それらの教授法を活用して，実際に日本の中学・高等学校で指導するために，教授法を活用した授業づくりを試みる。	
				中等英語科教育法ＣⅡ	教育実習前の学生に，教育現場での実践力を身に付けることを目的とした内容で行う。グローバル社会における英語の役割，小・中・高等学校における学習指導要領の理解，各学校の授業観察，指導案の作成，指導の展開・工夫，教室管理等，充実した英語教育実習のために知っておきたい知識を身に付ける。また，実践指導力を習得するために指導者として身に付けておきたい英語コミュニケーション能力，教材研究，評価等についても学ぶ。さらに，小・中・高一貫の英語の授業やその役割等についても理解し，教育実習に活かせる総合的な力を習得する。	
				中等英語科教育法ＣⅢ	授業の到達目標は，教育実習を控え，授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができるようにする。英語教育の理論と実践を見通した上で，最新の知見を踏まえ教育実践ができる素地を養うことを目的とする。授業の概要では，第二言語学習の概要を踏まえ，それらの理論と実践との関わりを掘り下げて学んでいく。言語習得理論では，母語を基礎として外国語習得，臨界期仮説，個人差と動機づけ，外国語学習のメカニズム，外国語を身に付ける，効果的な外国語学習を扱う。さらに教室学習での特徴を理解できるように学び，生徒同士，教師と生徒とのやり取りに着目できる機会を理論および実践で行う。さらに評価に関わり，試験作成での信頼性及び妥当性を実践に生かせる力を付ける。これらを踏まえて，模擬授業も行い英語コミュニケーション力の養成も進める。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教育法科目）	（英語科教育）	中等英語科教育法ＣⅣ	中学校及び高等学校の学習指導要領解説に書かれている内容を，これまでの教科指導法で身に付けた理論を援用して，授業の中で具現化できるようになることを目標とする。また，中高の英語教育の基盤となる小学校外国語活動及び外国語の概要についても学ぶ。 具体的には，「英語科における学年目標」「単元目標」「本時の目標」を設定する力，「本時の目標」を達成することができる教材の開発及び作成の力，授業における指導力を，演習を通してそれぞれ身に付けていく。また，実際の学校現場で行われているテスティング及び評価の方法についても演習を通して身に付けていく。最後に，英語科教育における理論と実践との往還について，学んだ内容や自身の模擬授業の省察から各自の考えをまとめ，各校種における教育現場で効果的な授業ができるようにする。	
			職業指導科教育	職業指導科教育法ＣⅠ	職業指導，キャリア教育の意義と歴史的経緯から現在の学校教育における職業指導についてキャリア教育と関連づけて検討する。また，我が国の教育理念とその具現化のために，社会的・職業的自立に向けた能力育成の方策として，キャリア発達の基礎理論及び発達段階に即した効果的指導，各教科，領域との関連，地域社会との連携について主に演習を通じて論議し理解を深める。授業は，論点の提示をもとに講義形式，アクティブ・ラーニング，演習など内容に応じてスタイルを変更し論議する。	
				職業指導科教育法ＣⅡ	職業指導，キャリア教育の意義と歴史的経緯から現在の学校教育における職業指導についてキャリア教育と関連づけて検討する。また，我が国の教育理念とその具現化のために，社会的・職業的自立に向けた能力育成の方策として，キャリア発達の基礎理論及び発達段階に即した効果的指導，各教科，領域との関連，地域社会との連携について論議し理解を深める。授業は，論点の提示をもとに講義形式，アクティブ・ラーニング，演習など内容に応じてスタイルを変更し論議する。	
				職業指導科教育法ＣⅢ	雇用が流動化し，予測しづらい社会の中で生徒たちが生きていくために，どのような力を育てていくことが求められるのかを理解すると共に，教育課程の中で具体的にそれをどう指導していくのかについて，これまでに学習した理論や内容を踏まえて指導案を作成する力を育成する。また，指導案作成にあたっては，中学・高校(普通科)における指導の在り方だけではなく工業・商業高校などにおける取組も念頭に置きながら，地域社会と連携を図りながら職業指導を行っていく方策を議論していく。	
				職業指導科教育法ＣⅣ	産業や経済の構造的変化に伴って雇用形態が多様化･流動化する中，子どもの進路の不安定化と不透明化が急速に進行しつつあります。生徒にとって進路選択および進路先への適応は決して容易なものではなく，様々なリスクに直面することも少なくありません。現代の職業指導には，予期できない事態を乗り越えて自らの人生の可能性を拡げ，キャリアを積極的に構築できる生徒を育成することが求められています。本講義では，職業指導の理論と方法について講義を通して学習した上で，アクティブ・ラーニング形式で職業指導に関する授業の計画・実践・評価・改善を行うことで，学校や生徒の状況をふまえた効果的な支援を展開できるようにします。	
			情報科教育	情報科教育法ＣⅠ	本授業の到達目標は，（1）情報科の教育的な背景となる考え方について，学習指導要領から読み取ることができる，（2）情報科の各教育内容について，関連する学問領域と結びつけることができる，（3）教育的な背景と学問的な背景を踏まえ，各単元の教材研究に活用することができる，である。目標を達成するため，指導要領および指導要領解説を読み解きながら，目標や内容と指導上の留意点，学習評価の考え方，関連する学問領域を結びつける学習活動を行う。また情報科の各単元についてグループに分かれて教材研究を行い，教材研究の結果について発表・共有する。	
				情報科教育法ＣⅡ	本授業の到達目標は，（1）基礎的な授業設計理論を理解し，学習目標の種類に基づいた授業設計や評価基準の作成ができる，（2）情報科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用法を理解し，具体的な授業場面を想定した指導案を作成することができる，（3）具体的な授業場面を想定した模擬授業を行い，振り返りを通して授業の改善ができる，である。目標を達成するため，情報科の授業実践事例や実践研究を調査・分析し，情報科の特性に応じた情報機器及び教材の活用法や，学習指導要領との対応等を理解する。また，基礎的な授業設計理論に基づき，授業実践例を参考に具体的な授業を想定した指導案を作成する。さらに，模擬授業を行い検討会を行い，授業改善を行う。	
			地歴科教育	地歴科教育法ＣⅠ	高等学校学習指導要領（地理歴史科）における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の振り返りを行い，よりよい授業作りについて考えていきます。	
			公民科教育	公民科教育法ＣⅠ	高等学校学習指導要領（公民科）における目標や育成を目指す資質・能力を理解し，学習内容とその背後にある学問領域とを関連させることで理解を深めていきます。そして，様々な学習指導理論，学習指導案の書き方を学んだ後，模擬授業を通して教育現場で役に立つ実践力を身に付けてもらいます。第１～５回は学習指導要領，指導する上での留意点，評価，学問領域と学習内容の関係，課題解決型などの発展的内容について学びます。第６～９回は子どもの実態にあった授業作り，ICTの利用，学習指導案作成上の注意点を学んだ後に学習指導案を作成します。第10～14回は模擬授業を実践してもらい，第15回は模擬授業の振り返りを行い，よりよい授業作りについて考えていきます。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（中等教科教育法科目）	書道科教育	書道科教育法ＣⅠ	高等学校における書道は，書写が国語科の中に位置づけられているのに対し，芸術科の中に位置づけられている。芸術科の目標はただ単に技術・技能の習得に終わるだけではなく，生涯にわたって芸術を愛好する心情を育て，芸術文化を理解し，豊かな感性を養うことにある。高等学校において書道を教えようとする学生に対し，表現と鑑賞のそれぞれの分野における基礎的な知識・技能を身に付けながらも，より具体的な教材開発と指導方法についての専門性を養い，授業に対する実践力を獲得することを目標とする。具体的には，高等学校の教科書教材を取り上げ，教材研究の仕方や，学習指導案の書き方などについて具体的に指導する。授業を構想し，共同で検討することによってよりよい指導方法と実践について研究する。また指導者と生徒双方の視点から考えることでより実践的な指導能力を身に付けるとともに，指導方法の工夫と改善を試みる。	
				書道科教育法ＣⅡ	小・中学校国語科書写と高等学校芸術科書道の違いと両者の関連について整理したうえで，書道の指導方法の在り方について学ぶとともに，授業実践力を養う。高等学校の教科書教材の中でも，日本書道の名筆を取り上げ，教材研究の仕方や，学習指導案の書き方などについて具体的に指導する。授業を構想し，共同で検討することによってよりよい指導方法と実践について研究する。また指導者と生徒双方の視点から考えることでより実践的な指導能力を身に付けるとともに，アクティブ・ラーニングやＩＣＴ機器を利用した指導方法の工夫と改善を試みる。	
			工業科教育	工業科教育法ＣⅠ	本授業では，工業高校の現状及び教科工業の科目を俯瞰して，内容と取り扱いについて理解することに主眼を置く。専門高校としての工業高校の位置づけについてまず確認した上で，教科工業の科目について，機械系学科で主に設置する科目，電気系学科で主に設置する科目と，その他の科目に分類して，それぞれの内容を概観する。その上で，過去と現在の教科書を比較することで，工業科教育の変化をみる。また，科目「課題研究」について，取り組みの事例と評価について概説した後，現在公開されている事例と成果発表会について，ネット等を用いて調査し，発表と議論を行う検討会により，理解を深める。さらに，技術教育と工業教育及び工学教育との関係についてみた後，工業科における安全教育について理解する。	
				工業科教育法ＣⅡ	本授業では，学習指導要領に示される教科工業を学ぶ高校生の育成像，及び社会から求められている人材像を理解する。また具体的な教科工業の科目を選定の上，内容を深く理解し，模擬授業などを通して実践力を身に付ける。そのために，教科工業の授業科目を確認した上で，基礎的共通科目と各分野の科目に大別して，学習指導案と評価のための考え方を理解し，授業案を考え，模擬授業を行う。さらに，我が国の工業教育の現状と課題として，技術の高度化の視点，地域社会との連携の視点，国際的な視点について概説し，議論を通して理解を深める。	
		養護に関する科目		衛生学･公衆衛生学	養護教諭養成課程１年生の専門科目（必修）として開講する。水や空気などの身近な環境や，化学的，物理的あるいは生物学的，さらには社会的環境など，人間を取り巻くさまざまな環境が健康に及ぼす影響について学ぶ（衛生学）。さらに，疾病の予防や健康の保持増進のための組織的取り組みを，特に日本で行われている施策（法律，行政，教育を含む）を中心に理解する（公衆衛生学）。今後健康関連の分野で活躍する学生にとっては必須の内容であり，この分野の基本知識の習得を目標とする。	
				予防医学	養護教諭養成課程の専門科目（必修）として，主として感染症や生活習慣病の予防を中心に，現代日本における「健康管理」の現状と問題点を中心に講義と演習を行う。将来，養護教諭として学校現場で活躍する学生にとっては必須の内容であり，この分野の基本知識の習得を目標とする。主な講義内容は次の通りである。新感染症法と学校伝染病，結核，新型インフルエンザ，ウィルス性肝炎，その他の感染症の予防，予防接種，性感染症および食中毒，疫学調査とエビデンス，ヘルスプロモーションと健康増進活動，特定健康審査と学校職員の健康診断，循環器疾患の予防，がん予防など。	
				学校保健(小児保健，学校安全を含む。)	・学校保健の意義，目的，内容などについて，児童・生徒・学生の健康問題と関連づけながら説明できる。（知識/理解） ・本講義で学習した内容とこれまでに自分が経験してきた学校保健活動とを他の受講者と討議し，具体的な学校保健活動計画等を作成することができる。（思考／判断） 発育発達期にある幼児・児童・生徒・学生と教職員の健康の保持増進を図ることを目的とする学校保健について，保健教育と保健管理の両領域の円滑な運営を図るための保健組織活動の側面から理解を深める。 ①　通常は講義形式で行うが，VTR等の教育媒体を活用する。 ②　授業後は課題研究(レポート)を提出する。なお，課題研究は，講義の内容に基づいて設定するので，提出を義務づける。	
				養護概説	養護教諭は，学校看護婦としてその始まりを見る教育職員であり，児童生徒の養護をつかさどる専門職である。それぞれの時代背景のなかでその職務内容は変化も見られるが，誕生から今日まで常に子どもたちの健やかな成長を願いその支援を続けてきた事実は揺るぎない。本講義では，養護教諭の歴史や現状を概観した１年次の「養護教諭論」をふまえて，固有の専門性を有する養護教諭の役割やその活動に対する基本的な理解をさらに深めていくことをねらいとする。	
				健康相談	健康相談を支える心理学的技法を学ぶとともに，それらをロールプレイや模擬体験（ソーシャルスキルトレーニング，ストレスマネジメント，非言語的技法・コラージュ，心理アセスメント）を通して活用することで，養護教諭としての健康相談のあり方を考えることを目標とする。 健康相談活動に必要な知識の獲得と，それを活用する模擬体験の両側面から授業を展開する。模擬体験については，スクールカウンセラーの視点から学校で活用しやすいテーマと内容を取り上げて行っていく。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（養護に関する科目）	栄養学(食品学を含む。)	1.養護・栄養教諭として備えるべき栄養学に関わる基礎的な知識の習得，及び2.基礎知識を基に実際の栄養指導に対する思考，判断能力を養うことを目的とする。 具体的内容としてはじめに基礎的な有機化学と細胞生物学を学び，人体の構造の中でも特に栄養と関連が深い消化器の構造，主な栄養素である糖質・脂質・タンパク質の化学的構造，人体内での利用・機能，代謝・調節機構，微量栄養素であるビタミンおよびミネラルの人体にとっての必要性，代謝調節機構について学ぶ。また，栄養素ではないが水および食物繊維についても学ぶ。また，栄養素の観点から人のエネルギー代謝を学び，国民健康栄養調査に基づく日本人の食事摂取基準について解説を行う。	
			解剖生理学Ⅰ	将来，養護教諭として健康教育を行っていく上で，人体の解剖および生理機能を系統だって記憶し理解しておくことは非常に重要である。また，解剖学は医学の基礎であり，器官の解剖学的構造は，生理学的機能と密接に関連している。 【解剖生理学Ⅰ】では，細胞の構造，生命を維持するための機能（植物性機能）である，心・脈管系，呼吸器系，消化器系や腎・泌尿器系の解剖学的構造を把握し，それらと関連した機能を理解することを目標とする。	
			微生物学	1.養護教諭として備えるべき感染症に関わる基礎的な知識の習得，及び2.基礎知識を基に実際の感染症に対する思考，判断能力を養うことを目的とする。 講義形式で行う。また，授業毎に単元の理解が得られているかどうか確認する為に，簡単な小テストを実施する。 授業内容は微生物の分類，構造について，つぎに感染症の原因となる病原体に基づいて接触感染（性感染症含む），呼吸器感染，経食道感染についてどのような感染症がどのような微生物によって引き起こされるのかを学ぶ。また消毒・滅菌法，化学療法，さらに基本的な免疫学（自然免疫，獲得免疫）について学ぶ。さらに，実務上必須の知識として感染症法および学校保健安全法についても解説する。	
			精神保健	養護教諭として必要な精神保健の基礎的知識を体系的に獲得し，メンタルヘルスを支える援助者としての考え方を身に付ける。 各種の病気・障害（統合失調症圏の病気，躁うつ病圏の病気，神経症圏，パーソナリティ障害，発達障害，外因性精神病等）を中心とした精神保健に関わる諸知識を，治療者としてではなく，病気や障害を持つ者と関っていく可能性がある者（教師・スクールカウンセラー）の立場から必要なものは何かという点について，講義形式で授業を行っていく。積極的な参加と発言を求める。	
			看護学概論	養護教諭としての専門性を高めるために，基礎的学問として，看護の知識を習得する。 教科書に基づき，看護の構成要素について学習を深めるとともに，現在の関連する理論についても知ることができるよう，調べ学習を行うことをのぞむ。 各授業には，教科書に出てくる漢字および単語の意味等の小テストを行う。 また，看護理論についての学習を深めるため，冬休みには，看護理論家の理論書を読み，養護教諭の看護についてレポートをすること。 試験の日には，看護学概論のポートフォリオを提出すること。	
			看護実習Ⅰ	1.知識/理解 養護教諭としての専門性を高めるために，看護を理解し，習得した技術を他者に説明できる。 2.思考/判断 看護技術を用いる場面を考えながら，各技術を安全・安楽に用いるためのアセスメントができる。 3.関心/意欲 養護教諭として看護技術を用いる際の自分の現在の到達度を把握し，安全・安楽に実施するための目標を持ち，技術習得に向けての意欲が示せる。 4.技能/表現 安全・安楽に基づいた基礎看護技術の習得ができる。 5.その他 看護のポートフォリオを作成し，学習の成果を示すことができる。	
			臨床実習Ⅰ	学内外において学習した知識や技術を統合し，地域における保健医療福祉活動の実際を体験して養護教諭として必要な能力を養うことを目標とする。養護教諭を目指す学生としての視点を持ち，臨床実習を通して保健医療福祉機関とどのように関わる事ができるかを常に意識しながら実習をすすめ，養護教諭の役割・機能に関して考察をする。行動目標は以下である。 ①保健医療福祉機関ではどのような活動が行われているのかを理解する。 ②子どもの成長発達を踏まえ，学校における児童生徒の心身の訴えを多面的にとらえて疾病の早期発見と迅速かつ適切な対応といった保健活動に結びつけるために，養護教諭にできることは何か，何をなすべきかを考察する。 ③そのためにはどのような知識と技術が必要かに気づいて学習する。 ④養護教諭として保健医療福祉機関とどのような連携をとる事ができるかを考察する。	

（専門教育科目）	（専攻基礎科目群）	（養護に関する科目）	臨床実習Ⅱ	学内外において学習した知識や技術を統合し，さまざまな臨床場面における保健医療活動の実際を体験して養護教諭として必要な能力を養うことを目標とする。養護教諭を目指す学生としての視点を持ち，臨床実習を通して保健医療機関とどのように関わる事ができるかを常に意識しながら実習をすすめ，養護教諭の役割・機能に関して考察をする。行動目標は以下である。 ①保健医療機関ではどのような保健医療活動が行われているのかを理解する。 ②学校における児童生徒の心身の訴えをいろいろな疾病の早期発見と迅速かつ適切な対応といった保健活動に結びつけるために，養護教諭にできることは何か，何をなすべきかを考察する。 ③そのためにはどのような知識と技術が必要かに気づいて学習する。 ④養護教諭として保健医療機関とどのような連携をとる事ができるかを考察する。	
			救急処置	傷病者をすみやかに救助し，正しい応急手当をして，医師や救急隊員，保護者などに渡すまでの救命処置と応急手当の具体的な方法を学び技術を習得する。さらにけがや疾病の発生を未然に防ぐための対策について養護教諭の視点で創意工夫ができることを目標とする。 一般的な救急蘇生法（一次救命処置および応急手当：ファーストエイド）の理論について解説し，また実習を通して具体的な技術を習得させる。さらに学校における救急処置の在り方を踏まえた上で養護教諭として必要な能力を身に付けさせる。	
			診断学Ⅰ	養護教諭として，児童生徒の健康管理・健康教育を行っていくためには，疾患全般についての幅広い知識を持っていることが必要である。本授業では，学校現場で遭遇し得る児童生徒の内科系疾患（血液・造血器疾患，呼吸器疾患，消化管・消化器疾患，代謝・栄養疾患，神経・筋疾患等）に対して適切に対応できるようになること，生活習慣病等の予防につながるような健康教育が効果的に行えるようになることを目標とする。	
	専攻科目群	幼児教育専攻科目	幼児教育学	幼児期の教育理念と教育の基本について学ぶことを目標とする。具体的には，現在の幼児教育の目的・目標，法令・制度，保育内容，方法等とその考え方を理解するために，明治期以来の日本の幼児教育制度や思想の変遷を学び，日本として目指してきた方向性やその背景を学修する。合わせて，日本の保育に影響を及ぼしたフレーベルをはじめとする欧州の幼児教育・保育の思想や実践も適宜取り上げる。後半は現在の幼稚園教育要領等の内容について取り上げ，現代の保育実践状況や子ども・子育てをめぐる社会的課題などにも触れながら，幼児の特性を踏まえた今後の幼児教育のあり方について考究する。	
			幼児教育学演習	前半では，保育事例の検討を通して保育実践力の向上を図る。保育事例は，実習で経験した内容をエピソード記録として取り上げて一人ずつ発表し，子どもの心情や遊びの状況，保育者の援助や環境構成等の観点から検討し，子ども理解・遊び理解を深め，より良い保育実践方法について学び合う。後半では，保育制度や保育の質の向上と評価の問題など，乳幼児や幼児教育・保育に関わる諸課題や，海外の保育の動向について各自でレポートして発表し，議論を通して今後の幼児教育の目指すべき方向性や改善方法等について考究する。	
			幼児心理学	乳幼児の心身の発達における基本的な知識について，心理学的及び保育学的視点から身に付け，乳幼児に対する理解を深める。第一に，胎内から始まる心身の発達過程について学ぶ。具体的には，言語・認知・知能等の発達や，親子関係を基盤とする子ども同士の仲間関係の発達等を知る。第二に，出生直後の新生児及び保護者と，社会との繋がりの実相や，現代の乳幼児とその家族を取り巻く様々な社会的・教育的課題を知り，具体的な対応方法等について学ぶ。	
			幼児心理学演習	乳幼児の心身の発達に関する，心理学的及び保育学的視点からの基本的な知識を基に，乳幼児における人と関わる力の育ちと，その支援方法を含む専門的事項について理解を深める。脳機能及び情緒の発達や性格及び社会的役割等の発達過程の学びから，子どもの育ちを総合的に捉える視点を身に付けることを目指す。また，今日的課題としての発達障害に関する基本的な理解と具体的な対応及び支援の方法について考え，発達障害幼児が有する日常生活における困難感等について理解を深める。	
			子ども家庭支援の心理学	子どもが最初に出会う社会は家庭である。子どもは，まず，家庭において人間関係の基礎を学ぶと考えられる。そこで，子どもを取り巻く状況を時代背景を含めて理解すると共に，現代社会における家族の定義や意義，またその機能について学び，子どもの心身の健康を育む場としての家庭と養育者の役割について知識を深める。さらに，支援を必要とする家庭における養育力の向上を支援するための保育者としての専門性の学びを深め，具体的な方法を身に付けることを目指す。	
			社会福祉学原論	現代社会における社会福祉の意義と歴史的変遷及び社会福祉における子ども家庭支援の視点について理解する。社会福祉の制度や実施体系について理解する。社会福祉における相談援助について理解する。社会福祉における利用者の保護に関わる仕組みについて理解する。社会福祉の動向と課題について理解する。具体的には，社会福祉の理念と歴史的変遷，社会福祉の制度と法体系，社会福祉行財政と実施機関，社会福祉施設，社会福祉の専門職，社会保障及び関連制度の概要，相談援助の理論，相談援助の意義と機能，相談援助の対象と過程，相談援助の方法と技術，情報提供と第三者評価を内容とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（幼児教育専攻科目）	子ども家庭福祉	現代社会における子ども家庭福祉の意義と歴史的変遷について理解する。子どもの人権擁護について理解する。子ども家庭福祉の制度や実施体系について理解する。子ども家庭福祉の現状と課題について理解する。子ども家庭福祉の動向と展望について理解する。具体的には，子ども家庭福祉の理念，子ども家庭福祉の歴史的変遷，現代社会と子ども家庭福祉，子どもの人権擁護の歴史的変遷，児童の権利に関する条約，子ども家庭福祉の制度と法体系，子ども家庭福祉の実施体系，児童福祉施設，子ども家庭福祉の専門職，多様な保育ニーズへの対応，子ども虐待・ＤＶ，障害児，非行少年，貧困家庭，外国籍の子どもへの対応を内容とする。	
			社会的養護	現代社会における社会的養護の意義と歴史的変遷について理解する。子どもの人権擁護をふまえた社会的養護の基本について理解する。社会的養護の制度や実施体系について理解する。社会的養護の対象や形態，関係する専門職について理解する。社会的養護の現状と課題について理解する。具体的には，社会的養護の理念，社会的養護の歴史的変遷，子どもの人権擁護と社会的養護，社会的養護の基本原則，社会的養護における保育士の倫理と責務，社会的養護の制度と法体系，社会的養護の対象，家庭養護と施設養護，社会的養護に関わる専門職，社会的養護に関する社会的状況，施設の運営管理を内容とする。	
			社会的養護内容	子どもの理解をふまえた社会的養護の基礎的な内容について理解する。施設養護及び家庭養護の実際について理解する。社会的養護における計画・記録・自己評価の実際について理解する。社会的養護における子ども虐待の防止と家庭支援について理解する。具体的には，社会的養護における子ども理解，日常生活支援，治療的支援，自立支援，施設養護の生活特性及び実際，家庭養護の生活特性及び実際，アセスメントと個別支援計画の作成，記録及び自己評価，保育の専門性に関わる知識・技術とその実践，社会的養護に関わる相談援助の知識とその実践を内容とする。	
			子ども家庭支援論	保育士の専門性として必要とされる，子ども家庭支援に関する基本的知識と態度について学ぶ。また，現代における家族が置かれている様々な現状と課題を理解し，保育のみならず，個別の家族を支援する立場に就く者としての意識を高めることを目標とする。特に，保育において必要とされるカウンセリングマインドの理念と実際を学ぶことに主眼を置き，講義と演習を組み合わせて理解を深め，総合的に家庭支援の方法について学ぶことを目指す。	
			子育て支援	保育士の行う保育の専門性を背景とした保護者に対する相談，助言，情報提供，行動見本の提示の支援について，その特性と展開を具体的に理解する。保育士の行う子育て支援について，様々な場や対象に即した支援の内容と方法及び技術を，実践事例を通して具体的に理解する。具体的には，子どもの保育とともに行う保護者の支援，日常的・継続的な関わりを通じた保護者との相互理解と信頼関係の形成，保護者や家庭の抱える支援のニーズへの気づきと多面的な理解，子ども・保護者が多様な他者と関わる機会や場の提供，子ども及び保護者の状態の把握，支援の計画と環境の構成，支援の実践・記録・評価・カンファレンス，職員間や関係機関との連携・協働，多様な支援ニーズを抱える家庭に対する支援を内容とする。	
			子どもの保健	子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義の理解をもとに，子どもの身体的な発育・発達と保健，心身の健康状態とその把握，子どもの疾病とその予防法及び他職種間の連携・協働の下の適切な対応についての知識や技能を習得する。具体的には，子どもの保健の意義を説明できる，母子保健(生命の誕生，胎児期，出生)について理解し子どもの健康を母子保健から説明できる，人体の生理機能について理解し乳幼児の発育の特徴を説明できる，子どもの生理機能，運動機能の発達について説明できる，子どもの認知機能，人格形成(社会性の獲得)について説明できる，子どもの健康観察の重要性を保育者の視点から説明できる，ことを到達目標とする。	
			子どもの健康と安全	保育における保健的観点を踏まえた保育環境や援助について理解するとともに，関連するガイドラインやデータ等を踏まえ，保育における衛生管理・事故防止及び安全対策・危機管理・災害対策，また子どもの体調不良等に対する適切な対応，保育における感染症対策について具体的に理解する。さらに保育における保健的対応の基本的な考え方を踏まえ，関連するガイドラインや近年のデータ等に基づく，子どもの発達や状態等に即した適切な対応，子どもの健康及び安全の管理に関わる組織的取り組みや保健活動の計画及び評価等についての知識や技能を習得する。理論的事項を把握し，能動的な学修への参加を通して，理論や知識の定着，理論と実践の結合を目指す。	
			子どもの食と栄養	乳幼児における心身の発育・発達過程を理解し，それぞれの時期における特性に対する科学的な知識を習得し，離乳期からの適切な食事支援の方法などを身に付ける。時代的背景を踏まえて，子どもたちの生活における問題点を取り上げ，栄養状態を評価する方法や食生活の重要性を知るとともに，食育の重要性について理解を深める。保育者として子どもの精神的な満足や個々の体質に配慮した食生活の支援，子どもの食を想定した食材の選択・献立作成・調理方法・衛生管理，食育の基本とその内容及び食育のための環境に対する知識や技能を習得する。	
			乳児保育Ⅰ	乳児保育の意義・目的と歴史的変遷及び役割等，保育所，乳児院等の多様な保育の場における児保育の現状と課題，３歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制，乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携についての知識を習得する。また，現代における乳児保育の社会的意義を知り，保育士の役割，乳児保育を担当する保育者として必要な知識・技能の習得，乳児期の子とどもの発達や子どもの姿，発達過程に応じた保育士の適切な対応や援助方法について理解を深める。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（幼児教育専攻科目）	乳児保育Ⅱ	３歳未満児の子どもに対する発育・発達の過程や特性を踏まえた援助や関わりの基本的な考え方，養護及び教育の一体性を踏まえた生活や遊びと保育の方法及び環境，保育所保育指針にある子どもの心身の健康・安全と情緒の安定を図るための配慮についての理解をもとに，乳児保育における長期的，短期的指導計画および個別，集団の指導計画の作成についての知識や技能を実践的に習得する。また，乳児保育における保護者との連携，乳児保育の場である乳児院，家庭的保育，子育て支援施設における現状と課題についても理解する。	
			障害児保育	障害児保育を支える理念や歴史的変遷について理解する。個々の特性や心身の発達に応じた援助や配慮について理解する。障害児その他特別な配慮を要する子どもの保育における計画の作成や援助の具体的な方法について理解する。家庭への支援や関係機関との連携・協働について理解する。具体的には，障害の概念と障害児保育の歴史的変遷，障害児のインクルージョン及び合理的配慮を理解する。障害児保育の基本を理解する。肢体不自由児，知的障害児，視覚障害児・聴覚障害児・言語障害児，発達障害児（ＡＤＨＤ，ＰＤＤ），重症心身障害児，その他特別な配慮を要する子どもの理解と援助，個別の支援計画の作成，個々の発達を促す生活や遊びの環境，子ども同士の関わりと育ち合いを内容とする。	
			児童文化	児童文化という概念について，その考え方の背景や歴史的な変遷について現在から遡っていくかたちで辿っていくとともに，その時々の概念の中身について深く学んでいく。また一方では，児童のための文化創造，文化財，文化施設，さらには児童自身の文化的創造活動を含めた内容についても，その理論と実践を踏まえながら学んでいく。さらに，児童文化財とも呼ばれる絵本，児童文学，唱歌，詩歌，紙芝居，児童劇などについても個々の内容について理解を深めていく。	
			保育内容の理解と方法ＡⅠ	領域＜健康＞＜表現＞の内容を理解したうえで，「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き，保育者に必要とされる基本的な身体動作及び身体表現能を培うとともに，乳幼児を対象とした身体活動・運動遊び，身体表現活動の内容や方法について，発達過程を含めた子ども理解を深めながらの実践的な教材研究を通して知識と技能を習得する。身体意識，模倣，リズムダンス体操，イメージと動きの相互作用などをテーマに，理論と実践を往還させ，主として身体表現，身体を使った遊びに関わる保育を展開できる技能を培う。	
			保育内容の理解と方法ＢⅠ	領域表現の内容を理解し，保育現場において行われる乳幼児を対象とした音楽活動・音楽表現活動の基礎的な理論について学ぶ。また，保育において実践的な音楽表現活動を通して子どもの感性・創造性・想像力を豊かに育むために必要な音楽表現能力を養うことを目的とし，演奏技術および音楽基礎知識，表現遊び等を学ぶ。また，ピアノ演奏や幼児曲の弾き歌いを通して読譜力，ソルフェージュ能力を高めるとともに，理論と実践の融合を目指す。	
			保育内容の理解と方法ＣⅠ	領域＜表現＞の内容のうち，特に造形表現に関する部分を理解するために，「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き，保育者に必要とされる造形表現に関する基本的な内容を理解し学ぶとともに造形表現能を培う。さらに乳幼児を対象とした造形表現活動の内容，造形素材に関する知識，造形用具の使用方法，造形表現のための環境やその整え方について，発達過程を含めた子ども理解を深めながら実践的な教材研究を通して知識と技能を習得することを目指す。	
			保育内容の理解と方法ＤⅠ	領域表現について理解した上で，ミュージカルや劇を創作し，子どもの前で演じることを経験する。仲間と伝えあい，自身で表現することを感じ，どのようにすると幼児に表現の喜びが伝わるかについて考えることによって，表現技術および能力の向上を目指す。また，子どもたちの前で表現する実習を通じて，劇表現活動が子どもの育ちに与える影響・効果を理解し，幼児理解を深める。劇創作の過程を理解し，保育において子どもの劇遊びなどの指導法について体験を通して学ぶ。	
			保育内容の理解と方法ＢⅡ	領域表現の内容を理解し，保育において行われる様々な音楽表現活動における，歌唱や楽器遊び，劇遊び等の指導に必要な知識および技能として，アンサンブルや合唱など様々な形態による音楽活動について学ぶ。具体的には発声法・指揮法・編曲法・歌唱および楽器指導法等の基礎を身に付け，それらを保育において効果的に活用し，子どもの感性・創造性・想像力の育成およびコミュニケーション能力を高めるための視点について理解することを目指す。	
			幼児教育研究法	日本，諸外国の幼児教育に関する諸現象を実証的に研究する方法を学ぶとともに，研究論文の基本的な構造や執筆に関する基礎知識を学ぶ。国内外の学会や学会誌などで発表された幼児教育に関する最近の研究論文や，これまでに行われてきた幼児教育の卒業論文や紀要論文などの中から方法論的にできるだけ多様なものを取り上げ，研究方法という観点から検討を行う。それぞれの学生が自己の関心に合わせて担当する論文を選択し，読み，その内容や問題点を他の生の前で発表し，その後討議をする。研究論文を批判的に読む力としての課題抽出力を養う。次いで卒業研究に向けて，自らの掲げたテーマに基づき，先行研究の検討，研究計画の精選，予備実験・実践を通して研究という視点から幼児教育・保育，その周辺社会への関心を深める。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（幼児教育専攻科目）		幼児教育研究実践	幼児教育に関する特定のテーマについて，オリジナルなデータを収集，分析考察を行い，卒業研究として執筆しまとめる過程を経験する。それを通して，自主的な研究の進め方，論理的思考，学術的研究法，データの分析法，論理的な論文執筆，効果的なプレゼンテーションの技法などを学ぶ。到達目標として，研究テーマの目的を社会的背景や既往の研究と関連付けて理解できる，研究目的に沿って実験を遂行し，その結果を観察・記録し，実験ノートに整理できる，得られたデータから導かれる解釈を正しく理解できる，成果を取りまとめ，論理的に文章で記述できる，成果を口頭で発表し，討論において的確に受け答えができることを目指す。	
		義務教育専攻科目	学校教育科学	教育学基礎実習Ⅰ	この授業では，教育学に関する文献等を講読することをとおして，大学生に求められる基本的な力の習得を目的とする。具体的には，次の五つである。①文献や論文等を集める力，②文献や論文等を読む力，③レジュメなどにまとめる力，④自らの意見をまとめ，発表する力，⑤多様な意見や立場を理解し討論する力。講読する図書は年度によって異なるが，教育学の入門的なテキストを選択する。授業では課題図書をレジュメにまとめ，２名１組などのグループで発表・司会・討論などを進行する。	
				教育学概論Ⅰ	この授業では，教育学における多様な専門領域について，それぞれの具体的な研究テーマや研究方法の概略を理解することを目標とする。受講生には，専門的な教育学研究に向けて問題意識を深めるとともに，授業を通じて，自身の研究領域や研究テーマを明確化していくことが求められる。 （オムニバス方式／全15回） （24 山口 匡／４回） 教育哲学について論じる。 （99 竹川慎哉／４回） カリキュラム論について論じる。 （23 野平 慎二／４回） 教育思想論について論じる。 （101 釜田 史／３回） 教育史について論じる。	オムニバス方式
				教育学概論Ⅱ	この授業では，教育学における多様な専門領域について，それぞれの具体的な研究テーマや研究方法の概略を理解することを目標とする。受講生には，専門的な教育学研究に向けて問題意識を深めるとともに，授業を通じて，自身の研究領域や研究テーマを明確化していくことが求められる。 （オムニバス方式／全15回） （101 釜田 史／３回） 教育史について論じる。 （98 片山 悠樹／４回） 教育社会学について論じる。 （92 田久保 清志／４回） 生活指導論について論じる。 （94 趙 卿我／４回） 教育方法学について論じる。	オムニバス方式
				教育学基礎実習Ⅱ	この授業では，教育学を学ぶ上で必要不可欠な基礎的な力を習得することを目的とする。具体的には，次の五つである。①テーマ（問い）を考え，選択する力，②文献や論文等を収集する力，③文献や論文等を読み込む力，④レジュメを作成し，発表し，討論する力，⑤自らテーマを選択し，関連する文献等を集め，読み，レポートとしてまとめることができる力。授業の前半部分では教育学の調査・研究方法等に関わる文献等について検討し，後半部分では各自設定したテーマの報告会やレポートの作成に取り組む。	
				教育学特別研究	この授業では，学生の興味・関心によりテーマごとに文献の講読や授業実践にふれること，調査の実施等を通して，学生自身の解釈についてレジュメ発表やディスカッションを通して理解を深めることを目標とする。本授業は，実際の授業実践の観察や調査を含むことから集中にて開講をする。具体的なテーマについては，教育哲学・教育思想に関する重要事項，重要人物についての担当範囲を要約し討論を行うことや，授業研究とカリキュラム研究の関係について先進的な授業実践を展開する教室を実際に参観し，授業を記録し，ディスカッションするなかで，授業の多層的な構造の理解を行うこと，大学史に関して史料群を活用し，大学の歴史に関わるポスターなどの作成・展示にグループ別で取り組むことなどがあげられる。	
				教育哲学演習Ⅰ	教育哲学・教育思想論に関する基礎的な文献・研究論文等の講読および演習をとおして，教育哲学・教育思想研究の主要なテーマと方法論について理解を深めることを目標とする。授業はテキスト（年度によって異なる）の基本的な理解と解説のあと，互いの質疑応答，ディスカッションによって進められる。１回に定められた範囲を担当者が要約し（レジュメを用意），討論を行う。受講者には，全員が各回のテキストを熟読のうえ，各自の疑問点，問題意識をもちよってもらう。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（学校教育科学）	教育思想論演習Ⅰ	教育思想論，ならびにそれに関連する教育哲学の専門文献を講読することを通して，代表的な教育思想ならびに教育哲学の諸理論と諸概念について理解を深める。教育思想に対して批判的に再検討できるようになるとともに，教育哲学の知見を踏まえて現代の教育に対する専門的見解を述べることができるようになることを目標とする。授業では特に，西洋の古代から近代にかけての教育思想，西洋近代以降の教育哲学の諸理論と諸概念を主な内容として取り上げる。	
				カリキュラム論演習Ⅰ	本演習では，現代のカリキュラム理論の系譜について，代表的な文献の講読，レジュメ発表，ディスカッションを通して理解することを目的とする。具体的には，哲学・思想的アプローチ，授業研究アプローチ，政治学的アプローチ，評価論からのアプローチを取り上げる。また，国際的な研究・実践動向についての理解を図るため，外国語文献も一部講読しながら，世界的な潮流の中での日本のカリキュラム政策・理論・実践の特質や課題点を理解していく。	
				教育方法学演習Ⅰ	本講義では，教育方法学に関する実践的な理論を学び，学校の授業はどうあるべきかなどについて基礎的な理論と具体的な教育方法（情報機器および教材の活用方法等）を理解することを目指す。具体的には，次の３つを主な内容として取り上げる。１．教育方法とは何か，教育課程の編成に関する基本的な理論と具体的な教育方法，２．日本における教育方法の史的変遷（第二次世界大戦後を中心に），３．日本における教育方法の課題と教育改善に関する近年の動向	
				生活指導論演習Ⅰ	生活指導とは，主に学校の教科外領域において，いわゆる生徒指導・進路指導・特別活動などを含む，より広範な内容と方法を持つ教育学の実践的概念である。近年では地域や家庭の状況も視野にいれ，福祉や医療や司法にも及ぶ様々な実践が展開されている。本演習では，過去の歴史的遺産に学びつつ，現代の学校教師の実践を取り上げ，実践記録の分析を中心にして，指導のあり方を検討する。	
				教育社会学演習Ⅰ	本演習の目的は，社会学・教育社会学の文献を読み，教育現象を自身の経験を相対化しながら冷静に分析できる態度を身に付けることである。教育現象を「思い込み」や自身の経験のみで語るのではなく，「根拠は何であるのか？」，「妥当なように感じる見解はいかにつくられたのか？」といったクリティカルな思考を働かせ，自身の言葉でアウトプットできることを目指す。また，これらを通じて，教育の多様なあり方を認める態度を身に付けてほしい。	
				教育史演習Ⅰ	この授業では，日本の教育の歴史的変遷について通史的に理解することを目標とする。具体的には，山田恵吾編著『日本の教育文化史を学ぶ－時代・生活・学校－』（ミネルヴァ書房）などに代表される日本教育史の入門的テキストを講読し，古代から現代に至るまでの日本の教育の歴史に関する基礎的知識の習得を目指す。また，適宜受講者の興味・関心に応じて，愛知県内あるいは近隣地域に残されている貴重な史料群や建築物等の視察見学を実施し，演習を通して習得した知識を深める。	
				教育行政学演習Ⅰ	この授業では，国内外の教育行政学に関する代表的な先行研究等を選択し，共同での報告・検討を行う。また，受講生が関心のある研究テーマを選択し，関連する代表的な文献や論文等を収集し，それをレジュメにまとめて報告，他の受講生等もあわせてディスカッションを通して理解することを目的とする。授業で取り扱う研究テーマや課題図書等は，その年度によって異なるが，教育行政学（場合によっては教育経営学や教育財政等も含む）に関する基本的な入門テキストを選択する。	
				教育哲学演習Ⅱ	教育事象に関する哲学的反省の歴史，展開，主要テーマ，今日的課題についての理解を深めることを目標とする。教育哲学・教育思想論に関する研究文献（年度によって異なる）の講読をとおして，次の４つの項目に沿って考察を行う。①教育というコミュニケーション領域の特性，②教育に対する哲学的反省のはじまりとその後の展開，③論じられてきた主要なテーマ（それらの成果と問題点），④今後取り組まれるべき研究課題。とくに，③，④の項目に力点を置いた演習を行う。	
				教育思想論演習Ⅱ	教育思想論，ならびにそれに関連する教育哲学の理論や主題についての探究的学修と共同での検討を行う。受講生は各自，関心のある理論や主題をひとつ選定し，その主題に関する先行研究の調査，分析と検討，報告を行い，その報告について全員で検討する，という形で進める。授業を通して，教育思想論，教育哲学に対する理解を深めるとともに，探究すべき課題の発見，課題に関わる文献や資料の調査，分析と考察，まとめと報告，共同での議論と検討，という課題探究，課題解決に関わる一連の能力を身に付けることを目標とする。	
				カリキュラム論演習Ⅱ	本演習では，教育課程概念と類型論，教育課程編成の基本原理など教育課程研究における基本概念と基本問題を理解した上で，教育課程の現代的諸問題の考察へと展開していく。具体的には，21世紀型能力論，アクティブ・ラーニング，カリキュラム・マネジメントなどを検討していく。基本概念および現状の課題を整理した上で，次に幼児，児童及び生徒や学校・地域の実態を踏まえて教育課程や指導計画を検討する手法について，国内外の教育実践事例を分析しながら考察していく。これらの授業展開において，受講者は，文献の講読とプレゼンテーション，発表を踏まえた討論を行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（学校教育科学）	教育方法学演習Ⅱ	本講義では，教育方法・教授法の歴史，学習指導論，教育課程論，教育評価論等の観点から，実際に教育実践を行うために必要となる教育方法学について理論と方法を理解するとともに，その内容についての自分なりの考えを深めるための機会を提供する。具体的には，次の３つを主な内容として取り上げる。１．教育課程の編成に関する理論と具体的な方法，２．諸外国における教育方法の変遷や近年の動向，３．諸外国における教育評価の変遷と課題	
				生活指導論演習Ⅱ	前期・生活指導論演習Ⅰを発展させて，受講学生が自分自身の問題意識に基づいて研究テーマを設定し，研究の方法と内容について演習で深めながら，毎回受講生による研究報告を行ない，全員での討議・検討によって生活指導に関する研究の初歩を習得することを目指す。	
				教育社会学演習Ⅱ	本演習の目的は，社会学・教育社会学の理論や知見を学ぶことを通して，教育現象を多角的にアプローチし，分析できるスキルを身に付けることである。「教育社会学演習Ⅰ」の成果を土台に，教育現象におけるさまざまなトピックを社会学的に考え，社会的・歴史的文脈に位置づけて理解すること，教育現象の背後にある要因を自身の言葉で説明できることを目指す。また，これらを通じて，教育の多様なあり方を認める態度を身に付けてほしい。	
				教育史演習Ⅱ	この授業では，教育史の代表的な文献や史資料を読み取る作業をとおして，教育史の知識や技術の習得を目指す。授業の前半部分では，近現代日本における教員養成史（教育学部史）や教師像の変遷等について，TEES研究会編著『「大学における教員養成」の歴史的研究』（学文社）や土屋基規『戦後日本教員養成の歴史的研究』（風間書房）などの代表的な研究成果を講読し，教師の養成・採用・研修の一連の流れについて歴史的に理解する。授業の後半では，受講生各自で研究テーマを選択し，そのテーマに関連する先行研究の調査と分析，報告を検討する作業を継続し，歴史的な視点から考察するために必要な力の習得を目指す。	
				教育総合演習Ⅰ	この授業では，卒業論文の執筆に向けて，学生が興味・関心のある教育学の領域（教育哲学，教育思想論，カリキュラム論，教育方法学，生活指導論，教育社会学，教育史）を選択し，その領域で求められる研究方法等を習得することを主な目的としている。具体的には，受講者自身が研究テーマを選択し，その研究テーマに関連する先行研究やデータを収集・整理・分析し，あるいは必要に応じて調査等を行い分析する。領域によって研究方法は異なるが，課題図書の講読やフィールドワーク，史料調査等を通してそれぞれの研究方法の習得を目指す。	
				教育総合演習Ⅱ	この授業では，前期に開講される「教育総合演習Ⅰ」の成果をふまえつつ，卒業論文の執筆に向けて，学生が興味・関心のある教育学の領域（教育哲学，教育思想論，カリキュラム論，教育方法学，生活指導論，教育社会学，教育史）を選択し，その領域で求められる研究方法等を習得することを目的としている。具体的には，受講者自身が研究テーマを選択し，その研究テーマに関連する先行研究やデータを収集・整理・分析し，あるいは必要に応じて調査等を行い分析する。領域によって研究方法は異なるが，課題図書の講読やフィールドワーク，史料調査等を通してそれぞれの研究方法の習得を目指す。	
				心理学方法論Ａ	本授業では，心理学に関する論文を読み，まとめ，発表し，討論する。これを通じて，心理学に関する論文の読み方や，プレゼンテーションの基本等を理解する。また，心理学における実験法や観察法に関する実習を行い，人間の行動に関するデータを収集し，これを整理し，レポートにまとめる。また，レポートに関しては複数回の添削を行い，フィードバックする。これを通して，科学的な実証の方法や，論理的な文章の書き方について理解する。	
				心理学方法論Ｂ	心理学では，実験法，質問紙法，観察法といった方法でデータを収集し，客観的な根拠をもとに人間の心理について検討する。本授業では，このような心理学の調査手法についての代表的な例を紹介し，その調査手法について，体験を通して学ぶことを目的とする。具体的には，質問紙法の調査手法を学び，質問紙調査および結果の統計処理を行うための基礎的な知識・態度を身に付ける。また，この中で，プレゼンテーションの仕方，学術論文の読み方，書き方についても同時に学ぶ。	
				心理学教育統計学実習	本授業では，心理統計の基本的な考え方を理解するとともに，調査法や実験法，卒業論文で収集するデータを統計ソフトを用いて統計的に分析し，レポートを作成できることを目標とする。具体的には，質的データと量的データの記述統計（平均値，中央値，分散，標準偏差，尖度，歪度など）や統計的検定の仕方（χ２検定，無相関検定，ｔ検定，分散分析など）とその結果の記述の仕方について，SPSSという統計ソフトを用いて，実習形式で学習する。	
				心理教育アセスメント	幼児～成人期までの心理および教育におけるアセスメントについての基礎的理論を学ぶとともに，心理検査の実習や事例検討を通して，児童理解や発達支援に必要な知識を習得する。心理検査の活用の実際とその意義について理解し，実践に必要な知識や技能を獲得することを目標とする。心理アセスメントや検査法に関する講義のほか，受講生による購読担当発表をもとに，グループワークでの心理検査の実習やディスカッションを行う。グループワークは，教育現場での実践を想定して，仮想事例を用いて，児のアセスメントおよび支援例をチームで検討する練習をする機会となるように行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（学校教育科学）	発達心理学講義	発達心理学は，時間経過（加齢）によって生じる人間の発達的変化を研究する心理学の一分野である。つまり，「乳児期」から「老年期」までの加齢による人間の一生涯の変化過程を理解する学問である。本授業では，その発達心理学の基本的な事項を理解することを目的とする。具体的には，①生まれてから死ぬまでの心理的な機能の発達（胎児期・新生児期・乳児期・幼児期・児童期・青年期・成人期・老年期），②各発達段階における心理的な問題や障がい，③学校における発達援助（学校心理学の理論と実践），について理解を深めることを目指す。	
				発達心理学演習	この演習では，発達心理学の知見を研究の成果だけから理解するのではなく，研究の目的・方法・結果・考察の全体を通して，より深く学ぶことを目的とする。この学習を通して，発達心理学の研究がどのように子どもの発達を明らかにしていくのか，教育活動にどのように貢献しているのかについての理解も深める。また，文献をまとめて資料を作成し，発表・討論を行うことで，研究について他者に伝える力や，批判的・建設的な討論を行う力を養うことも目指す。	
				学習心理学講義	本授業では，児童生徒の学習に関する基礎理論とそれを応用した実践的問題について学ぶ。具体的には，記憶や思考に関する学習者の認知的過程について理解し，これらの理論に基づく教授・学習方法について検討する。また学習の動機づけに関する諸理論について理解し，学習者が主体的・自律的に学習するための教授・学習方法や，教育評価のあり方について学ぶ。これらの授業内容を講義形式の授業と，グループワークや集団討議を織り交ぜながら学習する。	
				学習心理学演習	本授業では，児童生徒の学習に関する基礎理論とそれを応用した実践的問題について，関連する論文や参考資料を受講者が紹介し，それに基づいて受講者全員で討議，検討しながら学習する。具体的な内容は，記憶や思考に関する学習者の認知的過程やこれらの理論に基づくさまざまな教授・学習方法，学習の動機づけに関する諸理論やこれらの理論に基づく教授学習方法，また教育評価のあり方やその目的，方法，効果などである。これらの内容について，受講者が関する論文や参考資料を紹介し，それに基づいて受講者全員で討議，検討しながら学習する。	
				心理学方法論Ｃ	心理学では，実験法，質問紙法，観察法といった方法でデータを収集し，客観的な根拠をもとに人間の心理について検討する。本授業では，このような心理学の研究方法の中で，実験法について体験を通して学ぶことを目的とする。具体的には，教育心理学にかかわる心理学研究の中で実験法を用いた研究の追試実験を実施し，結果の統計処理を行い，最終的に報告書にまとめる。これらを通して，心理学における実験法のプロセスを具体的に学び，統計的処理ための基礎的な知識・態度を身に付ける。また，先行研究の文献発表や研究計画・結果・考察についての発表も実施し，プレゼンテーションの仕方，学術論文の読み方，書き方についても同時に学ぶ。	
				教育心理学総合実習Ｉ	本実習では，教育に関する諸問題に対して，教育心理学的な観点でみることができる能力を育成する。具体的には，過去の学習心理学，発達心理学，社会心理学，臨床心理学の研究のレビューを行い，それを踏まえた今後の研究の方向性について考えられることを目指す。授業は，発表，質疑応答という形式で行う。発表する１週間前までに，発表に関する論文を全員分コピーして配布する。発表時には，発表する内容をまとめたレジュメを配布して，それをもとに発表する。 （オムニバス方式／全15回） （22 弓削 洋子／３回） 主に社会心理学を担当する。 （93 石田 靖彦／３回） 主に社会心理学を担当する。 （96 小嶋 佳子／３回） 主に発達心理学，学習心理学を担当する。 （97 中井 大介／３回） 主に発達心理学，臨床心理学を担当する。 （100 黒川 雅幸／３回） 主に社会心理学を担当する。	オムニバス方式

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（学校教育科学）	教育心理学総合実習Ⅱ	本実習では，教育に関する諸問題に対して，教育心理学的な観点から実証的に検討できる能力を育成する。具体的には，各自で研究テーマを設定し，過去の学習心理学，発達心理学，社会心理学，臨床心理学の研究のレビューを行い，それを踏まえた研究計画の立案（実施）ができることを目指す。授業は，各グループに分かれ，発表，質疑応答という形式で行う。発表する１週間前までに，発表に関する論文を全員分コピーして配布する。発表時には，発表する内容をまとめたレジュメを配布して，それをもとに発表する。 第１回は，各教員から専門領域の説明をうける。 第15回はそれぞれの領域で学修したまとめの発表を行う。 第２回から第14回目はグループに分かれ，専門領域について学修する。 （22 弓削洋子）社会心理学を担当する。 （93 石田靖彦）社会心理学を担当する。 （96 小嶋佳子）発達心理学，学習心理学を担当する。 （97 中井大介）発達心理学，臨床心理学を担当する。 （100 黒川雅幸）社会心理学を担当する。	共同
				社会心理学講義	本講義では，教育に関する社会心理学の基本的な知見を理解したうえで，研究の諸問題について考え，研究課題を自ら探究する力を養うことを目的とする。授業形態は，以下の授業内容に関する基礎的な知識を学ぶための講義形式を主として，テーマに関わる研究上の課題について受講生が自ら学ぶために，個人単位あるいはグループ単位での課題を適宜おこなっていく。授業内容の計画は次の通りである。まず，教師の児童生徒の理解の問題，児童生徒集団の動態と課題，協同学習の効果と問題点，教師の指導行動内容及び効果について，学級経営の発達段階，及び学校組織の協同の心理的意義についてである。	
				社会心理学演習	本演習では，教育に関する社会心理学の文献をとりあげ，その研究手法や分析方法について理解するともに，発表を通して研究全般について他者に伝える力を養うことを目的とする。授業形態は，受講生が希望するテーマの論文講読を行い，その発表と質疑応答を基に展開していく。授業計画は，以下のテーマに関連する論文購読を行う。子どもの自尊感情，子どもの原因帰属，子どもの向社会的行動，子どものソーシャルスキル，教師と子どもの関係，子どもの適応問題，子どものいじめ，学級の荒れ等である。	
				集団過程演習	私たちは，自分の周囲にいる人たちに影響を及ぼすとともに，周囲の人たちからさまざまな影響を受けている。本授業では，人は自分自身や他者をどのように認識しているか，また他者からどのような影響を受けているかなど，自己と他者，対人関係，集団に関する心理学的知見を紹介し，自己や対人関係，集団，社会に関する諸事象を，社会心理学的な観点から把握し，検討できることを目標とする。授業形態は，上記の内容に関連する論文や参考資料を受講者が紹介し，それに基づいて受講者全員で討議，検討する。	
				教育心理学講義	本講義では，教育心理学を構成する諸領域に関し，その知見や研究法について学び，教育に関わる事象を心理学的な観点から評価，検討できる総合的な能力を培うことを目的とする。授業形態は，講義形式と討論を基にした指導を展開する。授業計画は，教育心理学に関わる問題に対し，実験法，調査法，観察法，面接法等を用いて検討した研究を取り上げる。また，授業外学習として教員の指示した資料やデータ等をあらかじめ確認しておくことを求める。取り上げるテーマは，教育心理学を構成する領域である，学習心理学，発達心理学，社会心理学，臨床心理学である。	
				教育心理学演習	本演習では，教育心理学を構成する諸領域に関し，その知見や研究法の理解をもとに教育に関わる事象を心理学的な観点から分析し考察できる力を養い，教育に関わる諸問題を自ら検討できる総合的な能力を培うことを目的とする。授業形態は，受講生が希望するテーマの論文講読を行い，その発表と討論を基に展開する。授業計画は，以下のテーマに関連する論文購読を行う。教育心理学に関わる問題に対し，実験法，調査法，観察法，面接法等を用いて検討した研究であり，教育心理学を構成する領域である，学習心理学，発達心理学，社会心理学，臨床心理学に関わる論文である。	
				臨床心理学講義	幼児～成人期までの心理および教育におけるアセスメントについての基礎的理論を学ぶとともに，心理検査の実習や事例検討を通して，児童理解や発達支援に必要な知識を習得する。心理検査の活用の実際とその意義について理解し，実践に必要な知識や技能を獲得することを目標とする。心理アセスメントや検査法に関する講義のほか，受講生による購読担当発表をもとに，グループワークでの心理検査の実習やディスカッションを行う。グループワークは，教育現場での実践を想定して，仮想事例を用いて，児のアセスメントおよび支援例をチームで検討する練習をする機会となるように行う。	
				臨床心理学演習	幼児～成人期までの心理および教育におけるアセスメントについての基礎的理論を学ぶとともに，心理検査の実習や事例検討を通して，児童理解や発達支援に必要な知識を習得する。心理検査の活用の実際とその意義について理解し，実践に必要な知識や技能を獲得することを目標とする。心理アセスメントや検査法に関する講義のほか，受講生による購読担当発表をもとに，グループワークでの心理検査の実習やディスカッションを行う。グループワークは，教育現場での実践を想定して，仮想事例を用いて，児のアセスメントおよび支援例をチームで検討する練習をする機会となるように行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（学校教育科学）	キャリア教育の理論と活用	職業指導の活動がどのように起こり，その後，日本の学校教育にどのような経緯で導入されたのかを理解するとともに，今日的な職業・進路問題と関連付けながら，学校進路指導に何が期待され，どのような実践が行われているのか，理解する。また，子どもたちのキャリア発達を促進するためにはどのような活動を教育で取り入れることが効果的なのか考え，これからの社会を生きる子どもたちにどのような支援が必要なのか検討していく。	
				キャリア教育研究法Ⅱ	進路指導・キャリア教育を実践したり，その取り組みを評価したりする方法の一つとして，調査を実施することがある。また，進路指導に限らず，今後の教育実践においては，統計的手法を活用する場面も多くある。そこで，調査を進路指導にどのように活用することができるのかを考えるとともに，特に質問紙法を中心に，その基本的な統計的手法を実際にデータを扱いながら身に付けていく。	
				職業指導概論	学校から職業社会への移行を支援する教育の理論と実践について，主に高校卒業後に就職する若者を念頭に検討する。また，職業的･社会的自立を目指してキャリア発達を促進するキャリア教育全体を視野に入れつつも，「職業」あるいは「労働」にある程度焦点化して，「キャリア教育としての職業指導」の在り方について考察する。	
				キャリア教育研究法Ⅰ	キャリア教育の研究を進めるために必要な研究方法を質的研究，量的研究の2観点から学ぶとともに，実際に収集したデータを使用して分析を行い，研究方法を身に付けることができるようにする。さらに学習成果を生かして卒業研究に向けた研究計悪を組み立てることができるようにする。 （オムニバス方式／全15回） （95 高綱 睦美／７回） 前半7回は研究とは何か，研究における測定の意味，問いの立て方などを学習するとともに，質問紙法による量的研究の基礎を学習する。 （21 清水 克博／８回） 後半は逐語記録などをもとにした質的研究法の基礎を学ぶとともに，SCAT分析やKHコーダーを用いた分析手法の進め方について実際にデータを分析することを通して学んでいく。	オムニバス方式
				キャリアカウンセリング基礎論	キャリアカウンセリグ（Career Counseling）に関する基礎知識を習得するとともに，キャリアカウンセリグの進め方の実際について演習を行う。前半は，主に講義形式で行い，キャリアカウンセリングの基礎概念とアプローチについて理解する。後半は，ロールプレイを行いながら，キャリアカウンセリグに必要な基本態度やスキルを学習する。	
				キャリア教育概論	職業指導の基本的活動を理解するとともに，学校教育を中心とした職業指導の活動について，自ら課題に取り組むことで関心を持ち，進路指導・キャリア教育を理論的根拠に基づいて行うことができるよう，基礎的知識・技能を習得することを目標にする。また，中学生に対して職業や進路・キャリアについて何をどのように伝えていくことができるか考えて行く。	
				生涯キャリア形成論	人生100年時代といわれる社会の中で生きていくためのライフキャリアとは何か，Superらの理論をベースとして学びつつ，学校教育だけにとどまらず地域や社会の中で形成されるキャリアについて理解する。また，地域の中でどのようなキャリア形成が可能であるか，先進的な地域の事例を踏まえつつ検討し，学校がそうした地域社会と共にそこに暮らす人のキャリア形成を支援するためには何をどのどのように教育活動に入れていけばよいか，これからの地域社会と学校のありかたついて議論し深めていく。	
				キャリア教育の技術と方法	初等中等教育のキャリア教育で実際に使われているキャリア・ノートを分析することを通じて，キャリア教育に用いるポートフォリオの構成要素を検討するとともに，教科等の学びを特別活動でまとめ，新たな学びにつなぐキャリア教育を実施するためのポートフォリオ開発と，これを用いたカリキュラムの検討を行う。	
				キャリアカウンセリング実習	これまでに学習したキャリアカウンセリグ（Career Counseling）のアプローチ・スキルなどについて，実習を通して，さらに理解を深めるとともに，キャリアカウンセリグの実践力の向上を図る。前半は，主に講義形式で行い，これまでの学習内容を振り返りつつ，キャリアカウンセリグのアプローチについて理解する。後半は，具体的な事例を取りあげ，場面を想定したロールプレイを行う。	
				キャリア教育の評価	評価方法の選択，および評価指標の作成から評価結果の分析までに至るプロセスを，講義形式で理論的に学習する。また並行して実践論文を読み解くことで，評価の実際についての事例検討を行う。さらにパフォーマンス評価に着目し，ルーブリックの作成に取り組み実際に学生を対象とする模擬授業を企画・実施し，（模擬）評価を行う。	
				キャリア教育の組織マネジメント	組織行動とリーダーシップの基礎知識の習得だけでなく，教育ゲームやグループワークなどの体験的な学習の機会を導入しつつ，チームビルディングの手法や組織を機能的に活用していく方法を学習する。また，キャリア教育を推進するための効果的な組織の在り方とともに，学校外部や地域との連携を通じた組織マネジメントについて理解を深める。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	生活・総合	生活科教育概論Ⅰ	平成元年の生活科新設からその後の学習指導要領改訂の変遷をたどり，他の教科とは異なる生活科の特質に関して，目標論を中心に，それとの関係で内容論，指導論，および，評価論について学ぶ。具体的には，到達目標と方向目標との相違，基本的な視点と具体的な視点による内容の構成，内容構成の階層，学習支援としての環境構成，生活科の評価の特質，指導と評価の一体化等について，実践事例や実践場面を示しながら解説する。適宜，季節の遊び，おもちゃづくり等の体験や活動を行い，それらの単元構想，指導案，実践報告を個人もしくはグループで分析・考察する。以上の学習活動を通して，生活科の特質についての認識を広げ深める。	
				生活科教育概論Ⅱ	本授業では，『小学校学習指導要領解説　生活編』（平成29年７月）における各内容項目の読解等を通して，生活科の教科目標や学年の目標と各内容項目との関連，内容構成の階層，各内容項目を組み合わせた生活科の典型的な単元についての理解を図る。また，主に飼育・栽培活動に関わる単元を構成し実践できる基本的な知識と技能の習得を目指す。授業の概要としては，学習指導要領解説に記載されている目標・内容等を熟読し，それに関わる実践事例・学習指導案等を分析・検討する。また，受講者自身も，飼育・栽培活動に関わる学習指導案を作成してプレゼンテーションし，お互いの指導案について検討する。	
				生活科教材論	本授業では，生活科の年間指導計画や単元計画の作成，学習指導の進め方についての理解を図る。また，主に飼育・栽培活動を対象として実践研究された論文の検討，飼育・栽培活動の実習等をもとに，生活科学習における教材の在り方について理解を図るとともに，教材研究の方法を身に付ける。授業概要としては，主に飼育・栽培活動を対象とした実践研究論文を各受講者が紹介し，それをもとに討議する形式で行う。また，教材開発の媒体として受講者自身が飼育・栽培活動の教材開発を行ってプレゼンテーションし，お互いの開発した教材について検討する。	
				生活科カリキュラム論	基礎的なカリキュラム理論に関心をもち，学校におけるすべての教育活動，カリキュラム全体の中で生活科教育をどのように位置づけ，そこでの子どもたちの学習活動をどのように指導し支援し評価するのかを基礎的なカリキュラム理論の読解，分析・考察を通して学ぶ。授業では基本的なカリキュラム理論に関する論文と文献を読解し，他の文献を参考にしながら分析・考察する。必要に応じて，英語の論文と文献の原書講読を行う。授業では，各自による発表資料の作成それらの分析と考察を踏まえ，全員でディスカッションを行う授業が中心となる。適宜，教員が授業内容について，生活科教育と関連させながら解説する。	
				生活科・総合的学習授業論	生活科及び総合的な学習の時間のねらいや内容を示しながら教育方法についての理解を深めるとともに，指導法や評価の在り方について考え，教科の本質や課題に迫りることで，実際の教育現場で活用できる授業実践力を身に付ける。ねらいや内容，教育方法の理解については，学習指導要領解説や実践資料などを参考に，理解構築に努める。具体的な授業がイメージできるように，指導案の検討や実際の授業を参観するなどして，工夫するとともに，事例検討をし理解の深化を図る。また，学校探検，町探検，家族単元等の社会的事象を扱った単元指導計画作成やその検討，プレゼンテーションなどの体験的かつ協同的な学習場面を積極的に取り入れる。	
				幼小連携教育論	幼稚園や保育所での幼児教育や保育のねらい，内容を示しながら理解を深めるとともに，小学校教育につなげるための授業や指導法の在り方について考え，幼小連携の本質や課題に迫る。ねらいや内容の理解については，学習指導要領，幼稚園教育要領などを参考に理論構築に努める。幼児と児童の交流場面については，指導案や実際の授業の写真などを提示し，受講者に幼児教育から小学校教育への接続がイメージしやすいように工夫する。また，幼児，児童の育ちのつながりをより理解するために，スタートカリキュラムやアプローチカリキュラム，遊びを核とした生活科の実践などを実際に構想する授業場面などを積極的に取り入れる。	
				生活科教育専門演習	本授業は各自の発表と報告に基づくディスカッション中心の授業である。具体的には，それぞれの問題意識や設定したテーマに基づき，生活科及び総合的学習に関する研究論文・著書を収集する。他の文献を参照・引用しながら，それらを分析・考察し，発表資料を作成する。その発表資料に基づきディスカッションを行う。適宜，教員が解説，補足説明をする。必要に応じて，関連する英語の論文と文献の読解も行う。 （オムニバス方式／全15回） （８　中野　真志／５回） 生活科と総合的学習の教育思想的系譜 （９　加納　誠司／５回） 幼小の接続と生活科 （146　西野　雄一郎／５回） 総合的学習と他教科等との関連	オムニバス方式
				生活科探究ゼミナールⅠ	個々の担当教員のもとでゼミナールを行う。各自の選んだテーマに基づき，生活科や総合的学習の理論や実践に関わる研究論文・著書を収集し読解する。他の文献を参照・引用して，比較したり分類したり関連づけたり整理しながら，分析と考察を行い，発表資料を作成する。多種多様なテーマに興味と関心をもち，積極的にディスカッションするスキルを習得する。必要に応じて，教員が解説，補足説明をする。このゼミナールⅠを通して，各自の研究テーマを焦点化していく。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（生活・総合）	生活科探究ゼミナールⅡ	個々の担当教員のもとでゼミナールを行う。生活科探究ゼミナールⅠにおいて焦点化した研究テーマに基づき，各々に適した方法で研究を深めていく。各自の研究テーマに基づいて，例えば国内外の論文と文献調査，授業観察・実態調査などのフィールドワーク，教材開発・授業実践等を行う。適宜，教員が指導・助言を行いながら，これらの調査・実践等から得られた結果をもとに分析・考察を加え，卒業論文にまとめる。この探究ゼミナールⅠとⅡを通して，知的好奇心を高め，学術研究の基礎的な知識と技能を習得する。	
			ICT活用支援	学校情報研究Ａ	教育現場におけるICT機器を活用した授業実践について具体的事例を知り，その基本となる情報活用能力を身に付ける。授業計画については，以下に示す３項目に分けて，学校情報に関する研究について考察する。具体的には，（１）授業事例：各教科の中でどのような事例についてICT機器を活用した授業が行われているかを分析（２）活用方法の研究：ICT機器を活用した授業を活用形態（調べ学習，共同学習等）から分析し教科横断的な活用方法を探る（３）実践活用：今後，５Ｇなどが具体化した際の活用方法や未来の授業形態等に関する提案など，を実施していく上で必要となる情報の活用に関する基礎的な知識・技能を習得する。	
				学校情報研究Ｂ	授業の目標は，学校情報研究についての具体的な研究事例を理解し，その基本となる学術的な理論を身に付ける。授業計画については，以下に示す３つのユニットに分けて，学校情報に関する研究について考察する。具体的には，（１）調査研究：最新のテクノロジーが教育や人間に及ぼす影響の分析，（２）開発研究：コンピュータ等のICT機器を活用した学習支援システムや教材の開発研究，（３）実践研究：インターネットなどの各種情報メディアの教育的な利活用や学校での授業実践研究，の３つからなり，学校情報についての学問的研究を的確に理解し，その研究を行うための基礎的な知識・技能を習得する。	
				初等情報研究	本授業の到達目標は，（１）児童生徒の情報活用能力の育成について，各教科等においてどのような力を育成するのかを具体的に挙げることができる，（２）児童生徒の情報活用能力の現状について，調査データを示しながら分析・考察することができる，（３）情報活用能力の育成方法について，具体的な教科や単元，授業と関連付けて提案・実施することができる，である。目標を達成するために，講義を基にしたグループ討議・全体討議をとおして情報活用能力を概念的に理解し，児童生徒の情報活用能力の調査結果をグループで分担して分析・考察する。最後に任意の教科・単元で情報活用能力を育成する授業を計画し，模擬授業を実施する。	
				初等情報教育	本授業の到達目標は，まず，授業を設計するという考え方を，いくつかの教授設計理論を通して学ぶ。その後，ICTを使った授業作りを行う。以上の経験を通して，授業や学びを科学的にとらえるための基礎的な知識を身に付けること，授業におけるICT活用について理解することを目的とする。目標を達成するために，前半は，ID理論に沿った授業設計を学ぶ。演習として，自分で単元を決めて，ID理論に沿った指導案を作成する。後半は，それらを活かして，ICT機器を使った授業を設計し，模擬授業を行う。模擬授業ごとに，授業検討会を行い，改善策を考える。	
				情報科研究Ⅰ	低学年で学んだことを受けて，コンピュータの両輪であるハードウェアとソフトウェアについて一体的に理解を深めるとともに，IoTについて関心が持てるようにする。ハードウェアにアクセスするプログラミングなどを学ぶ。 Raspberry Piといった小型ボードコンピュータをセットアップし，スイッチ・センサなどの入力デバイスとLED・モータ・スピーカなどの出力デバイスを扱う計測制御などのプログラミングを行う。通信を伴うプログラミングも行い，IoTについての理解を深める。	
				情報科研究Ⅱ	本授業の到達目標は，（１）これまで学習したことを応用し，目的に応じた表現手法・情報技術を使った双方向的な情報コンテンツの設計・開発を行う，（２）情報コンテンツのユーザビリティについてデータを収集し，統計的手法を活用して評価を行う，（３）グループでの開発を効果的に進める方法を考え，実践できる，である。目標を達成するため，小中高生のいずれかを対象とした学習に役立つ情報コンテンツをPDCAサイクルにそって設計・開発・評価する。	
				情報と社会	本授業では，情報社会やSociety5.0に対する自分なりの考えを持ち，その社会を生きている子どもたちにはどんな力が必要なのかを自分の言葉で説明することができることを目指す。そのために，一つ目に情報モラルの様々な指導法について体験し，その指導法についてメタ的に検討する。二つ目に，協同学習で，情報社会の新しい問題や，新しい情報技術の導入が社会に及ぼす影響を，技術面，セキュリティ，使用する立場，統計データの利用など多面的な側面から捉え，どのような改善策が考えられるか，問題解決にどのように生かせるか，などを検討する。最後に，これらの学修を通して得られた知見を基に，情報社会やSociety5.0に対する自分なりの考えを持ち，その社会を生きている子どもたちにはどんな力が必要なのかを自分の言葉で説明する。	
				プログラミング	コンピュータ内部での情報の表し方を理解し，コンピュータで情報が処理される仕組みやアルゴリズムについて学ぶ。また，コンピュータを用いて問題解決をする場合のデータの考え方やモデル化について理解する。情報とデータの関係性を理解し，プログラミング上で扱うべきデータについて学ぶ。アンプラグドプログラミングやビジュアルプログラミング言語などでプログラミイグの基本を学んだのち，問題解決のための手順（アルゴリズム）について理解する。また，教育におけるプログラミングについても理解する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（ICT活用支援）	コンピュータとプログラミング	アルゴリズムの最適化について学び，問題の発見・解決に向けて適切かつ効果的にプログラミングについて理解する。また，事象をモデル化による問題の発見やシミュレーションによるモデルの評価など，プログラミングを通してコンピュータを活用する力を身に付ける。テキストプログラミング言語を用いてプログラムにより問題解決することを学ぶ。問題解決のためのモデル化とシミュレーション，および，適切かつ効果的なプログラミングについて，実習を通じて理解することを目的とする。	
				情報基礎	「情報」を処理する機械であるコンピュータの基本的な構成を理解し，情報量，ビット，デジタル化の基本的な考え方など「情報」自体の理解も深める。「情報」という言葉には多くの意味が含まれるが，コンピュータで扱う場合には処理しやすい工夫やデータ変換が必要不可欠となる。これは，コンピュータの仕組みを知ることによってさらに理解が深まる。コンピュータと情報処理の基礎知識を増やしつつ，最新技術との関連や教育における利用などについても理解を深める。	
				データサイエンス基礎	本授業の到達目標は，データサイエンスの基礎となる統計的手法を理解し，様々な問題をデータに基づいて実証的に分析することができる力を身に付けることである。授業では，統計的手法の理論について学ぶとともに，コンピュータ上で統計ソフト（js-STARおよびR）を用いたデータ処理を実習し，結果の分析および考察を行う。扱う項目は，統計的検定の一般的な考え方，χ２検定，メディアン検定，サイン検定，t検定，分散分析，相関係数，因子分析，多次元尺度構成法，クラスター分析，重回帰分析，等である。	
				データサイエンス	本授業の到達目標は，データサイエンスの手法を用いて大量のデータを収集し，コンピュータによってそれらを解析することで問題を発見し解決することができる力を身に付けることである。大量のデータを収集することが比較的容易な言語データを主な対象とし，その収集方法やコンピュータによる解析方法を実習する。実習で扱う項目は，形態素解析（JUMAN），係り受け解析（KNPおよびCabocha），テキストマイニング（KH Coder），等である。さらに，実習で学んだ方法を活用した調査研究，すなわち，テーマの設定から調査方法の立案，データの収集，データの解析，考案までを一連の作業として体験する。	
				情報システム	複数の情報機器が協調して働くWebシステムの構築を通してシステム設計及び暗号化技術等を習得すること，並びに情報システムを活用するためのプロジェクトマネジメント力及びプログラミング力を育むことを目標とする。そのために，情報システムに関する基礎を学習した後，ラーニングマネージメントシステム（LMS）用サイトを情報システムの一例として実際に構築する。また，数学の１つの単元用トピックを作成し，LMSを用いたコース設計を学ぶ。さらに，LMS用プラグインの作成を行う。	
				ユーザインタフェースデザイン	本授業の到達目標は，（１)道具や情報システムのユーザインタフェース(以下UI)を考える上で重要なルールについて，それらが守られていない事例を挙げながら説明することができる，（２)使いやすさという観点から，身近な道具や情報システムのUIを分析・評価できる，（３)情報システムのUIを設計・評価できる，である。目標を達成するため，使いにくいUIの事例の講義をとおしてUIを考える上で重要なルールについて学ぶとともに，仮想的な情報システムのUIのペーパープロトタイプを開発・評価する。	
				情報通信ネットワーク	コンピュータネットワークは，仕組みがあって動作していることを理解する。ネットワークの一般的包括的な技術の概要，TCP/IPプロトコル階層，いくつかのネットワークアプリケーションを学ぶ。コンピュータネットワークについて，今日のインターネットで使われている技術や事例を中心に講義を行う。講義の内容の理解を助けるために，パソコン等のOSのネットワーク機能，ネットワークアプリケーション，Wireshark等のネットワーク解析ソフトウェアを用いた実習を適宜取り入れる。	
				情報通信ネットワークとデータの利用	コンピュータ上で扱われる情報はすべて何らかのデータの形で管理され，データ通信やデータ処理が行われている。コンピュータネットワーク上で，どのような技術のもとに情報が蓄積・公開されているかを理解することを目的とする。コンピュータネットワーク上で，データ処理に対して使われている技術や事例について講義を行う。また，データベースと連携したWebサーバシステムを構築することで，実際に利用されている技術に対する理解を深める。	
				情報セキュリティ	下の学年で情報通信ネットワークについて学んだことを受けて，情報セキュリティに関する知識と技術を習得させ，情報の安全を担う能力と態度を育成する。今日，世間で用いられている情報セキュリティ技術について，実施可能な実習を含めて，講義を行う。高等教育機関の情報セキュリティ対策のためのサンプル規程集(国立情報学研究所)や大学などの公開されている情報セキュリティポリシーを縦覧して，組織運営に必要な情報セキュリティマネジメント関連についても扱う。	
				情報デザイン基礎	情報を収集し，分類再構成して発信するまでの一連の流れを学習する。それと同時に情報の科学的な理解を深める。そのために，情報を収集する際のメディアの特徴，情報の情報のディジタル化に関わる画像や音声，動画などの理論的な基礎や多様な情報コンテンツの特性及び処理と表現の方法，データ圧縮の方法等を学ぶ。情報制作過程の理論的な理解をした後，情報コンテンツの作成及び発信を実際に行うことによって情報デザインの基礎を学習し理解する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（ICT活用支援）	情報デザイン	本授業の到達目標は，（1）情報デザインに配慮した的確なコミュニケーションの必要性について知る，（2）特にDTPやプレゼンテーションのデザインに関する基礎知識を身に付けるとともに，情報媒体の伝え方や表現方法を実践的に学ぶ，（3）「デザイン」を単に自己表現の作品ととらえず，目的に則した造形・形態の探求や実現ととらえ，客観的に課題にとり組む姿勢を持てるようになることを目指す，である。そのために，この授業では，前半，グラフィック系アプリケーションを使い，DTPや視覚デザインの基礎を学ぶ。後半では，プリンタ，スキャナ，デジカメなどの周辺機器も用いて実習で紙メディアやプレゼンの制作課題を行う。尚，この授業に関する連絡，資料配布，課題提出はe-learningシステムを用いる。	
				情報コンテンツ	教育現場におけるICT活用の際に必ず必要となる情報コンテンツの開発工程から管理・運用・保守までの各過程にわたる一連の作業内容を理解し，指導できるようにすることを授業目標とする。授業の概要としては，まず初めに，デジタル化された情報コンテンツを，日常生活において「創る」「伝える」「使う」という異なる観点から可視化する。そして，情報コンテンツの制作過程に必要な知識・技能を習得し，体験・理解する。また，人間の知と情報コンテンツの融合から作り出される新しい情報環境などに関する理解を深める。	
				情報と職業	本授業の到達目標は，（1）情報技術が社会や産業や人々に与えた影響について，複数の観点から自身の考えを述べることができる，（2）今後社会において情報技術がどのような役割を果たすのかについて，これまでの発展を踏まえ自身の考えを述べることができる，である。目標を達成するため，産業発達の歴史・政策や文化への影響・サイバー犯罪や情報倫理・心理に与える影響や効果・人とコンピュータのコミュニケーションなどの情報化社会に関わる複数のトピックについて，グループディスカッションを中心に学習する。	
			日本語支援	音声学・音韻論	音声は言語の最も基本的な単位である。音声についての理解を深めることは，言語学・日本語学・英語学など，どの分野の学習や研究を行うにしても必須の項目である。この授業では，日本語や英語を中心とした音声学・音韻論の基本を学ぶことを目標にする。多くの訓練を積むことにより，音声言語に対する理解が深まり，自信を持って日本語や英語の音声指導ができるようになる。 講義と演習を組み合わせた授業である。その日のテーマについての概説的な説明を講師が行うと同時に，クラス全体で議論をする。課題を出して，クラスで，または持ち帰って，考えてもらうこともする。	
				言語学研究	世界には現在，6,000 ともいわれる数の言語が話されているが，中国語や英語のようなよく知られた大言語から，数百人，数十人の人々によって話されている少数言語まで，どの言語の文法にも独自のユニークな特徴が存在する。この授業では，言語学が解明しようとしている諸現象の一端として，諸言語の文法に見られる多様性と，世界のあらゆる言語に共通して見られる普遍的特徴を理解することを目標とする。 講義と演習を組み合わせた授業である。授業日ごとにテーマを設定し，その日のテーマについての概説的な説明を受講者が発表する。具体的な言語の例を出してその言語とテーマを関連づけてもらう。その後，講師が補足的な説明を行う。	
				言語生活	地域差，性差，階層差，世代差などの社会的属性による言語変異のパターンとその時代的変化や二言語使用者による言語使い分けの原理，世界の様々な国における言語問題と言語政策の比較などを扱う。今後のグローバル化の進展を視野に入れ，外国に居住する日本人および日本に居住する外国人の言語生活に関する最新の研究も取りあげ，その研究方法についても検討する。あらゆる言語行動の背後に社会的な関係が潜んでいることを，具体例を通して認識することを目標とする。	
				日本語研究の多様なアプローチ	日本語に対するさまざまなアプローチを知り，日本語をさまざまな角度・観点で観察することにより，違った見方で日本語を分析することができる。そのような複眼的な視点を持つことは，日本語を深く理解することに役に立つ。この授業では，異なるタイプの日本語の研究を取り上げ，受講者がそれらについて一定の知識が得られることを目標とする。一例として，統語論の分野から「文の階層構造」，形態論や通時的研究として「文法化理論」，あるいは，語用論の分野から「ポライトネス理論」を取り上げる。	
				日本語史	日本語史の基本的事項を，文字・表記（万葉仮名，ヲコト点など），文体・文章（和文体・漢文体，上方語と江戸語，標準語など），語彙（和語・漢語・外来語，翻訳語など），音韻（上代特殊仮名遣い，四つ仮名など），文法（係り結び，連体形終止法など）といった分類にしたがって概観するとともに，様々なタイプの言語変化について学び，現代の日本語と関連づける。さらに，歴史言語学や文法化の理論など，言語変化，言語の歴史的な系統についても触れることによって，日本語をより広い視野で見ることができるようになる。	
				日本語と外国語	日本語教育においては，言語間の構造的な相違に起因する外国語学習上の障害についての知識が要求されるが，この授業では，そのために必要な言語間の相違性と類似性を分析する能力を習得することを目標に，英語をはじめ，この分野の研究で取り上げられることの多い言語の音韻と文法の特徴を学ぶ。前半は，分析の仕方を学び，後半は，主として本学の初習外国語（ドイツ語，フランス語，ポルトガル語，中国語）に関する発表を通して，人に外国語の特徴を説明するための技術を身に付ける。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（日本語支援）	言語学入門	言語を分析するために不可欠な基礎知識の習得を目標に，言語学の主要な分野の導入部分を講義する。具体的には，音声学・音韻論，形態論，統語論，意味論，語用論，言語類型論である。導入として諸言語の系統関係とその分布，文字の種類とその系統についても扱い，また最後にピジン・クレオールや言語接触など社会言語学の一端にも触れる。講義が中心であるが，授業内タスクを通して主要概念を身に付ける作業も行う。	
				日本語教育評価法	日本語教育評価に関する基本的な知識を身に付け，日本語教育の現場で実際に役立てられる日本語能力の測定と評価技術を獲得する。前半を基本的な知識を身に付けるため主に講義形式，実際にテストを作成，後半は，テスト結果分析をすることにより評価技術を身に付ける。エクセルを使用して，実際に分析を行うため，パソコンを何度か持参してもらう（持参する日は授業中に指示する）。また，日本語学習者が受けるテスト，日本語教育能力検定試験などを授業中に体験することにより，評価を考える。	
				日本語教育学概説	日本語を外国語として教えるために，日本語を客観的に捉え，分析する知識を深めるとともに，外国人労働者が増え，今後「生活者」としての外国人とともに築いていく多文化共生を目指す日本社会として，日本語教育にどのような意味があるかを考える。日本語学習者に漢字の授業をする場面を想定し，目的や学習内容等を実際に考える活動や，外国語教授法を自ら体験する活動を通して，日本語教師としての教授活動能力を養うことを目指す。	
				年少者日本語教育実習	年少者への日本語指導を実際に行うことで，自分なりの課題を見つけて取り組むことを目指す。近隣の外国人児童が多く在籍する小学校２校で最低５回ボランティアとして日本語や算数の指導を行うことを実習とする。最低１回はリーダーとしての経験をすることで，自分が将来実際に教壇に立った時のイメージを具体的に捉えることにつなげる。ボランティアとして実習に行くことで，課題を明らかにして，課題解決に向け実践を行う。	
				日本語教育実習	日本語教育の現場で必要となる，チームティーチングの基本的な考え方を理解し，クラス運営全体に配慮する姿勢を身に付けることを目標とする。授業運営に必要な役割を受講生全員で分担し，担当箇所を決めて実習を行う。実習は２名一組となり，本学留学生に60分間実際に日本語の授業（会話）を教える形式をとる。指導案の作成とそれへの指導を受け，しっかり準備を行った上で授業をする。授業時間外に準備の時間を確保する必要がある。	
				日本語教授法	日本語教授法の基礎を身に付ける。日本語教育で使われている初級の教科書・教材に触れることで，教授内容，日本語教育文法，教授法等についての実践的な知識を構築する。学習者への配慮やコースデザインの基礎を学ぶ。日本語教育に必要な知識・技術，日本語教師の資質・能力，内外の日本語教育の現状等を概観する。授業は，課題，発表，ディスカッション，ピアビードバック等を多く取り入れて行う。授業の総括として，内省・省察を行う。	
				言語習得論	第二言語習得に関する基礎知識を構築し，外国語学習，外国語教育等の応用を考える。第二言語習得に関する英語の文献を中心に読み，授業でディスカッションする。言語習得に関わる様々な要因や言語習得過程に関する問題に関する意識を高め，外国語教育との関わりを考察する。英文レポート，テスト等を随時実施する。小課題も有り。発表，質疑応答，ディスカッション等は，日本語，英語で行い，英語学習や英語の運用能力を高めることも目標とする。	
				外国語教育科学	外国語教育における様々な教授法，指導法，教室活動等について，理論と実践の面から考察する。第一言語習得研究，第二言語習得研究，学習科学，認知心理学等の分野から得られた知見を授業に応用するにはどのようにしたらよいかを考える。また，逆に，普段授業で行っている教え方や指導の仕方，教室活動等は，どのような理論的根拠に基づいているのかを明らかにする。そして，自分が担当するクラスの目標・目的に応じて，最も効果的な授業を構成する糧とする。	
				日本語教育キャリア開発	様々な外国語教授法を学び，日本語教授法への応用，効果的な日本語教育の方法を考える。外国語教授法の発達，変遷，背景等を概観する。世界と日本の日本語教育・教授法の発達，変遷，背景等について調べる。外国語教授法について，各グループで特色，理論的背景，長所，短所，活用法，批判等を研究して，発表する。次にその教授法を使って，日本語教育の模擬授業を実演し，質疑応答，ディスカッション等を行う。総括として，授業での学びの省察レポートを書く。	
				日本語学入門	日本語を母語とする者なら誰でも日本語を教えることができる，わけではない。私たちが普段意識せずに使っている日本語とはどのような言語であるかを，日本語学の様々な観点から観察し，日本語に対する理解を深めるとともに，日本語学習者に教える際に問題になるさまざまな事柄にも興味を持てるようになることが，この授業の目的である。一方的な講義ではなく，受講者には，積極的に観察し，考える姿勢を持ってもらう。その日のテーマについての概説的な説明を講師が行うと同時に，クラス全体で議論をする。課題を出して，考えてもらうこともする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（日本語支援）	日本語学研究	この授業は，１年次で学習した「日本語学入門」などの日本語学・言語学の基礎の上に，さらに深い理解を目指して，いくつかのトピックを決めて学ぶものである。認知言語学・機能主義言語学・会話のインタラクション研究などの分野について，それぞれの研究学派の主張，目的，研究方法を理解し，どのような言語現象，言語関連の状況に対してどういった研究成果が生まれているかを具体的に知る。それにより，受講者が，基本知識のみの状態から脱し，独力で研究できる能力を育めるように，授業を進めていく。	
				日本語学演習	この授業は演習であるので，まだ定説のない，あるいはさまざまな議論がなされているような日本語学の諸問題・諸分野からトピックを選び，先行研究から学ぶだけではなく，コーパスなどの日本語の実例を積極的に利用し，受講者でオリジナルな主張を持てるように，授業を進めていく。具体的には，（１）文法や使用に関わる現象を取り上げる。（２）一人で考えたり，またはグループで意見を出し合ったりし，研究方法を工夫して，解決に取り組む。（３）何らかの結論を得たら，結論を公開する（論文の形にまとめる，プレゼンテーションをする）。	
				年少者日本語教育概説	実際に日本語指導が必要な児童生徒への指導について考える。「サバイバル日本語」，「日本語基礎」，「技能別日本語」，「日本語と教科の統合学習」，「教科の補習」の５つのプログラムを理解したうえで，これらのプログラムを組み合わせたコース設計の必要性を理解する。「初期日本語指導」と「日本語と教科の統合学習」を深く理解する。	
				日本語教育事情	世界の様々な国・地域の日本語教育事情に合わせて，日本語教育を創ることができる資質の基礎を養う。様々な目的や背景を持つ日本語学習者に対応したの日本語の授業を計画し，運営していくコーディネーターとしての知識・技量を身に付けることを最終目標とする。授業では，まず，コースデザインの基礎を実践的に学ぶ。ニーズ分析，目標言語調査等を実際に行い，学習目的に合ったカリキュラム，シラバス等を作成する。その上で，コースの運営に必要な様々な要因を検討する。	
				日本語教育学入門	日本語教育の現状や課題について知り，現在求められている日本語教育とは何かを考える。学校教育の中で課題となっている日本における外国人児童生徒支援にも目を向ける。「日本語教育推進法」の理念や日本語教師の責務等を考える。日本語指導が必要な児童生徒の支援には，どのような資質能力が必要か，大学卒業までのどのような知識・経験を身に付けておいたら良いか，さらに，外国人に「やさしい日本語」とは何か，また，JSLカリキュラム等につて理解を深める。日本語初期指導の方法等についても学び，日本語教育の土台を築く。	
			国語	国語学講義ＢⅡ	方言研究は国語学の研究分野の一つに位置づけられている。この方言を研究対象とするためには，実際の方言の動態を正確に把握することが求められる。その把握にはいかなる方法があるのか，あるいは，日本語の方言は現在どのようになっているのか，そういった問題をこの授業では取り上げる。また，受講者が今までの言語生活で経験してきた方言を徹底的に振り返るという作業を通じ，自らの使用する日本語を客観的に捉えるという作業も行う。そこから日本語のしくみや特徴を再認識すると同時に，自らの使用する日本語について振り返ることを最終の目標とする。	隔年
				国語学講義ＢⅢ	本講義では，日本語史に見られる通時的な変種や，現代共通語や諸方言を含む共時的バリエーションをも含めた日本語を対象に，文法・音声音韻などを中心にその規則性を考察する。国語教師として必要な日本語およびその歴史についての知識を身に付けるとともに，日本語の多様性について理解を深めることを目的とする。なお，講義形式ではあるものの，コメントカードや授業時の質疑，授業内での作業など双方向の授業を実施することで，受講者が主体的に考える力を涵養する。	隔年
				国語学演習ＢⅡ	国語学の研究分野の一つに方言研究ある。この授業では，まず学生自らの方言意識について確認した後，先行研究を精査した上で，内省による自らの言葉の運用についての検討を促す。さらに自らの居住する地域で，地域方言の実態や人々の方言意識を調査し，方言研究の基礎となるフィールドワークを実践する。この作業を通しフィールドワークによる方言研究の方法について学び，地域に出かけてアンケート・インタビューを行いデータを採取し，そのデータを分析するという言語研究の手法を身に付けることが可能となる。これらのことから，自らの使用する日本語を客観的に捉え，そこから日本語のしくみや特徴を再認識し，自らの日本語使用を振り返ることへとつながっていく。	隔年
				国語学演習ＢⅢ	本演習では，言語資料に基づく日本語の分析方法を身に付けることを目標とする。文献や談話などの言語資料を対象に，問いをたて，データ（用例）を収集し，仮説を検証するという調査研究を行う。また，その際にただ資料に現れる例を無批判に扱うのではなく，その資料の成立背景や反映される言語などの資料性を踏まえて分析することで，言語資料の背後にある実際の言語の規則性を明らかにすることを目指す。授業後半では相互に発表・ディスカッションを行うことで，他者にわかりやすく整理して伝える力・他者のコメントを反映して自身の考えを精緻化していく力を身に付ける。	隔年
				国語学演習ＣⅠ	日本語学に関する学術研究を実践するにあたって必要な能力を身に付ける。具体的には以下の諸点を目標とする。①論文を読み，「研究の方法」「研究のまとめ方」「課題の所在」「考察の仕方」等を学ぶ。②具体的な課題に基づき，調査を行う。その際，文献の扱い方，コーパスの利用法，パソコンを用いた調査方法等の理解を深める。③考察内容をまとめる際にどういう工夫が効果的で，何が必要かを意識しながら効果的なアウトプットの仕方を身に付ける。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（国語）	国語学演習ＣⅡ	日本語学に関する学術研究を実践することにより，研究に必要な，以下の一連の過程を体験する。その活動を通じて，日本語学を修めるとはどういうことかを理解する。①特定のテーマについて，先行研究を読み，研究史を整理し，取り組むべき課題の所在を明らかにする。②その課題意識に基づいて必要な方法を設定する。③調査を実際に行い，データを入手・整理・集計・分析する。④分析結果について考察をする。⑤一連の所見を，他者に説得的に，効果的に伝えるとりまとめを行う。	
				国文学講義ＡⅠ	万葉赤人歌の表現方法と古語イニシヘ/ムカシの使い分けを講義する。前半は，万葉歌人である山部赤人の和歌を七種とりあげて詳しく解釈し，後半は，そのうち二種にかかわる古語イニシヘ(およびその類語ムカシ)をとりあげて語意を詳述し，文学理解に役立てる。授業の概要については，前半では，万葉赤人歌の表現方法に見る周到な計算を精確にさぐり，後半では，上代における古語イニシヘ/ムカシの使い分けのありようと中古への継承について広く深くさぐる。	
				国文学講義ＢⅠ	近世の箏曲地歌の歌詞がどういうもので，訳すとはどういう作業なのかを，典拠との関係性や詞と曲の同調等にも目配りしつつ，講義していく。特にわかりやすく訳すことの大変さや意義を伝えることは，教育大学の学生にとって非常に重要と考える。なお，担当者の自著『箏曲地歌五十選 歌詞解説と訳』の解釈や論文の自説を紹介するにとどまらず，担当者自作の「地歌動画講義」も適宜視聴させる。	
				国文学講義ＢⅡ	日本近現代文学の作品について分析する上で必要とされる文学理論について，知識を習得し理解を深める。また作品をめぐる諸言説について，文学理論を踏まえつつ検討を加え，作品の批評性を明らかにする。このような学習を経ることにより，作品を読解する上で必要とされる思考力や判断力を養う。同時に，文学作品を読解するための高度な技能を養い，作品対する関心を深めることを目標とする。	
				国文学演習ＣⅠ	一つの古典の特定の部分・箇所に関し，個人またはグループ単位でレポートして，正しい本文や解釈・説を選ぶ能力を習得させる演習。教育大学の学生ということを念頭に置き，具体的かつ筋道立ててわかりやすく説明できる能力も併せて習得させる。なお，何を対象に選ぶかにもよるが，変体仮名を読める基礎力をつけるために，影印本をテキストに用る場合もあり得る。また，グループ別でレポート発表する場合は，初めの一～二班は授業外に事前指導も行う。	
				国文学演習CⅡ	本演習では，日本近現代文学の研究方法を多角的に検討することを目指す。主要な研究方法に対する理解を深め，作品分析を可能にする能力を養う。具体的には，研究方法・アプローチについて，先行研究を参照しながら検討する。さらに，研究方法を習得し，より深い作品分析ができることを目標とする。加えて，日本近現代文学にかかわる作品について，個人で分析して発表する。発表を通して論理的な説明のできる能力を養う。	
				国文学演習ＥⅠ	四年次の卒論提出にそなえ，自分が何をテーマに選びたいかを考えつつ，そのテーマにはどこまでの先行研究があってどんな問題点があるかも調べる演習。指導教員との対話によって，先行研究を批判的に踏まえることや論拠を明示しながら筋道立てて論を進めていくことの重要性を，三年次のうちに学んでおく。なお，国語教育は丹藤博文，砂川誠司，古典は田口尚之，近現代は奥田浩司が担当するものとする。	
				国文学演習EⅡ	四年次の卒論提出にそなえ，自分が選んだテーマについて，考察を深める。具体的には問題点の把握，先行研究との関係性について考察し発表する。同時に指導教員との対話を通して，理論的なアプローチを踏まえ，論拠を明示しながら論理的に説明する能力を養う。加えて，自らの研究と先行研究との関係性についても，指導教員との対話を通して確認する。なお，国語教育は丹藤博文，砂川誠司，古典は田口尚之，近現代は奥田浩司が担当するものとする。	
				中国文学講読	漢文の原テキストを正確に理解するためには，時代と地域に関する知識，その言語構造の理解，そして何より辞書や索引をはじめとする様々な工具書の使用法を身に付ける必要がある。この授業では，中国文学・思想に関する基本文献を題材として，必要な工具書を使用しながら，それらの原典を読解する技術を身に付けることを目標とする。入念な予習が必要であるが，それを通して技術のみならず，学術分類や人名・書名など中国古典に関する様々な基礎知識を身に付けることができるだろう。	
				中国思想演習	『論語』や諸子百家をはじめ，漢文で扱われるテキストの多くは，二千年以上も離れた時代に作られ，その後長く日本・中国で読まれてきたものである。本来それらを精確に読解するためには，現在に到るまでの，権威を認められてきた注釈類を参照し，辞書などを用いた語彙の用例の調査などを通して，それらの妥当性を評価しながら，解釈を絞り込んでゆくという作業が必要である。この授業では，演習形式によって，漢文で書かれた注釈と合わせて精読することで，そのような読解方法の基礎を習得することを目指す。合わせて卒業論文作成における問題設定に必要な知識を身に付ける。	
				中国文学史	中国古典文学における中核的ジャンルである詩について，先秦から南宋に至る発展過程を通観し，各時代を代表する詩人たちの詩を鑑賞することによって，中国古典文学に対する知識と理解を深める。『詩経』『楚辞』を源とし，漢代に五言詩が誕生し，魏晋南北朝詩，唐詩，宋詩と成熟・展開していった中国古典詩の流れを把握し，詩の形式・押韻・平仄等について理解する。曹植や陶淵明，杜甫・李白・白居易・杜牧，そして蘇軾・陸游など，日本にも大きな影響を与えた詩人たちの多様な作品を観賞しながら，各時代，各詩人の文学的特徴を考察する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（国語）	漢文学研究	講義形式により，漢代から明代までの多様なジャンルの作品を読み，各ジャンルの特質を正しく理解するとともに，そのジャンルが盛行した時代背景を考察する。前近代において最も格式高い文体と見なされてきた賦，駢文と古文，また魏晋南北朝期の志怪・志人小説から唐代の伝奇小説，明代の『三国志演義』や『西遊記』等の白話小説に至るまで，多様なジャンルの作品を読解・鑑賞することを通じて，中国古典文学全般に対する理解を深めることを目標とする。	
				中国文学演習	演習形式によって中国文学の研究の手順と手法を実践的に学び，論文作成のための基本的能力を身に付けることを目指す。まず中国文学に関する学術書・研究論文を読んで受講者みずから論点を整理して発表し，全体で討論を行い，更に必要な調査をみずから考えて実行し，文章化する力を養う。学術研究の手順と論文執筆の注意点を理解し，実践として自ら問いを立て，必要な文献資料を収集・分析し，先行研究の検討を進める。最後に全体で発表と質疑応答を行う。	
				書道演習Ａ	最初は，漢字（楷書・行書・草書）の用筆法とかなの用筆法について比較をしながら，両者に共通する点や相違点を探りながら，さまざまな用筆について理解を深める。その上で，かなの単体（いろは・変体かな）の書き方や，さまざまな連綿の方法について実技指導していく。基礎的な用筆から学習を進め，和歌や俳句を四行書きにする中で，行の構成の仕方についても学びながら，段階的に多様なかなの書法を用いることができるようにしていく。	
				書道演習Ｂ	かなの基礎である「いろは」の単体や変体がなが字母からどのように変化したか，かな文字の変遷について確認しながら書法を学ぶ。また，和歌や俳句を行書きやちらし書きにしながら，連綿，行の構成や配置など，かなの表現方法について学んでいく。平安朝のかな古筆の臨書も行いながら，さまざまな連綿法や行の構成法や，紙面構成法などについての知見を広げていくことにより，効果的なかなの表現ができるようにし，自らの選んだ詩歌を作品にする方法を学ぶ。	
				書道演習Ｃ	授業のテーマ及び到達目標は，１，行書と草書の書法を学習し，その運筆法・用筆法を習得する。２，行書と草書の技法を応用して，創作作品へ発展させる。中国での代表的な行書および草書の古典作品を取り上げ，その作品が生まれた時代背景，書人，作品内容等を把握する。そして，その書法を理解したうえで，臨書をする。それを倣書作品から創作作品につなげる。最終的には，臨書（行書および草書）による学習成果を条幅作品（半切）に仕上げる。	
				書道史	中国書道史と日本書道史の両面から，「書」の歴史について様々な視点で調査・研究することにより，文字文化について正しく理解することができる。書（文字）にはそれぞれ時代性・地域性があり，豊富な書（文字）資料からその特徴を考察し，理解を深める。さらに，広く日本・中国の文化を理解するとともに，豊かな人間性を支える教養と深い専門的知識を身に付ける。具体的には，中国および日本の各時代の書名跡を取り上げ，その書の持つ意義を様々な角度から考察していく。臨書等の実技も含めながら，発展・定着化を図る。したがって，毎時間書道用具(初回授業時に説明する）を持参すること。基本的な授業の進行は，（1）学生のプレゼンテーション，（2）教師の講義，（3）古典作品の臨書，（4）まとめ，という形になる。	
				書論講読	中国清代の書論を読み，書の見方，考え方について深く考察することができる。さらに，書法論および書道文化を分析的に理解するとともに，豊かな人間性を支える教養と深い専門的知識を身に付けている。具体的には，中国清代の書論を読み解く事に重点をおく。前半は，基礎的知識として「書の美」について深く考察し，その中で，書法用語・人名等を確認する。後半は，清代に書かれた書論を精査に読み解き，書法理論について深く考察する。	
				書研究Ａ	中国と日本の代表的な書家とその書法について学ぶ。なかでも，篆書・篆刻の基礎・基本を学び，更に発展学習として篆刻作品の制作を行う。毎時間，理論(書家についての発表)と実技(篆書・篆刻)の二つを行いながら進める。理論は，代表的書家について，調べ学習と発表を行いながら，書人と作品の関係について考察する。また，実技としては，篆書は大篆と小篆の臨書を行い，篆書を用いた作品制作や，篆刻作品の制作と研究を行う。	隔年
				書研究Ｂ	中国と日本の書人として著名な人物を何人か取り上げ，その人物像を知ることにより，書の文化，ひいては中国と日本の書文化について考察する。また，篆刻の分野で著名な人物にも焦点をあて，篆刻の表現文化についても理解する。授業の前半では，人物に関する先行研究や関連する資料を読みながら書人への理解を深める。その上で，後半は，実際に作品の臨書を行うことにより，書人と作品の表現技法との関係性について考察を深めていく。	隔年
				作品研究Ａ	中国の書に関する文献資料をもとに，書作品についての知識を深めていく。先行研究や古資料を読みながら，書の古典作品の筆者，時代（政治・文化）との関わりや，書かれている内容，書体・書風，書法などを多面的・総合的にとらえ，書作品の書道史的な意義を考察する。各自の興味関心に応じ，書法的に優れた碑法帖を選択して，筆者・時代背景・作品内容・書風や書体の特徴・用筆法についての考察を行う。先行研究の検討も行いながら，調べてきた内容をレポートして理解を深める。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（国語）	作品研究Ｂ	日本の書に関する文献資料をもとに，書作品についての知識を深めていく。先行研究や古資料を読みながら，書の古典作品の筆者，時代（政治・文化）との関わりや，書かれている内容，書体・書風，書法などを多面的・総合的にとらえ，書作品の書道史的な意義を考察する。各自の興味関心に応じ，書法的に優れた古筆を選択して，筆者・時代背景・作品内容・書風や書体の特徴・用筆法についての考察を行う。先行研究の検討も行いながら，調べてきた内容をレポートして理解を深める。	
			社会	歴史と環境	歴史や社会を作り出す人間の行動は，その個人や終端が置かれているさまざまな環境によって規定されている部分が大きい。その環境とは，自然環境ももちろん含んでいるが，同時に周辺の諸勢力などとの関係を生み出す政治的，経済的，文化的などの人為的に作られるものも重要である。日本史あるいは世界史に関わるような諸事例を取り上げ，それらがどのような環境によって規定された歴史的現象であったのかを掘り下げることによって，受講生がより深く歴史や社会の諸事象を捉え，将来の教材環境につなげていけるような力を養う。	
				地理学特論Ⅰ	４年次の卒業+論文作成を念頭に，特論Ⅰでは，地理教育・農業地理学・都市地理学について，基本的な内容を講義する。本講義では，各分野で何が問題とされ，何が明らかになったのか。また，いかなる研究手法がとられてきたのかを中心に各分野の基本的理解をはかることを目的とする。	
				地理学特論Ⅱ	４年次の卒業+論文作成を念頭に，特論Ⅰでは，地理教育・農業地理学・都市地理学について，基本的な内容を講義する。本講義では，各分野で何が問題とされ，何が明らかになったのか。また，いかなる研究手法がとられてきたのかを中心に各分野の基本的理解をはかることを目的とする。	
				哲学の諸問題	本授業では，プラトンやアリストテレスといった個々の哲学者にフォーカスしたり，あるいは歴史的な叙述に偏ったりするのではなく，むしろ哲学の歴史の中で繰り返し問題とされてきた重要な概念ないしトピックにフォーカスした講義を実施する。たとえば，現代の英語圏盛んに論じられる一連の哲学上の概念としては，真理・確率・因果・自由意志・合理性などが本講義で俎上にのぼることになるであろう。これらをつうじて哲学上重要な諸概念・諸問題について受講生に理解を深めてもらうことが本講義のねらいである。	
				倫理学の諸問題	この講義では，主に現代の倫理学で論じられている諸問題のなかから，重要なものをいくつか取りあげ，考察する。現代の倫理学では，道徳についての判断はどのような本性のものであるかが活発に論じられる（メタ倫理学）とともに，ヨーロッパ大陸では「他者」の問題が，主にアメリカを中心とする英語圏では「正義」の問題が，倫理学の重要な問題となっている。また生命や環境やビジネスといった，具体的な社会問題をめぐる倫理学的な議論（応用倫理学）の動向も見過ごすことはできない。このような問題のなかから，受講者の関心に応じてテーマを設定し，その問題のおおよそを概観する。	
				宗教の諸問題	本講義では，まず，宗教に関する基礎的知識（世界宗教であるキリスト教・イスラム教・仏教，そして日本における代表的な宗教である神道と仏教諸宗に関する基礎的知識）ならびに宗教学の今日にいたるまでの歩みを概説する。その上で宗教と国家の関りや宗教と戦争の関りについて考察し，さらには宗教を通して社会現象を読み解くことを試みる。異文化としての宗教文化に対する受講者の関心を広げることが本講義のねらいである。	
				哲学基礎演習	本授業では，哲学の古典的な著作の主要な部分をいくつか取りあげ，これを読解し，またそれに基づいて議論を行う。それに先立って，取りあげる哲学者やその著作の基本的な予備知識を講義形式で学んだのちに，実際にその著作の一部を輪読形式で読み進める。この作業をつうじて，哲学の基本的な方法論や課題についての理解を深めるとともに，今後の演習形式の授業で必要となる古典読解の方法や他の受講者との討論の方法を受講者各自が身に付けることを本授業のねらいとする。	
				哲学演習Ａ	西洋哲学の原典を，翻訳を参考にしながら精読することを通じて哲学的思考に親しみ，そこで問われている哲学的テーマに対して各自の問題意識に従いながら解釈していくとともに，それを自らの言葉で表現していく能力を身に付けることを目指す。読解テクストは，西洋近世哲学の代表的な著作，たとえばデカルト『省察』，スピノザ『エチカ』，ライプニッツ『モナドロジー』などから抜粋して取りあげる。各自テクストを予習しておくことが求められる。	
				哲学演習Ｂ	本授業では，西洋哲学（主に近現代の古典的著作）の原典講読を行う。原典の精読をつうじて哲学的思考に親しみ，そこで問われている哲学的テーマに対して各自の問題意識に従いながら解釈していくと共に，それを自らの言葉で表現していく能力を身に付けることが本授業のねらいである。テクストとしては，ロック『人間知性論』，バークリ『人知原理論』，ヒューム『人間本性論』など，主としてイギリスをはじめとする英語圏の著作を取り上げる。	
				倫理学基礎演習	この授業では，倫理学の古典的な作品の主要な部分をいくつか取りあげ，これを読解し，またそれに基づいて議論を行う。まず議論の前提として，取りあげる哲学者や作品の基本的な予備知識を講義形式で学んだのちに，実際に古典的な作品の一部分を，輪読形式で読み進める。そのことを通じて，倫理学という学問の基本的な方法論や課題についての理解を深めるとともに，今後の演習形式の授業で必要となる，古典読解と他の受講者との討論の方法を，受講者各自が身に付けることを目指す。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（社会）	倫理学演習Ａ	この授業では，古代ギリシアにはじまり近現代の欧米や日本に至る倫理学の歴史のなかで，古典的な位置を占める作品をひとつ選んで，これを読解し，またそれに基づいて議論を行う。読解のために必要な予備知識を押さえたうえで，輪読形式で選んだ作品を読み進めていく。このことを通じて，とりあげた古典ないしはその著者についての理解を深めるとともに，卒業論文の製作のために必要となる，古典的な作品を読解するための基本的な能力を受講者各自が身に付けることを目指す。	
				倫理学演習Ｂ	西洋の倫理学に関わる代表的な著作の読解を通じて，倫理学的思考や方法論に親しみ，そこで問われている問題の所在を理解し，それを自分なりの仕方で表現する能力を身に付けることを目指す。授業の進め方としては，前半は，古代から近世にかけての基本文献からの抜粋を資料として，グループごとに内容解説形式の授業を行ってもらう。後半は，近世の代表的哲学者の著作，たとえばデカルト『情念論』，スピノザ『エチカ』，ライプニッツ『弁神論』などからの抜粋を材料として，グループごとに発表を行ってもらう。	
				宗教哲学演習Ａ	授業では，哲学・倫理学・宗教学の基本的文献を正確に読み解く能力の習得を目指す。また，基本的文献の読解を通じて，各自の問題意識にもとづきながら「問い」を設定し，それに対する考察や解釈を，自らの言葉で論理的に表現していく能力を習得することを目指す。受講者各自の関心にもとづき文献を選び，各回とも担当者が決められた範囲の内容について報告し，他の参加者がその発表を検討する，という形式で授業を進めていく。	
				宗教哲学演習Ｂ	本授業では，哲学・倫理学・宗教学の原典テクストを，翻訳や解説書等を参考にしながら読解することができるようになることを目指す。同時に，自分なりの問題意識に立ってテクストの解釈・考察を行い，自らの言葉で論述・表現する能力を養うことを目指す。授業の中心となるのは，各自の興味・関心に即した文献読解作業である。受講生は，各自選択した文献について，その考察報告を行い，参加者で検討しあう形式で授業を進めていく。	
				宗教倫理学演習Ａ	本授業は，倫理学・哲学・宗教学の論文作成の方法を学び，最終的に論文としてまとめ上げることを目的とする。倫理学・哲学・宗教学に関して，まず自分なりの「問い」を持つことから出発し，基本となるテクストを読解していくなかで，各自が論文テーマを設定する。さらに，テーマに即してテクストの読解を深め，論文の形に仕上げていく。授業の具体的な進め方としては，関連する研究論文や先行研究を参照しながら各自で資料を作成して発表し，それを参加者で検討しあう形を想定している。	
				宗教倫理学演習Ｂ	本授業は，倫理学・哲学・宗教学の論文作成の方法を学び，最終的に論文としてまとめ上げることを目的とする。倫理学・哲学・宗教学に関して，まず自分なりの「問い」を持つことから出発し，基本となるテクストを読解していくなかで，各自が論文テーマを設定する。さらに，テーマに即してテクストの読解を深め，論文の形に仕上げていく。各自の設定テーマに関連する研究論文や参考文献の分析・考察をまとめて発表資料として作成し，その資料に基づいてディスカッションする形で進めていく。	
				日本史書講読Ⅰ	学校教育で一般的な日本史に関わる史料や文献をもとに，研究の変化や変化の背景を考察する。特に社会科歴史教育で基礎となる文献や資料について，読解の技術を深めるとともに，情報を整理し，仮説を作って検証する能力を高めていきたい。特に近現代に関する諸研究についての文献等を読んで，どのような問題があり，どのように研究が進められ，何が達成され，何が課題として残されているのか，などを探究していく。それらの経験を重ねることで，将来，教員として自分なりに教科や教材の研究を行っていくための力量を培ってもらう。	
				日本史書講読Ⅱ	日本の，特に中世史に関わる史料を取り上げ，その読解の技術を深めるとともに，そうして得た情報をどのように整理し，自分なりの仮説を作っていくのかという能力も高めていきたい。そのためには，取り上げた史料に関わるこれまでの諸研究についての文献を読んで，どのような問題がありねどのように研究がすすめられ，何が達成され，何が課題として残されているのか，などを探究していく作業が求められる。それらの経験を重ねることで，将来，教員として自分なりに教科や教材の研究を行っていくための力量を培ってもらう。	
				地域史演習Ⅰ	歴史や社会の諸事象を捉えていく場合，それが生起している地域の特性を踏まえて考察することは研究上の重要な視角となる。日本史でも世界史でも，ある地域での出来事がより広い地方での状況を作り出す要因となり，それがひいてはある集団や国家，民族などのありようにも関わっていく。そうした視点は現在の歴史研究においても，重視されているものである。そのような地域からの視点によって歴史を再構成していく作業を，具体的な史料の読解を通して進めていく。それによって，受講生が将来，自ら起用度学習や教材研究に関わっていくための素養を培っていく。	
				地域史演習Ⅱ	地域史演習Ⅰにおいて，地域の歴史を考察する力量を高めたことを踏まえ，次にはそれをより広い地域史や政治史，国家氏などにつなげていくための作業を進める。そのためには幅広く史料を読み解く作業とともに，従来の諸分野の研究文献を読み，その中に自分の考察の結果を位置づける作業も重要になる。受講生には，関係史料を読解し，かつそれに関わる文献のレポートなどを作成・報告することを，教員の始動の下に分担して進めてもらう。それによって，受講生が自らの視点で歴史や社会を捉え，的確に説明できるような力量を高めていきたい。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（社会）	日本史基礎演習	日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において，より専門的な学修を進めるための基礎固めを行う。自ら課題を見出し，それを探究することが要求される専門分野の研究に踏み込むためには，専門の学術書や論文を探し，それを読み込んで理解する力，整理し報告する力，さらにその根拠となる資史料を自ら取り扱う力などが必要になる。そのことを受講生にじかくしてもらうため，実際に諸文献や資史料にも接しながら，それらとどのように関わっていけばよいのか，教員からの始動と受講生からの報告を組み合わせつつ，授業を進めていく。	
				日本史応用演習	日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において，専門的な学修の成果を卒業研究として結実させるための，教員からの指導と受講生からの報告を組み合わせた授業となる。その際に重視するのは，卒業研究にむけて，どれだけ次節の根拠となる資史料を探し，それを利用できているのか，そこから得られた情報がどれだけ正確なものであるのか，それによって推論された内容がどれだけ説得力を有するものなのか，そしてそれらを明確な文章で説明できているか，などの点である。そうした研究のための能力を高めていくことが，この授業の目的になる。	
				外国史書講読Ⅰ	外国史の史料・研究書の読解を通じて，歴史研究に必須となる基礎的な語学力を身に付けるとともに，史料批判や史料解釈の方法を学ぶ。歴史の考察に当たり，これまでの研究成果と，それらの根拠となる原典史料を読解する力は必須の能力であるが，外国史の場合，それらの多くは日本語以外の外国語で書かれており，特に史料は古典的な言語である場合が多い。古典的な言語は，表面的な読解だけでは文意をつかむことが困難であり，文脈や典拠・訓詁を確認しながら読み進めることが必要である。この授業は，特定のテキストを題材として，受講生に担当を割り振り，参加者同士で討論しながら会読する形で進行する。担当者は翻訳するだけではなく，これまでの解釈を確認し，関連史料も参照することで，自身の解釈を根拠付けるための注釈の作成が求められる。こうした作業を通じて，歴史の解釈の方法を基礎から身に付けることを目的とする。	
				外国史書講読Ⅱ	外国史書講読Ⅰに引き続き，外国史の史料・研究書の読解・解釈を実践的に学ぶ。外国史書講読ⅡではⅠよりも専門的なテキストを選択し，また担当者は関連する情報を幅広く参照して深く検討することが求められる。担当者以外の出席者にも，あらかじめ読解した上での出席を求め，個々の文章の解釈に当たって，相互に活発な批判や討論を行うことを義務づける。こうした作業を通じて，歴史の解釈の方法をより実践的に深く学ぶことを目的とする。	
				外国史基礎演習	日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において，より専門的な学修を進めるための基礎固めを行う。自ら課題を見出し，それを探究することが要求される専門分野の研究に踏み込むためには，専門の学術書や論文を探し，それを読み込んで理解する力，整理し報告する力，さらにその根拠となる資史料を自ら取り扱う力などが必要になる。そのことを受講生にじかくしてもらうため，実際に諸文献や資史料にも接しながら，それらとどのように関わっていけばよいのか，教員からの始動と受講生からの報告を組み合わせつつ，授業を進めていく。	
				外国史応用演習	日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において，専門的な学修の成果を卒業研究として結実させるための，教員からの指導と受講生からの報告を組み合わせた授業となる。その際に重視するのは，卒業研究にむけて，どれだけ次節の根拠となる資史料を探し，それを利用できているのか，そこから得られた情報がどれだけ正確なものであるのか，それによって推論された内容がどれだけ説得力を有するものなのか，そしてそれらを明確な文章で説明できているか，などの点である。そうした研究のための能力を高めていくことが，この授業の目的になる。	
				地理学基礎Ⅱ	地理学では地域ごとの統計データを地理行列という形式で整理し分析することで，地域の特色や地域差の解明を試みる。そこで，この授業では地理行列を用い て，地域に関する様々な分析手法を学ぶ。さらに，日本にはどのような統計データが存在するのかを学習する。他にも生成した統計データを主題図に変換するこ とを体験し，主題図の適切な表現手法について学習する。統計データの分析では表計算ソフトウエアEXCELを利用し，地図の作成に対しては，主題図作成支 援システムMANDARA（フリーソフト）を利用する。また，統計データ以外にも様々な地域分析に利用できる地図類がある。これらの分析手法についても学ぶ。	
				地理学研究法Ⅰ	人文地理学・地理教育の学術論文・レポートの作成に必要な「地理学的視点・研究法」の習得を目指す。多くの人文地理学・地理教育論文を読みながら，先行研究のまとめ方と論文の読み方を学ぶとともに，学術論文やレポート作成のための調査法，論理的な文章の書き方を身に付ける。授業は発表・演習形式が基本となる。	
				地理学研究法Ⅱ	人文地理学・地理教育の学術論文・レポートの作成に必要な「地理学的視点・研究法」の習得を目指す。多くの人文地理学・地理教育論文を読みながら，先行研究のまとめ方と論文の読み方を学ぶとともに，学術論文やレポート作成のための調査法，論理的な文章の書き方を身に付ける。授業は発表・演習形式が基本となる。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（社会）	地理学演習	本演習は，４年次の卒業研究を視野に入れながら，各人が特定のテーマを決めて，文献・フィールドワークを行って地理学レポートの習作をまとめることで，地理的見方・考え方を培い，地理的観点から物事を考察する能力を養うことを目的とする。具体的には，文献調査法，対象地域の選定とその過程，野外調査における土地利用・景観観察法，聞き取り調査法，調査結果の集計と分析手法，論文の文書作法等に関する講義とそれに基づいた演習を行い，地理的見方・考え方に基づいた研究手法と考察，そして論文作成の力量育成を目指す。	
				地理学実験	地理学にとって，景観や土地利用から地域の特徴を読みとったり，地図化をとおして人文・自然の諸現象を理解したりするスキルは，学問を支える基礎と言ってもよい。本授業では，地理学者の道を歩んできた研究者たちが若手のころに書いた「学術論文」を読解し，また『地域調査ことはじめ』を通じて調査方法やその苦労，得られた喜びなどを知ってもらいたい。授業では以下の点について特に留意する。１）対象地域と調査テーマの選び方（どこで何を調べるか？），２）調査の始め方，フィールドワークへの入り方（どこから手をつけるか？誰に話を聞くか？），３）データの集め方（定量的データと質的データの違い），４）データのまとめ方（地図とグラフの作り方），５）調査結果のまとめ方。これらのスキルは，同様に初等・中等の社会科教育や地歴を教えるうえでも役に立つ素養であろう。また，本授業は３年次に受講する地理学演習，４年次の地理学卒業論文作成までの道筋を念頭においている。	
				地理学論文演習Ⅰ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，２名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	
				地理学論文演習Ⅱ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，２名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	
				地理学論文演習Ⅲ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，３名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	
				地理学論文演習Ⅳ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，４名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	
				地理学野外実験Ⅰ	人文地理学・地理教育を中心としたフイールドワークを行うとともに，各自で調査テーマを決めて現地調査に挑戦したり，地理教育で役に立つ施設を見学したり，地理教材開発の提案を行ったりする。現地でのフィールドワークの前に資料収集などの予備調査を行い，その成果を発表する。その後，現地に入り，調査を行う。調査終了後，調査結果を分析し，それについて発表する。	
				地理学野外実験Ⅱ	人文地理学・地理教育を中心としたフイールドワークを行うとともに，各自で調査テーマを決めて現地調査に挑戦したり，地理教育で役に立つ施設を見学したり，地理教材開発の提案を行ったりする。現地でのフィールドワークの前に資料収集などの予備調査を行い，その成果を発表する。その後，現地に入り，調査を行う。調査終了後，調査結果を分析し，それについて発表する。	
				地誌概説Ⅲ	本講義は，アメリカ合衆国を対象にその性格を自然環境・政治・経済・社会・文化の多面的視野から総合的に理解することを目的とする。合衆国は中等教育の社会科において，必ず世界地誌の一部として取り上げられる地域であるが，その全容についてじっくり学ぶ機会が限られているのが現状である。本講義では合衆国の自然環境，歴史，地域区分など基礎的な内容について包括的に講義し，合衆国の全体像と地域区分概念を理解する。その上で，アメリカ社会や政治を支える独自の合理主義や思想についてさまざまな地域の事例から合衆国の多様性を検討する。	
				法学演習Ⅰ	この授業では，以下の事柄を行うことにより，法学の基礎を身に付け，また法学分野での論文を書くための基本的な知識を獲得することを目指す。その際，基本的な知識の伝達が求められる際には講義形式で授業を行うこともあるが，基本は学生の主体的な学びと発表によって授業は構成される。①法とはなにかを知る。②法の解釈について学ぶ。③裁判制度について知り，判例を読めるようになる。④法学分野の文献検索を行う。⑤文献の精読を行い，その内容について発表を行う。⑥アカデミック・ライティングについて学ぶ。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（社会）	法学演習Ⅱ	この授業では，学生個人の研究関心に基づき，法学分野の小論文の執筆を行う。その際，「法学演習Ⅰ」で学んだアカデミック・ライティングの知識，文献検索を行うスキル，そして文献を正確に読むスキルを活用することが求められる。なおこの小論文は，卒業論文のテーマを選択するための基礎学習としての性格と，学術論文を執筆するための基本的なルールを学ぶ機会としての性格を併せ持つ。こうした小論文執筆を通して，学術的論文のテーマ選択を行う際に気を付けるべき点はどのようなことなのか，学術的な文章といえるために気を付けるべき点はどのような内容かを知ることを目標とする。	
				法学演習Ⅲ	この授業では，学生個人の研究関心に基づいた卒業論文の執筆に向けた準備を行う。その際，「法学演習Ⅰ」及び「法学演習Ⅱ」での学習の成果を活かすことが必須である。授業は，学生が自身の卒業論文のテーマに関連する文献を選び，その内容を報告し，皆で議論することで進めていく。まずは自身が選択した研究テーマの先行研究を網羅的に読み，これまでの研究のなかで明らかになっていること，明らかになっていないことを明確にする。そのうえで，自身の研究では何を論じ，何を明らかにするのかを意識しながら卒業論文執筆に向けた準備を進めることを目指す。	
				現代社会学演習Ⅰ	本講義では，インタビューを中心とする質的社会調査についてテキストを用いながら，テーマ設定，調査設計，調査の実施，結果分析という手順に沿って習得する。またその後，自らの関心に基づいたテーマを選んで，実際にそれに関する社会調査を実施することで，調査技法を実践的に習得する。具体的には，テキスト『質的社会調査の方法』を順に学生が担当を割り振ってレジュメを作って発表し，討論して内容の理解を深める。またその後，自らの研究テーマを選び，それを先行研究を学びながら社会学的な仮説として調査可能な形に整え，実際に調査を計画し，簡単な調査を実践し，プレゼンテーションを行う。	
				現代社会学演習Ⅱ	本講義では，『はじまりの社会学』をテキストに用いて，さまざまな社会現象を研究する際に，どのような研究領域があるのか，またそこでの代表的な議論のあり方について学んでいく。具体的には，テキストの各章を学生がそれぞれ担当して発表し，その内容について解説する。またコメンテーターが各章の内容に該当する社会現象を探してきて，討論の題材として紹介する。これに基づいた討論の中で，特定の社会現象を社会学の対象として考察する方法について学んでゆく。また後半では卒業研究に向けて自らのテーマを考えていく参考として，各学生の関心に基づいて社会学の論文ないし著作を各々一つずつ選んで発表する。	
				社会調査実習	本実習では，社会調査の実際の手順を理解し，また自らテーマを定めて，基本的な社会調査を実施できることを目標とする。また既存の先行研究における調査結果の分析を踏まえた上で，自らの調査報告書をまとめ上げられることが目標である。具体的にはまず自らの関心に基づいてテーマを選び，社会学の関連する先行研究をそれぞれ探索し，内容を理解し授業内で紹介を行い，自らの問いを社会学的に定式化し，調査仮説を立てる。仮説に基づいた調査設計を行い，主に夏季休暇中に調査を行い，結果を報告し，分析を行い，論文にまとめる。	
				現代社会学研究Ⅰ	本講義の目標は，様々な具体的な社会現象を取り上げ，それを社会学の先行研究においてはどのように捉えてきたか，またそれをどう調査し，結果を分析したかを紹介し，また自らの関心テーマに基づいて調査研究について設計までを行う。受講生が主体となった発表・討議で講義を進めていく。具体的には，学生が各自が関心あるテーマを定めて，その社会学的な先行研究がどの領域のものか考え，文献を探索し，発表する。また自らの問いを考え，それに基づいてどのような社会調査が可能か，設計まで行う。	
				現代社会学研究Ⅱ	本講義の目標は，Ⅰに続いて，学生各自がそれぞれの関心に基づいて様々な具体的な社会現象を取り上げ，先行研究を渉猟し，比較検討し自らの視角を定めるとともに，自らの問いを設定し，それを社会調査の仮説として調査可能な形へと変形する。その後それぞれそ仮説ををどう調査し，どのように結果を分析するかについて，先行研究を参考にしながら見通しまでを立てる。具体的な調査対象者の集まりについての考察と，分析結果の適応領域について等，社会調査と社会理論の関係についても学ぶ。	
				国際経済学	自由化，国際化が進んだ現在の世界経済においては，世界各国は自国のみに注力した経済運営をすることは難しく，他国との関係性や世界全体を包括的に理解することが重要となってきている。自由化，国際化はまた，従来の世界に比べ，企業や個人に対しても世界経済との関係性を意識した経済活動をすることを余儀なくさせている。 本講義ではその様な時代に対応すべく，世界経済の構造分析を行い，世界でどのような経済的問題が生じているのか，様々なトピックごとに学習し，世界経済について俯瞰的な視野を身に付ける。その際，主に貿易，国際金融，多国籍企業，世界経済体制，発展途上国と開発の問題に焦点を当てて学習を行う。	
				経済学演習Ⅰ	社会において，経済や金融と全く関わらずに過ごすことのできる人間はいない。しかし，経済や金融について，何らかの形で学ぶ機会のないまま，社会に出ることが多い。それは貯蓄の概念であったり，主権を持つ消費者としての必要な知識であったり，負債や投資の活用であったり，社会保障や保険なども挙げられる。社会に出る際に必要とされる経済，金融の学習範疇にはキャリア教育やライフプランニングなども含まれる。ここでは社会生活を送るうえで，知っておくべき経済や金融に関する基礎知識について，演習形式で広く学ぶことを目的とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（社会）	経済学演習Ⅱ	今日の経済において，政府の役割は大きくなってきている。市場の失敗や急激なリセッション，循環的な不景気などに対処するため，経済政策の重要性は高まっている。また地域に目を向ければ，各自治体は人口減少時代において，それぞれの置かれた状況に応じた政策課題に対応する必要がある。本講義では政府や自治体が経済に働きかける手段である経済政策について理解を深めることが目的である。 そういった経済政策は様々なものがあるが，その実施主体である政府や自治体の基本機能についての理解がなければ，経済政策を理解することは難しい。この演習では，経済の中で政府や自治体に求められる役割と，その行動に関するインセンティブといった点を理解することを目的としている。地域が抱える経済問題などについては，自治体と連携しつつ，課題解決型の学習を目指す。	
				国際金融論実習Ⅰ	1980年代より注目を集めるようになってきた「金融化（ファイナンシャリゼーション）」について，とりわけそれが国際的な通貨危機を伴い，世界経済に大きな影響力を持つようになったことについて，その身近な世界への影響を具体的にイメージしながら国際金融について学ぶことが本講義の目的である。その際，証券取引所や日本銀行などへの訪問学習を通じて，イメージのしにくい金融の世界を，実体験を伴った理解ができるように実習形式の授業形態をとる。そして，金融について，他者に教える際にどういった点が理解しやすく，どういった点が理解しにくいのか，教育に際して具体的な課題を見つけながら，国際金融全般の知識を深めていく。	
				国際金融論実習Ⅱ	現在の世界経済に大きなウェイトを持つ国際金融について，国際金融システムの構造という観点で学習を行う。ここでは戦後から現在の国際通貨体制を中心に，貨幣，金融機関，金融市場，金融政策といったものが複雑に絡み合っている事を資料調査等から学習する。主なテーマは変動相場制移行後に続発している世界規模での金融危機について個別事象と理論との両面からの学習である。また，その過程で経済学的方法論を身に付けることも目標とする。	
				社会科教材研究Ⅰ（公民分野）	本授業の目標は，次の（1）～（7）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察できる教材を開発することである。 （1）少子高齢化・情報化・グローバル化が政治，経済，国際関係に与える影響（2）文化の継承と創造の意義（3）物事の決定の仕方，契約，きまりの役割（4）個人や企業の経済活動における役割と責任（5）職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善（6）国や地方公共団体が果たす役割（7）財政と租税の役割 本授業では，（1）～（7）のテーマについて，「多面的・多角的に考察する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	
				社会科教材研究Ⅱ（公民分野）	本授業の目標は，次の（1）～（7）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察できる教材を開発することである。 （1）日本国憲法に基づいて政治が行われていることの意義（2）民主政治の推進と公正な世論の形成との関連（3）民主政治の推進と選挙など国民の政治参加との関連（4）地方自治と住民の自治意識との関連（5）日本国憲法の平和主義に基づいた安全と防衛（6）国際貢献を含む国際社会における日本の役割（7）よりよい社会を築いていくために解決すべき課題 本授業では，（1）～（7）のテーマについて，「多面的・多角的に考察する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	
				社会科教材研究Ⅲ（公民分野）	本授業の目標は，次の（1）～（7）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察し，構想できる教材を開発することである。 （1）人工知能の進化による産業や社会の変化（2）災害時における防災情報の発信・活用（3）科学，芸術，宗教と社会生活との関わり（4）日本の伝統と文化（5）個人や企業の経済活動（6）市場における取引と貨幣（7）経済活動や起業を支える金融 本授業では，（1）～（7）のテーマについて，「多面的・多角的に考察し，構想する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	
				社会科教材研究Ⅳ（公民分野）	本授業の目標は，次の（1）～（7）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察し，構想できる教材を開発することである。 （1）仕事と生活の調和と労働保護立法（2）消費者の保護と自立支援（3）少子高齢社会における財源の確保と配分（4）法に基づく公正な裁判の保障と裁判員制度（5）領土問題の平和的手段による解決（6）戦争の防止と世界平和（7）国際社会における文化や宗教の多様性 本授業では，（1）～（7）のテーマについて，「多面的・多角的に考察し，構想する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	算数・数学	線形数学演習Ⅰ	「線形数学Ⅰ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。行列の定義，演算法則および諸性質，逆行列，連立一次方程式の解法，行列の階数，行列式などの基本的事項，さらに，２次・３次元空間における直線や平面の方程式を通し，連立方程式や行列式の図形的な性質を学び，代数的・幾何学的な側面を有機的につなげるための演習も盛り込み，大学で学ぶ抽象的な数学を理解するために必要な基礎事項の定着を目指す。	
				微分積分演習Ⅰ	「微分積分Ⅰ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。数列の極限，連続関数，逆関数，および一変数関数の微分法，テイラー展開，マクローリン展開および極値問題への応用など，微分積分，特に，微分法の基礎事項（計算技法も含む）に関する演習を行う。この演習では，高等学校の数学Ⅲで学んだ微分積分と「微分積分Ⅰ」で学ぶ事柄の橋渡しを意識し，大学で学ぶ数学の基礎となる事柄の定着を目指す。	
				線形数学演習Ⅱ	「線形数学Ⅱ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。「線形数学Ⅰ」で学んだ行列に関わる具体的な計算との関係を意識しながら，抽象ベクトル空間，一次独立性・従属性，ベクトル空間をつなぐ線形写像とその行列表現，内積，固有値・固有ベクトルと固有空間，行列の対角化，および二次曲線の分類などの基礎事項に関する演習を行い，大学で学ぶ抽象的な数学を理解するために必要な基礎事項の定着を目指す。	
				微分積分演習Ⅱ	「微分積分Ⅱ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。特に，積分法（計算技法も含む）や無限級数に焦点を当てる。有理関数，三角関数，指数関数や無理関数を含む関数の不定積分の計算技法，定積分やその面積・体積や曲線の長さへの応用，極限によって定義される広義積分の積分可能性，級数の収束・発散とそれらの判定法などに関わる演習を行い，大学で学ぶ数学の基礎となる事柄の定着を目指す。	
				解析学Ａ	この講義では，複素数の必要性，および解析学との関連を示すことでその有用性を学ぶ。講義の前半では，オイラーの公式，３次・４次方程式の解法，正17角形の作図，代数学の基本定理などを学び，複素数の必要性および有用性を体験する。後半では，複素関数論の入り口，つまり，指数関数，対数関数，三角関数等，初等関数の複素変数版や，複素関数の微分法，コーシー・リーマンの関係式を通して正則関数に関わる基礎事項を学び「解析学特論」への導入とする。	
				代数と幾何の基礎	多角形や二次曲線などの平面図形や複素平面の幾何学的側面と，行列や方程式，および初等整数論などで学ぶ代数学的側面を有機的に関連付けて学ぶ。具体的には，代数方程式の根と複素平面，コンパスと定規・折り紙による作図，格子点の離散幾何学と連分数，といった高等学校までに学ぶ数学の内容と密接に関連する素朴な数学的対象を，大学において新たに学んだ様々な数学を駆使することで，分野横断的により深く理解することを目指す。	
				応用代数学	離散数学は高等学校までに系統的に学ぶ機会が少ないが，情報科学をはじめとする他分野への多様な応用が知られており，その重要性にゆるぎはない。この講義では，グラフ理論とそれに関係する代数を取り上げる。正則グラフ，平面グラフ，二部グラフなどの基本的なグラフの概念の理解と，握手の定理，オイラーの公式，Hallの結婚定理などの，よく知られる定理の紹介とその証明を行う。また，群作用の考えを用いた，グラフ彩色の数え上げも扱う。	
				代数学Ａ	中学校数学における文字と式（単項式，多項式），その展開及び因数分解といった内容のバックグランドとなる代数系の諸概念を理解し，代数学の基礎的な知識，および，代数学的な思考力を修得することを目標とする。「代数学概論」で学習した内容を前提として，多項式環の構成から出発し，多項式の除法の定理，剰余定理と因数定理，また整数環や体上の多項式環の自然な一般化であるユークリッド整域，単項イデアル整域へと進む。	
				幾何学Ａ	この講義では，まずユークリッド空間における開集合について学び，１年次の微分積分学で扱った連続関数の概念が，開集合を用いて記述できることを理解する。その上で，同相という同値関係やコンパクト性，連結性，ハウスドルフ性といった位相空間の性質についての理解を深める。さらに，位相が定められた集合「位相空間」は，伸縮自在な図形と理解できが，その具体例として低次元多様体を取り上げ，特に，閉曲面の分類について学ぶ。	
				解析学Ｂ	数理科学や社会科学分野における基礎的な数学モデルには，しばしば微分方程式が登場し，その重要性が広く知られている。この講義では，具体的な数理モデル（例えば，増殖，振動，競合，惑星の運動など）に言及しながら，基礎的な常微分方程式および方程式系の解法，および，それらの解析手法を学ぶ。また，下級年次における「微分積分」や「線形数学」で学んだ基礎事柄とのつながりを強く意識し，既習事項の理解の深化と定着を目指す。	
				コンピュータ実験と数学	コンピュータを一つの実験ツールとして用い，試行錯誤を重ね体験的に数学的事実を確認し理解することを目指す。また，自ら数理実験を設計し，数理モデルの簡単なシミュレーションができるようになることを目指す。例えば，記述統計，極限定理・パーコレーションなどの確率現象，力学や生物個体数などの微分方程式モデル，音響などの波動現象に関わるシミュレーション，エラトステネスの篩・ユークリッド互除法・連分数等の整数論に現れる様々なアルゴリズムに関する数値実験を通した活動が展開される。具体的事例を伴った奥行のある理解へと誘う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（算数・数学）	代数学Ｂ	「代数学概論」「代数学Ａ」で学習した内容を前提として，まず整数環や体上の多項式環の自然な一般化である単項イデアル整域，一意分解整域の性質から始める。一意分解整域上の多項式環が一意分解整域であることを示すことが前半の目標である。後半では多項式の既約性に関するアイゼンシュタインの判定法や多項式関数，有理関数について考察し，ネーター環，中国式剰余定理について学ぶ。最後に，商体の概念に触れ，整数環から有理数体を構成する方法について学習する。	
				幾何学Ｂ	球面幾何，双曲幾何は，どちらも平行線の公理を満たさない非ユークリッド幾何学のことである。この講義では，合同変換・相似変換の復習から始め，その自然な拡張として1次分数変換について学ぶ。次に「幾何学概論」で学んだ曲線や曲面の曲率の知識を基に，球面幾何における測地線，球面三角法，三角形の合同条件について学ぶ。最後に，双曲幾何の典型的なモデルである上半平面やポアンカレ円盤を構成し，それらの測地線，双曲三角法，三角形の合同条件について学ぶ。	
				確率統計Ⅲ	「確率統計Ⅰ」および「確率統計Ⅱ」において，確率統計学の基本的な考え方を学んできた。しかしながら，これらの講義では，推測統計学の基礎概念を身に付けるために，正規分布，もしくは二項分布を用いる事例に限定していた。本講義では，「確率統計Ⅰ」および「確率統計Ⅱ」の続編として，さらに進んだ推測統計学の習熟を目標とする。 標本分布として現れる種々の分布を確認したあと，様々な母数の推定と仮説検定について，さらには回帰分析を扱う。	
				応用解析	熱伝導の研究に端を発するフーリエのアイディアは，現在までに，自然科学分野のみならず工学をはじめとする幅広い分野で利用されている。本講義では，高等学校で学ぶ三角関数や大学下級年次における「微分積分」「線形数学」「解析学概論」で学ぶ基礎事項を踏まえ，フーリエ級数，およびフーリエ変換の基礎事項を解説する。さらに，それらの応用として，熱伝導，波動，およびラプラス方程式を代表とする線形偏微分方程式の初期値問題や境界値問題の解法を学ぶ。関数解析などの現代的な手法も適宜紹介する。	
				代数学特論	体論における基本的事項を復習し，ガロア理論を概説する。５次以上の方程式に解の公式が存在しないことを証明することを目標とし，２次，３次方程式におけるガロア群などの関連事項を例で見ながら講義を進める。また，「ギリシャの３大作図問題」について解説を与え，正多角形が作図可能であることの必要十分条件を与える。抽象的に展開される代数系におけるガロアの基本定理が，どのように方程式の解の公式や作図問題に応用されるかを厳密な議論の元に理解できることを目指す。	
				幾何学特論	単体的複体，ホモロジー群，基本群といった位相幾何学における基本的な概念について学び，多様体の位相構造について理解を深める。まずは，単体的複体と多様体の関係を学び，それらを用いてホモロジー群を定義し，具体的な多様体のホモロジー群の計算方法（マイヤー−ビートリス完全系列）について学ぶ。次に，基本群について学び，その計算方法（ザイフェルト−ファン・カンペンの定理）の習得を目指す。加えて，基本群・ホモロジー群を理解する上で重要となる，群の表示についても学ぶ。	
				解析学特論	「解析学Ａ」で学んだ複素数と複素関数についての続編として正則関数の積分理論について解説する。複素積分を定義し，正則関数におけるコーシーの積分定理・積分公式を学ぶ。 コーシーの積分定理から導かれる様々な正則関数に関する諸性質，特に正則関数の冪級数展開（テイラー展開，マクローリン展開），および，有理型関数のローラン展開，留数定理を取り扱う。また，留数定理を用いて実関数の定積分の計算ができるようになることを目標とする。	
				確率統計特論	確率モデルはランダム性を伴う現象の数理解析に欠かせない。講義では，時間発展するランダム現象のモデルとしてマルコフ連鎖を扱う。「確率統計Ⅰ」「確率統計Ⅱ」で学んだ基礎事項（確率変数・確率分布など）を簡単に振り返ったのち， マルコフ連鎖に関わる諸概念（推移確率・再帰性・定常分布など）を学ぶ。 関連して， ランダムウォーク・出生死亡過程・ポアソン過程なども取り上げて， それらの幅広い応用を概観する。	
				学校数学特論	小学校算数・中学校数学の領域構成は，数学という学問分野の系統性を色濃く反映しているが，数学的問題を解決したり，数学を構成・発展させたりする数学的活動や，そこで働くことが期待される数学的な見方・考え方などの視点から，指導内容を分析・開発することもできる。本授業では，数学的な見方・考え方をそうした視点の一つとして理解し，実際に教材分析・開発の視点として利用できるようになることを目標とする。授業では，講義形式により，幾つかの数学的な見方・考え方（例えば，特殊化，一般化，帰納的な考え方など）を解説し，演習形式により，そうした視点から小中学校数学の指導内容の発展性を考えたり，「課題学習」に好適な問題の開発を行ったりする。	
				学校数学探究Ⅰ	数学的な探究活動を自ら遂行するための様々な方法論等に関する基礎的な知識・技能について理解することを目標にする。そのために，学校数学で取り上げる事が可能で数学に関わる興味深い問題や日常的・社会的・自然科学的事象などを調査し，その様々な解決方法やモデル化の方法，更には発展・拡張・一般化の仕方について考察すると共に，当該問題・事象から派生する様々な探究課題を検討するなどして，数学における探究的テーマの探索や探究活動の遂行のための基礎的な方法論を，演習を通して体験的に理解していく。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（算数・数学）	学校数学探究Ⅱ	「学校数学探究Ⅰ」で理解した資質・能力を活用し，数学的探究の過程の一部を自ら（あるいはグループで）遂行していくことができるようにすることを目標にする。そのために，「学校数学探究Ⅰ」に引き続いて，学校数学で取り上げる事が可能で数学に関わる興味深い問題や日常的・社会的・自然科学的事象などから，関心を持ったテーマ・トピックに焦点化し，具体的な探究課題を設定して，自ら（あるいはグループで）数学的な探究を遂行すると共に，その探求過程や途中経過，あるいは暫定的な解決や成果の一部などを発表する。	
				学校数学探究Ⅲ	「学校数学探究Ⅰ」で理解した資質・能力を活用し，数学的探究の過程全体を自ら（あるいはグループで）遂行し，結果を取りまとめ，発表することなどができるようにすることを目標にする。そのために，「学校数学探究Ⅱ」で設定し，探究してきた探究課題に関して，最終的な解決結果や成果を取りまとめ，それらを発表すると共に，探求の過程を振り返ったり，意見交換などをしたりすることを通して，解決方法や結果の質を向上させる機会を持ち，最終的には，全ての過程と成果を論文やレポートの形でまとめるようにする。	
			理科	物理数学	微積分と線形代数はいずれも応用数学の中で最も重要な概念である。物理学では力学，電磁気学の記述に不可欠なツールとなる。物理学においてこれらが重要なのは，ニュートンが微積分を発明したこと，ギブスが電磁気学の簡潔な記述のために，微積分と線形代数を融合してベクトル解析という分野を作ったという歴史的な事実からもうかがい知れる。しかしながら，今やその応用範囲は物理学にとどまらず，化学・生物学・地球科学の自然科学一般はもちろん，経済学・社会学などの人文科学においても必須のツールである。本講義では，これらの２つの数学的ツールについて学ぶ。	
				基礎物理学演習	本講義では日常生活とのつながりの深い熱力学と幾何光学について学ぶ。熱力学では，熱力学的平衡状態とは何かから入り，温度と熱の概念を導入し，物質（特に理想気体）の熱的性質を概観した後に，熱力学第一法則，熱力学第二法則までを学ぶ。幾何光学ではレンズや鏡のつくる像の基礎と光学機器（カメラや顕微鏡）のしくみを理解することを目標とする。本講義の内容を修得することで，日常に見られる自然現象や光学機器などに対する見方が変わることを期待する。また，本講義の授業内容は小・中学校理科の単元[光の性質（小３）；空気と水の性質（小４）；金属，水，空気と温度（小４）；光と音（中１）；状態変化（中１）；天気の変化（中２）；エネルギー（中３）]とも関わりが深いため，学校現場で行う（あるいは行うことが可能な）実験などを交えつつ講義を進めていく。	
				物理学演習	自然界における電気現象と磁気現象を統一的に記述する電磁気学について学ぶ。電磁気学の範囲はとても広く，通常は静電場・静磁場から学び始め，時間的に変動する電磁場，物質中の電磁気学，電磁波の伝播などと続いていく。本演習では，それらの中でも中学校と高等学校の電磁気分野の内容と教材に強く関連する題材を中心に取り上げて，背景にある中核疑念や知識体系ならびに教材の有効性の理解を深める授業を展開する。具体的な授業内容は次の通りである。（１）電気回路（２）静磁場と電磁石（３）電磁誘導・モーターと発電機。	
				応用物理学演習	電車や車などの乗り物の揺れや弦楽器や管楽器の音色，はたまた地震動の伴う建物の揺れ，更には動物の心臓の拍動など，日常生活によく見られる現象や自然現象，更には生命現象など様々な場面で振動現象が見られる。本講義では，こうした振動現象のうち最も簡単な単振動の性質から初めて，減衰振動，強制振動，連成振動と続き，波動現象についてまで学んでいく。また，中等教育の物理分野の学習内容と関連づけて，流体力学の初歩的内容（アルキメデスの原理，ベルヌーイの法則，揚力，粘性抵抗，慣性抵抗など）についても学ぶ。	
				熱物理学	統計力学とは物質の究極の構成要素として原子をミクロな実在と仮定し，構成論的に物質の性質を解き明かそうとする学問である。ボルツマン，ギブスによって打ち立てられた統計力学の体系は物質の詳細によたずに成り立つ熱力学と完全に無矛盾であり，温度やエントロピーの正体について分子論的解釈を可能にする。さらに熱力学ではインプットとして必要となる物質別の経験データ，例えば比熱，圧縮率，膨張率，状態方程式等をミクロな力学に基づいて導出することが可能となる。統計力学を建設する上で重要となる原理（概念）の厳密な数学的な基礎付けは，未だに研究対象となっており未解決問題であるが，講義ではどのようなことを受け入れないといけないかということと，それを認めた上で如何に熱力学と無矛盾な理論を構成できるのか，比熱や状態方程式の具体的計算法の習得に時間を割く。	
				量子物理学	光の本性と極微な物体に関する基本法則である量子力学を学ぶ。量子力学は，微視的世界の素粒子の自然法則や巨視的世界の固体の物性などを理解する上で，欠かすことのできない学問である。この講義を通じて量子力学の基礎概念と基本法則を把握し，量子現象を記述するために必要な演算規則を習得する。講義内容は次の通りである。（１）前期量子論:19世紀後半から20世紀初頭にかけて，光や原子に関する様々な実験事実が古典物理学（力学，電磁気学）の破綻を示した。これらの問題を解決するために導入された“量子”の概念とその成功を歴史的背景とともに知る。ここで「波動と粒子の二重性」という量子論の基礎概念を把握する。（２）量子力学:量子力学の基本法則の枠組みや定式化を学び，そこに現れる演算規則を習得する。具体的な問題を扱って，古典論と量子論の世界にあるそれぞれの粒子の性質の相違点と類似点とを検証する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（理科）	熱物理学演習	光の本性と極微な物体に関する基本法則である量子力学を学ぶ。量子力学は，微視的世界の素粒子の自然法則や巨視的世界の固体の物性などを理解する上で，欠かすことのできない学問である。本演習を通じて量子力学の基礎概念と基本法則が自然界の現象にどのように関わっているのかについて具体例を学ぶ。本演習では次の内容を扱う。（１）ポテンシャル散乱とトンネル効果（２）調和振動子ポテンシャルとエネルギーの量子化（３）角運動量の量子化ならびに水素原子の構造。	
				量子物理学演習	統計力学の応用について学ぶ。個性のない分子の集まりによって，集団としての物理的・化学的性質がどのように現れるのか，ミクロカノニカル集合とカノニカル集合という２つの立場から追及する。まず，気体の低密度での状態方程式や，高温での固体比熱についてのデュロン＝プティの法則といった「普遍的な性質」がいかに導かれるかを学んだ上で，高密度・低温の領域で，分子の個性が物質全体としての振る舞いにどのようにあらわれるのかを見ていく。また，そのような性質が気体の状態変化，化学反応論（質量作用の法則等）といった，中等教育で登場する化学分野の法則とどのように関連するのかについても触れる。さらに，統計力学の考え方が物理にとどまらずいろいろな分野で応用可能であることの紹介として，所得分布の簡単な市場統計モデルを扱い，機会の平等が結果の不平等につながることを見る。	
				物理学実験Ⅰ	私たちの毎日の身の周りの日常生活において様々な力学的，電磁気学的，光学的な物理現象が知らず知らずのうちに生じている。基礎物理学実験では，以下の身近な現象を素材とし，実験を通してこれらの現象を体験的に学習する。また，本実験は，自然科学を研究する最も基本的な実験手法（コンピュータ活用を含む）を修得することのみでなく，科学的なものの見方・考え方を身に付けることも目的とする。さらに，測定結果をきちんとしたレポートとしてまとめ，報告することができるようになることも重要な目的の一つである。物理分野を専門とする学生はもちろん，専門としない学生にとっても有意義な実験テーマを厳選している。	
				物理学実験Ⅱ	いくつかの実験課題を設定し，これまでに学んできた基礎知識をベースとして，（１）課題の内容を理解する事，（２）実験装置などを製作する事，（３）データを収集し結果をまとめる事，（４）まとめた結果を発表して人に伝える事，をきちんとやり遂げる能力を養う。５～６人程度のグループに分かれて，１課題５回程度をかけた実験に取り組む。また適宜発表会を行う。実験課題としては，光や音などの各種センサーを使った実験や，霧箱やエマルションを利用していわゆる自然放射線を観察・計測する素粒子・原子核分野の実験を行う。	
				物理教材実験Ⅰ	理科離れが大きな問題になっている現在，小・中・高の教育現場において質の高い実験や観察を児童・生徒に体験させ，自然界の現象や身のまわりの自然について，興味や好奇心を喚起させることはきわめて重要であり，そのような実践的機動力を有する教員が強く求められている。本実験では，小・中・高の学校現場に配置されている実験器具や設備などを有効に利用できるための実践的訓練を行う。使用される頻度の高い実験器具や設備を教える立場から使用し，経験的・実践的に教育効果や実験方法を検討する。さらに自ら，教育的教材を設計し，製作する能力・技術を身に付けることを目的とする。	
				物理教材実験Ⅱ	初等・中等教育の理科授業において，座学を中心とした知識享受に加え，それらを裏付けるような観察・実験を相補的に実施することが効果的である。そのためには，教育現場で使用される実験器具を有効に活用できるためのスキルを身に付けることが不可欠である。また近年では，ICT機器や安価なマイコン・センサーの普及に伴って，それらを利用した新たな教材開発が活発に行われている。そこで本実験では，従来型の物理実験に加え，現代的な機器を導入した実験を自らデザインすることを通して，それらの教育的効果の検証および，教材開発能力の向上をねらう。	
				物理学ゼミナールⅠ	物理学の専門分野および理科教育に関する題材について自ら課題を見出すための取り組みを行う。３年生までに学ぶ基礎知識と研究題材に関する専門知識を実践的に活用することで，総合的な知力（問題把握，分析的思考，豊かな発想，論理構築，説明能力）を高める。各題材に関する専門知識および基礎技能を習得するために，学術論文誌の文献報告や専門書の輪読を行う。この際に主として学生が発表を行い，自らの考えを他者に伝達する上で最低限必要な合理的説明能力を習得する。	
				物理学ゼミナールⅡ	物理学の専門分野および理科教育に関する題材で自ら立てた課題に関連した学術論文等の講読演習を行う。３年生までに学ぶ基礎知識と研究題材に関する専門知識をもとに読解し，その内容を発表して質疑応答を行うことにより，得られた知見を卒業研究に活用する。これにより，総合的な知力（論理読解力，分析的思考，プレゼンテーション能力）を高める。担当教員との相談に基づき，卒業研究の題材に関連した学術論文等を設定し，各自が読解を行う。中間指導を受けながら読解を進め，取りまとめた内容についてはゼミ内で発表を行い，他者からの質疑に応答する。学術論文等の書かれた目的を踏まえて，使用する方法との整合性，結果に示されるデータ解釈や考察の妥当性を吟味し，論文の論理性をつかむことを重視する。また，明確かつ合理的な説明能力を身に付けることも重視する。	
				物理化学Ａ	物質の示す様々な化学現象を理解するには，物質を構成する原子の組換えや結合様式の変化によって生み出される物質の質的変化を，原子・分子レベルで量子論的に理解するのみならず，分子の集合体として統計力学的にとらえる必要がある。本講義では，この物質のマクロなとらえ方において見出される物質の諸法則を与える熱力学について学ぶ。熱力学の基礎について理解し，状態変化を決める要因を考えて，化学現象を理論的に説明する能力を身に付けることを目標とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（理科）	物質化学	化学平衡および化学結合について理解し，化学反応と分子構造を決める要因を考えて，自然現象を説明する能力を身に付けることを目標として，以下の内容の講義を行う。まず熱力学の諸法則および種々の熱力学状態関数について論じた後に，化学平衡について定量的議論を行う。次いでこの方法を種々の相の間の平衡へ拡張する。これによって蒸留の定量的取り扱いの基礎や混合物の相変化の解釈などを明らかにする。また，分子論に立脚した取り扱いを行うために量子論について学ぶ。ここでは，水素原子の電子軌道について詳しく考察し，２個以上の電子をもつ原子にそれらの計算を拡張する。これによって，原子半径，イオン化エネルギー，電子親和力の複雑な周期性を理解する。さらに分子に量子力学を適用して，化学結合の本質を理解する。ここでは，水素分子をはじめとして，二原子分子，多原子分子の化学結合を原子価結合法や分子軌道法により取り扱う。	
				有機化学Ａ	有機化合物の構造，反応，性質を学ぶ有機化学は現代社会を支えている基本的な学問分野で，有機化学による医薬，ポリマー材料，農薬等の化学物質の開発は人類の長年の夢を実現させ，人々の生活を安全で快適なものにしてきた。また，生体の中で起こっている反応の，ほとんどは有機反応である。したがって教員を目指す者にとって，様々な身の回りのものやできごとの仕組みを理解するために有機化学は基本的で必要不可欠な知識である。本講義では，これまでに学習した化学の内容の確認の後，有機化合物の官能基の化学（振る舞い）を理解し，振る舞いを予想できる能力を問題を解きながら身に付ける。	
				基礎物理化学演習	物質の構造や状態変化，化学反応のような化学の諸現象を理解するためには，物質を構成している原子や分子の性質を知ることが不可欠である。原子・分子のように非常に小さな微視的粒子の振る舞いは，量子力学の概念を使わなければ説明することができない。本演習では，量子力学を化学に適用した学問である「量子化学」について講述し，演習を行う。量子化学の基本原理を習得し，それに基づいて原子や分子の性質および物質の性質を理解することを目的とする。	
				化学演習	本演習では，中学校および高等学校の化学において重要な位置を占めている有機化合物，合成高分子化合物，および天然高分子化合物を取り上げ，大学レベルのより高い視点からこれらの化合物について理解することを目標として，解説と演習を行う。有機化合物に関しては，様々な有機化合物の性質と反応性および合成法を系統的に学習する。合成高分子化合物に関しては，高分子の概念がどのように確立されたか，高分子化合物と低分子化合物の違いはどのようなものか，高分子化合物は暮らしの中でどのように役立っているかを学習する。天然高分子化合物に関しては，生体を構成している糖鎖，アミノ酸とタンパク質，核酸とDNAの性質と構造について学習する。	
				有機化学演習	本演習では理科の学生向けに，初歩の有機化学を解説し演習を行う。有機化学は，我々の日常生活と深い関わりをもっている。例えば，医薬品，化粧品，高分子材料，染料などの製造において，有機化学はその基盤となっている。また，他の領域の科学とも密接な関連があり，例えば，生体現象を分子レベルで理解するためには，有機化学の考え方は必要不可欠となっている。この演習では基礎知識と基本概念の習得に重点をおき，系統的に分類された様々な有機化合物について，その構造，性質，合成法および反応について学ぶ。分子モデルを自身で構築することにより，立体化学の理解を深める。	
				機器分析演習	機器分析は，物質の同定，構造決定，定量分析を主な目的とするもので，化学の実験を行う上で必要不可欠となっている。本演習では，クロマトグラフィー，赤外線吸収スペクトル，紫外可視吸収スペクトル，質量分析，プロトン核磁気共鳴スペクトル，C13核磁気共鳴スペクトル，二次元核磁気共鳴スペクトルなどの各種機器分析法を取り上げ，有機化合物を対象とした有機機器分析に焦点を置き，物質の単離精製法，機器分析の原理，解析方法などについて，解説と演習を行う。	
				化学探求演習Ⅰ	初等および中等教育の化学分野における既存の教材を分析し，その効果や有効性を検証したうえで，教育現場において化学教材を適切に運用できる知識・技能を身に付けることを目標とした演習および実習を行う。はじめに化学の授業における教材の役割と効果について解説し，その後，初等および中等教育で使用されている化学教材（特に実験教材）の分析・検証を行っていき，そのようにして得た知識に基づいて，学生が教員になったときに，授業の中で化学教材を正しく使用できるように，演習および実習を行う。さらに，修得した知識に基づいて，新しい化学教材の探求を行うことも目的とする。	
				化学探求演習Ⅱ	化学探求演習Ⅰに引き続いて，初等および中等教育の化学分野における既存の教材を分析し，その効果や有効性を検証したうえで，教育現場において化学教材を適切に運用できる知識・技能を身に付けることを目標とした演習および実習を行う。初等および中等教育で使用されている化学教材（特に実験教材）の分析・検証をさらに進め，教材に関する知識を深化させて行く。そのような知識に基づいて，学生が教員になったときに，授業の中で化学教材を正しく使用できるように，演習および実習を行い，さらには，修得した知識に基づいて，新しい化学教材の探求を進めて行く。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（理科）	化学ゼミナールⅠ	本演習では，卒業研究の遂行に必要な判断力，理解力，表現力を身に付けるために，個々の研究課題に関連した文献や論文を検索し，精読して，その内容の報告を行い，研究能力の向上を図る。精読して理解した内容をもとに，自らの卒業研究の進展状況の経過発表を行い，理解を深める。各自が精読した論文の発表に必要なプリントを準備する。これをもとに受講者および教員との議論を行う。実験報告も各授業回ごとに行う。また，将来の教員として理科教育の実施に必要な知識や手法を化学の研究を通じて習得する。	
				化学ゼミナールⅡ	本演習では，化学ゼミナールⅠに引き続き，卒業研究の遂行に必要な判断力，理解力，表現力を身に付けるために，個々の研究課題に関連した文献や論文を検索し，精読して，その内容の報告を行い，研究能力の向上を図る。精読して理解した内容を基に，自らの卒業研究の進展状況の経過発表を行う。受講者は各自の卒業研究実験の結果をまとめ，発表し，他の受講者，及び担当教員とディスカッションする。また，実験に必要な文献を購読したり，紹介，輪読を分担して行ったりして，将来の教員として理科教材の開発と実施に必要な知識や手法を化学の研究を通じて習得する。	
				物理化学実験	物理化学に関する基礎的な実験を行い，卒業研究を行うために必要な基礎力を養うとともに，体験的学習を通して観察力，思考力を培う。なお，この実験は物理化学Ａ，物理化学Ｂ，物理化学演習ＡおよびＢと密接な関連を持ち，それらの講義および演習とあわせて，化学の実践には実験と理論の両方が必要であることを体得することも目的とする。具体的な実験テーマとしては，相平衡，反応熱，液体の粘度，反応速度，吸収スペクトル，電気伝導度の内容に関する実験を行う。	
				有機化学実験	現代社会では，有機化学の知識に基づいて合成された医薬品，洗剤，繊維，プラスチック，色素などの有機化合物が私たちの豊かな生活を支えている。本実験では，有機化学における生化学的な実験と医薬品や糖質合成の基礎を修得すること目的とし，有機化合物の取り扱い，合成，分離，精製，確認法，機器分析に関する基本的操作の習得を目標とした体験的授業を行う。具体的な実験テーマとしては，糖質・タンパク質の定性実験，DNAの抽出，解熱鎮痛剤からのサリチル酸の単離とサリチル酸メチルの合成，糖の保護とサリチル酸メチルの核磁気共鳴スペクトル測定，糖のグリコシル化と単糖の核磁気共鳴スペクトル測定，糖の脱保護と核磁気共鳴スペクトル測定の内容に関する実験を行う。	
				生物学基礎演習Ａ	細胞や細胞内小器官について，単細胞生物や動物の組織を例に解説する事によって，生物を細胞や分子レベルで理解する。また，身近なセキツイ動物としてニワトリを取り上げ，ニワトリとヒトの体制を比較しながら，生物学に関する基礎的な知識の定着をはかる。学んだ知識を実践演習する場としてニワトリの解剖を行う。これによって，知識として得た情報を実際の生物で確認し，より理解を深めることができる。さらに，植物に関しても比較的種を同定しやすい樹木を対象にしながら，身近な自然観察を行い，地域の自然への理解を促す。	
				生物学基礎演習Ｂ	ウイルスや細菌，遺伝子組み換えという核酸の関わる生命現象について解説し，生物の根本である遺伝物質についての知識を増やすとともに，遺伝のしくみについても理解を深める。また，遺伝子の違いとともに身近な生物を対象に生物多様性について考える。近年，生物多様性はなぜ重要とされているのか？特に外来種が生物多様性へ与える危機性について理解を深める。さらに，植物を用いた生物多様性や外来種に関する課題研究について考える。これは大学周辺の自然を利用して実際に活動を行う事によって，生物多様性を含めた自然と触れ合い問題意識や今後の課題について考える。	
				生物学演習	生物学演習では一般的な生物学の事象を幅広く理解するとともに，考える能力を養う。主に教科書に記載されているような基礎的な実験について，その意義を理解するとともに詳細な方法や技術も身に付ける。これは，その背景にある科学的な意義を身をもって理解することにつながると同時に，論理的な思考能力を身に付ける事に繋がる。また，自身で動物や植物，あるは微生物と言った実際の生物を用いた実験を再現し，他者に説明する能力を養う。これによって，生物学における様々な事象の根本を理解することができる。	
				臨海実習	生命誕生の場所である海の生物について，多様性と生活の場での様子を観察する。また，海辺でなければ学べない分類学・生態学的内容について，実物や実験を通して習得する。磯採集による海岸の生物の観察とスケッチを通して，生物の構造を種類ごとに細部まで見定める力を養い，構造と機能の関連性についても推察する。また，夜間のプランクトン・底生生物の採集と分類，顕微鏡を用いた形態観察を行い，食物連鎖を底辺で支える微生物への興味・関心を養う。そのほか，海岸の動植物についての標本の作成し，形態観察による分類を行うと同時に，海の生き物に関する自由研究を行い，海の生物に関する基礎知識を養う。	
				里山体験実験	里山は我々にとって身近な自然環境の一つである。里山が包蔵する多様な生産力の発見を通して，里山の重要性を考える。また，野外での様々な実習体験を通して，自然への興味を深め，探求能力を高める。学外での共同生活を通して大学生活への意欲を高める。フィールドワークを中心に，炭焼き・低温帯林の観察を行う。さらに，農産物を栽培し，実際のDNA解析により複数クローンを抽出，糖度および粘度などの品質比較などを行う。また，森林労働の本質的意義を踏まえ「共生とは何か？」を，個々人が実践を通して考え体得することを目指す。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（理科）	野外生物実習	我々が暮らす日本列島は南北に長く伸びた島弧からなっているため，各地でみられる自然環境は大きく異なる。この授業では，愛知県とは大きく異なった生物の棲む野外実習を通して，我が国に見られる動植物の生態系が如何に多様であるかを理解することを目的とする。また，本実習の運営には可能な限り受講者自身に主体的に携わってもらうことを目指しており，遠隔地において大人数の野外実習を運営することを通して，社会性・協調性を育み，自然観察を目的とした校外学習やイベントを行う上で必要な経験や知識を習得することも目的とする。	
				環境生物学実験	日本列島及び愛知県の生物的自然の特徴や身近な動植物がどのように多様化したのか，について実習や座学を通して学ぶ。特徴的な環境に生育する植物を観察，採集し，標本作成，種同定を行なったり，適応に関わる形質を計測したりすることで，身近な生物多様性を認識し，理解しようとする能力の育成を図る。これにより自然環境保全について適切に判断し行動する力を養うと同時に，生物が環境との関わりの中でどのように生活しているかについて，実際の動植物との関連性を学ぶことによって理解する。	
				細胞生物学実験	私たちの身体を構成する細胞は，組織・器官の役割ごとにたくさんの種類が存在する。その細胞の基本構造は変わらないが，それぞれの特徴があり，機能に応じた形態的特徴がある。本実験では基本的な実験器具の操作方法を学ぶとともに，細胞を構成するタンパク質の解析方法や得られた結果の定量法を習得する。細胞が役割を得る過程を観察することによって動物細胞の基本を学ぶ。また，グループごとに課題を作成し，それを解決することによって細胞についての深い理解を目指す。	
				植物生活環実験	植物の生活環は種子からはじまり種子で終わる。その過程の中で，発芽，栄養成長，生殖成長と切り替わる。各種作物を実際に栽培し，その栽培管理を通し植物栽培の技術を習得するとともに，成長過程で見られる様々な現象を実験観察のもとで体験する。授業は，植物栽培の圃場（観察園）での実験と実験室での実験を交互に行う。圃場での実験は各種作物の栽培のための準備から，播種，定植，栽培管理，結実までを行い，週数の経過に伴って見られる頂芽優性，雌雄性（雄花，雌花），栄養繁殖（挿し木）等の生物現象を体感する。実験室の実験では，雌蕊抽出物への花粉管伸長の影響，子房内の胚珠と花粉管の観察，成長点と細胞分裂，植物ホルモンの影響，遺伝分離について実験する。	
				発生遺伝学実験	この実験では，遺伝学と発生学に関する基礎的な実験を行う。遺伝学の実験では，キイロショウジョウバエを用いた交配実験を行い，基本的な遺伝の法則を実際に観察することによって，遺伝に関する理解を深める。また，発生学の実験では，昆虫の卵形成，精子形成過程の観察，ウニの受精と正常発生過程の観察等を通して，動物が特徴的な形態を形成していく過程を観察し，発生に関する興味・関心や理解を深めることを目標とする。	
				系統進化学実験	高等植物の形や構造を理解し，さらに，分子系統学的実験を行い，種分化を理解させることを目的とする。実験は，植物体から酵素タンパクを抽出し核酸の抽出やDNAの増幅，塩基配列の決定等を行う。以上の実験結果から，植物の多様性を考える。材料は，主にタンポポなどの身近な植物を用いる。現在日本列島には，セイヨウタンポポ，アカミタンポポの，２種のヨーロッパ原産のタンポポ属植物が帰化している。特にセイヨウタンポポの大部分が交雑によって在来種の遺伝的特性を取り込み，スーパー帰化種として在来種の生育地にまで分布を拡大していることが明らかになった。そして分子データに基づく解析を始めた1995年頃はその遺伝的多様性は低かったが，近年の調査では遺伝的多様性が増加しつつある。そこで本実験では，多様性が増加しつつある雑種性帰化タンポポの起源（親子鑑定）を分子データ及びその倍数性から明らかにすることを目的とする。その結果，今まさに起きている種分化の現象が浮かび上がってくると思われる。	
				生物学ゼミナールⅠ	卒業研究に取り組むとき，さまざまな実験，観察を行うほかに，研究に関連した数多くの文献を読むことが必要である。特に卒業論文を書く段階では，関連分野の先人の業績（文献）を理解した上で，自分の研究の意義を明確にする必要がある。この授業では，卒業研究に関連した生物学分野の文献を輪読することにより，専門分野の文献を読んで理解する力を養う。毎時間，卒業研究に関連した総説的な文献の輪読を行い，内容について討論する。	
				生物学ゼミナールⅡ	学生自身が卒業研究を行う上で必要なさまざまな実験手法や観察結果を発表し，議論を行う。関連した数多くの文献を参考にして，学生自身の研究がどのような位置づけであるか理解するとともに，文献調査の結果や自身の実験結果を研究室の学生同士で議論し，研究方法の改善や他の研究との比較検討を行う。担当教員とともに考えた仮説やその検証方法に考えて，課題解決に向けて研究を遂行する。これにより，問題提起や解決能力を養うとともに，コミュニケーション能力や論理的な思考能力を身に付ける。	
				基礎地球科学フィールドワーク	固体地球（地圏），海や河川（水圏），大気（気圏），それに私たちを含む生き物（生物圏）が相互に影響を与えながら変化するという，巨大で複雑な系（地球システム）が機能していることがわかってきた。教育現場でも，地球の理解と私たちが取り組むべき課題の探求が重視されるようになってきた。これからの時代は「地球」が重要なキーワードである。地球の仕組みとその営みを理解するためのファーストステップとして，フィールドワーク（野外調査）によって地形や地質岩石，古生物（化石）などを観察・観測する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（理科）	地球環境科学	地学分野は，自然そのものの「構造」とその「変化」を研究の対象とし，その理解に総合知が要求される点が，他の要素還元的な分野とは異なる。この講義では「地球」と「宇宙」，その「構造と進化」をキーワードに，私たちを取り巻く自然環境の性質と成り立ちについて科学的視点から考え，地球環境に対する理解を深める。	
				地学演習	地学分野においては，現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため，望遠鏡による観測や野外における観察・調査を通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論が重視される。これら地学特有の手法と物理学や化学，生物学の基礎的な知識を演習形式で学ぶ。	
				地質学	古地磁気学とそれに関連した分野について学び，地球科学について理解を深める。古地磁気学は地球科学の重要な分野の一つであり，地球科学の発展に大きく寄与してきた。この講義では，古地磁気学の基礎を深く学び，古地磁気学のいくつかの応用についても理解を深める。	
				固体地球科学Ａ	地球（特に地殻）でどのような現象が起きているのか，また地球がどのように進化してきたのかを探求するためには，その構成物質である岩石についての理解が不可欠である。この講義では，火成岩に関連する基本的な事項の解説を通して，地殻の生成についての理解を深める。	
				固体地球科学Ｂ	地球物理学は，物質としての地球を物理法則に基づいて理解する学問であり，流体系と固体系に大別される。この講義では，測地学や地震学等の固体地球物理学に関する分野の基礎的な考え方，弾性波を用いた地球の内部構造を推定する方法について学ぶ。	
				大気・水圏科学	日本付近を含む中緯度地域における大規模な気象現象は，例えば，温帯低気圧，台風，前線活動などに代表される。この講義では，それらの現象の背景にある熱力学や力学といった物理的原理を，数式による取り扱いを含めて学ぶ。	
				宇宙科学Ａ	人類の宇宙に対する理解は圧倒的な速さで更新され続けており，特に過去数十年で，宇宙が激しい活動現象で満たされていることがわかってきた。この講義では，宇宙における高エネルギー天体物理学とそのメカニズムについて，基礎となる物理過程（力学・統計物理学・熱力学・電磁気学等）や観測手法等も含めて包括的に学習する。	
				宇宙科学Ｂ	この講義では，地球の運動に始まり，太陽系の天体の特徴や構造，恒星の性質，その進化や見え方，そして銀河の構造から宇宙の膨張までを，その理解の基礎に重きを置いて学習する。初歩的な数学と物理を使って，天文学に特有の考え方を丁寧に一つずつ理解する。	
				地学ゼミナールⅠ	地学諸分野の卒業研究を行うためには，「固体地球分野」，「岩石・鉱物分野」，「地質分野」，「大気・海洋分野」，「天文分野」の各分野に特有の方法論を身に付けなければならない。また，各分野には，長い歴史の中で積み上げられ構築されてきた強固な学問的な土台が個々にある。ゼミナールⅠでは，各分野の論文や専門書の輪読，その内容に対する討議を通し，（1）専門的な文献を批判的に読みとる能力を開発し，（2）卒業研究に必要な考え方や実験法の技術を主体的に習得する。	
				地学ゼミナールⅡ	ゼミナールⅡでは，ゼミナールⅠで培った専門分野に対する理解やその分野特有の方法論を土台に，（1）卒業研究のテーマを決定し，（2）その内容の主体的な学習・研究を通して，論理的に考察する力を伸ばす。最終的には，研究で得られた成果を，（3）わかりやすい形でプレゼンテーションできるようになることを目標とする。	
			音楽	声楽実習Ⅰ	声楽Ⅰ・Ⅱを取得した者で，さらに意欲があり，積極的に声楽の学習を希望する者に対し，自らの歌唱技術だけでなく，どのようにして歌唱指導に結び付けていくか，その理論と方法を学び演習を重ねていく。 授業の概要は，ベッリーニ，ドナウディ，ヴェルディなどの作品を取り上げながら，声楽Ⅰ・Ⅱで学んだ知識と技術を更に深めていく。発声法，イタリア語の発音の仕方，演奏解釈を更に深く研究し，個人レッスンの形態で授業を進めていく。授業では個々に歌う形態で進めていくが，お互いに聞きあい，違う視点からも学習を深めていく。	
				ピアノ実習Ⅰ	前半の回では，小学校から中学校の音楽の授業で扱う歌唱教材の伴奏を，さまざま状況を想定しながら演奏できるようにすることを目指す。ピアノの伴奏で音楽を表現できるようになることはもちろんだが，それだけでなく，子どもの状況を想像し，どのような場面においても対応できるような力を身に付けていく。後半の回では，グループでテーマを決めたうえで楽曲を選択し，その演奏法についてグループレッスンの形で進めていく。演奏するだけでなく，子どもに聴いてもらうことを前提とした演奏ができるようになることを目指し，最終発表を行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（音楽）	合奏Ⅱ	授業の目標 　受講者自らが主体となりアンサンブルを創り上げることで，アンサンブルに必要な基礎的な知識と技術を理解する。さらに，将来小学校や中学校でアンサンブルを指導する場面を想定しながら，楽器を媒体とした他者とのコミュニケーション（音楽的な協調・共創・共奏）を，体験を通して理解する。 授業計画の概要 　リコーダー・アンサンブルを行う。学期末へ小学校で「出前コンサート（訪問コンサート）を行い，子供達の前で成果発表する。取り組む課題の曲数は原則３曲以上とする。ソプラノ・リコーダーとアルト・リコーダーは受講者が準備し，テナー・リコーダーとバス・リコーダーは授業者が用意して貸し出す。楽譜は，授業者が用意する。学生に対する評価は，授業への取り組み（30%），曲の個人練習の具合（40%），アンサンブル行為の意欲（合わせようとする態度），周囲へのアドバイスや働き掛け等のアンサンブルへ参加しようとする積極性（30%）を総合して判断する。	
				合唱指導法	小・中学校の音楽の授業で必ず必要になる合唱指導だが，実際に経験した事のある生徒は少ない。この授業では，声の出し方，合唱の作り方，指揮の仕方，指導の仕方を学び，実践を重ねて，現場で臆することなく指導に望めることを目標とする。 授業の概要と形態は，発声の方法やハーモニーの作り方を学び，様々な合唱曲を用いて指導する役と歌う役に分かれて演習する。実際に指導することに慣れることが目標で，前に立って指揮し，指導する時間を多くとり，学生同士で意見を出し合って，合唱を作り上げる楽しみを感じてほしい。	
				声楽実習Ⅱ	明治から昭和の時代に，日本音楽の基盤を作った音楽家達が，文部省唱歌になるような曲を含む作品を作曲する模範とし学んだドイツリートに触れ，音楽の様式を学び，言葉と音楽の結びつきを感じ取れるようになるのを目標とする。 授業の概要と形態はモーツァルト，シューベルト，シューマン，ブラームス等の歌曲を用いて，発声法，ドイツ語の発音の仕方，演奏解釈を学ぶ。個人レッスンの形態で授業を進めていく。授業では個々に歌う形態で進めていくが，グループで同じ曲を勉強するので，お互いに聞きあい，違う視点からも学習を深めていく。	
				歌曲伴奏法概論	授業形態は，伴奏を弾くものが，声楽の演奏者を同伴し，その演奏者の伴奏を弾く形態で行う。授業目標は，小，中学校教育現場での音楽の授業では，歌唱，合唱の授業の占める割合が非常に高い，最近では伴奏のCDもかなり出ているが，子供達のレベルに合わせて，臨機応変に対応するには，やはり先生が弾くことが望ましい。伴奏は演奏において大変重要な役割を果たしている。伴奏の経験を通して，アンサンブルの能力を養い，相手があって自分の音楽が生きることを理解し，又，相手を生かすような音楽表現を学習することを目標とする。授業計画は，３回の授業で１曲を仕上げるように，１回目では，歌唱者の歌を聴きながら伴奏する。２回目は歌唱者に添って，より細かく伴奏する。３回目は仕上げとして，協力して演奏研究する。これを５曲ほど繰り返し行い。その既習曲の中から１曲を試験曲として演奏する。	
				ピアノ実習Ⅱ	中学校・高等学校の生徒に聴かせたいピアノ曲の小品をとりあげる。生徒の状況を想定して選曲を行い，その楽曲について分析すること，作曲家について，その時代について，楽曲の背景についても知識を深めることを通して読譜力の向上を目指す。また，これらの知識を演奏に活かす技術を身に付け，演奏能力の向上を目指す。選曲，分析などは個人で進めた上で，グループでの意見交換を行う，また，演奏を聴きあいそれに対する意見交換を行うというように，個々での取り組みとグループ活動を組み合わせる形で進める。様々な解釈や意見に触れることで，個々の理解がより深まることを目指す。また，知識だけでなく，それぞれの楽曲の表現に必要な技術についても表現の幅を広げることを目指す。	
				器楽演奏法研究Ⅰ	ピアノ，または管打楽器を用いた表現豊かな演奏を目指し，そのための基礎的な知識や演奏技法の確認とともに，表現に必要な新たな知識と技術を身に付けることを目標とする。初回にそれぞれが取り組む楽曲を決め，個人レッスンの形で進めることとするが，お互いに聴きあい，意見交換する場も設け，演奏するだけでなく演奏を聴いて言葉にして伝えることを通して，それぞれの演奏を振り返ることができるようにする。学期末に実技試験を行い，通常の授業への取り組みと合わせて総合的に判断し評価する。	
				器楽演奏法研究Ⅱ	ピアノ，または管打楽器を用いたより豊かな表現を目指し，そのために必要な知識と技術を身に付けることを目標とする。初回にそれぞれが取り組む楽曲と個々の課題を決め，個人レッスンの形で進めることとするが，お互いに聴きあい，評価しあう場も設け，演奏するだけでなく演奏を聴いて言葉にして伝えることを通して，それぞれの演奏を振り返ることができるようにする。学期末に実技試験を行い，通常の授業への取り組みと合わせて総合的に判断し評価する。	
				器楽演奏法研究Ⅲ	ピアノ，または管打楽器を用いた音楽の深い表現力を獲得するために，作品の音楽的な構造や背景を理解し，表現に活かす技術と方法を身に付けることを目指す。初回の授業でそれぞれが取り組む楽曲と課題を決め，楽曲についての個人レッスンだけでなく，楽曲の背景について調べることや楽曲分析も行いながら進めていく。分析や背景については，ここで取り組む楽曲だけでなく，他の人が取り組んでいる楽曲についても知ることで，さらに幅広い知識を獲得できるようにする。学期末に実技試験を行い，通常の授業への取り組みと合わせて総合的に判断し評価する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（音楽）	器楽演奏法研究Ⅳ	ピアノ，または管打楽器を用いた演奏表現において，より深い作品理解を進め，演奏の完成度を高めていくことを目指す。初回の授業でそれぞれが取り組む楽曲と課題を決め，楽曲についての個人レッスンを中心に進めていく。器楽演奏法研究Ⅲに引き続き，楽曲をより深くとらえ，それを表現に活かすための方法の模索すること，さらには，その方法や作品理解について意見交換をすることを通して音楽表現を深めていく。学期末に実技試験を行い，通常の授業への取り組みと合わせて総合的に判断し評価する。	
				声楽演奏法研究Ⅰ	１，２年生で学んだことを元に，母国語である日本歌曲を学ぶ。言葉が聞き手に中身のある詩として伝わるような歌い方，無理のない発声を学びながら，演奏研究する。自らの歌唱技術だけでなく，どのようにして歌唱指導に結び付けていくか，その理論と方法を学び演習を重ねていく。授業の概要と形態は，山田耕作，中田喜直の曲を中心に，小中学校の教科書で取り上げられている曲も含めつつ，今まで学んだ知識と技術を更に深めていく。授業では個々に歌う形態で進めていくが，お互いに聞きあい，違う視点からも学習を深めていく。	
				声楽演奏法研究Ⅱ	今までの授業を通じて学んだことを元にして，オペラのアリアから，各々の声に合った曲目を勉強・演習する。授業の概要と形態は，モーツァルトのオペラを中心にモーツァルト以前の古典のオペラ作品を研究，演習することにより，今までの声楽曲では学べなかった，戯曲と音楽の繋がりを学ぶ。戯曲のあるものを学ぶ事で，小中学校の学芸会や音楽劇での指導法につながる方法を体感する事ができる。またそれとともに，更なる自然な発声法や，音楽的な表現を追求していく。授業では個々に歌う形態で進めていくが，お互いに聞きあい，違う視点からも学習を深めていく。	
				声楽演奏法研究Ⅲ	今まで学んできたことを元に，卒業研究に向けて，生徒各々の研究課題にしたい分野・作曲家を絞っていく。その中で歌唱技術・楽曲分析・表現方法を磨いていくだけではなく，どのようにして実際に小・中学校で歌唱指導に結び付けていくか，その方法を深く考える。授業の概要と形態は，今まで学んできたイタリア，ドイツ，日本の声楽歌曲又はオペラアリアの中から，各々の声に合うもの，卒業研究したい物を，テーマを決めて掘り下げていく。基本的には個人レッスンの形で進めていく。	
				声楽演奏法研究Ⅳ	声楽演奏法研究Ⅲで絞って学んできたものを，卒業研究に向けて仕上げていく。作曲家の時代背景から，その作品の成り立ち，楽曲分析，詩の分析をまとめ，それが机上の上だけではなく，実際に演奏に反映できるように今まで学んできた発声法，表現方法と結びつくように演習する。授業の概要と形態は，基本的には個人レッスンの形で進めていく。また研究対象も，イタリア，ドイツ，日本の声楽歌曲，またはオペラアリアだが，それ以外の物でも本人の意思で研究対象とする。	
				作曲法研究Ⅰ	感覚と理論を併用しながら創作のおもしろさを追求する姿勢を養うことで，個々の音楽性の深化を図ることが本授業のねらいである。初段階として，感覚に任せた自由な発想による作曲をまず試みた上で，かたちとなった自作の楽曲がいかに理論に裏打ちされたものであり，いかに技法と呼べるものを無意識に活用しているかを分析。これを経て，次の段階として表現意図を技術へと応用する「意識された表現」を目指した作曲を目指していく。	
				作曲法研究Ⅱ	教科書に掲載されている教材を作曲学的な見地から分析し，本来，歌唱や合奏，鑑賞を目的とした教材の中に創作面で活かせるところがないかを探る。実技面では，与えられた音群を用い，なるだけ調性に拠らない作風を意識した作曲を試みる。自らの欲する響きや方法論を探ることに多くの時間を割くことになるが，創作活動は知的作業であるという原点を思い起こしながら，思考を費やした末の成果を実現させることが本授業の目標である。	
				作曲法研究Ⅲ	教科書に掲載されている創作に係る紙面に着目し，実際に試作してみる。また，教科書に掲載されているフォークソングやポップスなどのポピュラー音楽に着目し，戦後の歌謡史の流れをふまえつつ，作曲技法の変遷について講義する。実技面では，ソナタ形式についての理解を深めるため，同形式に関する基礎知識を得た上で既成曲の鑑賞・分析を行い，主題動機の特徴，展開方法について学んだのを経て，実際に作曲に臨み，試演まで行う。	
				作曲法研究Ⅳ	学習発表会を想定したお芝居に付ける音楽および効果音の作曲や，架空の校歌づくりおよびブラスアレンジの実習を行い，そのかたわらで卒業作品の制作と副論文を意識した研究を個々に進めていくことになる。これまで履修した内容をふまえ，作曲研究を総括したひとつの成果たる集大成を各人が実現させることを目的としており，基本として毎回が作案添削の連続となる。個々に応じたガイドを施しながら，各自の卒業作品の完成を目指す。	
			図画工作・美術	絵画実技Ⅱ	作例を元に心象風景について自己の考えを整理して，油彩で「自分の心の世界」を表現する。空想的な絵画作品を楽しく上手に描くための，また上手く教えるための技術や知識を深めていくこと，油彩画の材料に習熟することが本授業のねらいである。写実的な表現を基盤として，形の大小の転換，配置の転換（デペイズマン）の他，組合せ方の非日常化がおもしろい表現を生むことを知り，アイディアスケッチから下絵作り，本画制作過程と完成に至るまで，プロセス毎に意見交換会を行い，相互に学習の振り返りと今後の展開を確認できるようにする。また作品評価のためのルーブリック（観点表）を用いて，目標を持って授業に取り組むようにする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（図画工作・美術）	絵画制作Ⅰ	人物クロッキー，人物デッサンの他，写真やモデルを使用して油彩肖像画を描く。絵画は「静物画」「風景画」「人物画」と大別されることが多いが，人物画はごまかしが利きにくいことから最も難しい領域とも言われる。また，頭像，胸像，半身像，全身像によって背景に対する工夫が異なるので，絵に込める作者の考えや思いについても検討を要する。授業では，作例を見ながら，作者の心情や，どのような工夫がされているのか等について意見交換を行い，学習者各自の考えをまとめられるようにする。作品発表の講評会では，ルーブリック（観点表）を用いて自己採点も行えるようにする。	
				風景写生	自然豊かな豊田市羽布町（旧東加茂郡下山村）で合宿しながら集中講義形式で風景画の制作について学習する。多くの学校現場では写生大会が行われるほか，風景は親しみやすく一般的にもよく扱われる絵の題材であるとともに，人物画の背景としての役割も果たすため，本授業では油絵具を用いて風景画の描き方と教え方について学ぶ。油彩画による風景画は通常「プリマ描き」とか「アラプリマ」と呼ばれる一気に描き上げる手法で行われることが多いため，描こうとする風景から自身の表現の狙い（主題，構図，制作のプロセス，配色，筆勢など）をすばやく定める瞬発力と，２日以上に及ぶ制作への持久力を養う。現地では講評会を行うほか，大学内外での展示会を通して，額装，搬入と搬出，展示の方法等についても学習する。	
				彫刻実技Ⅱ	木彫によって抽象彫刻の制作を行う。はじめに，ワークシートや塑造用粘土を用いてマケット制作に取り組み，大まかなイメージを具体的に可視化する。マケットを基に，クスなどの木材を加工することによって抽象彫刻の制作を行う。最後に各自が造形した作品について講評会を行う。これら彫造による抽象彫刻作品の制作を通して，抽象形態による表現の可能性，実材の素材感，加工方法，彫造特有の造形的なアプローチなどについて研究する。	
				彫刻制作Ⅰ	自然物の形態を観察するとともに，模刻を行うことにより，造形とイメージとの関連性について理解を深める。その後，イメージを具体化する造形表現力の向上のため，提示されたイメージを立体化する制作活動に取り組む。まとめとして，立体及び彫刻領域の教育実践について模擬授業を展開する。これら，塑造用粘土による制作および模擬授業を展開することを通して，自然の造形美，量塊による造形思考の展開と技法に関して教育実践的研究を行う。	
				デザイン実技Ⅱ	教育をする立場・デザイン活動をする立場に共通する「考える力」について考えていく。デザイン活動はFeelingではなく，Thinkingを基底とする。学校教育での「美術・図工」の授業意義がそうであるように，考える力の要素である「市場観察力」「課題発見力」「編集する力」をつけるための基礎的なトレーニングをする。また課題に対しての学生によるプレゼンテーションとして，PC系の基本ソフトの習得も行う。	
				デザイン制作Ⅰ	教育分野でのデザイン思考の一環で，未来の先生へ向けての教養として「情報を読み解く力」を体得する内容である。授業としては，課題テーマに対してのデザイン活動（取材，執筆，編集，写真撮影，伝達）が主体となる。具体的には，広告づくり，試作品づくり，新聞づくりなどとして収斂され，問題の発見・解決・発想をデザインにつなげる思考の体得を目指す。また，これまでに制作してきた作品を見つめ直す「ポートフォリオ」づくりに取り組む。	
				絵画制作Ⅱ	絵画制作の主題と，制作で使用する画材について各自が選択し，表現する上で必要となる道具や材料の扱い方，技法等について課題意識を持ちながら小作品を半期間で２点制作する。授業者及び，学生相互の意見交換も取り入れながら学習活動を展開する。タブロー画（下絵的な制作としてではなく，完成画としての油彩画，水彩画，日本画など）について，絵画の構成要素（構図，形，配色，量感，質感など）の観点から，《知識/理解》を獲得し，思い通りに描ける《技能/表現》する力を身に付け，また指導法についても修得することが授業のねらいである。作品発表の講評会では，ルーブリック（観点表）を用いて自己採点も行えるようにする。	
				絵画演習	演習形式での絵画制作活動を通し，自己表現というものについて掘り下げる。絵画制作にはさまざまな葛藤がともなう。具体的には「何を描いたら良いのか」「どう描いたら良いのか」であろうが，もう少し詳細に言えば，自分とは何なのかという哲学的な問いかけや，モチーフや主題の選択の難しさ，配色，形，構図，量感，質感，重量感，画肌等に対する疑問であろう。こうした課題に自ら解決しようとする強い意欲と関心を持って制作することが大切だと考える。能動的かつ主体的な学びであるとともに，協働的な学びとなるよう，発表や意見交換を軸に，自他ともに絵画について学び合う授業となることを期待する。	
				絵画研究	絵画及び，絵画教育に関するさまざまな疑問や課題について，解決策として新たな知見を見いだすことができるように研究することが授業のねらいである。研究テーマの具体としては，主題やモチーフ，色彩，形，構図，（画肌・光沢・乾燥等に関わる）材料や用具，このほか絵画指導法なども挙げられよう。こうした絵画制作上の疑問や課題に対して，文献や先行研究事例の読解，調査や実験等を通して解決していく。学習者各自が興味や関心を持って，各自の課題に取り組むことが何より大切であるが，毎回の授業において，各自の研究の進行具合についてプレゼンテーション発表を行い，次のステップについての意見交換を行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（図画工作・美術）	彫刻制作Ⅱ	受講者各自が選択した自然物を，表現主題に基づいて造形する。はじめに，対象とする自然物や表現主題について，ワークシートの記入やアイディアスケッチを行い，制作の方向性を定める。制作では塑造用粘土を用いて，等身大の人体程度の大きさの造形に取り組む。最後に，各自の造形表現について講評会を実施する。これら表現主題に基づいた具象彫刻の制作を通して，自然の造形美，量塊による造形思考の展開と技法に関して高度の研究を行う。	
				彫刻演習	主として日本，ヨーロッパ，アメリカにおける彫刻表現や彫刻教育について調査分析するとともに，明確な表現主題に基づいた彫刻制作に取り組む。調査分析においては，先行研究を収集し，調査内容を決定し，実地調査などにより分析を行う。制作においては，自らが定めた表現主題に基づき，表現する造形物のアイディアスケッチやマケット制作を行い，塑造用粘土などで小品の制作を行う。本授業を通して，彫刻表現や彫刻教育などに関する多様な見方や考え方を身に付けるための高度の研究を行う。	
				彫刻研究	現代までの様々な彫刻表現や彫刻教育から課題を設定し，理論と実践の両側面から考察する。課題設定においては，彫刻の表現様式の変遷について調査分析を行い，その中で選択した表現様式の特性や意義に関して論証すべき課題を設定する。考察においては，課題を解決に導くための理論研究や実践研究を行い，理論と実践の両側面から考察する。本授業を通して，彫刻表現や彫刻教育などに関する客観的判断力を身に付けるための高度の研究を行う。	
				デザイン制作Ⅱ	デザインを広義に捉え，「デザイン的思考」とは何かを実践を通して学ぶ。 例えば「目の前にある石ころと枝の使い道を可能な限りたくさん考えてみる」というようなことを通して，ものごとの解決や新しい発想，頭の中になかった考え方を導き出す訓練をし，表面的なデザインではなく，社会全体における様々な場面で「デザイン的思考」を発揮できる力を身に付ける。 その上で改めて狭義のデザインにも着眼し，具体的なプロダクトやヴィジュアルといったデザインに向き合い，同じ考え方で解を導くトレーニングをする。	
				デザイン演習	これまで学んできた様々なデザイン，デザイン思考を元に，各々がテーマを設定して探求し，リサーチ，実験，開発を横断的に実践する。 デザインは常に時代や社会の変化とともにその求められることや使命が変化し，また環境やテクノロジーの進化と共に素材や実装も進化していく。例えばユニバーサルデザインという言葉が一時期先行したが，その理論は実践しようとすると矛盾を生じることが多々あった。それに代わって近年動き出したインクルーシブデザインという思想は，より具体的且つ流動性を持っており，新たな方法論になりつつある。そういった変化，進化に対して常にアンテナを張り，自分たちに何が求められ，デザインの力を通して何ができるかを考える力を身に付けていく。	
				デザイン研究	デザイン演習で探求していったテーマに対して，より具体的な提案をしていく。 例えば文字をそのテーマに掲げた場合，歴史的背景を踏まえながら，今の時代に今自分たちが提案するに相応しいコンセプトとは何か？を問い，その上で様々な要素を掛け算しながら，オリジナリティや美といった最終局面を迎えた時，デザインの最後（良し悪し）を決めるのが「整える」ことに集約されていることを学ぶ。 これはまるで座禅や瞑想のようでもあり，その対象が二次元的であったり三次元的であったりということや，身体に対する物理的なスケールなどは一切関係なく，デザインの思想があらゆることに通じることを学ぶことでもある。	
				工芸実技Ⅱ	機能性・実用性・美術的な美しさを融合させた工作物，並びにそれらのものを制作することである工作・工芸に関する内容を扱う。現在では，機能性や実用性を有さない彫刻やオブジェのように独創的なものや自己表現に基づく作品も数多く含まれるように，その領域の幅は広がってきているが，本授業では，木を素材とした作品制作や教材に関する内容を中心に扱う。その内容は，木材加工に必要な道具や木材加工用機械に関する知識や道具の使用法，それらを扱うときに必要な安全面の配慮や環境づくり，素材である木に関する知識等である。特に，木材加工の実習を通して，基本的な木材加工を体験するとともに，将来自ら木を素材とする教材の開発を行うことができるための知識や技術の習得を目指す。	
				工芸制作Ⅰ	本授業では，前半と後半とで２つの課題を行う。 課題①　ロストワックスよる円心鋳造技法を用いて真鍮のキーホルダーを制作する。原型制作・湯道付け・埋没・鋳込み・仕上げ等を体験し鋳造技法を学ぶ。 課題②　「動物」をテーマとしてピンバッジを制作する。各自がデザインした動物を糸鋸で切り取りテクスチャーを施し，ネジをロウ付けしてバッジにする。 鋳造作品制作と彫金作品制作を学びながら，金属の特性や魅力を学ぶとともに，制作した作品を身に付け使用することで工芸の楽しさを知る。 講評会では自分の制作した作品をプレゼンし質疑応答を行う。	
				工芸制作Ⅱ	この授業では，ガラスを加工するための技術とデザインの関係について学び，ガラス加工の可能性について理解する事を目標とする。 過去に学んだガラス工芸技法を発展させて照明器具を制作し，ガラスによる透過・反射・屈折といった光の効果について学び，それらを効果的に使った照明のデザインについて考える。また，ガラス工芸の技術力の向上を目指し，独自の解釈を用いて発展・展開させた作品制作について探求し，ガラスによる造形制作の可能性を追求する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（図画工作・美術）	工芸演習	これまでに学んだ鋳金・彫金技法のどちらかを選択し，卒業制作に繋がる技法で金工作品を制作する。それぞれの金工作品制作を続けながら愛知県の伝統産業である七宝技法も学ぶ。工芸作品制作には多くの工程を必要とし，どれを省いても良い作品を作ることはできないことを体験する。また，７月末には卒業制作の図案を発表し，制作工程や，制作日程を決定する。選択した技法や金属材料に関連した卒業論文を書くために定期的に検討を重ねる。	
				工芸研究	本授業では，ガラス工芸の歴史やガラス素材の組成等について学び，制作に必要な素材に対する知識を修得し，表現の可能性を広げる事を目標とする。 ガラス工芸史では，古代から現代に至るガラス工芸技法の発展について調べ，ガラスの科学では，ガラスの科学的特性や，色の発色などにおける素材の組成について調べる。ガラス工芸における様々な調査から課題を設定し，理論と実践の両側面から考察することにより，工芸の特性，意味と意義について研究する。	
				美術史実習	この授業では，日本における建築・工芸・彫刻・絵画が統合的な空間の中でどのように表現され受容されてきたかを美術史的に理解させるために，奈良・京都のフィールドを用いて学生による実習を行う。 実習は大きく二つの活動からなる。その第１は，奈良・京都に実在する建築・工芸・彫刻・絵画に通底する問題を学生自身に発見させ，深くリサーチさせる活動である。この活動においては，教師は学生の検討内容と検討方法に適宜助言を与える。その第２は，先に発見・検討させた問題について，奈良・京都の実地において学生自身に確認させる活動である。この活動においては，教師は学生の観察活動に随伴し，観察の観点について助言を行う。	
				美術史演習Ⅰ	この授業では，美術史という学問の枠組みについて理解させるために，教員による講義と学生による演習とを交互に実施する。講義においては，美術史に関して，美術・美術教育のさまざまな分野に関する専門的な内容を今後学んでゆく学生にとって有益な，基本的な概念や理念に関するレクチャーを行う。演習においては，講義で提示した概念や理念に関連した課題を学生に課し，実践的な活動を通じて，その理解と活用に到達できるよう指導する。 いずれの実施形式においてもパソコンとプロジェクターを用いた，視覚体験型の授業を展開する。	
				美術史演習Ⅱ	この授業では，美術史という学問を深めるうえで必要な知識と技術を習得させるために，教員による講義と学生による演習とを交互に実施する。講義においては，美術史に関して，研究活動を今後行う学生にとって有益な，専門的な概念や理念に関するレクチャーを行う。演習においては，講義で提示した概念や理念に関連した課題を学生に課し，実践的な活動を通じて，その理解と活用に到達できるよう指導する。 いずれの実施形式においてもパソコンとプロジェクターを用いた，視覚体験型の授業を展開する。	
				美術史演習Ⅲ	この授業では，学生の研究発表と教員の講義を交互におこない，発表について討論して検討することにより，学生が卒論作成に向けた研究を進めることをうながす。具体的には，学生がどのようにして自分のテーマを見つけ，調査して情報を集め，考察を深め，説得力のあるプレゼンテーションをするかという方法を身に付けさせる。 パソコンとプロジェクターを用いたプレゼンテーションの仕方や，配付資料の作り方についても指導する。 研究のテーマは学生によって違うが，他の学生の発表の長所にお互いに気づき学ぶことができるように，個別の指導と合わせて，この授業で美術史を専攻する複数の学生を合わせた指導も行う。	
				美術教育演習Ⅰ	受講生の研究課題を考慮するが，美術教育に関わる教育プログラムの開発・実施・評価を行う。受講者は，小グループをつくり，そのグループ内で美術教育に関わる教育プログラムの立案から評価までを行う。各回の授業時には，各グループのプログラム実施にむけた研究や課題を発表する。プログラムの実施に関しては，本授業時間外で行うことを前提とする。本授業を通して，美術教育に関わる基礎的な理論と方法を理解こと，基礎的な理論と方法を活用し，課題を自ら設定し，その解決へ論理的に思考すること，美術教育に関わる現代的課題に関心をもち，その解決に向けて取り組むこと，課題に対して理論と実践との往還をする上で，基礎的な表現技能を身に付けることを目指す。	
				美術教育演習Ⅱ	「美術教育演習Ⅰ」と連動した授業である。受講生の研究課題を考慮するが，美術教育に関わる教育プログラムの開発・実施・評価を行う。受講者は，小グループをつくり，そのグループ内で美術教育に関わる教育プログラムの立案から評価までを行う。各回の授業時には，各グループのプログラム実施にむけた研究や課題を発表する。プログラムの実施に関しては，本授業時間外で行うことを前提とする。本授業を通して，美術教育に関わる基礎的な理論と方法を理解こと，基礎的な理論と方法を活用し，課題を自ら設定し，その解決へ論理的に思考すること，美術教育に関わる現代的課題に関心をもち，その解決に向けて取り組むこと，課題に対して理論と実践との往還をする上で，基礎的な表現技能を身に付けることを目指す。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（図画工作・美術）	美術教育演習Ⅲ	美術教育に関わる研究課題を受講者が設定し，その課題の探求を行う。課題に関する先行研究の収集・整理・分析を行い，授業期間内で解決できる具体的な問題を設定し，計画的な研究姿勢を身に付ける。そして，研究課題に応じて，造形的な表現活動や授業実践を行い。また，各受講者が設定した研究課題の基礎となる理論を理解するために，美術教育に関わる基礎文献を講読し，理論と実践を往還した学びを行っていく。本授業を通して，美術教育に関わる基礎的な理論と方法を理解こと，基礎的な理論と方法を活用し，課題を自ら設定し解決へ向けて論理的に思考することを身に付ける。	
			保健体育	コーチ学	コーチは初心者から競技者レベルまで多種多様な目的を持った広範な人々を対象にコーチングすることが求められる。本授業ではスポーツにおけるコーチの役割について理解すること，また，コーチングの基礎を学習することで，実践に向けて自らの考えを持ち発信できることを到達目標とする。内容については，哲学，計画，組織化，経営，評価というコーチングサイクルについて，日本スポーツ協会公認スポーツ指導者養成講習会で取り扱われている内容について取り上げ基礎知識の習得を行いながら，学生各々の考えを互いに発表し，共有させることを繰り返すことで，これからの望ましいコーチングについて考えていく。	
				運動処方論	運動指導の際には，運動者に応じた運動強度等の適切な条件が重要である。本授業では，目的に応じた運動の内容を決定するためのプロセスに関して理解を深めることを目標としている。目的に応じた適切な運動の内容は，運動種目，強度，持続時間及び頻度により決定されるため，事例を参考にそれらを決定するためのプロセスについて講義を行う。具体的には，運動の効果について，運動処方の意義について，運動処方に基本的条件について，体力検査について，体力検査結果の評価について，運動負荷検査について，運動の種類について，運動の強度について，運動量について，運動頻度について，実際に行われている事例について講義を行う。	
				スポーツ医学	スポーツは身体へ良い影響を与えるとともに場合によっては怪我や疾病等の弊害をもたらすこともある。多くのヒトはスポーツがいかなる刺激を身体に与え，さらに身体がいかなる適応変化を起こすなどを知らずに運動を指導，実践している場合が多いのが現状である。運動により得られる効果と危険性を理解し，運動指導を行うことができる知識を習得することを目標とする。 授業は，スポーツと内科的領域および整形外科領域，体重管理，スポーツと各年齢段階および性差，スポーツと医学関連手技などにより展開する。	
				球技Ｃ	実技を中心に行い，テニス，ソフトボールの技能を向上させる。また，自分たちで試合を行ったり，運営できるように実習させる。さらに，学校現場を想定し，実践課題を踏まえながら多角的に授業を進める。具体的にはテニス，ソフトボールの技能に習熟する。テニス，ソフトボールの指導法を習得する。 （オムニバス方式／全15回） （139 頼住 一昭・222 長 かおり／１回）（共同） ガイダンス （139 頼住 一昭／７回） ソフトボール （222 長 かおり／７回） テニス	オムニバス方式・共同（一部）
				野外運動	自然とのかかわりの深い野外での活動を通して，野外活動の特性や安全管理についての知識や技能を高め，自己保全能力と生きる力の育成，野外での生活や教育に関する基礎的指導法を習得する。また，克服的活動や集団的活動を通じて自己を見つめ直し，人間的交流を深め，コミュニケーション能力を育成，仲間との交流，協力関係を築くことを目的とする。 授業は，野外活動に関する社会的特性と安全管理，自然環境への理解と活動計画等の基礎的知識の習得と自然環境における宿泊実習により実施する。	
				体育原論	「体育って何だろう」 「スポーツって何だろう」この問いは，受講者全員に向けられたものである。講義は，この問いの探求を中心に行い，将来，体育教師を目指すものが，「体育」や「スポーツ」について，それらを概念として理解すること，また，学校体育をめぐる問題について多角的な視点から捉え考えることができることを目標とする。授業は，「スポーツとは何か」「体育とは何か」に対する受講者の見方を確認した上で，これまでの体育論者の「体育」や「スポーツ」の思想を概観する。その後，体育の概念について，カテゴリーを用いた考え方を紹介・講義していく。その他，スポーツ倫理についても講義する。	
				体育心理学	体育心理学とは，体育やスポーツに関する人間の心理的現象を扱う学問である。この科目では，体育心理学の基礎，体育の実施と健康の関係，運動技能の獲得に関わる運動学習，課外活動で取り組むスポーツにおける心理的現象など，広範囲に学習し，体育心理学の視点から教育現場を理解する素地をつくる。授業が終了するときに，履修学生は以下のことができるようになる。① 各テーマにおける体育心理学の理論，多様な心理的現象を説明できる。② 体育心理学の理論と知識による体育・スポーツ（課外活動）の教育・指導現場への応用を考えることができる。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（保健体育）	生涯スポーツ論	現代社会において，スポーツは様々な機能を持っている。生き甲斐，コミュニケーションづくり，健康や体力の増進など，その役割は大きい。本授業では，生涯スポーツの意義や重要性について，生涯スポーツのシステム・スポーツイベントの計画と運営・地域スポーツの振興・生涯スポーツ施設の整備と運営など，今日の社会が抱えているさまざまな問題との関わりから講義する。その上で，ニュースポーツの実践を通して，生涯スポーツの指導方法について理解する。	
				スポーツ技術・戦術論	本授業は，教員養成課程の学生が教職に就き体育授業で子どもたちの運動についての評価を行うときに必要であると考えられる，一般的な運動の技術論及び戦術論について学習する。運動学及び体育科教育学の橋渡しとなる各運動領域における一般妥当性となる技術及び戦術について理解することを目的に，アスリートから体育授業における子どもの運動までを取り扱いながら，その運動の技術及び戦術について科学的に観察できるようにする。内容は，スポーツにおける技術及び戦術の基礎理論の習得を行いながら，各運動領域における具体的運動に対する技術力及び戦術力の評価を学生同士で意見交換を行いながら深めていく。	
				健康教育論	生涯を通して健康に生きるためには，良い健康状態を維持・増進し，悪くなれば回復させるために管理する必要がある。健康管理のためには，それぞれのライフステージにおける健康課題を理解し，国レベルの政策，個人レベルの行動として改善に取り組まなければならない。 授業は，１）現代の健康課題と健康管理についての考え方や方法を知る，２）近年の重要課題の１つである精神保健について学ぶ，３）救急法についての知識を学び，実技実習によって技術を習得する，の３つの側面から具体的・主体的に詳しく学ぶことをねらう。	
				発育発達	学校教員およびスポーツ指導者の資質として身に付けなければならない発育発達期の特性を知り，年齢段階に応じた身体諸機能の変化が子どもの心身に与える影響，そして，それに適したスポーツ活動（運動）方法，指導法について学ぶ。 授業は，各組織・形態の発育，筋の発育と筋力，パワーについて発達，発育期の身体的特徴と怪我との関係，中高年の体力の衰えなどについて展開する。	
				保健体育学研究Ⅰ	卒業研究に向けて，テーマの絞り込みを図り，あわせて，専門文献の読解力を深めながら，関心を高めることを狙いとする。受講者が取り上げたいテーマについて報告し，その内容について討議していく。卒業論文作成のための準備段階として，それらに関する内外の文献購読，ディスカッション等を通して基礎的な知識・技術を身に付けることを目標とする。教員，受講生によるプレゼンテーション，ディスカッションにより授業進行を行い，詳細については受講生により目標を設定し，概要，進行状況を決定する。	
				保健体育学研究Ⅱ	卒業研究に向けて，Ⅰに引き続いてテーマの絞り込みを図りながら内容について検討していく。あわせて，専門文献の読解力を高めることを狙いとする。受講者が取り上げたいテーマについて報告し，その内容について討議していく。進度によって，関連する文献および論文の批判的検討を実施する。卒業研究のテーマに応じて論文作成に必要とされる知識を得るため，論文抄読，演習，ディスカッション等で行う。卒業論文の作成や卒業論文発表に必要とされるスキルを身に付ける。	
			ものづくり・技術	木材加工演習	１）基本的な木材加工具，加工機械の安全で効率的な使用方法を身に付ける。２）基本的な木材加工プロセスを理解するとともに，適切な工具や機械を選択し，発生する課題を把握し，適切に対応することができる。 ３）木材加工の製作題材における評価の視点を理解し，自身の学習成果物を適切に評価することができる。木材の性質理解のための簡単な実験や中学校等で実践されている製作題材をとりあげ，それらの体験的，実践的活動を中心に講義を進める。手加工から機械加工の基礎にいたる基礎的な理論，基礎的な技術を修得するとともに，木材加工指導に必要な説明方法や支援方法を学び，教員としての実践力向上を図る。	
				木材加工実習Ⅲ	中学校技術・家庭科技術分野の教育を行うに当たり，指導者の素養として必要となる加工技術及び，設計・製作能力を高めることを目指し，機械加工も含む合理的な製作手法について木材加工実習を通して学ばせる。具体的には，木材加工実習Ⅰ・Ⅱで学んだ木材加工に関する技術を踏まえつつ，実用的な加工技能を習得させる。また，木製家具の製作実習を通して，合目的な考案・設計や合理的な加工工程の必要性，各種の工具・加工機械の合理的な活用方法を身に付けさせる。	
				金属加工法Ⅱ	現代を未来の考古学者は鉄器時代に含めるだろう。鉄は現代文明を支える殆ど全ての装置，機械，構造物の最も重要な素材となっている。また近代以降は，工作機械を体表とする機械類の発達により，安価に精度の高い物を簡単に作ることができるようになり，生産力は劇的に向上した。授業では，基本的な機械工作法について学ぶとともに社会にどのような役割を担っているかを考える。	
				金属加工法Ⅲ	ものづくり・技術・工業教育において必要となる，金属材料を中心とした工業材料の特性，加工法について理解する。教科書を中心に，各種材料の特性について講義し，連続する金属加工実習Ⅰの内容と合わせて，製図や実習を含めて行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（ものづくり・技術）	機械工学概論	科学技術の人類にもたらした成果が「機械文明」と総称されているように，機械は人間の生活の発展と深く関わりあっており，古い歴史を持っている。われわれ人間は，エネルギー確保や環境保全等さまざまな問題を抱えつつも，文明社会を逆戻りすることなく，科学の時代，高度機械化の時代に生きており，機械なしでは私生活も社会生活も考えられない状況にある。現代社会には，宇宙ロケット，航空機，鉄道車両，自動車，工作機械などから家庭用電気機械にいたるまで，さまざまな機械類が存在するが，これらのほとんどのものが機械工学と深く結びついている。本講義では，機械にどのような技術が生かされているのかということについて解説し，機械工学と人間生活との関わりについて考えていく。	
				機械学	機械や構造物を構成する各部材は，例外なくなんらかの力を受けている。したがって，機械や構造物を設計・製作する際には，各部材に生ずる変形および抵抗力などに関する知識を持ち，各部材に求められる剛さと強さが確保されるように，材料および寸法を決めなければならない。もし外力に対する抵抗力に不十分な部分があれば機械はその部分から破損するであろうし，また反対に過大に失すれば不必要に多くの材料を用いることになって不経済であるだけでなく機械等の性能を低下させてしまう。本授業では，外力によって生ずる金属材料の変形および抵抗力を求めるための理論的な取り扱い方を修得することを目標とする。	
				機械要素力学	機械の多くは，ねじ歯車，軸受けなど，さまざまな機械要素で構成されている。従って，機械の構造を理解するためには，機械要素に関する広範な知識と各機械要素について理解しておく必要がある。また，機械の部品に掛かる力や速度，加速度を理解するためには，質点の力学，質点系の力学，剛体の力学，運動方程式の導出，その解法，エネルギーの概念，衝突現象，剛体の運動学と動力学について理解する必要がある。本授業では，ねじや歯車，軸受けなどの基本的な機械要素を紹介し，機械要素の基礎知識を習得すると共に，機械の力学モデルの導出と解法を理解する事を目的としている。	
				電子工学Ⅰ	電気を学ぶ者としては，電気・電子素子に使用されている材料の性質についての知識が必要である。電気・電子材料とは，物質を電気的な性質によって分類し，それぞれの性質や特徴について学ぶ学問である。電気・電子材料を機能の面から分類し（導体，絶縁体，磁性体，半導体），そのような性質の現れる理由について理解し，個々の材料の性質から，それぞれの材料の長所，短所，用途について学ぶことを目標とする。	
				電子工学Ⅱ	半導体は，現在のエレクトロニクスを理解するうえで避けて通れない分野である。本来なら固体電子論からエネルギー・バンドに対する理解を深めた上で，半導体のいろんな性質を学ぶべきであるが，ここでは半導体を用いた素子の動作原理，特にトランジスタの基礎であるＰＮ接合による整流特性を中心に学び，他の半導体素子の理解に役立てることを目標とする。	
				電気Ⅲ	電磁気学を基礎とするエネルギー変換には，機械エネルギーから電気エネルギーに変換する発電機，また逆に電気エネルギーから機械エネルギーに変換する電動機（モーター）がある。また電気の形を変換する変圧器，整流器，サイリスタ等がある。これらの電気機器の基礎とその特性・応用について理解を深めることを目標とする。簡単な機器（例えば，模型用モータ）を分解・組み立てることにより，原理・構造を考え，プレゼンを通して議論し理解を深めていく。 １)エネルギー変換と電気形態変換について２)フレミングの法則３)直流器の原理４)直流モーターの特性５)直流モーターの速度制御６)変圧器の原理７)変圧器の特性８)等価回路と効率９)交流モーターの原理10)整流回路の基礎，半端整流，全波整流の基礎的な回路11)平滑回路の特性12)サイリスタの基礎，動作原理と特性，電圧制御	
				農学	農業の基本としての農業技術について，基礎的かつ実践的な知識を中心として理解を深める。栽培に必要な，植物の生理・生態学的知識を学ぶとともに，各作物の栽培上の特徴を知る。そして，具体的なそれぞれの作物の栽培技術について学習する。さらに，社会的視点からの農業と農業技術やエネルギー変換技術との関連についても論ずる。あわせて，農業技術にかかわる教材も紹介する。	
				栽培演習Ⅰ	作物の栽培・農業生産は，工業生産とは異なり，作物の生物としての複雑な性質とそれが生育 する環境条件・生態系によって大きな影響を受ける。従って，栽培を行う際には，作物と環境 条件との関連性についての法則的な理解が必要になる。この目標を実現するために，作物の栽培に関連した実験を行い，作物の栽培技術と研究的な視点について，理解を深める。具体的には，栽培する作物の特性を調べて確認し，それに基づいて実験計画を立てて，実施する。栽培期間中の管理を行い，収量などのデータを収集し，自分なりに整理・分析してレポートを作成し内容を確認する。	
				栽培演習Ⅱ	栽培演習Ⅰの延長上で，得られた栽培実験データについて，研究的手法を確認しながら，整理・分析し，考察を検討しあうことを通じて，作物の環境条件に対する反応の法則性を確認し，適切な栽培管理の方法について検討する。あわせて，研究的な方法と考え方を修得し，文献を参考にしながら，論文形式でレポートを作成して，論文の書き方を確認する。	
				情報Ⅱ	コンピュータネットワークに関する原理的な理解と，問題解決の手順についての考え方と，コンピュータを用いた問題解決の方法やアルゴリズムついて扱う。コンピュータネットワークについては，有線・無線を問わず，また建物内・公共によっても多様な技術の組み合わせによって成り立っている。また，「インターネット」はコンピュータネットワークの一形態にすぎないことも理解する。問題解決とアルゴリズムについては，問題解決の手順と，実際にコンピュータを用いて取り組むにあたり，考え方を，いかにアルゴリズムとして表現するかを考える。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（ものづくり・技術）	プログラミング実習Ⅱ	古典制御理論に基づく制御と論理による制御を組み合わせた，計測・制御のプログラムに必要な知識を理解し，このプログラムを設計し作成する方法を身に付ける。PID制御の考え方を実習しながら段階的に理解する。また，自動搬送車を題材に，センサを用いてコースに沿ってものを運ぶ課題を解決するプログラム作成の方法を理解する。主な内容:プログラムによる教材を用いた計測と制御の方法，On-Off制御によるライントレース，比例制御によるライントレース，線形システムの概要，積分制御を加えたライントレース，微分制御を加えたライントレース，自動搬送車モデル，交差点での衝突を避けるアルゴリズム，状態遷移するプログラム：ライントレースと交差点処理の分離，正面衝突と追突を防ぐアルゴリズム，状態遷移と条件判定の分離，荷物の積み込みと荷降ろしに対応するアルゴリズム，路面状況に応じた走行	
				ソフトウェアⅠ	コンピュータを用いた作業のなかで，統計など大量のデータを処理することの重要性はいささかも衰えていない。大学生活の中でも調査やデータを集計する機会は数多く存在し，卒業後に業務のなかでこれを行うことも頻繁にあろう。本演習では，前半ではExcelを用いて，後半では統計処理ソフトウェア「R」を利用したデータの集計と基本統計処理を実際に行いながら，統計学の基礎や正しい調査の方法などについて実践的に理解することを目標とする。まず，「なぜ人はデータを集めるか？」ということを考える。続いて，集めたデータをどう活用するか，資料に基づいて理解する。現実問題の理解ができるよう，実際のデータを用いてExcelによる基本統計処理を実践して，操作法を習得する。	
				ソフトウェアⅡ	統計分析の代表的方法について理解し，課題解決に活用する方法を身に付ける。統計ソフトウェアにより可視化を用いたデータ分析を行う手順を具体的事例により身に付ける。主な内容:１)統計ソフトウェアのインストールと設定 ２)データの読み込みと統計ソフトェアの基本操作 ３)データの並べ替えと抽出 ４)表を加工する関数 ５)クロス集計表・分散・相関係数 ６)統計的仮説検定とは ７)有意水準とp値の意味 ８)統計的仮説検定の例と報告の方法 ９)データ可視化とは 10)データ可視化の様々な方法 11)分散分析とは 12)２要因分散分析の方法 13)探索的データ分析とは	
				職業指導概論	学校から職業社会への移行を支援する教育の理論と実践について，主に高校卒業後に就職する若者を念頭に検討する。また，職業的･社会的自立を目指してキャリア発達を促進するキャリア教育全体を視野に入れつつも，「職業」あるいは「労働」にある程度焦点化して，「キャリア教育としての職業指導」の在り方について考察する。 また工業高校をはじめとする専門高校において，どのような進路指導・職業指導・キャリア教育を進めていくことが必要なのか，そのあり方についても理解を深めていく。	
			家庭	家庭経営演習	家庭経営は家族関係学，家庭経済学，生活経営学などの諸学問を基礎に，家庭生活，消費生活，労働，福祉など，生活の諸領域を幅広く対象にする。この授業の目的は，家庭経営にかかわる現代的課題に即し，文献講読，調査などを通して，家庭経営の内容及び探求方法を学ぶことである。グループによる探究活動の報告およびディスカッションの形で授業を行う。家庭経営にかかわる現代的課題のテーマを設定し，テーマにかかわる文献講読を通してグループごとに探求課題を設定し，課題にふさわしい方法で調査を実施，結果を分析し，報告会において結果の共有とディスカッションを行う。	
				食物学実験	まず最初に実験を始めるにあたって，実験で使用する器具や機器の名称と用途及び実験ノートの書き方について説明する。授業の前半では食品成分の定量に主眼を置き，比色分析と滴定（酸化還元と中和）を中心に，食品分析で用いられている基本的な実験手法について習得する。同時に，得られたデータの処理方法についても学ぶ。そして後半では，身近にある実際の食品をいくつか取り上げ，その製造工程においてどのような食品成分間反応が利用されているかについて，実験を通して体験する。	
				生活機器	現代社会において豊かで有意義な生活をするためには，科学技術に関わる基礎的な知識を習得する必要がある。本授業では，日常生活に欠かせない家庭電気・機械・情報機器に注目し，これらに関する基礎的な理論，事象について学習し，具体的な生活機器について動作原理，構造等についての知識を習得する。具体的には，まず家庭における生活機器の利用について述べ，次に機械の基礎知識(機械要素・家庭機器材料)について論じる。次に，家庭のエネルギーの基礎知識（燃料・電源・熱源・光源・動力）と電気機器について論ずる。さらに，家庭電化製品ならびに情報機器の動作原理・構造について論じる。より理解を深めるため簡単な実験・実習も行う。	
				生活設計	この授業は，生涯の生活設計を行ううえで必要な様々な基礎知識を身に付け，自分自身の生活を主体的にプランニングできる能力を養うことを目標とする。そのため，授業の前半では，預貯金，住宅ローン，公的年金や所得税等に関する基礎知識について，実際に計算しながら学び，後半では，これらの基礎知識を活用しながら，主体的に具体的なライフプランを考えていく。またライフプランの発表会を通し，自分のライフプランだけでなく，様々なプランについても理解する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（家庭）	消費者論	消費は，生活者自らが日々行っているとても身近な経済活動である。情報通信技術の発達や，グローバル化など急激に変化する社会経済の状況の中で，消費をめぐる課題は大きく変化している。この授業では，現代の消費者や消費行動に関する様々な課題を取り上げ，文献講読等を通し，問題意識を持って主体的に深く学んでいくことで，自立した消費者として，また消費者市民としての意思決定能力や実践能力を高めることを目指すものである。	
				保育学演習	この授業では，中学校，高等学校家庭科免許科目である「保育学」の内容にかかわる現代的課題を探求的に学ぶことで，家庭科の「保育」の内容に対する理論的，実践的かつ総合的な理解を得ることを目標にする。保育学Ⅰで学んだ現代社会において子どもが育つこと，子どもを育てることにかかわる諸課題をふまえた上で，受講生の関心を取り入れて「保育学」にかかわる現代的課題を設定し，文献講読，調査等の活動とディスカッションを通した探求的，発展的な学習を行う。	
				消費生活演習Ⅰ	近年の急激な経済社会状況の変化を背景として，私たちの消費生活はこれまでとは大きく変化している。この授業は，現代の消費生活にかかる課題について，その実態を把握するための基礎的能力を身に付けることを目標としている。授業では，消費生活に関するテーマをいくつか設定し，これに関する基礎的な学術論文を取り上げ，受講者による文献講読，これに関する報告及びディスカッションという形式で進めていく。また，小・中・高等学校の家庭科の学び中でこれらの消費生活の課題をどのように学んでいくのかについても考える。	
				消費生活演習Ⅱ	近年の急激な経済社会状況の変化を背景として，私たちの消費生活はこれまでとは大きく変化している。この授業は，消費生活演習Ⅰで学んだことを基礎として，現代の消費生活にかかる課題について，その実態をより詳細に把握し，さらにはその解決策についても検討することを目標としている。授業では，消費生活に関するテーマをいくつか設定し，これに関する基礎的な資料を収集や調査を行い，これに関する報告及びディスカッションという形式で進めていく。また，小・中・高等学校の家庭科の学び中でこれらの消費生活の課題をどのように学んでいくのかについてもより具体的に考える。	
				生活経営研究Ⅰ	人の生活の営みについて，社会と関わりから探求していく。この授業は，現代の生活経営にかかる課題について，その実態を把握するための基礎的能力を身に付けることを目標としている。授業では，生活経営に関するテーマをいくつか設定し，これに関する基礎的な学術論文を取り上げ，受講者による文献講読，これに関する報告及びディスカッションという形式で進めていく。また，小・中・高等学校の家庭科の学び中でこれらの生活経営の課題をどのように学んでいくのかについても考える。	
				生活経営研究Ⅱ	人の生活の営みについて，社会との関わりから探求していく。この授業は，生活経営演習Ⅰで学んだことを基礎として，現代の生活経営にかかる課題について，その実態をより詳細に把握し，さらにはその解決策についても検討することを目標としている。授業では，生活経営に関するテーマをいくつか設定し，これに関する基礎的な資料を収集や調査を行い，これに関する報告及びディスカッションという形式で進めていく。また，小・中・高等学校の家庭科の学び中で生活経営の課題をどのように学んでいくのかについてもより具体的に考える。	
				「家族と社会」演習Ⅰ	家庭科の一領域である家族について，社会と関連づけた科学的認識を持つことを目標にする発展的演習科目である。家族は社会を構成する一要素であり，職業労働，福祉，消費社会など，社会の諸側面と密接な関わりを持っている。また，グローバル化が進む現代にあって，世界社会の文脈において理解する必要がある。この授業では，「家族と社会」にかかわる諸問題を捉える視角を，基礎的文献講読を通して得ることを目的にする。	
				「家族と社会」演習Ⅱ	家庭科の一領域である家族について，社会と関連づけた科学的認識を得た上で，より深く探究するための研究方法を学ぶことを目標にする発展的演習科目である。家族は社会を構成する一要素であり，職業労働，福祉，消費社会など，社会の諸側面と密接な関わりを持っている。また，グローバル化が進む現代にあって，世界社会の文脈において理解する必要がある。この授業では，「家族と社会」にかかわる諸問題を研究する方法として，社会調査，資料研究などの方法を，受講生の関心に応じたテーマに即して学ぶ。	
				家庭科内容発展研究Ⅰ	家庭科は，家族・家庭生活，衣食住の生活，消費・環境など，多岐にわたる内容から構成されている。それらの内容の基礎となる学問もまた，自然科学，社会科学，教育科学，複合領域分野など多岐にわたり，家庭科の授業を構想するためには，生活の諸現象の学際的，総合的理解と現代社会を生きる子どもの生活と発達への理解が必要である。この授業では，主として小・中学校における家庭科の教材研究・教材開発を想定した現代的生活諸課題の発展的探究を通して，学際的，総合的な視点にたって家庭科の内容を捉える力をつけることを目標とする。	
				家庭科内容発展研究Ⅱ	家庭科は，家族・家庭生活，衣食住の生活，消費・環境など，多岐にわたる内容から構成されている。それらの内容の基礎となる学問もまた，自然科学，社会科学，教育科学，複合領域分野など多岐にわたり，家庭科の授業を構想するためには，生活の諸現象の学際的，総合的理解と現代社会を生きる子ども・青少年の生活と発達への理解が必要である。この授業では，主として高等学校における家庭科の教材研究・教材開発を想定した現代的生活諸課題の発展的探究を通して，学際的，総合的な視点にたって家庭科の内容を捉える力をつけることを目標とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（家庭）	被服学Ⅱ	被服を構成する上で重要な原型・型紙について学ぶ。各自デザインした衣装の型紙を作り，できるだけシームラインを省き単純化していくことを試みる。同時に曲線を取り入れて体型にフィットすることも考慮する。１/２の型紙を用いて雛型のボディに試着できる衣装を製作し，他との比較を試みる。	
				被服実習Ⅱ	互いに採寸して被服の計測法の基礎を学び，被服実習Ⅰで学んだ実習の基礎を踏まえ，簡単な婦人服や紳士服など大きいサイズの作品を製作できるようにする。ブラウス，シャツ，スカート，ワンピース等。また被服実習Ⅰの復習として１回目と２回目は新しいことは行わず，小物の縫製を行う。	
				被服製作実践演習Ⅰ	被服材料と被服構成は切れない関係である。どちらも理解して初めて縫製の基礎となる。被服材料を理解する上で，様々な素材を扱い，縫製することを学ぶ。薄い布，厚い布，伸びる素材，アイロンをかけることができない素材，滑る素材，皮革などを用い衣服と小物製作をする。	
				被服製作実践演習Ⅱ	被服学Ⅱで作成した型紙を用い，等身大の作品に仕立てる。雛型の衣装を基に，型紙の作成が妥当だったかを検証し，どこをどう直せば好みの着心地，見栄えを得られるのか製作しながら検討，更なる高みを目指す。他との比較も随時行う。全ての結果を得てから，納得のいく型紙作りを行い，時間が許す限り作品製作も試みる。	
				被服学研究Ⅰ	3年間を通して学んだ被服の知識を生かし，被服学の論文を読み解き，実験計画ができるようにする。被服学の小さな実験を計画した後，実際に実験を試み，結果をまとめ，考察する。その結果を念頭にさらに効果的な実験を計画，実施，まとめ，考察する。	
				被服学研究Ⅱ	求めたい被服学実験の結果を得るために論文を選び，読み解き，効果を推測できるようにする。被服学研究Ⅰで得た実験計画の基礎を用い，効果的な被服学実験を計画し，まとめることができるようにする。論文の構成を学び，実験結果を自ら論文にまとめる能力を高める。	
				食物学Ⅲ	特定保健用食品や機能性表示食品のパッケージには，お腹の調子を整える，血圧が高めの方に適する，食後の血糖値の上昇を緩やかにする，などといった様々な健康の維持・増進に関わる機能性が表示されている。そして，その機能性は，各食品に含まれる機能性成分によるものである。この授業では，それら機能性成分の物性及びその機能発現のメカニズムについて，食品学の観点から解説する。また，表示されている機能性の科学的根拠についても考察を加える。	
				食品学演習Ⅰ	食品分析では，ピペット，フラスコ，ビーカー，電子天秤，pHメーター，遠心分離機，分光光度計などをはじめとして，多種多様な器具・機器が使用されている。この授業ではまず，各器具の特徴や使用方法，また，機器についてはその構成・仕様や分析原理を解説し，実際の食品分析において目的に応じた最適な器具・機器の選択でき，それを正しい方法で利用できるようになることを目指す。そして後半では，五大栄養素を中心に簡単な食品分析実験を各自で計画し，その中で適切な器具・機器の選択ができるのかを体験を通して確認していく。	
				食品学演習Ⅱ	食品の成分分析では，成分に応じて様々な分析手法が確立されている。この授業では，五大栄養素であるたんぱく質，脂質，炭水化物，ビタミン及び無機質について，汎用されている定性及び定量のための分析法をいくつか取り上げ，各分析法が栄養成分のどのような物性を利用し，また，どのような原理に基づいて行われているかについて解説する。また，分析結果の解析方法についても言及する。そして，食品分析の基礎となる理論や考え方及び技術を修得し，食品の栄養素に対する理解を深めることを目的とする。	
				食品学研究Ⅰ	食品学や栄養学における最新の知見は，学術論文によって公表されることが多い。この授業では，食品や栄養に関わる領域の文献から興味あるものを選択して熟読し，内容を正しく把握できるようになることを目指す。さらにはそれを自分の中で整理してまとめ，他の人にわかりやすく説明できるようにする。また，可能であれば分献に記載された実験方法を自分自身で再現し，文献データを検証してみる。さらには，文献から得られた知見を今後の自身の研究に役立てていけるようにしていく。	
				食品学研究Ⅱ	研究成果の発信方法には，論文によるものと口頭発表によるものがある。この授業では，食品学領域における論文の書き方とプレゼンテーションの方法について学ぶ。論文の書き方ではワードを利用し，文章の作り方や論文としての体裁の整え方について習得する。また，実験データ等は表やグラフにまとめる必要があるので，エクセルを利用して表やグラフの作成方法についても学ぶ。また，口頭発表では，パワーポイントを利用した効果的なプレゼンテーションの方法について学ぶ。	
				調理実習Ⅱ	本授業では主体的に食生活を営むために，主に①安全で衛生的な食材・調理用具の取扱い，②食品の調理特性，③食事計画と献立作成，④日本の食文化の継承に関する高度な知識や技能技術を習得し，生活に役立つ実践力をさらに高めることを狙いとする。近年，増加している食物アレルギー児童に対応した調理（卵・乳・小麦除去食），災害時に適する大量調理等さまざまな環境に適切に，迅速に対応できるよう多様な調理方法について検討し，学校教育に役立つ力を養う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（家庭）	調理学演習Ⅰ	本授業では，食品の調理特性や栄養素に関する知識を深めるため，愛知県産食材（米粉や野菜）や増粘多糖類を用いてその種類とその特性について簡単な実験を行い，その結果について科学的視点から考察する。加熱，加圧，撹拌などによってどのような科学変化が起きているか観察力を養うとともに，食品の栄養素を効率よく摂取するための調理方法についても検討し，小中高等学校の家庭科の調理実習，学校給食等にも役立つ知識を習得する。また，地域の食文化について文献講読によって調査し，伝統料理の特徴について整理し考察する。	
				調理学演習Ⅱ	本授業では調理学演習Ⅰの内容を発展させ，食品の調理特性や栄養素，地域の食文化とその特徴についてさらに深めることを目的とする。アクティブ・ラーニングによりテーマを受講者自身が自由に選択し，食品の調理加工上，どのような科学変化が生じているかを実験機器を用いて観察したり，どのような社会的背景から食文化の継承がなされてきたかを文献講読によって調査し，さまざまな視点から考察する。我われの身近な食品の調理加工において様々な現象が生じていることをよく理解し，食品の品質管理上の留意点についての知識を習得したり，先人の知恵や自然の恩恵によって現代の食生活が継続されていることを深く理解する。	
				調理学研究Ⅰ	食品の調理特性や栄養素の理解を目的として，文献講読をはじめ食物を取り扱った実験や調査を主体的に進めて行く。愛知県産食材の特性（テクスチャー，熱量，色調など）について実験機器を用いてデータを収集し解析する。また，食文化について生活科学や家政学の視点から探求し，理論的に考察する。その成果について，現代社会で豊かな食生活を送るために，また家庭科や調理実習にどのように役立てていくか様々な意見を提案したり，受講者同士で議論し合う。	
				調理学研究Ⅱ	調理学研究Ⅰの学びを生かして，さらに高度な内容に発展させるため，様々な実験機器（テクスチャー測定，熱測定，色調測定など）を用いて食品の調理特性を科学的に明らかにしたり，古い書物を用いて愛知県の食文化について探求したりする。食物学に関する様々な諸問題（食環境，食物アレルギー等）に対する解決策についても議論し，食生活や家庭科（調理実習）にどのように役立てていくかを考える。取り組んだ研究内容については文章化し，パワーポイントで発表する。	
				生活環境論	本授業では生活や環境に関する諸問題（地球温暖化，環境汚染，高齢社会など）が私たちの衣食住にどのような影響を与えているか，その特徴と課題を深く理解し，家庭科が社会に果たす役割について総合的な視点から考察を深めていく。前半は資料を用いて現状理解のために課題を一部紹介し，後半は受講者自身がテーマを設定し，アクティブ・ラーニングによって学びを深め，解決策について授業内で発表したり意見交換をする。発表時はパワーポイントを用いる。	
				家庭科授業演習Ⅰ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げるとともに，小学校家庭科の授業について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけ，総合的・理論的・実践的に実践を検討することを目標とします。	
				家庭科授業演習Ⅱ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げるとともに，中学校・高等学校の家庭科の授業について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけ，総合的・理論的・実践的に実践を検討することを目標とします。	
				家庭科実践研究Ⅰ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げるとともに，中学校家庭科の諸実践について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけ，総合的・理論的・実践的に実践を検討することを目標とします。	
				家庭科実践研究Ⅱ	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げるとともに，高等学校家庭科の諸実践について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題に結びつけ，総合的・理論的・実践的に実践を検討することを目標とします。	
			英語	英語史Ⅱ	英語史Ⅰの内容を踏まえて，より発展的なレベルで英語の歴史を振り返り，現代英語の理解を深める。特に以下の二点を目標とする。 （1）英語がどのようにして現在のような姿になったのかを，特にいくつかの文法的発達に着目して学ぶ。（2）世界最大の英語辞書であるOxford English Dictionaryを使えるようにする。 以上の目的のもと，前半では，doと仮定法の発達を，それに関わる様々な事象（語彙拡散，韻律，英米差，文法化など）にも目を向けながら辿る。後半では，受動態，進行形など，他のいくつかの文法事項の発達を見て，最後にOxford English Dictionary の使い方を学び，各自のテーマで調査した結果をまとめる。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（英語）	英語学演習Ⅱ	本授業では，英文法を多角的な視点から考察・理解する手がかりとして，以下のような項目について演習を行う。 （1）句構造とXバー理論 （2）述語を中心とした文の組み立て （3）格と語順 （4）名詞句と指示について （5）変換と変換に課せられる制約 （6）発音されない諸要素の性質について その中で，定形節と不定詞節，第五文型と小節など，学校英文法と密接に関連するトピックの他，発音される要素と発音されない要素とを包括的に扱う原理など，より広い視野で学校英文法を捉える観点も紹介し，英文法教育を発展的に推進しうる素地を養う。	
				英語文学講義Ⅰ	ロマン派を中心に主だった英語詩を読み，その歴史的・文化的コンテクストを踏まえたうえで，作品のテーマ，詩の韻律(meterとrhymeおよびalliteration)，言葉の技法等について学ぶ。具体的には，マザーグース，ワーズワース，ブレイク，キーツ，バーンズ，ポー，ディキンソン，エミリー・ブロンテ，テニソン，クリスティーナ・ロゼッティ，ロレンス等の代表的な作品を扱う。言葉の技法としては，直喩と隠喩，提喩，誇張法やアイロニー等について学ぶ。	
				オーラルコミュニケーションⅡ	This course focuses upon developing the English oral presentation and debating skills of students. Students will learn how to construct argument that is supported by factual evidence, and how to deliver it logically to an audience. Moreover, they will then learn how to refute and deliver counter-arguments. Students will face off in final debates with opponents. このコースは，学生の英語の口頭発表とディベートスキルの開発に焦点を当てています。学生は，事実に基づいた証拠に裏付けられた議論を構築する方法と，それを聴衆に論理的に伝える方法を学びます。さらに，彼らは反論に反論し，配信する方法を学びます。学生は，相手との最終的なディベートで対決します。	
				英語学講義Ⅱ	最近の英語学の成果を活かして英語（言語）に対する理解を深めるとともに，指導の質を上げ，指導の引き出しを増やすことを目指す。具体的には，（1）表現の「英語らしさ」とはどのようなものなのか，（2）日本人学習者の誤りの背景にはどのような背景（原因）があるのか，（3）一見丸暗記するしかない文法規則の背後にどのような合理性があるのか，（4）英語に限らず，日常使う言語にはどのような性質があるのか，といったことなど，幅広く英語（言語）に関する知見を身に付ける。	
				英語学講義Ⅲ	学校英文法で今なお影響力を持つ「文型」という考え方について，以下のような視点から考察する。 （1）5文型と7文型 （2）述語と文型 （3）深層的意味関係と文型 （4）なぜ少数の文型に収束するのか （5）文型と複文 （6）文型と叙述 その中で受講者は，多様な意味的関係が少数の表層的形式に収められる仕組みについて考察する。このような，文法的概念を批判的に検討する訓練を通して，発展的に英文法教育を推進しうる素地を養う。	
				英語学特殊講義	本授業では英文法を多角的な視点から考察・理解する手がかりとして，以下のような項目について講義を行う。 （1）語彙範疇と文の組み立て （2）機能範疇と文の組み立て （3）最小句構造 （4）ことばの線条性と階層性 （5）素性に基づく考え方 （6）派生の経済性 その中で，内容語と機能語の区別，語彙と構文，語順といった学校英文法と密接に関連するトピックの他，文を構成する究極的要素やまた文の派生を司る抽象的な原理など，より広い視野で学校英文法を捉える視点も紹介し，英文法教育を発展的に推進しうる素地を養う。	
				英語学演習Ⅲ	自身の関心のある分野・領域について，概説書や入門的内容の論文を毎回一つ取り上げ，関連の基礎知識を身に付ける。また，どのようなテーマの研究であっても必要なOxford English Dictionaryや各種大規模コーパス（BNC， COHA， COCAなど），テキスト処理ソフト（AntConcなど）等の調査ツールを実際に扱って初歩的な調査（小中学校で学ぶ語法・文法の実状の調査）を行い，その利用法を身に付ける。一連の学習過程において，単に専門知識を身に付け，深めるだけでなく，論理的に自身の考えを展開し，説明する能力を高めることも目標とする。	
				英語学演習Ⅳ	英語を教える上で，ことばとしての英語の本質を理解することは必須である。本授業では創造的な言語使用を背後で支える仕組みとしての「ことば」の特質について，以下のような観点から考察する。 （1）動物の「ことば」とヒトのことばはどのように違うのか （2）有限手段の無限使用 （3）ことばと進化 その中で，自分たちが日常的に用いていることばに対する根源的な興味を喚起し，より広い視野において英語教育を考えるための素地を養う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（英語）	英語学演習Ⅴ	英語学演習Ⅲで設定・追及したテーマに関する考察を深めるとともに，それに基づく独自の研究を行い，発表する。その過程において，，自身の研究に活かすべく，受講者が関心を持つ英語学に関わる諸領域（歴史言語学，認知言語学，語用論，社会言語学など）に関する論文等を読み，自分の研究に適した方法論や関連知識を学ぶ。一連の学習過程において，単に専門知識を身に付け，深めるだけでなく，論理的に自身の考えを展開し，説明する能力を高めることも目標とする。	
				英語文学演習Ⅲ	英語の詩や小説の一部または全体を暗唱し，それを声と身体（顔の表情やジェスチャー等）を使って表現する。具体的には以下のプロセスで行う。 （１） 課題となる詩や小説の一節を精読し内容や背景を理解する。 （２） 音読と暗唱を行い，気持ちを込めて再現できるようにする。 （３） 身体表現を加味して課題の作品を演劇的に表現する。 （４） 個人あるいは数人のグループで課題の作品を発表する。 以上のプロセスを通して，文学作品のもつ表現の可能性を知ると同時に，英語の発音や発声を練習し，声と身体による表現力の向上を目指す。	
				英語文学演習Ⅳ	本演習は，19世紀から20世紀のイギリス小説をテクストに，小説読解の技術を養うだけでなく，論理的に自身の主張を展開する能力を高めることを目的とする。テクストの精読を通した「文学性」への気づきの感覚を養うとともに，各自の興味・関心に沿った指定テクストに関する先行研究等を読み，方法論や関連知識を学ぶ。また，先行研究を鵜呑みにするのではなく，複数の先行研究を突き合わせて批評的に捉える態度の素地を養うことを目指す。	
				ライティングⅡ	In this course, the aim is to develop the students' academic writing skills so as to equip them with the necessary levels of expertise needed for the writing of their graduation theses. At the same time, there is an equal emphasis on academic research skills, such as constructing and administering surveys and interviews, and developing their observational techniques. Students are expected to collect and analyze data and then construct coherent analytical expositions in order to develop strong written argumentative skills. 本授業では専門的な論文を作成するために必要なアカデミックライティングの技能を養成すると同時に，アカデミックリサーチの技能を養う。受講者はデータを収集・分析し，説得力のある議論を文章として展開する力を身に付ける。	
				異文化講義Ⅰ	Cultural Identity, Diversity and Convergence In this introductory course, students will investigate the concept of 'culture', differentiate between surface and hidden culture, and investigate their own cultural identity, its origins and facets in regard to the individual and the society. Students will work individually, as well as in expert-groups to investigate much of the content of this course and also then present it to their peer group. 文化的アイデンティティー，多様性と共通性：この授業では文化の概念について考察する。受講生は表層的および深層的文化とを峻別し，自身の文化的アイデンティティーやその起源，また個人・社会における文化的諸相について検討する。個別的活動の他，グループ活動やプレゼンテーションを含む。	
				異文化講義Ⅱ	Language and Culture in Contact In this course, students will investigate how language interacts with or is drawn from a culture's beliefs, rituals, practices, and behaviors. A society's oral traditions, folk tales, classic works of literature, musical compositions, for example, reflect its cultural beliefs and practices. Students will work individually, as well as in expert-groups to investigate much of the content of this course and also then present it to their peer group. 言語と文化：この授業では言語と文化的信念や儀式，慣習や行動との関係について考察する。個別的活動の他，グループ活動やプレゼンテーションを含む。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（義務教育専攻科目）	（英語）	異文化講義Ⅲ	Culture and Education in Contexts In this course, students will investigate cultural convergence and diversity in regard to education. Educational systems developed from cultural beliefs and practices, and from parallel or diverse philosophical bases. Different civilizations contributed aspects of their cultural (Mesopotamian, Greek, Roman, Chinese, etc.) and philosophical (Aristotlean, Confucian, etc.) traditions to the advancement of knowledge and shaped the educational systems that developed within their geographical, economic and political spheres of influence. Cultures confer or deny education based on gender, religious, ethnic or social background. Students will work individually, as well as in expert-groups to investigate much of the content of this course and also then present it to their peer group. 文化と教育：この授業では，文化的共通性と多様性について，教育の観点から考察する。個別的活動の他，グループ活動やプレゼンテーションを含む。	
				英語教育演習Ⅰ	授業の目標は，英語教育に用いられる，中学校・高等学校外国語で扱う教材作成・評価の基本的な方法を学び，授業で活用できる視点を持つことである。授業内容の項目として，学習者の特性，教材研究，英語教育の諸課題を取り挙げる。さらに教材分析として教材の簡略化，多様な教材のあり方を分析し，これらの教材に適した設問作成を行えるようにする。	
				英語教育演習Ⅱ	本授業の目標は，心理学の文献，特に教師として身に付けておくべき心理学の知識を扱った英語文献を読むことにより，（１）心理学の理論的理解を深め，（２）それらの理論を言語教育への実践・研究に応用する力を養うことにある。本授業では，各回，あるテーマに沿った文献の輪読を行い，そしてその内容を受けて，受講者同士で言語教育への応用方法について議論を行う。最終的には内容理解だけでなく，英語で論文を書くための指導も行う。	
				英語教育演習Ⅲ	本授業では，言語教育におけるテスト理論についての英語文献を読み，（１）テスト理論の知識を身に付け，（２）テスト作成を行い，そして（３）より良いテストに向けてのテスト結果分析を行う。毎回，受講者が各テーマについての発表を行い，その内容を受けて議論を行う。テスト理論においては，統計的知識が必要となるため，適宜，言語テストに関わる統計を扱い，またコンピューターを用いてのテスト分析の実習も行う。	
				英語教育演習Ⅳ	本授業は，卒論に向けての準備段階となるように，言語教育における研究手法を扱う。本授業では，（１）研究実施の手順を理解し，（２）様々な研究手法を身に付け，（３）研究論文を英語で書くことができるようになることを目指す。研究手法には数多くの方法があるが，特に言語教育で有益となる統計手法，面接法，また参与観察法などの方法を中心に扱い，適宜，コンピューターを用いてデータ分析の実習も行う。最終的には，ミニ卒論のようなレポートを作成する。	
				英語教育実践	授業の目的は，近隣の小学校・中学校，高等学校の英語授業にて授業観察及び授業補助を行いながら，学校現場で授業を体験的に学ぶことである。愛知教育大学と協定を結ぶ市町村の協力の下で，英語授業を生徒の視点及び授業者の視点の両面から多角的に授業を捉える。理論と実践の往還を通して，児童及び生徒のつまずきの補助を行うことで，多様な習熟度に対応した英語授業づくり及び実践者となることが期待できる。	
		高等学校教育専攻科目	国語・書道	国語学講義ＡⅠ	日本語の歴史は，文献に記される言語の観察に基づき，さまざまな手続きを経て記述される。実際の資料における使用状況にも触れながら，古代～現代の日本語の移り変わりについて，音声音韻・表記・文法・語彙・文体などの諸観点から説明し，古代から現代へという大きな歴史はどの点にどのような変化が実際に起こり，またなぜそうなったのかということについて講ずる。それらの検討を通じて，言語の歴史を学ぶことの意味理解を図る。	隔年
				国語学演習ＢⅠ	パソコンを用いた言語研究の基本的な方法に習熟することを目標とする。資料としては，古代～現代の電子テキストを中心に取り上げる。コーパスを用いて実際に調査研究を行い，各資料において，どのように言語を用いているのか，いくつかの資料を比較するとそこにはどのような変化が想定されるのかなど，小規模な言語研究を各自で行ってみる。授業後半期には，それを取りまとめて発表し合うことにより，わかりやすく他者に伝える技術を身に付ける。	隔年
				国文学講義ＡⅡ	伊勢物語を相補論的につなぎ読んでいく講義。テクスト論的視座からの読みがどういうものか，理解できるようにする。内容については，第５回までは伊勢物語をつなぎ読む前の概説で，つなぎ読みが適している理由を説明する。その際，現在通説とされることもある三段階成立論への批判，および，最新の注釈書である二書への批判を，併せて行う。そして，第６回以降でつなぎ読みを具体的に示していくが，つなぎ方が一通りとは限らないことも説明する。なお，講師自作のネット上コンテンツを大いに活用する点は，本講義の特長である。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（国語・書道）	中国思想史	中国の思想史についての基本的な知識を習得する。諸子百家を中心に，宋代までの重要な思想文献を題材として，政治・言語・人間観などいくつかのテーマを通時的な軸として設定し，原文のテキストを読みながら，中国思想の全体を概観する。古典を読むことの楽しみと難しさを体感し，中国の思想家たちの問題意識と議論が現在の我々とどのように結びつけられるのかについても考える。毎回の授業において，内容に関する質問を出し，授業時間内に回答を提出してもらうので，積極的に参加することが求められる。	
				国語学講義ＢⅡ	方言研究は国語学の研究分野の一つに位置づけられている。この方言を研究対象とするためには，実際の方言の動態を正確に把握することが求められる。その把握にはいかなる方法があるのか，あるいは，日本語の方言は現在どのようになっているのか，そういった問題をこの授業では取り上げる。また，受講者が今までの言語生活で経験してきた方言を徹底的に振り返るという作業を通じ，自らの使用する日本語を客観的に捉えるという作業も行う。そこから日本語のしくみや特徴を再認識すると同時に，自らの使用する日本語について振り返ることを最終の目標とする。	隔年
				国語学講義ＢⅢ	本講義では，日本語史に見られる通時的な変種や，現代共通語や諸方言を含む共時的バリエーションをも含めた日本語を対象に，文法・音声音韻などを中心にその規則性を考察する。国語教師として必要な日本語およびその歴史についての知識を身に付けるとともに，日本語の多様性について理解を深めることを目的とする。なお，講義形式ではあるものの，コメントカードや授業時の質疑，授業内での作業など双方向の授業を実施することで，受講者が主体的に考える力を涵養する。	隔年
				国語学演習ＢⅡ	国語学の研究分野の一つに方言研究ある。この授業では，まず学生自らの方言意識について確認した後，先行研究を精査した上で，内省による自らの言葉の運用についての検討を促す。さらに自らの居住する地域で，地域方言の実態や人々の方言意識を調査し，方言研究の基礎となるフィールドワークを実践する。この作業を通しフィールドワークによる方言研究の方法について学び，地域に出かけてアンケート・インタビューを行いデータを採取し，そのデータを分析するという言語研究の手法を身に付けることが可能となる。これらのことから，自らの使用する日本語を客観的に捉え，そこから日本語のしくみや特徴を再認識し，自らの日本語使用を振り返ることへとつながっていく。	隔年
				国語学演習ＢⅢ	本演習では，言語資料に基づく日本語の分析方法を身に付けることを目標とする。文献や談話などの言語資料を対象に，問いをたて，データ（用例）を収集し，仮説を検証するという調査研究を行う。また，その際にただ資料に現れる例を無批判に扱うのではなく，その資料の成立背景や反映される言語などの資料性を踏まえて分析することで，言語資料の背後にある実際の言語の規則性を明らかにすることを目指す。授業後半では相互に発表・ディスカッションを行うことで，他者にわかりやすく整理して伝える力・他者のコメントを反映して自身の考えを精緻化していく力を身に付ける。	隔年
				国語学演習ＣⅠ	日本語学に関する学術研究を実践するにあたって必要な能力を身に付ける。具体的には以下の諸点を目標とする。①論文を読み，「研究の方法」「研究のまとめ方」「課題の所在」「考察の仕方」等を学ぶ。②具体的な課題に基づき，調査を行う。その際，文献の扱い方，コーパスの利用法，パソコンを用いた調査方法等の理解を深める。③考察内容をまとめる際にどういう工夫が効果的で，何が必要かを意識しながら効果的なアウトプットの仕方を身に付ける。	
				国語学演習ＣⅡ	日本語学に関する学術研究を実践することにより，研究に必要な，以下の一連の過程を体験する。その活動を通じて，日本語学を修めるとはどういうことかを理解する。①特定のテーマについて，先行研究を読み，研究史を整理し，取り組むべき課題の所在を明らかにする。②その課題意識に基づいて必要な方法を設定する。③調査を実際に行い，データを入手・整理・集計・分析する。④分析結果について考察をする。⑤一連の所見を，他者に説得的に，効果的に伝えるとりまとめを行う。	
				国文学講義ＡⅠ	万葉赤人歌の表現方法と古語イニシヘ/ムカシの使い分けを講義する。前半は，万葉歌人である山部赤人の和歌を七種とりあげて詳しく解釈し，後半は，そのうち二種にかかわる古語イニシヘ(およびその類語ムカシ)をとりあげて語意を詳述し，文学理解に役立てる。授業の概要については，前半では，万葉赤人歌の表現方法に見る周到な計算を精確にさぐり，後半では，上代における古語イニシヘ/ムカシの使い分けのありようと中古への継承について広く深くさぐる。	
				国文学講義ＢⅠ	近世の箏曲地歌の歌詞がどういうもので，訳すとはどういう作業なのかを，典拠との関係性や詞と曲の同調等にも目配りしつつ，講義していく。特にわかりやすく訳すことの大変さや意義を伝えることは，教育大学の学生にとって非常に重要と考える。なお，担当者の自著『箏曲地歌五十選 歌詞解説と訳』の解釈や論文の自説を紹介するにとどまらず，担当者自作の「地歌動画講義」も適宜視聴させる。	
				国文学講義ＢⅡ	日本近現代文学の作品について分析する上で必要とされる文学理論について，知識を習得し理解を深める。また作品をめぐる諸言説について，文学理論を踏まえつつ検討を加え，作品の批評性を明らかにする。このような学習を経ることにより，作品を読解する上で必要とされる思考力や判断力を養う。同時に，文学作品を読解するための高度な技能を養い，作品対する関心を深めることを目標とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（国語・書道）	国文学演習ＣⅠ	一つの古典の特定の部分・箇所に関し，個人またはグループ単位でレポートして，正しい本文や解釈・説を選ぶ能力を習得させる演習。教育大学の学生ということを念頭に置き，具体的かつ筋道立ててわかりやすく説明できる能力も併せて習得させる。なお，何を対象に選ぶかにもよるが，変体仮名を読める基礎力をつけるために，影印本をテキストに用る場合もあり得る。また，グループ別でレポート発表する場合は，初めの一～二班は授業外に事前指導も行う。	
				国文学演習ＣⅡ	本演習では，日本近現代文学の研究方法を多角的に検討することを目指す。主要な研究方法に対する理解を深め，作品分析を可能にする能力を養う。具体的には，研究方法・アプローチについて，先行研究を参照しながら検討する。さらに，研究方法を習得し，より深い作品分析ができることを目標とする。加えて，日本近現代文学にかかわる作品について，個人で分析して発表する。発表を通して論理的な説明のできる能力を養う。	
				国文学演習ＥⅠ	四年次の卒論提出にそなえ，自分が何をテーマに選びたいかを考えつつ，そのテーマにはどこまでの先行研究があってどんな問題点があるかも調べる演習。指導教員との対話によって，先行研究を批判的に踏まえることや論拠を明示しながら筋道立てて論を進めていくことの重要性を，三年次のうちに学んでおく。なお，国語教育は丹藤博文，砂川誠司，古典は田口尚之，近現代は奥田浩司が担当するものとする。	
				国文学演習ＥⅡ	四年次の卒論提出にそなえ，自分が選んだテーマについて，考察を深める。具体的には問題点の把握，先行研究との関係性について考察し発表する。同時に指導教員との対話を通して，理論的なアプローチを踏まえ，論拠を明示しながら論理的に説明する能力を養う。加えて，自らの研究と先行研究との関係性についても，指導教員との対話を通して確認する。なお，国語教育は丹藤博文，砂川誠司，古典は田口尚之，近現代は奥田浩司が担当するものとする。	
				中国文学講読	漢文の原テキストを正確に理解するためには，時代と地域に関する知識，その言語構造の理解，そして何より辞書や索引をはじめとする様々な工具書の使用法を身に付ける必要がある。この授業では，中国文学・思想に関する基本文献を題材として，必要な工具書を使用しながら，それらの原典を読解する技術を身に付けることを目標とする。入念な予習が必要であるが，それを通して技術のみならず，学術分類や人名・書名など中国古典に関する様々な基礎知識を身に付けることができるだろう。	
				中国思想演習	『論語』や諸子百家をはじめ，漢文で扱われるテキストの多くは，二千年以上も離れた時代に作られ，その後長く日本・中国で読まれてきたものである。本来それらを精確に読解するためには，現在に到るまでの，権威を認められてきた注釈類を参照し，辞書などを用いた語彙の用例の調査などを通して，それらの妥当性を評価しながら，解釈を絞り込んでゆくという作業が必要である。この授業では，演習形式によって，漢文で書かれた注釈と合わせて精読することで，そのような読解方法の基礎を習得することを目指す。合わせて卒業論文作成における問題設定に必要な知識を身に付ける。	
				中国文学史	中国古典文学における中核的ジャンルである詩について，先秦から南宋に至る発展過程を通観し，各時代を代表する詩人たちの詩を鑑賞することによって，中国古典文学に対する知識と理解を深める。『詩経』『楚辞』を源とし，漢代に五言詩が誕生し，魏晋南北朝詩，唐詩，宋詩と成熟・展開していった中国古典詩の流れを把握し，詩の形式・押韻・平仄等について理解する。曹植や陶淵明，杜甫・李白・白居易・杜牧，そして蘇軾・陸游など，日本にも大きな影響を与えた詩人たちの多様な作品を観賞しながら，各時代，各詩人の文学的特徴を考察する。	
				漢文学研究	講義形式により，漢代から明代までの多様なジャンルの作品を読み，各ジャンルの特質を正しく理解するとともに，そのジャンルが盛行した時代背景を考察する。前近代において最も格式高い文体と見なされてきた賦，駢文と古文，また魏晋南北朝期の志怪・志人小説から唐代の伝奇小説，明代の『三国志演義』や『西遊記』等の白話小説に至るまで，多様なジャンルの作品を読解・鑑賞することを通じて，中国古典文学全般に対する理解を深めることを目標とする。	
				中国文学演習	演習形式によって中国文学の研究の手順と手法を実践的に学び，論文作成のための基本的能力を身に付けることを目指す。まず中国文学に関する学術書・研究論文を読んで受講者みずから論点を整理して発表し，全体で討論を行い，更に必要な調査をみずから考えて実行し，文章化する力を養う。学術研究の手順と論文執筆の注意点を理解し，実践として自ら問いを立て，必要な文献資料を収集・分析し，先行研究の検討を進める。最後に全体で発表と質疑応答を行う。	
				書道演習Ａ	最初は，漢字（楷書・行書・草書）の用筆法とかなの用筆法について比較をしながら，両者に共通する点や相違点を探りながら，さまざまな用筆について理解を深める。その上で，かなの単体（いろは・変体かな）の書き方や，さまざまな連綿の方法について実技指導していく。基礎的な用筆から学習を進め，和歌や俳句を四行書きにする中で，行の構成の仕方についても学びながら，段階的に多様なかなの書法を用いることができるようにしていく。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（国語・書道）	書道演習Ｂ	かなの基礎である「いろは」の単体や変体がなが字母からどのように変化したか，かな文字の変遷について確認しながら書法を学ぶ。また，和歌や俳句を行書きやちらし書きにしながら，連綿，行の構成や配置など，かなの表現方法について学んでいく。平安朝のかな古筆の臨書も行いながら，さまざまな連綿法や行の構成法や，紙面構成法などについての知見を広げていくことにより，効果的なかなの表現ができるようにし，自らの選んだ詩歌を作品にする方法を学ぶ。	
				書道演習Ｃ	授業のテーマ及び到達目標は，１，行書と草書の書法を学習し，その運筆法・用筆法を習得する。２，行書と草書の技法を応用して，創作作品へ発展させる。中国での代表的な行書および草書の古典作品を取り上げ，その作品が生まれた時代背景，書人，作品内容等を把握する。そして，その書法を理解したうえで，臨書をする。それを倣書作品から創作作品につなげる。最終的には，臨書（行書および草書）による学習成果を条幅作品（半切）に仕上げる。	
				書道史	中国書道史と日本書道史の両面から，「書」の歴史について様々な視点で調査・研究することにより，文字文化について正しく理解することができる。書（文字）にはそれぞれ時代性・地域性があり，豊富な書（文字）資料からその特徴を考察し，理解を深める。さらに，広く日本・中国の文化を理解するとともに，豊かな人間性を支える教養と深い専門的知識を身に付ける。具体的には，中国および日本の各時代の書名跡を取り上げ，その書の持つ意義を様々な角度から考察していく。臨書等の実技も含めながら，発展・定着化を図る。したがって，毎時間書道用具(初回授業時に説明する）を持参すること。基本的な授業の進行は，（1）学生のプレゼンテーション，（2）教師の講義，（3）古典作品の臨書，（4）まとめ，という形になる。	
				書論講読	中国清代の書論を読み，書の見方，考え方について深く考察することができる。さらに，書法論および書道文化を分析的に理解するとともに，豊かな人間性を支える教養と深い専門的知識を身に付けている。具体的には，中国清代の書論を読み解く事に重点をおく。前半は，基礎的知識として「書の美」について深く考察し，その中で，書法用語・人名等を確認する。後半は，清代に書かれた書論を精査に読み解き，書法理論について深く考察する。	
				書研究Ａ	中国と日本の代表的な書家とその書法について学ぶ。なかでも，篆書・篆刻の基礎・基本を学び，更に発展学習として篆刻作品の制作を行う。毎時間，理論(書家についての発表)と実技(篆書・篆刻)の二つを行いながら進める。理論は，代表的書家について，調べ学習と発表を行いながら，書人と作品の関係について考察する。また，実技としては，篆書は大篆と小篆の臨書を行い，篆書を用いた作品制作や，篆刻作品の制作と研究を行う。	隔年
				書研究Ｂ	中国と日本の書人として著名な人物を何人か取り上げ，その人物像を知ることにより，書の文化，ひいては中国と日本の書文化について考察する。また，篆刻の分野で著名な人物にも焦点をあて，篆刻の表現文化についても理解する。授業の前半では，人物に関する先行研究や関連する資料を読みながら書人への理解を深める。その上で，後半は，実際に作品の臨書を行うことにより，書人と作品の表現技法との関係性について考察を深めていく。	隔年
				作品研究Ａ	中国の書に関する文献資料をもとに，書作品についての知識を深めていく。先行研究や古資料を読みながら，書の古典作品の筆者，時代（政治・文化）との関わりや，書かれている内容，書体・書風，書法などを多面的・総合的にとらえ，書作品の書道史的な意義を考察する。各自の興味関心に応じ，書法的に優れた碑法帖を選択して，筆者・時代背景・作品内容・書風や書体の特徴・用筆法についての考察を行う。先行研究の検討も行いながら，調べてきた内容をレポートして理解を深める。	
				作品研究Ｂ	日本の書に関する文献資料をもとに，書作品についての知識を深めていく。先行研究や古資料を読みながら，書の古典作品の筆者，時代（政治・文化）との関わりや，書かれている内容，書体・書風，書法などを多面的・総合的にとらえ，書作品の書道史的な意義を考察する。各自の興味関心に応じ，書法的に優れた古筆を選択して，筆者・時代背景・作品内容・書風や書体の特徴・用筆法についての考察を行う。先行研究の検討も行いながら，調べてきた内容をレポートして理解を深める。	
			地歴・公民	歴史と環境	歴史や社会を作り出す人間の行動は，その個人や終端が置かれているさまざまな環境によって規定されている部分が大きい。その環境とは，自然環境ももちろん含んでいるが，同時に周辺の諸勢力などとの関係を生み出す政治的，経済的，文化的などの人為的に作られるものも重要である。日本史あるいは世界史に関わるような諸事例を取り上げ，それらがどのような環境によって規定された歴史的現象であったのかを掘り下げることによって，受講生がより深く歴史や社会の諸事象を捉え，将来の教材環境につなげていけるような力を養う。	
				地理学特論Ｉ	４年次の卒業+論文作成を念頭に，特論Ｉでは，地理教育・農業地理学・都市地理学について，基本的な内容を講義する。本講義では，各分野で何が問題とされ，何が明らかになったのか。また，いかなる研究手法がとられてきたのかを中心に各分野の基本的理解をはかることを目的とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（地歴・公民）	地理学特論Ⅱ	４年次の卒業+論文作成を念頭に，特論Ⅰでは，地理教育・農業地理学・都市地理学について，基本的な内容を講義する。本講義では，各分野で何が問題とされ，何が明らかになったのか。また，いかなる研究手法がとられてきたのかを中心に各分野の基本的理解をはかることを目的とする。	
				哲学の諸問題	本授業では，プラトンやアリストテレスといった個々の哲学者にフォーカスしたり，あるいは歴史的な叙述に偏ったりするのではなく，むしろ哲学の歴史の中で繰り返し問題とされてきた重要な概念ないしトピックにフォーカスした講義を実施する。たとえば，現代の英語圏で盛んに論じられる一連の哲学上の概念としては，真理・確率・因果・自由意志・合理性などが本講義で俎上にのぼることになるであろう。これらをつうじて哲学上重要な諸概念・諸問題について受講生に理解を深めてもらうことが本講義のねらいである。	
				倫理学の諸問題	この講義では，主に現代の倫理学で論じられている諸問題のなかから，重要なものをいくつか取りあげ，考察する。現代の倫理学では，道徳についての判断はどのような本性のものであるかが活発に論じられる（メタ倫理学）とともに，ヨーロッパ大陸では「他者」の問題が，主にアメリカを中心とする英語圏では「正義」の問題が，倫理学の重要な問題となっている。また生命や環境やビジネスといった，具体的な社会問題をめぐる倫理学的な議論（応用倫理学）の動向も見過ごすことはできない。このような問題のなかから，受講者の関心に応じてテーマを設定し，その問題のおおよそを概観する。	
				宗教の諸問題	本講義では，まず，宗教に関する基礎的知識（世界宗教であるキリスト教・イスラム教・仏教，そして日本における代表的な宗教である神道と仏教諸宗に関する基礎的知識）ならびに宗教学の今日にいたるまでの歩みを概説する。その上で宗教と国家の関りや宗教と戦争の関りについて考察し，さらには宗教を通して社会現象を読み解くことを試みる。異文化としての宗教文化に対する受講者の関心を広げることが本講義のねらいである。	
				哲学基礎演習	本授業では，哲学の古典的な著作の主要な部分をいくつか取りあげ，これを読解し，またそれに基づいて議論を行う。それに先立って，取りあげる哲学者やその著作の基本的な予備知識を講義形式で学んだのちに，実際にその著作の一部を輪読形式で読み進める。この作業をつうじて，哲学の基本的な方法論や課題についての理解を深めるとともに，今後の演習形式の授業で必要となる古典読解の方法や他の受講者との討論の方法を受講者各自が身に付けることを本授業のねらいとする。	
				哲学演習Ａ	西洋哲学の原典を，翻訳を参考にしながら精読することを通じて哲学的思考に親しみ，そこで問われている哲学的テーマに対して各自の問題意識に従いながら解釈していくとともに，それを自らの言葉で表現していく能力を身に付けることを目指す。読解テクストは，西洋近世哲学の代表的な著作，たとえばデカルト『省察』，スピノザ『エチカ』，ライプニッツ『モナドロジー』などから抜粋して取りあげる。各自テクストを予習しておくことが求められる。	
				哲学演習Ｂ	本授業では，西洋哲学（主に近現代の古典的著作）の原典講読を行う。原典の精読をつうじて哲学的思考に親しみ，そこで問われている哲学的テーマに対して各自の問題意識に従いながら解釈していくと共に，それを自らの言葉で表現していく能力を身に付けることが本授業のねらいである。テクストとしては，ロック『人間知性論』，バークリ『人知原理論』，ヒューム『人間本性論』など，主としてイギリスをはじめとする英語圏の著作を取り上げる。	
				倫理学基礎演習	この授業では，倫理学の古典的な作品の主要な部分をいくつか取りあげ，これを読解し，またそれに基づいて議論を行う。まず議論の前提として，取りあげる哲学者や作品の基本的な予備知識を講義形式で学んだのちに，実際に古典的な作品の一部分を，輪読形式で読み進める。そのことを通じて，倫理学という学問の基本的な方法論や課題についての理解を深めるとともに，今後の演習形式の授業で必要となる，古典読解と他の受講者との討論の方法を，受講者各自が身に付けることを目指す。	
				倫理学演習Ａ	この授業では，古代ギリシアにはじまり近現代の欧米や日本に至る倫理学の歴史のなかで，古典的な位置を占める作品をひとつ選んで，これを読解し，またそれに基づいて議論を行う。読解のために必要な予備知識を押さえたうえで，輪読形式で選んだ作品を読み進めていく。このことを通じて，とりあげた古典ないしはその著者についての理解を深めるとともに，卒業論文の製作のために必要となる，古典的な作品を読解するための基本的な能力を受講者各自が身に付けることを目指す。	
				倫理学演習Ｂ	西洋の倫理学に関わる代表的な著作の読解を通じて，倫理学的思考や方法論に親しみ，そこで問われている問題の所在を理解し，それを自分なりの仕方で表現する能力を身に付けることを目指す。授業の進め方としては，前半は，古代から近世にかけての基本文献からの抜粋を資料として，グループごとに内容解説形式の授業を行ってもらう。後半は，近世の代表的哲学者の著作，たとえばデカルト『情念論』，スピノザ『エチカ』，ライプニッツ『弁神論』などからの抜粋を材料として，グループごとに発表を行ってもらう。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（地歴・公民）	宗教哲学演習Ａ	本授業では，哲学・倫理学・宗教学の基本的文献を正確に読み解く能力の習得を目指す。また，基本的文献の読解を通じて，各自の問題意識にもとづきながら「問い」を設定し，それに対する考察や解釈を，自らの言葉で論理的に表現していく能力を習得することを目指す。受講者各自の関心にもとづき文献を選び，各回とも担当者が決められた範囲の内容について報告し，他の参加者がその発表を検討する，という形式で授業を進めていく。	
				宗教哲学演習Ｂ	本授業では，哲学・倫理学・宗教学の原典テクストを，翻訳や解説書等を参考にしながら読解することができるようになることを目指す。同時に，自分なりの問題意識に立ってテクストの解釈・考察を行い，自らの言葉で論述・表現する能力を養うことを目指す。授業の中心となるのは，各自の興味・関心に即した文献読解作業である。受講生は，各自選択した文献について，その考察報告を行い，参加者で検討しあう形式で授業を進めていく。	
				宗教倫理学演習Ａ	本授業は，倫理学・哲学・宗教学の論文作成の方法を学び，最終的に論文としてまとめ上げることを目的とする。倫理学・哲学・宗教学に関して，まず自分なりの「問い」を持つことから出発し，基本となるテクストを読解していくなかで，各自が論文テーマを設定する。さらに，テーマに即してテクストの読解を深め，論文の形に仕上げていく。授業の具体的な進め方としては，関連する研究論文や先行研究を参照しながら各自で資料を作成して発表し，それを参加者で検討しあう形を想定している。	
				宗教倫理学演習Ｂ	本授業は，倫理学・哲学・宗教学の論文作成の方法を学び，最終的に論文としてまとめ上げることを目的とする。倫理学・哲学・宗教学に関して，まず自分なりの「問い」を持つことから出発し，基本となるテクストを読解していくなかで，各自が論文テーマを設定する。さらに，テーマに即してテクストの読解を深め，論文の形に仕上げていく。各自の設定テーマに関連する研究論文や参考文献の分析・考察をまとめて発表資料として作成し，その資料に基づいてディスカッションする形で進めていく。	
				日本史特論Ⅰ	武家政権の歴史を講述する。平清盛による平氏政権の成立から江戸幕府の倒壊に至るまで，700年にわたって，日本史は武家政権の歴史としての様相を色濃く帯びている。日本史の特質を理解する上でも，その過程を押さえていくことは重要になる。この講義では，近年の研究成果も踏まえつつ，平氏政権から鎌倉幕府，室町幕府から戦国大名や織豊政権，江戸幕府などを適宜取り上げ，その実像や日本史上での位置づけなどを考えていく。専門的な内容にもわたるため，半期をすべてを講ずることにはこだわらず，必要な事柄は時間をかけて論じていく。	
				日本史特論Ⅱ	日本中世の愛知県域の歴史について講述する。おおよそ尾張と三河となるこの地域は，中世にさまざまな人物が活動し，それが日本史全体の流れとも関わることがしばしばであった。古代末期からの国守や国主の問題，庄園の問題，足利氏など有力な武士の投じようとその足跡，さまざまな戦いの歴史，そして織田信長や徳川家康とそれに関わる人々の動きなど，この地域の歴史は重要な事象に富んでいる。将来，愛知県など東海地域で高校の教員となるであろう学生を，近年の自治体史の編纂などによってかつてとは異なる歴史像が描かれるようにもなったこの地域の歴史に触れさせるための授業となる。	
				日本史書講読Ⅰ	学校教育で一般的な日本史に関わる史料や文献をもとに，研究の変化や変化の背景を考察する。特に社会科歴史教育で基礎となる文献や資料について，読解の技術を深めるとともに，情報を整理し，仮説を作って検証する能力を高めていきたい。特に近現代に関する諸研究についての文献等を読んで，どのような問題がありどのように研究が進められ，何が達成され，何が課題として残されているのか，などを探究していく。それらの経験を重ねることで，将来，教員として自分なりに教科や教材の研究を行っていくための力量を培ってもらう。	
				日本史書講読Ⅱ	日本の，特に中世史に関わる史料を取り上げ，その読解の技術を深めるとともに，そうして得た情報をどのように整理し，自分なりの仮説を作っていくのかという能力も高めていきたい。そのためには，取り上げた史料に関わるこれまでの諸研究についての文献を読んで，どのような問題がありねどのように研究がすすめられ，何が達成され，何が課題として残されているのか，などを探究していく作業が求められる。それらの経験を重ねることで，将来，教員として自分なりに教科や教材の研究を行っていくための力量を培ってもらう。	
				地域史演習Ⅰ	歴史や社会の諸事象を捉えていく場合，それが生起している地域の特性を踏まえて考察することは研究上の重要な視角となる。日本史でも世界史でも，ある地域での出来事がより広い地方での状況を作り出す要因となり，それがひいてはある集団や国家，民族などのありようにも関わっていく。そうした視点は現在の歴史研究においても，重視されているものである。そのような地域からの視点によって歴史を再構成していく作業を，具体的な史料の読解を通して進めていく。それによって，受講生が将来，自ら起用度学習や教材研究に関わっていくための素養を培っていく。	
				地域史演習Ⅱ	地域史演習Ⅰにおいて，地域の歴史を考察する力量を高めたことを踏まえ，次にはそれをより広い地域史や政治史，国家氏などにつなげていくための作業を進める。そのためには幅広く史料を読み解く作業とともに，従来の諸分野の研究文献を読み，その中に自分の考察の結果を位置づける作業も重要になる。受講生には，関係史料を読解し，かつそれに関わる文献のレポートなどを作成・報告することを，教員の始動の下に分担して進めてもらう。それによって，受講生が自らの視点で歴史や社会を捉え，的確に説明できるような力量を高めていく。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（地歴・公民）	日本史基礎演習	日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において，より専門的な学修を進めるための基礎固めを行う。自ら課題を見出し，それを探究することが要求される専門分野の研究に踏み込むためには，専門の学術書や論文を探し，それを読み込んで理解する力，整理し報告する力，さらにその根拠となる資史料を自ら取り扱う力などが必要になる。そのことを受講生にじかくしてもらうため，実際に諸文献や資史料にも接しながら，それらとどのように関わっていけばよいのか，教員からの始動と受講生からの報告を組み合わせつつ，授業を進めていく。	
				日本史応用演習	日本史やそれを対象とする社会科教育の分野において，専門的な学修の成果を卒業研究として結実させるための，教員からの指導と受講生からの報告を組み合わせた授業となる。その際に重視するのは，卒業研究にむけて，どれだけ次節の根拠となる資史料を探し，それを利用できているのか，そこから得られた情報がどれだけ正確なものであるのか，それによって推論された内容がどれだけ説得力を有するものなのか，そしてそれらを明確な文章で説明できているか，などの点である。そうした研究のための能力を高めていくことが，この授業の目的になる。	
				外国史特論Ⅰ	外国の特定の国の歴史事象を事例として，歴史学の方法論と思考法を具体的に学修する。授業では教員が歴史学の基本的な方法論，すなわち研究状況と把握と問題の設定，史料の選定・批判・読解，読解した情報の整理と整合的な解釈，仮説の提示と検証，という一連のプロセスを事例を挙げて提示する。とくに史料は歴史の根幹であり，事例の検討は，教員の専門に即した史料を素材とする形で進められる。受講生は，教員が提示する題材を自身でも積極的に検証・討論し，その結果を討論したりレポートにまとめたりすることで，歴史学の方法論を身に付け，批判的な思考力を涵養する。	
				外国史特論Ⅱ	外国の特定の国の歴史事象を事例として，歴史学の方法論と思考法をより専門的に学修する。外国史特論Ⅰに引き続き，教員が特定の課題に関する研究の最前線について，具体的な史料やその解釈を紹介しながら，実証的に議論を展開する。特に，従来の研究で見解が大きく分かれ，諸説が対立してきた論点について，批判・検証を展開しながら授業を進めていく。受講生は，そうしたプロセスを学ぶとともに，自ら積極的に関連問題を考察することが求められる。こうした作業を通じ，専門的な学修課題を探求する力を養うとともに，将来の教育現場で論争点を自ら掘り下げられる力を持った教員の養成を目指す。	
				外国史書講読Ⅰ	外国史の史料・研究書の読解を通じて，歴史研究に必須となる基礎的な語学力を身に付けるとともに，史料批判や史料解釈の方法を学ぶ。歴史の考察に当たり，これまでの研究成果と，それらの根拠となる原典史料を読解する力は必須の能力であるが，外国史の場合，それらの多くは日本語以外の外国語で書かれており，特に史料は古典的な言語である場合が多い。古典的な言語は，表面的な読解だけでは文意をつかむことが困難であり，文脈や典拠・訓詁を確認しながら読み進めることが必要である。この授業は，特定のテキストを題材として，受講生に担当を割り振り，参加者同士で討論しながら会読する形で進行する。担当者は翻訳するだけではなく，これまでの解釈を確認し，関連史料も参照することで，自身の解釈を根拠付けるための注釈の作成が求められる。こうした作業を通じて，歴史の解釈の方法を基礎から身に付けることを目的とする。	
				外国史書講読Ⅱ	外国史書講読Ⅰに引き続き，外国史の史料・研究書の読解・解釈を実践的に学ぶ。外国史書講読ⅡではⅠよりも専門的なテキストを選択し，また担当者は関連する情報を幅広く参照して深く検討することが求められる。担当者以外の出席者にも，あらかじめ読解した上での出席を求め，個々の文章の解釈に当たって，相互に活発な批判や討論を行うことを義務づける。こうした作業を通じて，歴史の解釈の方法をより実践的に深く学ぶことを目的とする。	
				外国史基礎演習	外国史やそれを対象とする社会科教育の分野において，専門的な学修を進めるための基礎として，主に日本語で書かれた研究論文や研究書の読解・要約・報告の方法を実践的に学ぶ。歴史分野の教育や研究に当たって，先行研究の成果を確認し，研究の進展の過程や，解釈上の対立点・論争点を把握することがきわめて重要である。そのためには，個々の学術論文が何を根拠として，どのような問題関心と論理構成で書かれているかを理解する能力が必須となる。この授業では，その能力の基礎を身に付けるため，教員が課題文献を選び，受講生に割り当てて，読解と要約，報告と討論を実践してもらう。この作業を通じて，論文の骨組みを理解し，自らが論文を執筆するための基礎とする。	
				外国史応用演習	外国史やそれを対象とする社会科教育の分野において，専門的な学修を自ら進めるため，研究の課題を設定して，それに関連する研究史を作成するとともに，史料に基づいてそれらを検証する方法を学ぶ。この授業では受講生が教員の指導のもと，自ら問題を設定し，論文や研究書を検索・入手して，これまでの研究成果の到達点と対立点，そして新たな課題を明らかにすることを目指す。またその過程において，その問題系で重要な史料にはどのようなものがあり，いかなる解釈・論争が繰り広げられてきたのかを把握する。この作業を通じて，自身の専門的な学びの課題を明確化するとともに，将来教員として，さまざまな課題について問題点を掘り下げられる汎用的能力を身に付ける。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（地歴・公民）	地理学基礎Ⅱ	地理学では地域ごとの統計データを地理行列という形式で整理し分析することで，地域の特色や地域差の解明を試みる。そこで，この授業では地理行列を用い て，地域に関する様々な分析手法を学ぶ。さらに，日本にはどのような統計データが存在するのかを学習する。他にも生成した統計データを主題図に変換するこ とを体験し，主題図の適切な表現手法について学習する。統計データの分析では表計算ソフトウエアEXCELを利用し，地図の作成に対しては，主題図作成支 援システムMANDARA（フリーソフト）を利用する。また，統計データ以外にも様々な地域分析に利用できる地図類がある。これらの分析手法についても学ぶ。	
				地理学特論Ⅲ	高校の「地理探求」で定められた現代世界の系統地理的考察と地誌的考察をベースに，（１）自然環境，（２）資源・産業，（３）交通・通信・観光，（４）人口・都市・村落，（５）生活文化・民族・宗教，（６）地誌にかかわる幅広いトピックを深く学ぶとともに，自らの力で地理学・地誌学を探求する力を身に付ける。	
				地理学研究法Ⅰ	人文地理学・地理教育の学術論文・レポートの作成に必要な「地理学的視点・研究法」の習得を目指す。多くの人文地理学・地理教育論文を読みながら，先行研究のまとめ方と論文の読み方を学ぶとともに，学術論文やレポート作成のための調査法，論理的な文章の書き方を身に付ける。授業は発表・演習形式が基本となる。	
				地理学研究法Ⅱ	人文地理学・地理教育の学術論文・レポートの作成に必要な「地理学的視点・研究法」の習得を目指す。多くの人文地理学・地理教育論文を読みながら，先行研究のまとめ方と論文の読み方を学ぶとともに，学術論文やレポート作成のための調査法，論理的な文章の書き方を身に付ける。授業は発表・演習形式が基本となる。	
				地理学演習	本演習は，４年次の卒業研究を視野に入れながら，各人が特定のテーマを決めて，文献・フィールドワークを行って地理学レポートの習作をまとめることで，地理的見方・考え方を培い，地理的観点から物事を考察する能力を養うことを目的とする。具体的には，文献調査法，対象地域の選定とその過程，野外調査における土地利用・景観観察法，聞き取り調査法，調査結果の集計と分析手法，論文の文書作法等に関する講義とそれに基づいた演習を行い，地理的見方・考え方に基づいた研究手法と考察，そして論文作成の力量育成を目指す。	
				地理学実験	地理学にとって，景観や土地利用から地域の特徴を読みとったり，地図化をとおして人文・自然の諸現象を理解したりするスキルは，学問を支える基礎と言ってもよい。本授業では，地理学者の道を歩んできた研究者たちが若手のころに書いた「学術論文」を読解し，また『地域調査ことはじめ』を通じて調査方法やその苦労，得られた喜びなどを知ってもらいたい。授業では以下の点について特に留意する。１）対象地域と調査テーマの選び方（どこで何を調べるか？），２）調査の始め方，フィールドワークへの入り方（どこから手をつけるか？誰に話を聞くか？），３）データの集め方（定量的データと質的データの違い），４）データのまとめ方（地図とグラフの作り方），５）調査結果のまとめ方。これらのスキルは，同様に初等・中等の社会科教育や地歴を教えるうえでも役に立つ素養であろう。また，本授業は３年次に受講する地理学演習，４年次の地理学卒業論文作成までの道筋を念頭においている。	
				地理学論文演習Ⅰ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，２名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	
				地理学論文演習Ⅱ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，２名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	
				地理学論文演習Ⅲ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，３名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	
				地理学論文演習Ⅳ	主に人文地理学や地理教育の研究動向を理解するとともに，人文地理学・地理教育とは何かを考える。また，討論を通じて質疑・応答などの技法を収得する。日本および外国の人文地理学・地理教育論文を各自が発表形式で紹介し，それをもとに全体で質疑・応答を行い，当該論文の理解とともに地理的見方・考え方の視点を学び，討論形式の授業の経験を積む。各回ともに，４名の発表者による発表と質疑応答，討論の演習形式で行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（地歴・公民）	地理学野外実験Ⅰ	人文地理学・地理教育を中心としたフイールドワークを行うとともに，各自で調査テーマを決めて現地調査に挑戦したり，地理教育で役に立つ施設を見学したり，地理教材開発の提案を行ったりする。現地でのフィールドワークの前に資料収集などの予備調査を行い，その成果を発表する。その後，現地に入り，調査を行う。調査終了後，調査結果を分析し，それについて発表する。	
				地理学野外実験Ⅱ	人文地理学・地理教育を中心としたフイールドワークを行うとともに，各自で調査テーマを決めて現地調査に挑戦したり，地理教育で役に立つ施設を見学したり，地理教材開発の提案を行ったりする。現地でのフィールドワークの前に資料収集などの予備調査を行い，その成果を発表する。その後，現地に入り，調査を行う。調査終了後，調査結果を分析し，それについて発表する。	
				地誌概説Ⅲ	本講義は，アメリカ合衆国を対象にその性格を自然環境・政治・経済・社会・文化の多面的視野から総合的に理解することを目的とする。合衆国は中等教育の社会科において，必ず世界地誌の一部として取り上げられる地域であるが，その全容についてじっくり学ぶ機会が限られているのが現状である。本講義では合衆国の自然環境，歴史，地域区分など基礎的な内容について包括的に講義し，合衆国の全体像と地域区分概念を理解する。その上で，アメリカ社会や政治を支える独自の合理主義や思想についてさまざまな地域の事例から合衆国の多様性を検討する。	
				法学演習Ⅰ	この授業では，以下の事柄を行うことにより，法学の基礎を身に付け，また法学分野での論文を書くための基本的な知識を獲得することを目指す。その際，基本的な知識の伝達が求められる際には講義形式で授業を行うこともあるが，基本は学生の主体的な学びと発表によって授業は構成される。①法とはなにかを知る。②法の解釈について学ぶ。③裁判制度について知り，判例を読めるようになる。④法学分野の文献検索を行う。⑤文献の精読を行い，その内容について発表を行う。⑥アカデミック・ライティングについて学ぶ。	
				法学演習Ⅱ	この授業では，学生個人の研究関心に基づき，法学分野の小論文の執筆を行う。その際，「法学演習Ⅰ」で学んだアカデミック・ライティングの知識，文献検索を行うスキル，そして文献を正確に読むスキルを活用することが求められる。なおこの小論文は，卒業論文のテーマを選択するための基礎学習としての性格と，学術論文を執筆するための基本的なルールを学ぶ機会としての性格を併せ持つ。こうした小論文執筆を通して，学術的論文のテーマ選択を行う際に気を付けるべき点はどのようなことなのか，学術的な文章といえるために気を付けるべき点はどのような内容かを知ることを目標とする。	
				法学演習Ⅲ	この授業では，学生個人の研究関心に基づいた卒業論文の執筆に向けた準備を行う。その際，「法学演習Ⅰ」及び「法学演習Ⅱ」での学習の成果を活かすことが必須である。授業は，学生が自身の卒業論文のテーマに関連する文献を選び，その内容を報告し，皆で議論することで進めていく。まずは自身が選択した研究テーマの先行研究を網羅的に読み，これまでの研究のなかで明らかになっていること，明らかになっていないことを明確にする。そのうえで，自身の研究では何を論じ，何を明らかにするのかを意識しながら卒業論文執筆に向けた準備を進めることを目指す。	
				現代社会学演習Ⅰ	本講義では，インタビューを中心とする質的社会調査についてテキストを用いながら，テーマ設定，調査設計，調査の実施，結果分析という手順に沿って習得する。またその後，自の関心に基づいたテーマを選んで，実際にそれに関する社会調査を実施することで，調査技法を実践的に習得する。具体的には，テキスト『質的社会調査の方法』を順に学生が担当を割り振ってレジュメを作って発表し，討論して内容の理解を深める。またその後，自らの研究テーマを選び，それを先行研究を学びながら社会学的な仮説として調査可能な形に整え，実際に調査を計画し，簡単な調査を実践し，プレゼンテーションを行う。	
				現代社会学演習Ⅱ	本講義では，『はじまりの社会学』をテキストに用いて，さまざまな社会現象を研究する際に，どのような研究領域があるのか，またそこでの代表的な議論のあり方について学んでいく。具体的には，テキストの各章を学生がそれぞれ担当して発表し，その内容について解説する。またコメンテーターが各章の内容に該当する社会現象を探してきて，討論の題材として紹介する。これに基づいた討論の中で，特定の社会現象を社会学の対象として考察する方法について学んでゆく。また後半では卒業研究に向けて自らのテーマを考えていく参考として，各学生の関心に基づいて社会学の論文ないし著作を各々一つずつ選んで発表する。	
				社会調査実習	本実習では，社会調査の実際の手順を理解し，また自らテーマを定めて，基本的な社会調査を実施できることを目標とする。また既存の先行研究における調査結果の分析を踏まえた上で，自らの調査報告書をまとめ上げられることが目標である。具体的にはまず自らの関心に基づいてテーマを選び，社会学の関連する先行研究をそれぞれ探索し，内容を理解し授業内で紹介を行い，自らの問いを社会学的に定式化し，調査仮説を立てる。仮説に基づいた調査設計を行い，主に夏季休暇中に調査を行い，結果を報告し，分析を行い，論文にまとめる。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（地歴・公民）	現代社会学研究Ⅰ	本講義の目標は，様々な具体的な社会現象を取り上げ，それを社会学の先行研究においてはどのように捉えてきたか，またそれをどう調査し，結果を分析したかを紹介し，また自らの関心テーマに基づいて調査研究について設計までを行う。受講生が主体となった発表・討議で講義を進めていく。具体的には，学生が各自が関心あるテーマを定めて，その社会学的な先行研究がどの領域のものか考え，文献を探索し，発表する。また自らの問いを考え，それに基づいてどのような社会調査が可能か，設計まで行う。	
				現代社会学研究Ⅱ	本講義の目標は，Ⅰに続いて，学生各自がそれぞれの関心に基づいて様々な具体的な社会現象を取り上げ，先行研究を渉猟し，比較検討し自らの視角を定めるとともに，自らの問いを設定し，それを社会調査の仮説として調査可能な形へと変形する。その後それぞれそ仮説ををどう調査し，どのように結果を分析するかについて，先行研究を参考にしながら見通しまでを立てる。具体的な調査対象者の集まりについての考察と，分析結果の適応領域について等，社会調査と社会理論の関係についても学ぶ。	
				国際経済学	自由化，国際化が進んだ現在の世界経済においては，世界各国は自国のみに注力した経済運営をすることは難しく，他国との関係性や世界全体を包括的に理解することが重要となってきている。自由化，国際化はまた，従来の世界に比べ，企業や個人に対しても世界経済との関係性を意識した経済活動をすることを余儀なくさせている。 本講義ではその様な時代に対応すべく，世界経済の構造分析を行い，世界でどのような経済的問題が生じているのか，様々なトピックごとに学習し，世界経済について俯瞰的な視野を身に付ける。その際，主に貿易，国際金融，多国籍企業，世界経済体制，発展途上国と開発の問題に焦点を当てて学習を行う。	
				国際金融論	本授業の目標は，現在の世界経済に大きなウェイトを持つ国際金融について学ぶことである。 とりわけ為替の理論と国際収支の理論，そしてそれらが実体経済に与える影響を中心とする。その際，幅広い理解を目指すべく，国際通貨システムの歴史的経緯から始め，現代の諸問題についてまで学習する。そのことによって国際金融の世界で起きている出来事を正確に理解する基礎知識を身に付ける。また，為替変動などから，将来の経済的な変化について予測する力を身に付ける。 基本的には外国為替の基礎知識，国際収支について学び，貨幣が国家をまたいで活動するという事の多面的な把握を行う。さらに，常に変化し続ける経済社会にキャッチアップするため，デジタル通貨やMMTなど，直近で話題になったキーワードについても都度，取り入れる。	
				経済学演習Ⅰ	社会において，経済や金融と全く関わらずに過ごすことのできる人間はいない。しかし，経済や金融について，何らかの形で学ぶ機会のないまま，社会に出ることが多い。それは貯蓄の概念であったり，主権を持つ消費者としての必要な知識であったり，負債や投資の活用であったり，社会保障や保険なども挙げられる。社会に出る際に必要とされる経済，金融の学習範疇にはキャリア教育やライフプランニングなども含まれる。ここでは社会生活を送るうえで，知っておくべき経済や金融に関する基礎知識について，演習形式で広く学ぶことを目的とする。	
				経済学演習Ⅱ	今日の経済において，政府の役割は大きくなってきている。市場の失敗や急激なリセッション，循環的な不景気などに対処するため，経済政策の重要性は高まっている。また地域に目を向ければ，各自治体は人口減少時代において，それぞれの置かれた状況に応じた政策課題に対応する必要がある。本講義では政府や自治体が経済に働きかける手段である経済政策について理解を深めることが目的である。 そういった経済政策は様々なものがあるが，その実施主体である政府や自治体の基本機能についての理解がなければ，経済政策を理解することは難しい。この演習では，経済の中で政府や自治体に求められる役割と，その行動に関するインセンティブといった点を理解することを目的としている。地域が抱える経済問題などについては，自治体と連携しつつ，課題解決型の学習を目指す。	
				国際金融論実習Ⅰ	1980年代より注目を集めるようになってきた「金融化（ファイナンシャリゼーション）」について，とりわけそれが国際的な通貨危機を伴い，世界経済に大きな影響力を持つようになったことについて，その身近な世界への影響を具体的にイメージしながら国際金融について学ぶことが本講義の目的である。その際，証券取引所や日本銀行などへの訪問学習を通じて，イメージのしにくい金融の世界を，実体験を伴った理解ができるように実習形式の授業形態をとる。そして，金融について，他者に教える際にどういった点が理解しやすく，どういった点が理解しにくいのか，教育に際して具体的な課題を見つけながら，国際金融全般の知識を深めていく。	
				国際金融論実習Ⅱ	現在の世界経済に大きなウェイトを持つ国際金融について，国際金融システムの構造という観点で学習を行う。ここでは戦後から現在の国際通貨体制を中心に，貨幣，金融機関，金融市場，金融政策といったものが複雑に絡み合っている事を資料調査等から学習する。主なテーマは変動相場制移行後に続発している世界規模での金融危機について個別事象と理論との両面からの学習である。また，その過程で経済学的方法論を身に付けることも目標とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（地歴・公民）	社会科教材研究Ⅰ（公民分野）	本授業の目標は，次の（１）～（７）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察できる教材を開発することである。 （１）少子高齢化・情報化・グローバル化が政治，経済，国際関係に与える影響（２）文化の継承と創造の意義（３）物事の決定の仕方，契約，きまりの役割（４）個人や企業の経済活動における役割と責任（５）職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善（６）国や地方公共団体が果たす役割（７）財政と租税の役割 本授業では，（１）～（７）のテーマについて，「多面的・多角的に考察する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	
				社会科教材研究Ⅱ（公民分野）	本授業の目標は，次の（１）～（７）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察できる教材を開発することである。 （１）日本国憲法に基づいて政治が行われていることの意義（２）民主政治の推進と公正な世論の形成との関連（３）民主政治の推進と選挙など国民の政治参加との関連（４）地方自治と住民の自治意識との関連（５）日本国憲法の平和主義に基づいた安全と防衛（６）国際貢献を含む国際社会における日本の役割（７）よりよい社会を築いていくために解決すべき課題 本授業では，（１）～（７）のテーマについて，「多面的・多角的に考察する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	
				社会科教材研究Ⅲ（公民分野）	本授業の目標は，次の（１）～（７）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察し，構想できる教材を開発することである。 （１）人工知能の進化による産業や社会の変化（２）災害時における防災情報の発信・活用（３）科学，芸術，宗教と社会生活との関わり（４）日本の伝統と文化（５）個人や企業の経済活動（６）市場における取引と貨幣（７）経済活動や起業を支える金融 本授業では，（１）～（７）のテーマについて，「多面的・多角的に考察し，構想する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	
				社会科教材研究Ⅳ（公民分野）	本授業の目標は，次の（１）～（７）のテーマについて，中学生や高校生が，社会科，公民科の授業において，多面的・多角的に考察し，構想できる教材を開発することである。 （１）仕事と生活の調和と労働保護立法（２）消費者の保護と自立支援（３）少子高齢社会における財源の確保と配分（４）法に基づく公正な裁判の保障と裁判員制度（５）領土問題の平和的手段による解決（６）戦争の防止と世界平和（７）国際社会における文化や宗教の多様性 本授業では，（１）～（７）のテーマについて，「多面的・多角的に考察し，構想する」ために必要な教材について検討を行った上で，各自の教材研究の成果を発表する。	
			数学	解析学Ａ	この講義では，複素数の必要性，および解析学との関連を示すことでその有用性を学ぶ。講義の前半では，オイラーの公式，３次・４次方程式の解法，正17角形の作図，代数学の基本定理などを学び，複素数の必要性および有用性を体験する。後半では，複素関数論の入り口，つまり，指数関数，対数関数，三角関数等，初等関数の複素変数版や，複素関数の微分法，コーシー・リーマンの関係式を通して正則関数に関わる基礎事項を学び「解析学特論」への導入とする。	
				代数と幾何の基礎	多角形や二次曲線などの平面図形や複素平面の幾何学的側面と，行列や方程式，および初等整数論などで学ぶ代数学的側面を有機的に関連付けて学ぶ。具体的には，代数方程式の根と複素平面，コンパスと定規・折り紙による作図，格子点の離散幾何学と連分数，といった高等学校までに学ぶ数学の内容と密接に関連する素朴な数学的対象を，大学において新たに学んだ様々な数学を駆使することで，分野横断的により深く理解することを目指す。	
				応用代数学	離散数学は高等学校までに系統的に学ぶ機会が少ないが，情報科学をはじめとする他分野への多様な応用が知られており，その重要性にゆるぎはない。この講義では，グラフ理論とそれに関係する代数を取り上げる。正則グラフ，平面グラフ，二部グラフなどの基本的なグラフの概念の理解と，握手の定理，オイラーの公式，Hallの結婚定理などの，よく知られる定理の紹介とその証明を行う。また，群作用の考えを用いた，グラフ彩色の数え上げも扱う。	
				線形数学演習Ⅰ	「線形数学Ⅰ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。行列の定義，演算法則および諸性質，逆行列，連立一次方程式の解法，行列の階数，行列式などの基本的事項，さらに，２次・３次元空間における直線や平面の方程式を通し，連立方程式や行列式の図形的な性質を学び，代数的・幾何学的な側面を有機的につなげるための演習も盛り込み，大学で学ぶ抽象的な数学を理解するために必要な基礎事項の定着を目指す。	
				微分積分演習Ⅰ	「微分積分Ⅰ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。数列の極限，連続関数，逆関数，および一変数関数の微分法，テイラー展開，マクローリン展開および極値問題への応用など，微分積分，特に，微分法の基礎事項（計算技法も含む）に関する演習を行う。この演習では，高等学校の数学Ⅲで学んだ微分積分と「微分積分Ⅰ」で学ぶ事柄の橋渡しを意識し，大学で学ぶ数学の基礎となる事柄の定着を目指す。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（数学）	線形数学演習Ⅱ	「線形数学Ⅱ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。「線形数学Ⅰ」で学んだ行列に関わる具体的な計算との関係を意識しながら，抽象ベクトル空間，一次独立性・従属性，ベクトル空間をつなぐ線形写像とその行列表現，内積，固有値・固有ベクトルと固有空間，行列の対角化，および二次曲線の分類などの基礎事項に関する演習を行い，大学で学ぶ抽象的な数学を理解するために必要な基礎事項の定着を目指す。	
				微分積分演習Ⅱ	「微分積分Ⅱ」で学ぶ内容やそれらに関係する事柄について問題演習および補足を行う。特に，積分法（計算技法も含む）や無限級数に焦点を当てる。有理関数，三角関数，指数関数や無理関数を含む関数の不定積分の計算技法，定積分やその面積・体積や曲線の長さへの応用，極限によって定義される広義積分の積分可能性，級数の収束・発散とそれらの判定法などに関わる演習を行い，大学で学ぶ数学の基礎となる事柄の定着を目指す。	
				代数学Ａ	中学校数学における文字と式（単項式，多項式），その展開及び因数分解といった内容のバックグランドとなる代数系の諸概念を理解し，代数学の基礎的な知識，および，代数学的な思考力を修得することを目標とする。「代数学概論」で学習した内容を前提として，多項式環の構成から出発し，多項式の除法の定理，剰余定理と因数定理，また整数環や体上の多項式環の自然な一般化であるユークリッド整域，単項イデアル整域へと進む。	
				幾何学Ａ	この講義では，まずユークリッド空間における開集合について学び，1年次の微分積分学で扱った連続関数の概念が，開集合を用いて記述できることを理解する。その上で，同相という同値関係やコンパクト性，連結性，ハウスドルフ性といった位相空間の性質についての理解を深める。さらに，位相が定められた集合「位相空間」は，伸縮自在な図形と理解できが，その具体例として低次元多様体を取り上げ，特に，閉曲面の分類について学ぶ。	
				解析学Ｂ	数理科学や社会科学分野における基礎的な数学モデルには，しばしば微分方程式が登場し，その重要性が広く知られている。この講義では，具体的な数理モデル（例えば，増殖，振動，競合，惑星の運動など）に言及しながら，基礎的な常微分方程式および方程式系の解法，および，それらの解析手法を学ぶ。また，下級年次における「微分積分」や「線形数学」で学んだ基礎事柄とのつながりを強く意識し，既習事項の理解の深化と定着を目指す。	
				コンピュータ実験と数学	コンピュータを一つの実験ツールとして用い，試行錯誤を重ね体験的に数学的事実を確認し理解することを目指す。また，自ら数理実験を設計し，数理モデルの簡単なシミュレーションができるようになることを目指す。例えば，記述統計，極限定理・パーコレーションなどの確率現象，力学や生物個体数などの微分方程式モデル，音響などの波動現象に関わるシミュレーション，エラトステネスの篩・ユークリッド互除法・連分数等の整数論に現れる様々なアルゴリズムに関する数値実験を通した活動が展開される。具体的事例を伴った奥行のある理解へと誘う。	
				代数学Ｂ	「代数学概論」「代数学Ａ」で学習した内容を前提として，まず整数環や体上の多項式環の自然な一般化である単項イデアル整域，一意分解整域の性質から始める。一意分解整域上の多項式環が一意分解整域であることを示すことが前半の目標である。後半では多項式の既約性に関するアイゼンシュタインの判定法や多項式関数，有理関数について考察し，ネーター環，中国式剰余定理について学ぶ。最後に，商体の概念に触れ，整数環から有理数体を構成する方法について学習する。	
				幾何学Ｂ	球面幾何，双曲幾何は，どちらも平行線の公理を満たさない非ユークリッド幾何学のことである。この講義では，合同変換・相似変換の復習から始め，その自然な拡張として1次分数変換について学ぶ。次に「幾何学概論」で学んだ曲線や曲面の曲率の知識を基に，球面幾何における測地線，球面三角法，三角形の合同条件について学ぶ。最後に，双曲幾何の典型的なモデルである上半平面やポアンカレ円盤を構成し，それらの測地線，双曲三角法，三角形の合同条件について学ぶ。	
				確率統計Ⅲ	「確率統計Ⅰ」および「確率統計Ⅱ」において，確率統計学の基本的な考え方を学んできた。しかしながら，これらの講義では，推測統計学の基礎概念を身に付けるために，正規分布，もしくは二項分布を用いる事例に限定していた。本講義では，「確率統計Ⅰ」および「確率統計Ⅱ」の続編として，さらに進んだ推測統計学の習熟を目標とする。 標本分布として現れる種々の分布を確認したあと，様々な母数の推定と仮説検定について，さらには回帰分析を扱う。	
				応用解析	熱伝導の研究に端を発するフーリエのアイディアは，現在までに，自然科学分野のみならず工学をはじめとする幅広い分野で利用されている。本講義では，高等学校で学ぶ三角関数や大学下級年次における「微分積分」「線形数学」「解析学概論」で学ぶ基礎事項を踏まえ，フーリエ級数，およびフーリエ変換の基礎事項を解説する。さらに，それらの応用として，熱伝導，波動，およびラプラス方程式を代表とする線形偏微分方程式の初期値問題や境界値問題の解法を学ぶ。関数解析などの現代的な手法も適宜紹介する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（数学）	代数学特論	体論における基本的事項を復習し，ガロア理論を概説する。５次以上の方程式に解の公式が存在しないことを証明することを目標とし，２次，３次方程式におけるガロア群などの関連事項を例で見ながら講義を進める。また，「ギリシャの３大作図問題」について解説を与え，正多角形が作図可能であることの必要十分条件を与える。抽象的に展開される代数系におけるガロアの基本定理が，どのように方程式の解の公式や作図問題に応用されるかを厳密な議論の元に理解できることを目指す。	
				幾何学特論	単体的複体，ホモロジー群，基本群といった位相幾何学における基本的な概念について学び，多様体の位相構造について理解を深める。まずは，単体的複体と多様体の関係を学び，それらを用いてホモロジー群を定義し，具体的な多様体のホモロジー群の計算方法（マイヤー-ビートリス完全系列）について学ぶ。次に，基本群について学び，その計算方法（ザイフェルト-ファン・カンペンの定理）の習得を目指す。加えて，基本群・ホモロジー群を理解する上で重要となる，群の表示についても学ぶ。	
				解析学特論	「解析学Ａ」で学んだ複素数と複素関数についての続編として正則関数の積分理論について解説する。複素積分を定義し，正則関数におけるコーシーの積分定理・積分公式を学ぶ。コーシーの積分定理から導かれる様々な正則関数に関する諸性質，特に正則関数の冪級数展開（テイラー展開，マクローリン展開），および，有理型関数のローラン展開，留数定理を取り扱う。また，留数定理を用いて実関数の定積分の計算ができるようになることを目標とする。	
				確率統計特論	確率モデルはランダム性を伴う現象の数理解析に欠かせない。 講義では，時間発展するランダム現象のモデルとしてマルコフ連鎖を扱う。「確率統計Ⅰ」「確率統計Ⅱ」で学んだ基礎事項（確率変数・確率分布など)を簡単に振り返ったのち， マルコフ連鎖に関わる諸概念（推移確率・再帰性・定常分布など）を学ぶ。関連して，ランダムウォーク・出生死亡過程・ポアソン過程なども取り上げて，それらの幅広い応用を概観する。	
				学校数学特論	高等学校数学の科目内容は，数学という学問分野（例えば，幾何，代数など）の系統性を背景にした内容構成になっているが，数学的問題を解決したり，数学を構成・発展させたりする過程や，その過程で働くことが期待される特定の数学的な見方・考え方などの視点から，内容を分析・開発することもできる。本授業では，数学的な見方・考え方をそうした視点の一つとして理解し，実際に教材分析・開発の視点として利用できるようになることを目標とする。授業では，講義形式により，幾つかの数学的な見方・考え方（例えば，特殊化，一般化，帰納的な考え方など）を解説し，演習形式により，そうした視点から高等学校数学で解決可能な問題群の分析・発掘を行ったり，「課題学習」に好適な問題の開発を行ったりする。	
				数学探究Ⅰ	「数学探究Ⅰ」から「同Ⅱ」「同Ⅲ」では，大学までに学んできた数学（代数，幾何，解析，確率・統計等）及び数学教育の中から関心を持った事柄について小グループに分かれて主体的な数学的探究活動を行うことが目標である。関心を持った数学的テーマ・トピックについて情報収集を行い，課題を設定・整理・分析し，それらの背景を系統的に理解するための探究活動を行う。本授業では，主に，数学的/数学教育的テーマ・トピックの選択を目標とする。	
				数学探究Ⅱ	「数学探究Ⅰ」から「同Ⅱ」「同Ⅲ」では，大学までに学んできた数学（代数，幾何，解析，確率・統計等）及び数学教育の中から関心を持った事柄について小グループに分かれ，主体的な数学的探究活動を行うことが目標である。関心を持った数学的テーマ・トピックについて情報収集を行い，課題を設定・整理・分析し，それらの背景を系統的に理解するための探究活動を行う。 本授業では，主に，「同Ⅰ」で選択したテーマ・トピックの数学的背景に関する調査・検討を通した探究活動を行い，その活動内容の発表・および検討を行う。	
				数学探究Ⅲ	「数学探究Ⅰ」から「同Ⅱ」「同Ⅲ」では，大学までに学んできた数学（代数，幾何，解析，確率・統計等）及び数学教育の中から関心を持った事柄について小グループに分かれ，主体的な数学的探究活動を行うことが目標である。関心を持ったテーマ・トピックについて情報収集を行い，課題を設定・整理・分析し，それらの背景を系統的に理解するための探究活動を行う。数学/数学教育に関わる幾つかのテーマ・トピックについての全体的展望を得ることを目標とする。本授業では，「同Ⅰ」で選択し，「同Ⅱ」で調査・検討したテーマ・トピックに関する数学的な背景や成果・知見を最終報告書としてまとめ，その内容について発表を行い，一連の探究活動の総まとめとする。	
			理科	高等学校理科探究Ａ（物理学）	高校物理の内容を基盤として，それらを発展・応用させて物理分野の探究課題に取り組む。物理学の問題解決に必要な解析手法や実験手法などを学び，学んだ知識・技術を総動員して課題に取り組み，成果発表を行う。これらの活動を通じて，物理概念や物理法則を活用する能力や表現力を習得し，物理学を主体的に学ぶ態度を獲得することを目標とする。少人数のグループにより物理学の探究課題に取り組む。はじめに物理学における理論的小課題と実験的小課題に取り組む中で，理論と実験の分析方法や問題解決のノウハウの基礎を学ぶ。その後，グループごとに物理学における探究課題を設定して，本格的な課題に取り組んで行く。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	高等学校理科探究Ｂ（化学）	高等学校の教員を目指す学生を対象として，高校化学の教員として必要な発展的な化学の知識や技能を身に付けられるように，化学分野における発展的内容の講義を行う。まず化学の各分野の基礎を確認したのち，化学の複数の分野が融合したナノテクノロジーや糖質・タンパク質科学などの化学の発展的内容について講義を行い，知識・技能の習得をはかる。そののち，化学の探求活動に取り組み，課題設定能力，探究力，課題解決能力を涵養するための教育を行う。探求課題について研究レポートの作成を求める。	
				高等学校理科探究Ｃ（生物学）	高校生物の内容を基盤として，関連する生物分野の課題探究に取り組む。生物学に関する諸問題の解決に必要な観察・実験手法を学ぶと同時に，得られたデータの解析方法などを学びながら，課題探究に取り組み，成果発表を行う。これらの活動を通じて，生物学の概念を活用する能力や表現力を習得し，生物学を主体的に深く理解することを目標とする。具体的にはグループに分かれ生物学に関する探究課題の設定とそのためのデータ収集に取り組む。また，得られた結果と考えをクラスで共有し，議論をすることにより，コミュニケーション能力を養うと同時に，新たな問題点を見出すことによって，生物学に関する理解を深める。	
				高等学校理科探究Ｄ（地学）	高校地学の内容を基盤として，関連する地学分野の課題探求に取り組む。地学に関する諸問題の解決に必要な観察・実験手法，フィールドワーク技法，データ解析方法などを学びながら，課題探究に取り組み，その成果を発表する。これらの活動を通し，現状を論理的に分析し本質的な課題を明らかにする力や，地学的手法や考え方を活用する力，自身の考えをわかりやすく説明する発信力を習得する。	
				物理数学	微積分と線形代数はいずれも応用数学の中で最も重要な概念である。物理学では力学，電磁気学の記述に不可欠なツールとなる。物理学においてこれらが重要なのは，ニュートンが微積分を発明したこと，ギブスが電磁気学の簡潔な記述のために，微積分と線形代数を融合してベクトル解析という分野を作ったという歴史的な事実からもうかがい知れる。しかしながら，今やその応用範囲は物理学にとどまらず，化学・生物学・地球科学の自然科学一般はもちろん，経済学・社会学などの人文科学においても必須のツールである。本講義では，これらの２つの数学的ツールについて学ぶ。	
				基礎物理学演習	本講義では日常生活とのつながりの深い熱力学と幾何光学について学ぶ。熱力学では，熱力学的平衡状態とは何かから入り，温度と熱の概念を導入し，物質（特に理想気体）の熱的性質を概観した後に，熱力学第一法則，熱力学第二法則までを学ぶ。幾何光学ではレンズや鏡のつくる像の基礎と光学機器（カメラや顕微鏡）のしくみを理解することを目標とする。本講義の内容を修得することで，日常に見られる自然現象や光学機器などに対する見方が変わることを期待する。また，本講義の授業内容は小・中学校理科の単元[光の性質（小３）；空気と水の性質（小４）；金属，水，空気と温度（小４）；光と音（中１）；状態変化（中１）；天気の変化（中２）；エネルギー（中３）]とも関わりが深いため，学校現場で行う（あるいは行うことが可能な）実験などを交えつつ講義を進めていく。	
				応用物理学演習	電車や車などの乗り物の揺れや弦楽器や管楽器の音色，はたまた地震動の伴う建物の揺れ，更には動物の心臓の拍動など，日常生活によく見られる現象や自然現象，更には生命現象など様々な場面で振動現象が見られる。本講義では，こうした振動現象のうち最も簡単な単振動の性質から初めて，減衰振動，強制振動，連成振動と続き，波動現象についてまで学んでいく。また，中等教育の物理分野の学習内容と関連づけて，流体力学の初歩的内容（アルキメデスの原理，ベルヌーイの法則，揚力，粘性抵抗，慣性抵抗など）についても学ぶ。	
				力学	物理学は複雑な自然現象の中からその本質を抽出する学問である。特に力学はその代表例であり，自然現象を数理的に理解する美しい学問体系の一つである。本講義では，質点の力学および剛体の力学を扱い，微分積分法を駆使して物理法則の記述や現象の解析を行う。そして，次に示す質的に異なる能力を修得することを目標とする。（１）力学現象を理解する上で欠かせない，物理法則の基本的知識や数学的技能を習得すること。 （２）力学現象を物理法則に基づいて定式化し，それを数学的技能を用いて解き，その解の性質を解釈し説明するといった応用力を修得すること。	
				電磁気学	電磁気学とは電気と磁気が関係する現象を数学的に記述する理論体系である。本授業では電気，磁気が関係する現象の発見にまつわる話や歴史的いきさつ等についても触れつつ，電磁気学の理論体系について学ぶ。静電場や静地場の学習で習得した知識を前提に，物質中の電磁場の振る舞いと動的な電磁気現象についての理解を目標とする。その数学的記述にはベクトル解析の初歩的知識が必須のため，同時にベクトル解析の基礎についても学ぶ。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	熱物理学	統計力学とは物質の究極の構成要素として原子をミクロな実在と仮定し，構成論的に物質の性質を解き明かそうとする学問である。ボルツマン，ギブスによって打ち立てられた統計力学の体系は物質の詳細によらずに成り立つ熱力学と完全に無矛盾であり，温度やエントロピーの正体について分子論的解釈を可能にする。さらに熱力学ではインプットとして必要となる物質別の経験データ，例えば比熱，圧縮率，膨張率，状態方程式等をミクロな力学に基づいて導出することが可能となる。統計力学を建設する上で重要となる原理（概念）の厳密な数学的な基礎付けは，未だに研究対象となっており未解決問題であるが，講義ではどのようなことを受け入れないといけないかということと，それを認めた上で如何に熱力学と無矛盾な理論を構成できるのか，比熱や状態方程式の具体的計算法の習得に時間を割く。	
				量子物理学	光の本性と極微な物体に関する基本法則である量子力学を学ぶ。量子力学は，微視的世界の素粒子の自然法則や巨視的世界の固体の物性などを理解する上で，欠かすことのできない学問である。この講義を通じて量子力学の基礎概念と基本法則を把握し，量子現象を記述するために必要な演算規則を習得する。講義内容は次の通りである。（１）前期量子論:19世紀後半から20世紀初頭にかけて，光や原子に関する様々な実験事実が古典物理学（力学，電磁気学）の破綻を示した。これらの問題を解決するために導入された“量子”の概念とその成功を歴史的背景とともに知る。ここで「波動と粒子の二重性」という量子論の基礎概念を把握する。（２）量子力学:量子力学の基本法則の枠組みや定式化を学び，そこに現れる演算規則を習得する。具体的な問題を扱って，古典論と量子論の世界にあるそれぞれの粒子の性質の相違点と類似点とを検証する。	
				熱物理学演習	統計力学の応用について学ぶ。個性のない分子の集まりによって，集団としての物理的・化学的性質がどのように現れるのか，ミクロカノニカル集合とカノニカル集合という２つの立場から追及する。まず，気体の低密度での状態方程式や，高温での固体比熱についてのデュロン＝プティの法則といった「普遍的な性質」がいかに導かれるかを学んだ上で，高密度・低温の領域で，分子の個性が物質全体としての振る舞いにどのようにあらわれるのかを見ていく。また，そのような性質が気体の状態変化，化学反応論（質量作用の法則等）といった，中等教育で登場する化学分野の法則とどのように関連するのかについても触れる。さらに，統計力学の考え方が物理にとどまらずいろいろな分野で応用可能であることの紹介として，所得分布の簡単な市場統計モデルを扱い，機会の平等が結果の不平等につながることを見る。	
				量子物理学演習	光の本性と極微な物体に関する基本法則である量子力学を学ぶ。量子力学は，微視的世界の素粒子の自然法則や巨視的世界の固体の物性などを理解する上で，欠かすことのできない学問である。本演習を通じて量子力学の基礎概念と基本法則が自然界の現象にどのように関わっているのかについて具体例を学ぶ。本演習では次の内容を扱う。（１）ポテンシャル散乱とトンネル効果（２）調和振動子ポテンシャルとエネルギーの量子化（３）角運動量の量子化ならびに水素原子の構造。	
				現代物理学Ａ	この講義では量子統計力学を基礎として発展した物質の物理学について学ぶ。とりわけ工学的な応用面でも重要な固体の性質に焦点をあてる。固体を形づくる原子やイオンや電子の運動という微視的な視点から始めて，固体の示す巨視的な振る舞い（温まりやすさ，音の伝わり，電気の伝わり，熱の伝わり）を明らかにする。この講義を受ける間に，我々の身の回りにあふれる固体の物性が量子の世界の賜物であることを痛感してもらいたい。格子波のエネルギー量子（フォノン），パウリの排他律，フェルミ気体といった量子統計力学の基礎概念を順次導入しながら，以下の題材を扱う。（１）固体を形づくる原子，イオン，分子，電子の性質と結晶の結合力（２）固体中において規則的に配列された原子やイオンの格子振動（３）金属の自由電子模型（４）バンド理論と金属・絶縁体・半導体。	
				現代物理学Ｂ	いわゆる素粒子・原子核があらわに顔を出す現象の概略を理解する事を目標とする。力学や電磁気学などこれまでに受講者が修得した知識との関係や，前期量子論の発展の歴史に留意しながら，（１）原子の構造，（２）原子は何故安定して存在できる？，（３）原子の周期律，（４）原子核は何故安定して存在できる？，（５）不安定な原子核，（６）霧箱で見る放射線，（７）地球起源の放射線，（８）宇宙起源の放射線，（９）放射線をどうやって測るか？，（10）相対論の話，（11）エマルションで見る放射線，（12）放射線の電荷をどうやって測る？，（13）電離損失，（14）放射線強度をどうやって表す？などのテーマを簡単な実験を交えながら扱う。	
				物理学実験Ｉ	私たちの毎日の身の周りの日常生活において様々な力学的，電磁気学的，光学的な物理現象が知らず知らずのうちに生じている。基礎物理学実験では，以下の身近な現象を素材とし，実験を通してこれらの現象を体験的に学習する。また，本実験は，自然科学を研究する最も基本的な実験手法（コンピュータ活用を含む）を修得することのみでなく，科学的なものの見方・考え方を身に付けることも目的とする。さらに，測定結果をきちんとしたレポートとしてまとめ，報告することができるようになることも重要な目的の一つである。物理分野を専門とする学生はもちろん，専門としない学生にとっても有意義な実験テーマを厳選している。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	物理学実験Ⅱ	いくつかの実験課題を設定し，これまでに学んできた基礎知識をベースとして，（1）課題の内容を理解する事，（2）実験装置などを製作する事，（3）データを収集し結果をまとめる事，（4）まとめた結果を発表して人に伝える事，をきちんとやり遂げる能力を養う。５～６人程度のグループに分かれて，１課題５回程度をかけた実験に取り組む。また適宜発表会を行う。実験課題としては，光や音などの各種センサーを使った実験や，霧箱やエマルションを利用していわゆる自然放射線を観察・計測する素粒子・原子核分野の実験を行う。	
				物理教材実験Ⅰ	理科離れが大きな問題になっている現在，小・中・高の教育現場において質の高い実験や観察を児童・生徒に体験させ，自然界の現象や身のまわりの自然について，興味や好奇心を喚起させることはきわめて重要であり，そのような実践的機動力を有する教員が強く求められている。本実験では，小・中・高の学校現場に配置されている実験器具や設備などを有効に利用できるための実践的訓練を行う。使用される頻度の高い実験器具や設備を教える立場から使用し，経験的・実践的に教育効果や実験方法を検討する。さらに自ら，教育的教材を設計し，製作する能力・技術を身に付けることを目的とする。	
				物理教材実験Ⅱ	初等・中等教育の理科授業において，座学を中心とした知識享受に加え，それらを裏付けるような観察・実験を相補的に実施することが効果的である。そのためには，教育現場で使用される実験器具を有効に活用できるためのスキルを身に付けることが不可欠である。また近年では，ICT機器や安価なマイコン・センサーの普及に伴って，それらを利用した新たな教材開発が活発に行われている。そこで本実験では，従来型の物理実験に加え，現代的な機器を導入した実験を自らデザインすることを通して，それらの教育的効果の検証および，教材開発能力の向上をねらう。	
				物理学ゼミナールⅠ	物理学の専門分野および理科教育に関する題材について自ら課題を見出すための取り組みを行う。３年生までに学ぶ基礎知識と研究題材に関する専門知識を実践的に活用することで，総合的な知力（問題把握，分析的思考，豊かな発想，論理構築，説明能力）を高める。各題材に関する専門知識および基礎技能を習得するために，学術論文誌の文献報告や専門書の輪読を行う。この際に主として学生が発表を行い，自らの考えを他者に伝達する上で最低限必要な合理的説明能力を習得する。	
				物理学ゼミナールⅡ	物理学の専門分野および理科教育に関する題材で自ら立てた課題に関連した学術論文等の講読演習を行う。３年生までに学ぶ基礎知識と研究題材に関する専門知識をもとに読解し，その内容を発表して質疑応答を行うことにより，得られた知見を卒業研究に活用する。これにより，総合的な知力（論理読解力，分析的思考，プレゼンテーション能力）を高める。担当教員との相談に基づき，卒業研究の題材に関連した学術論文等を設定し，各自が読解を行う。中間指導を受けながら読解を進め，取りまとめた内容についてはゼミ内で発表を行い，他者からの質疑に応答する。学術論文等の書かれた目的を踏まえて，使用する方法との整合性，結果に示されるデータ解釈や考察の妥当性を吟味し，論文の論理性をつかむことを重視する。また，明確かつ合理的な説明能力を身に付けることも重視する。	
				物理化学Ａ	物質の示す様々な化学現象を理解するには，物質を構成する原子の組換えや結合様式の変化によって生み出される物質の質的変化を，原子・分子レベルで量子論的に理解するのみならず，分子の集合体として統計力学的にとらえる必要がある。本講義では，この物質のマクロなとらえ方において見出される物質の諸法則を与える熱力学について学ぶ。熱力学の基礎について理解し，状態変化を決める要因を考えて，化学現象を理論的に説明する能力を身に付けることを目標とする。	
				物理化学Ｂ	本講義では，物理化学の応用分野である高分子化学に関して，その全体像を理解することを目標とした講義を行う。高分子の平均分子量，高分子の一次構造と立体化学構造，溶液中における高分子鎖の形態，高分子溶液物性，高分子の結晶化，高分子の粘弾性，ゴム弾性，ゲルの性質，高分子の光学的性質，高分子の合成，高分子の反応，機能性高分子化合物について解説し，知識の定着を図るために演習問題を課す。高分子化学の中で，物理化学の知識がどのように使われているのかに重きを置いて，解説を行う。	
				物質化学	化学平衡および化学結合について理解し，化学反応と分子構造を決める要因を考えて，自然現象を説明する能力を身に付けることを目標として，以下の内容の講義を行う。まず熱力学の諸法則および種々の熱力学状態関数について論じた後に，化学平衡について定量的議論を行う。次いでこの方法を種々の相の間の平衡へ拡張する。これによって蒸留の定量的取り扱いの基礎や混合物の相変化の解釈などを明らかにする。また，分子論に立脚した取り扱いを行うために量子論について学ぶ。ここでは，水素原子の電子軌道について詳しく考察し，２個以上の電子をもつ原子にそれらの計算を拡張する。これによって，原子半径，イオン化エネルギー，電子親和力の複雑な周期性を理解する。さらに分子に量子力学を適用して，化学結合の本質を理解する。ここでは，水素分子をはじめとして，二原子分子，多原子分子の化学結合を原子価結合法や分子軌道法により取り扱う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	有機化学Ａ	有機化合物の構造，反応，性質を学ぶ有機化学は現代社会を支えている基本的な学問分野で，有機化学による医薬，ポリマー材料，農薬等の化学物質の開発は人類の長年の夢を実現させ，人々の生活を安全で快適なものにしてきた。また，生体の中で起こっている反応の，ほとんどは有機反応である。したがって教員を目指す者にとって，様々な身の回りのものやできごとの仕組みを理解するために有機化学は基本的で必要不可欠な知識である。本講義では，これまでに学習した化学の内容の確認の後，有機化合物の官能基の化学（振る舞い）を理解し，振る舞いを予想できる能力を問題を解きながら身に付ける。	
				有機化学Ｂ	有機化学は化学における基礎的で重要な学習分野の一つである。生理活性のある化合物を理解するためには，その化合物の性質を知っておかねばならない。大きな生理活性のある化合物には有機化合物も多い。これまで学習してきた様々な有機化学反応に引続き，大学での有機化学の重要反応の学習を行うこととする。 本講義では非常に多くの有機化合物に含まれているカルボニル基の性質および関連する合成反応（カルボニル付加反応など）を取り扱い，これまでに学習した内容を含めた総合的な演習も行う。	
				生物化学	この授業では，天然有機化合物の理解を深めるために，アミノ酸，タンパク質，酵素，DNA，糖質を中心に学ぶ。有機化学に関する基本事項を確認しながら，アミノ酸の構造と性質および化学合成，タンパク質の構造と性質，ポリペプチドの化学合成，ヌクレオチド・核酸・DNAの構造と性質，単糖と多糖の構造および性質と化学合成，糖鎖の機能，糖鎖の構造解析（NMR，質量分析），酵素の反応速度論と阻害について，生化学と有機化学的な観点から講義を行う。	
				基礎物理化学演習	物質の構造や状態変化，化学反応のような化学の諸現象を理解するためには，物質を構成している原子や分子の性質を知ることが不可欠である。原子・分子のように非常に小さな微視的粒子の振る舞いは，量子力学の概念を使わなければ説明することができない。本演習では，量子力学を化学に適用した学問である「量子化学」について講述し，演習を行う。量子化学の基本原理を習得し，それに基づいて原子や分子の性質および物質の性質を理解することを目的とする。	
				物理化学演習	本演習では，反応速度論および分光学について理解し，化学反応を支配する要因を考えて，自然現象を説明する能力を身に付ける。また，量子化学と熱力学の間を橋渡しする統計力学を理解して，物理化学の学習を総まとめする。反応速度論では，反応速度を反応体や生成体の濃度の関数として表す反応速度式の決定法について学び，実験的に決定された反応速度式から反応機構について知見が得られることを理解する。分光学は分子の同定，濃度の決定に有用であり，マイクロ波スペクトルは原子間距離・結合角に関する知見を，赤外およびラマンスペクトルは結合の振動周期についての情報を，紫外可視分光学は解離エネルギーや電子励起状態に関する知見を与えることを学習する。統計力学は，個々の分子の性質と物質の性質とを連携づける学問であり，統計力学および分光学的知見を用いると，完全気体についての熱力学的性質を計算することができることを学ぶ。	
				有機化学演習	本演習では理科の学生向けに，初歩の有機化学を解説し演習を行う。有機化学は，我々の日常生活と深い関わりをもっている。例えば，医薬品，化粧品，高分子材料，染料などの製造において，有機化学はその基盤となっている。また，他の領域の科学とも密接な関連があり，例えば，生体現象を分子レベルで理解するためには，有機化学の考え方は必要不可欠となっている。この演習では基礎知識と基本概念の習得に重点をおき，系統的に分類された様々な有機化合物について，その構造，性質，合成法および反応について学ぶ。分子モデルを自身で構築することにより，立体化学の理解を深める。	
				機器分析演習	機器分析は，物質の同定，構造決定，定量分析を主な目的とするもので，化学の実験を行う上で必要不可欠となっている。本演習では，クロマトグラフィー，赤外線吸収スペクトル，紫外可視吸収スペクトル，質量分析，プロトン核磁気共鳴スペクトル，C13核磁気共鳴スペクトル，二次元核磁気共鳴スペクトルなどの各種機器分析法を取り上げ，有機化合物を対象とした有機機器分析に焦点を置き，物質の単離精製法，機器分析の原理，解析方法などについて，解説と演習を行う。	
				化学探求演習Ⅰ	初等および中等教育の化学分野における既存の教材を分析し，その効果や有効性を検証したうえで，教育現場において化学教材を適切に運用できる知識・技能を身に付けることを目標とした演習および実習を行う。はじめに化学の授業における教材の役割と効果について解説し，その後，初等および中等教育で使用されている化学教材（特に実験教材）の分析・検証を行っていき，そのようにして得た知識に基づいて，学生が教員になったときに，授業の中で化学教材を正しく使用できるように，演習および実習を行う。さらに，修得した知識に基づいて，新しい化学教材の探求を行うことも目的とする。	
				化学探求演習Ⅱ	化学探求演習Ⅰに引き続いて，初等および中等教育の化学分野における既存の教材を分析し，その効果や有効性を検証したうえで，教育現場において化学教材を適切に運用できる知識・技能を身に付けることを目標とした演習および実習を行う。初等および中等教育で使用されている化学教材（特に実験教材）の分析・検証をさらに進め，教材に関する知識を深化させて行く。そのような知識に基づいて，学生が教員になったときに，授業の中で化学教材を正しく使用できるように，演習および実習を行い，さらには，修得した知識に基づいて，新しい化学教材の探求を進めて行く。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	化学ゼミナールⅠ	本演習では，卒業研究の遂行に必要な判断力，理解力，表現力を身に付けるために，個々の研究課題に関連した文献や論文を検索し，精読して，その内容の報告を行い，研究能力の向上を図る。精読して理解した内容をもとに，自らの卒業研究の進展状況の経過発表を行い，理解を深める。各自が精読した論文の発表に必要なプリントを準備する。これをもとに受講者および教員との議論を行う。実験報告も各授業回ごとに行う。また，将来の教員として理科教育の実施に必要な知識や手法を化学の研究を通じて習得する。	
				化学ゼミナールⅡ	本演習では，化学ゼミナールⅠに引き続き，卒業研究の遂行に必要な判断力，理解力，表現力を身に付けるために，個々の研究課題に関連した文献や論文を検索し，精読して，その内容の報告を行い，研究能力の向上を図る。精読して理解した内容を基に，自らの卒業研究の進展状況の経過発表を行う。受講者は各自の卒業研究実験の結果をまとめ，発表し，他の受講者，及び担当教員とディスカッションする。また，実験に必要な文献を購読したり，紹介，輪読を分担して行ったりして，将来の教員として理科教材の開発と実施に必要な知識や手法を化学の研究を通じて習得する。	
				物理化学実験	物理化学に関する基礎的な実験を行い，卒業研究を行うために必要な基礎力を養うとともに，体験的学習を通して観察力，思考力を培う。なお，この実験は物理化学Ａ，物理化学Ｂ，物理化学演習ＡおよびＢと密接な関連を持ち，それらの講義および演習とあわせて，化学の実践には実験と理論の両方が必要であることを体得することも目的とする。具体的な実験テーマとしては，相平衡，反応熱，液体の粘度，反応速度，吸収スペクトル，電気伝導度の内容に関する実験を行う。	
				有機化学実験	現代社会では，有機化学の知識に基づいて合成された医薬品，洗剤，繊維，プラスチック，色素などの有機化合物が私たちの豊かな生活を支えている。本実験では，有機化学における生化学的な実験と医薬品や糖質合成の基礎を修得すること目的とし，有機化合物の取り扱い，合成，分離，精製，確認法，機器分析に関する基本的操作の習得を目標とした体験的授業を行う。具体的な実験テーマとしては，糖質・タンパク質の定性実験，DNAの抽出，解熱鎮痛剤からのサリチル酸の単離とサリチル酸メチルの合成，糖の保護とサリチル酸メチルの核磁気共鳴スペクトル測定，糖のグリコシル化と単糖の核磁気共鳴スペクトル測定，糖の脱保護と核磁気共鳴スペクトル測定の内容に関する実験を行う。	
				生物学基礎演習Ａ	細胞や細胞内小器官について，単細胞生物や動物の組織を例に解説する事によって，生物を細胞や分子レベルで理解する。また，身近なセキツイ動物としてニワトリを取り上げ，ニワトリとヒトの体制を比較しながら，生物学に関する基礎的な知識の定着をはかる。また学んだ知識を実践演習する場としてニワトリの解剖を行う。これによって，知識として得た情報を実際の生物で確認し，より理解を深めることができる。さらに，植物に関しても比較的種を同定しやすい樹木を対象にしながら，身近な自然観察を行い，地域の自然への理解を促す。	
				生物学基礎演習Ｂ	ウイルスや細菌，遺伝子組み換えという核酸の関わる生命現象について解説し，生物の根本である遺伝物質についての知識を増やすとともに，遺伝のしくみについても理解を深める。また，遺伝子の違いとともに身近な生物を対象に生物多様性について考える。近年，生物多様性はなぜ重要とされているのか？特に外来種が生物多様性へ与える危機性について理解を深める。さらに，植物を用いた生物多様性や外来種に関する課題研究について考える。これは大学周辺の自然を利用して実際に活動を行う事によって，生物多様性を含めた自然と触れ合い問題意識や今後の課題について考える。	
				生物学特論Ａ	メンデルが遺伝の法則を見出してから，遺伝学には様々な発見があった。中学校三年生で習う遺伝の法則を暗記ではなく，その内容を深く理解したのちに，その後に解明された遺伝現象についても理解できるようになることを目標とする。また，最近の分子生物学の発展にともない，発生生物学の研究も大きく様変わりし，発生現象を遺伝子の言葉で語られる時代となった。そこで，科学雑誌やテレビの科学番組で紹介されている発生遺伝学に関する最新の研究成果を理解できるようになることを目標とする。	
				生物学特論Ｂ	現在我々が目にする様々な生命現象や生物多様性はすべて進化の産物であり，生物学に対する深い学びを得るうえで，進化の概念に対する正しい理解は不可欠である。しかし，一方で「進化」という用語自体がごく一般的な用語として用いられる現在では，進化現象に対する誤った理解も広く共有されており，近代的な進化学は必ずしも正しく理解されているとは言えない。本授業ではこうした進化学の基礎的な概念や知識を網羅的に学ぶとともに，身の回りの生物を題材に，進化の結果である生物多様性をありのままに捉え，理解することを通して，これまで学んだ知識を進化学的な視点で捉えなおし，生命現象に対するより良い観察眼を養うことを目的とする。	
				生物学特論Ｃ	生物の細胞内には多種多様なタンパク質・DNA分子が存在しており，それらの分子が複雑な反応を行うことで様々な生命現象を営んでいる。本講義は今までに学んだ生命科学に基づき，最新の研究動向を理解すると同時に，生命をタンパク質やDNAレベルで理解する能力を養う。さらに，地球上に生活している生物は，一つの種だけが独立して生きることはできない。なぜ地球上に生存している生物はこのように進化したのか。その謎を，現在頻繁に用いられている，核酸やタンパク質などによる解析結果をもとに，主に植物の種分化から考える。系統進化の解明は分子的手法の導入により，その地位を確立した分子データがなくては語れないものである。すなわち種の進化を考える場合，分子進化が重要なことを理解することを目的とする。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	臨海実習	生命誕生の場所である海の生物について，多様性と生活の場での様子を観察する。また，海辺でなければ学べない分類学・生態学的内容について，実物や実験を通して習得する。磯採集による海岸の生物の観察とスケッチを通して，生物の構造を種類ごとに細部まで見定める力を養い，構造と機能の関連性についても推察する。また，夜間のプランクトン・底生生物の採集と分類，顕微鏡を用いた形態観察を行い，食物連鎖を底辺で支える微生物への興味・関心を養う。そのほか，海岸の動植物についての標本の作成し，形態観察による分類を行うと同時に，海の生き物に関する自由研究を行い，海の生物に関する基礎知識を養う。	
				里山体験実験	里山は我々にとって身近な自然環境の一つである。里山が包蔵する多様な生産力の発見を通して，里山の重要性を考える。また，野外での様々な実習体験を通して，自然への興味を深め，探求能力を高める。学外での共同生活を通して大学生活への意欲を高める。フィールドワークを中心に，炭焼き・低温帯林の観察を行う。さらに，農産物を栽培し，実際のDNA解析により複数クローンを抽出，糖度および粘度などの品質比較などを行う。また，森林労働の本質的意義を踏まえ「共生とは何か？」を，個々人が実践を通して考え体得することを目指す。	
				野外生物実習	我々が暮らす日本列島は南北に長く伸びた島弧からなっているため，各地でみられる自然環境は大きく異なる。この授業では，愛知県とは大きく異なった生物の棲む野外実習を通して，我が国に見られる動植物の生態系が如何に多様であるかを理解することを目的とする。また，本実習の運営には可能な限り受講者自身に主体的に携わってもらうことを目指しており，遠隔地において大人数の野外実習を運営することを通して，社会性・協調性を育み，自然観察を目的とした校外学習やイベントを行う上で必要な経験や知識を習得することも目的とする。	
				環境生物学実験	日本列島及び愛知県の生物的自然の特徴や身近な動植物がどのように多様化したのか，について実習や座学を通して学ぶ。特徴的な環境に生育する植物を観察，採集し，標本作成，種同定を行なったり，適応に関わる形質を計測したりすることで，身近な生物多様性を認識し，理解しようとする能力の育成を図る。これにより自然環境保全について適切に判断し行動する力を養うと同時に，生物が環境との関わりの中でどのように生活しているかについて，実際の動植物との関連性を学ぶことによって理解する。	
				細胞生物学実験	私たちの身体を構成する細胞は，組織・器官の役割ごとにたくさんの種類が存在する。その細胞の基本構造は変わらないが，それぞれの特徴があり，機能に応じた形態的特徴がある。本実験では基本的な実験器具の操作方法を学ぶとともに，細胞を構成するタンパク質の解析方法や得られた結果の定量法を習得する。細胞が役割を得る過程を観察することによって動物細胞の基本を学ぶ。また，グループごとに課題を作成し，それを解決することによって細胞についての深い理解を目指す。	
				植物生活環実験	植物の生活環は種子からはじまり種子で終わる。その過程の中で，発芽，栄養成長，生殖成長と切り替わる。各種作物を実際に栽培し，その栽培管理を通し植物栽培の技術を習得するとともに，成長過程で見られる様々な現象を実験観察のもとで体験する。 授業は，植物栽培の圃場（観察園）での実験と実験室での実験を交互に行う。圃場での実験は各種作物の栽培のための準備から，播種，定植，栽培管理，結実までを行い，週数の経過に伴って見られる頂芽優性，雌雄性（雄花，雌花），栄養繁殖（挿し木）等の生物現象を体感する。実験室の実験では，雌蕊抽出物への花粉管伸長の影響，子房内の胚珠と花粉管の観察，成長点と細胞分裂，植物ホルモンの影響，遺伝分離について実験する。	
				発生遺伝学実験	この実験では，遺伝学と発生学に関する基礎的な実験を行う。遺伝学の実験では，キイロショウジョウバエを用いた交配実験を行い，基本的な遺伝の法則を実際に観察することによって，遺伝に関する理解を深める。また，発生学の実験では，昆虫の卵形成，精子形成過程の観察，ウニの受精と正常発生過程の観察等を通して，動物が特徴的な形態を形成していく過程を観察し，発生に関する興味・関心や理解を深めることを目標とする。	
				系統進化学実験	高等植物の形や構造を理解し，さらに，分子系統学的実験を行い，種分化を理解させることを目的とする。実験は，植物体から酵素タンパクを抽出し核酸の抽出やDNAの増幅，塩基配列の決定等を行う。以上の実験結果から，植物の多様性を考える。材料は，主にタンポポなどの身近な植物を用いる。現在日本列島には，セイヨウタンポポ，アカミタンポポの，２種のヨーロッパ原産のタンポポ属植物が帰化している。特にセイヨウタンポポの大部分が交雑によって在来種の遺伝的特性を取り込み，スーパー帰化種として在来種の生育地にまで分布を拡大していることが明らかになった。そして分子データに基づく解析を始めた1995年頃はその遺伝的多様性は低かったが，近年の調査では遺伝的多様性が増加しつつある。そこで本実験では，多様性が増加しつつある雑種性帰化タンポポの起源（親子鑑定）を分子データ及びその倍数性から明らかにすることを目的とする。その結果，今まさに起きている種分化の現象が浮かび上がってくると思われる。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	生物学ゼミナールⅠ	卒業研究に取り組むとき，さまざまな実験，観察を行うほかに，研究に関連した数多くの文献を読むことが必要である。特に卒業論文を書く段階では，関連分野の先人の業績（文献）を理解した上で，自分の研究の意義を明確にする必要がある。この授業では，卒業研究に関連した生物学分野の文献を輪読することにより，専門分野の文献を読んで理解する力を養う。 毎時間，卒業研究に関連した総説的な文献の輪読を行い，内容について討論する。なお，授業は，研究室ごとに行う。	
				生物学ゼミナールⅡ	学生自身が卒業研究を行う上で必要なさまざまな実験手法や観察結果を発表し，議論を行う。関連した数多くの文献を参考にして，学生自身の研究がどのような位置づけであるか理解するとともに，文献調査や自身の実験結果を研究室の学生同士で議論し，研究方法の改善や他の研究との比較検討を行う。担当教員とともに考えた仮説やその検証方法に考えて，課題解決に向けて研究を遂行する。これにより，問題提起や解決能力を養うとともに，コミュニケーション能力や論理的な思考能力を身に付ける。	
				基礎地球科学フィールドワーク	固体地球（地圏），海や河川（水圏），大気（気圏），それに私たちを含む生き物（生物圏）が相互に影響を与えながら変化するという，巨大で複雑な系（地球システム）が機能していることがわかってきた。教育現場でも，地球の理解と私たちが取り組むべき課題の探求が重視されるようになってきた。これからの時代は「地球」が重要なキーワードである。地球の仕組みとその営みを理解するためのファーストステップとして，フィールドワーク（野外調査）によって地形や地質岩石，古生物（化石）などを観察・観測する。	
				地球環境科学	地学分野は，自然そのものの「構造」とその「変化」を研究の対象とし，その理解に総合知が要求される点が， 他の要素還元的な分野とは異なる。この講義では「地球」と「宇宙」，その「構造と進化」をキーワードに，私たちを取り巻く自然環境の性質と成り立ちについて科学的視点から考え，地球環境に対する理解を深める。	
				地学野外実習	地学分野では， 現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため， 望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。したがって， 地学において野外調査の基礎を身に付けることは極めて重要である。この実習では地質，地形，岩石の諸分野に関連したフィールドに行き，観察や測定，データ記載などを行うことにより，野外調査法と地球科学の基礎を学ぶ。	
				地質学	古地磁気学とそれに関連した分野について学び，地球科学について理解を深める。古地磁気学は地球科学の重要な分野の一つであり，地球科学の発展に大きく寄与してきた。この講義では， 古地磁気学の基礎を深く学び，古地磁気学のいくつかの応用についても理解を深める。	
				固体地球科学Ａ	地球（特に地殻）でどのような現象が起きているのか，また地球がどのように進化してきたのかを探求するためには，その構成物質である岩石についての理解が不可欠である。この講義では，火成岩に関連する基本的な事項の解説を通して，地殻の生成についての理解を深める。	
				固体地球科学Ｂ	地球物理学は，物質としての地球を物理法則に基づいて理解する学問であり，流体系と固体系に大別される。この講義では，測地学や地震学等の固体地球物理学に関する分野の基礎的な考え方，弾性波を用いた地球の内部構造を推定する方法について学ぶ。	
				大気・水圏科学	日本付近を含む中緯度地域における大規模な気象現象は，例えば，温帯低気圧，台風，前線活動などに代表される。この講義では，それらの現象の背景にある熱力学や力学といった物理的原理を，数式による取り扱いを含めて学ぶ。	
				宇宙科学Ａ	人類の宇宙に対する理解は圧倒的な速さで更新され続けており，特に過去数十年で，宇宙が激しい活動現象で満たされていることがわかってきた。この講義では，宇宙における高エネルギー天体物理学とそのメカニズムについて，基礎となる物理過程（力学・統計物理学・熱力学・電磁気学等）や観測手法等も含めて包括的に学習する。	
				宇宙科学Ｂ	この講義では，地球の運動に始まり，太陽系の天体の特徴や構造，恒星の性質， その進化や見え方，そして銀河の構造から宇宙の膨張までを，その理解の基礎に重きを置いて学習する。初歩的な数学と物理を使って，天文学に特有の考え方を丁寧に一つずつ理解する。	
				地質学演習	古地磁気学は地球科学の重要な分野の一つであり，地球科学の発展に大きく寄与してきた。地層の調査・研究から過去の情報を引き出すとき，地質学特有の考え方と思考が必要になることがある。この講義の目標は，演習を通じて地質学の基礎的な考え方と思考力を習得することである。	
				固体地球科学演習Ａ	固体地球を構成している物質は基本的に岩石である。地球表層に存在する岩石の研究によって，地殻の形成についての知見を得られる。岩石を調べるにあたり，野外での露頭観察や室内での岩石薄片の顕微鏡観察が最も基本的かつ重要な作業である。この授業では，大陸地殻の重要な構成岩である花崗岩が露出している地域に赴き，岩石の観察を行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	固体地球科学演習Ｂ	地学分野では，現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため，望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる観測事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。観測結果は大量のデータとして蓄積され，各分野の理解・発展に活かされる。数字の羅列にすぎない観測データを，目に見える意味のある形にするためには，コンピュータを使った処理が必要である。この演習では，観測データの統計的取り扱いについて，基本的な事柄を演習形式で学ぶ。	
				大気・水圏科学演習	日本付近の天気の諸現象について，それらの移り変わりの実態や仕組みについて演習形式で学ぶ。すなわち，様々な気象資料を総合して，天気が移り変わるとき， 大気中で何が起きているのか，また，なぜそうなるのかを理解する。また，これらの理解と，天気予報がどのように関係しているかについても理解を深める。	
				宇宙科学演習Ａ	人類の宇宙に対する理解は圧倒的な速さで更新され続けており，特に過去数十年で，宇宙が激しい活動現象で満たされていることがわかってきた。この講義では， 天体高エネルギー現象の基礎となる宇宙流体力学を，その背後にある力学や統計物理学，熱力学まで含めて演習形式で実践的に身に付ける。	
				宇宙科学演習Ｂ	宇宙の様々な現象を理解するためには， 天文学特有の知識・手法と物理学の知識の両方が必要である。この授業では宇宙科学Ｂの講義で学んだ内容を発展させた演習を通し，天文学特有の知識と手法を実践的に身に付ける。	
				地学コンピュータ演習	「プログラミング」はこれからの学校教育において欠かすことのできない大事な要素である。大量に得られたデータは単なる「数字の羅列」に過ぎない。大量のデータから，有用な情報を引き出す術を習得する必要があり，その基礎を与えるのが「プログラミング」である。この講義では，地学分野のデータを題材に，基本的なプログラミング手法，アルゴリズム，そして代表的な統計手法等について実践的に学習する。	
				地質学実験	地学分野では，現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため，望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる観測事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。地質学に関する室内実験と野外実習（フィールド・ワーク）を通して，地質や地形に関する基礎知識と調査法を習得する。また，地学教材の研究・開発も行う。	
				固体地球科学実験Ａ	岩石学を学ぶ上で，野外での露頭観察や室内での岩石薄片の顕微鏡観察は，最も基本的かつ重要な作業である。この実験では，野外での変成岩地域の地質調査および変成岩の顕微鏡観察の基礎的な手法を学び，変成岩の形成過程やそこから得られる情報について考察する。	
				固体地球科学実験Ｂ	地学分野では，現象を実験室等で再現することが難しい場合が多いため，望遠鏡による観測やフィールドワークを通して得られる観測事実に基づき自然現象を理解する方法論を重視する。観測結果は大量のデータとして蓄積され，各分野の理解・発展に活かされる。特に，近年の固体地球物理学に関わるデータの多くは自動的に収録され，データベース化されている。この実験では，データを測定するための基本的な原理や方法を理解し，実際に機器の作成や測定を行う。また，地震断層や活火山を訪れて観測を行う。	
				大気・水圏科学実験	地球の気候データを各自がパソコン上で解析することにより，気候について考察する。これにより，地球の気候（特に大気部分）の様々な特徴・成因などについて理解を深めると同時に，コンピュータ・プログラミングによるデータ解析の環境に慣れ，そのスキルを習得する。	
				宇宙科学実験Ａ	身近な恒星である「太陽」について，実際に小型望遠鏡を用いて観測する。太陽表面には「黒点」や「白斑」と呼ばれる構造が見られるが，この日々の変化を観測するすることで，生命としての人類が，太陽とどのように関わってきたのか？について理解する。観測を通し，激しい活動性をともなう「真の太陽像」を構築することも目標である。	
				宇宙科学実験Ｂ	観測天文学の基礎である星の明るさの測定を，大学に設置された60cm反射望遠鏡とCCDカメラを使って実習する。この実習のための基礎的事項として，天球座標，時刻，望遠鏡の取り扱い方，データ解析方法，画像処理方法など，観測天文学の基礎的事項の理解とその技術も習得する。	
				地学ゼミナールⅠ	地学諸分野の卒業研究を行うためには，「固体地球分野」，「岩石・鉱物分野」，「地質分野」，「大気・海洋分野」，「天文分野」の各分野に特有の方法論を身に付けなければならない。また，各分野には，長い歴史の中で積み上げられ構築されてきた強固な学問的な土台が個々にある。ゼミナールⅠでは， 各分野の論文や専門書の輪読，その内容に対する討議を通し，（１）専門的な文献を批判的に読みとる能力を開発し，（２）卒業研究に必要な考え方や実験法の技術を主体的に習得する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（理科）	地学ゼミナールⅡ	ゼミナールⅡでは，ゼミナールⅠで培った専門分野に対する理解やその分野特有の方法論を土台に，（1）卒業研究のテーマを決定し，（2）その内容の主体的な学習・研究を通して，論理的に考察する力を伸ばす。最終的には，研究で得られた成果を，（3）わかりやすい形でプレゼンテーションできるようになることを目標とする。	
			英語	英語史Ⅱ	英語史Ⅰの内容を踏まえて，より発展的なレベルで英語の歴史を振り返り，現代英語の理解を深める。特に以下の二点を目標とする。 （1）英語がどのようにして現在のような姿になったのかを，特にいくつかの文法的発達に着目して学ぶ。（2）世界最大の英語辞書であるOxford English Dictionaryを使えるようにする。 以上の目的のもと，前半では，doと仮定法の発達を，それに関わる様々な事象（語彙拡散，韻律，英米差，文法化など）にも目を向けながら辿る。後半では，受動態，進行形など，他のいくつかの文法事項の発達を見て，最後にOxford English Dictionary の使い方を学び，各自のテーマで調査した結果をまとめる。	
				英語学演習Ⅱ	本授業では，英文法を多角的な視点から考察・理解する手がかりとして，以下のような項目について演習を行う。 （1）句構造とXバー理論 （2）述語を中心とした文の組み立て （3）格と語順 （4）名詞句と指示について （5）変換と変換に課せられる制約 （6）発音されない諸要素の性質について その中で，定形節と不定詞節，第五文型と小節など，学校英文法と密接に関連するトピックの他，発音される要素と発音されない要素とを包括的に扱う原理など，より広い視野で学校英文法を捉える観点も紹介し，英文法教育を発展的に推進しうる素地を養う。	
				英語文学講義Ⅰ	ロマン派を中心に主だった英語詩を読み，その歴史的・文化的コンテクストを踏まえたうえで，作品のテーマ，詩の韻律(meterとrhymeおよびalliteration)，言葉の技法等について学ぶ。具体的には，マザーグース，ワーズワース，ブレイク，キーツ，バーンズ，ポー，ディキンソン，エミリー・ブロンテ，テニソン，クリスティーナ・ロゼッティ，ロレンス等の代表的な作品を扱う。言葉の技法としては，直喩と隠喩，提喩，誇張法やアイロニー等について学ぶ。	
				オーラルコミュニケーションⅡ	This course focuses upon developing the English oral presentation and debating skills of students. Students will learn how to construct argument that is supported by factual evidence, and how to deliver it logically to an audience. Moreover, they will then learn how to refute and deliver counter-arguments. Students will face off in final debates with opponents. このコースは，学生の英語の口頭発表とディベートスキルの開発に焦点を当てています。学生は，事実に基づいた証拠に裏付けられた議論を構築する方法と，それを聴衆に論理的に伝える方法を学びます。さらに，反論に反論し，配信する方法を学びます。学生は，相手との最終的なディベートで対決します。	
				英語学講義Ⅱ	特に言語類型論，語用論，社会言語学に注目して，英語（言語）に対する理解を深めるとともに，指導の質を上げ，指導の引き出しを増やすことを目指す。具体的には，（1）表現の「英語らしさ」とはどのようなものなのか，（2）日本人学習者の誤りの背景にはどのような背景（原因）があるのか，（3）一見丸暗記するしかない文法規則の背後にどのような合理性があるのか，（4）英語に限らず，日常使う言語にはどのような性質があるのか，といったことなど，幅広く英語（言語）に関する知見を身に付ける。	
				英語学講義Ⅲ	学校英文法で今なお影響力を持つ「文型」という考え方について，以下のような視点から考察する。 （1）５文型と７文型 （2）述語と文型 （3）深層的意味関係と文型 （4）なぜ少数の文型に収束するのか （5）文型と複文 （6）文型と叙述 その中で受講者は，多様な意味的関係が少数の表層的形式に収められる仕組みについて考察する。このような，文法的概念を批判的に検討する訓練を通して，発展的に英文法教育を推進しうる素地を養う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（英語）	英語学特殊講義	本授業では英文法を多角的な視点から考察・理解する手がかりとして，以下のような項目について講義を行う。 （１）語彙範疇と文の組み立て （２）機能範疇と文の組み立て （３）最小句構造 （４）ことばの線条性と階層性 （５）素性に基づく考え方 （６）派生の経済性 その中で，内容語と機能語の区別，語彙と構文，語順といった学校英文法と密接に関連するトピックの他，文を構成する究極的要素やまた文の派生を司る抽象的な原理など，より広い視野で学校英文法を捉える視点も紹介し，英文法教育を発展的に推進しうる素地を養う。	
				英語学演習Ⅲ	自身の関心のある分野・領域について，概説書や入門的内容の論文を毎回一つ取り上げ，関連の基礎知識を身に付ける。また，どのようなテーマの研究であっても必要なOxford English Dictionaryや各種大規模コーパス（BNC， COHA， COCAなど），テキスト処理ソフト（AntConcなど）等の調査ツールを実際に扱って初歩的な調査（高等学校で学ぶ語法・文法の実状の調査）を行い，その利用法を身に付ける。一連の学習過程において，単に専門知識を身に付け，深めるだけでなく，論理的に自身の考えを展開し，説明する能力を高めることも目標とする。	
				英語学演習Ⅳ	英語を教える上で，ことばとしての英語の本質を理解することは必須である。本授業では創造的な言語使用を背後で支える仕組みとしての「ことば」の特質について，以下のような観点から考察する。 （１）動物の「ことば」とヒトのことばはどのように違うのか （２）有限手段の無限使用 （３）ことばと進化 その中で，自分たちが日常的に用いていることばに対する根源的な興味を喚起し，より広い視野において英語教育を考えるための素地を養う。	
				英語学演習Ⅴ	英語学演習Ⅲで設定・追及したテーマに関する考察を深めるとともに，それに基づく独自の研究を行い，発表する。その過程において，自身の研究に活かすべく，受講者が関心を持つ英語学に関わる諸領域（歴史言語学，認知言語学，語用論，社会言語学など）に関する論文等を読み，自分の研究に適した方法論や関連知識を学ぶ。一連の学習過程において，単に専門知識を身に付け，深めるだけでなく，論理的に自身の考えを展開し，説明する能力を高めることも目標とする。	
				英語文学演習Ⅲ	英語の詩や小説の一部または全体を暗唱し，それを声と身体（顔の表情やジェスチャー等）を使って表現する。具体的には以下のプロセスで行う。 （１） 課題となる詩や小説の一節を精読し内容や背景を理解する。 （２） 音読と暗唱を行い，気持ちを込めて再現できるようにする。 （３） 身体表現を加味して課題の作品を演劇的に表現する。 （４） 個人あるいは数人のグループで課題の作品を発表する。 以上のプロセスを通して，文学作品のもつ表現の可能性を知ると同時に，英語の発音や発声を練習し，声と身体による表現力の向上を目指す。	
				英語文学演習Ⅳ	本演習は，19世紀から20世紀のイギリス小説をテクストに，小説読解の技術を養うだけでなく，論理的に自身の主張を展開する能力を高めることを目的とする。テクストの精読を通した「文学性」への気づきの感覚を養うとともに，各自の興味・関心に沿った指定テクストに関する先行研究等を読み，方法論や関連知識を学ぶ。また，先行研究を鵜呑みにするのではなく，複数の先行研究を突き合わせて批評的に捉える態度の素地を養うことを目指す。	
				英語文学演習Ⅴ	各自が選んだ研究対象である文学作品について，以下のプロセスで研究を深めることを目的とする。 （１） 作品（テキスト）の精読と時代背景等（コンテキスト）についての調べを行う。 （２） 特に重要と思われる作品の部分や調べたことについて発表し，質疑応答を行う。 （３） 参考文献について調べ，中心的なものを選んで内容を発表し，質疑応答を行う。 （４） 特に深めたい内容についていくつか論点をしぼりレポート(Ａ４，２枚程度)の英語にまとめる。 以上のプロセスを繰り返し行うことで，作品についての自らの観点を形成し，それをより大きな論文としてまとめることを目指す。	
				英語文学演習Ⅵ	本演習は，各自の研究テーマである文学作品についての理解をさらに深めるだけでなく，論理的に自身の主張を展開する能力を高めることを目的とする。具体的に，（１）作品の精読と作品を成立させている背景の調査を通して作品の重層的な読解を試み，（２）主だった先行研究を渉猟し，その内容をまとめ，（３）先行研究を踏まえて批判的に自身の主張をまとめあげ，（４）英語でレポート（Ａ４，２枚程度）を作成する。こうした作業の積み重ねによって，自身の主張を英語で展開する技術の向上を目指す。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（英語）	ライティングⅡ	In this course, the aim is to develop the students' academic writing skills so as to equip them with the necessary levels of expertise needed for the writing of their graduation theses. At the same time, there is an equal emphasis on academic research skills, such as constructing and administering surveys and interviews, and developing their observational techniques. Students are expected to collect and analyze data and then construct coherent analytical expositions in order to develop strong written argumentative skills. 本授業では専門的な論文を作成するために必要なアカデミックライティングの技能を養成すると同時に，アカデミックリサーチの技能を養う。受講者はデータを収集・分析し，説得力のある議論を文章として展開する力を身に付ける。	
				異文化講義Ⅰ	Cultural Identity, Diversity and Convergence In this introductory course, students will investigate the concept of 'culture', differentiate between surface and hidden culture, and investigate their own cultural identity, its origins and facets in regard to the individual and the society. Students will work individually, as well as in expert-groups to investigate much of the content of this course and also then present it to their peer group. 文化的アイデンティティー，多様性と共通性：この授業では文化の概念について考察する。受講生は表層的および深層的文化とを峻別し，自身の文化的アイデンティティーやその起源，また個人・社会における文化的諸相について検討する。個別的活動の他，グループ活動やプレゼンテーションを含む。	
				異文化講義Ⅱ	Language and Culture in Contact In this course, students will investigate how language interacts with or is drawn from a culture's beliefs, rituals, practices, and behaviors. A society's oral traditions, folk tales, classic works of literature, musical compositions, for example, reflect its cultural beliefs and practices. Students will work individually, as well as in expert-groups to investigate much of the content of this course and also then present it to their peer group. 言語と文化：この授業では言語と文化的信念や儀式，慣習や行動との関係について考察する。個別的活動の他，グループ活動やプレゼンテーションを含む。	
				異文化講義Ⅲ	Culture and Education in Contexts In this course, students will investigate cultural convergence and diversity in regard to education. Educational systems developed from cultural beliefs and practices, and from parallel or diverse philosophical bases. Different civilizations contributed aspects of their cultural (Mesopotamian, Greek, Roman, Chinese, etc.) and philosophical (Aristotlean, Confucian, etc.) traditions to the advancement of knowledge and shaped the educational systems that developed within their geographical, economic and political spheres of influence. Cultures confer or deny education based on gender, religious, ethnic or social background. Students will work individually, as well as in expert-groups to investigate much of the content of this course and also then present it to their peer group. 文化と教育：この授業では，文化的共通性と多様性について，教育の観点から考察する。個別的活動の他，グループ活動やプレゼンテーションを含む。	
				英語教育演習Ⅰ	授業の目標は，英語教育に用いられる，中学校・高等学校外国語で扱う教材作成・評価の基本的な方法を学び，授業で活用できる視点を持つことである。授業内容の項目として，学習者の特性，教材研究，英語教育の諸課題を取り挙げる。さらに教材分析として教材の簡略化，多様な教材のあり方を分析し，これらの教材に適した設問作成を行えるようにする。	
				英語教育演習Ⅱ	本授業の目標は，心理学の文献，特に教師として身に付けておくべき心理学の知識を扱った英語文献を読むことにより，（1）心理学の理論的理解を深め，（2）それらの理論を言語教育への実践・研究に応用する力を養うことにある。本授業では，各回，あるテーマに沿った文献の輪読を行い，そしてその内容を受けて，受講者同士で言語教育への応用方法について議論を行う。最終的には内容理解だけでなく，英語で論文を書くための指導も行う。	
				英語教育演習Ⅲ	本授業では，言語教育におけるテスト理論についての英語文献を読み，（1）テスト理論の知識を身に付け，（2）テスト作成を行い，そして（3）より良いテストに向けてのテスト結果分析を行う。毎回，受講者が各テーマについての発表を行い，その内容を受けて議論を行う。テスト理論においては，統計的知識が必要となるため，適宜，言語テストに関わる統計を扱い，またコンピューターを用いてのテスト分析の実習も行う。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（高等学校教育専攻科目）	（英語）	英語教育演習Ⅳ	本授業は，卒論に向けての準備段階となるように，言語教育における研究手法を扱う。本授業では，（１）研究実施の手順を理解し，（２）様々な研究手法を身に付け，（３）研究論文を英語で書くことができるようになることを目指す。研究手法には数多くの方法があるが，特に言語教育で有益となる統計手法，面接法，また参与観察法などの方法を中心に扱い，適宜，コンピューターを用いてデータ分析の実習も行う。最終的には，ミニ卒論のようなレポートを作成する。	
				英語教育実践	授業の目的は，近隣の小学校・中学校，高等学校の英語授業にて授業観察及び授業補助を行いながら，学校現場で授業を体験的に学ぶことである。愛知教育大学と協定を結ぶ市町村の協力の下で，英語授業を生徒の視点及び授業者の視点の両面から多角的に授業を捉える。理論と実践の往還を通して，児童及び生徒のつまずきの補助を行うことで，多様な習熟度に対応した英語授業づくり及び実践者となることが期待できる。	
		特別支援教育専攻科目		特別支援教育基礎論	本授業では，特別支援教育の歴史的展開，制度等，教育現場における取り組みの現状と課題について学び，特別支援教育の理念と教育現場における課題を理解することを目標とする。前半では，学習指導要領と教育課程の編成，自立活動，個別の指導計画，特別支援教育コーディネーター，障害者の福祉・就労などをテーマに取り上げ，主に障害児・者に関する基本的な教育制度についての知識を理解した上で，特別支援教育についての理解を深める。後半は特別支援学校や小・中学校における障害児を対象とした教育に関して紹介する。	
				視覚障害者心理・生理概論	本授業のテーマ及び到達目標は，「視覚系の構造と機能について理解する。」「見え方，眼疾患から視覚障害児者の困難さを理解する。」「感覚特性，視覚障害児者の発達・行動についての基本的な知識を獲得する。」の３点である。視覚障害のある幼児児童生徒が直面する学習又は生活上の困難さに気づき，適切な教育・支援を施すためには，視覚障害分野の生理学・心理学について学ぶ必要がある。このため，本授業では眼の仕組み，視機能，見え方に応じた困難さ等について生理学的に理解すると伴に，触覚や聴覚の感覚特性，視覚障害児者の発達や行動のメカニズムについて心理学的に理解する。	
				視覚障害者病理概論	本授業が目標とするのは，「視覚障害の種別や程度，眼疾患の基本的な特徴を理解する。」「ロービジョンケアの基礎を理解し，具体的な支援方法を獲得する。」の２点である。授業においては，視覚障害児や重複障害児の就学・就業の妨げになる病態の把握と，就学・就業等の教育支援に活用できるロービジョンケアの基礎について学ぶ。また，最新のICTを活用したロービジョンケアの一例として，デジタルビジョンケアのエイドとしてのタブレット型PCやスマートフォンの選定，導入の実践的な支援技術についても学ぶ。	
				視覚障害者のアセスメント	本授業のテーマ及び到達目標は，「各視機能評価の特徴を理解し，基本的な実施方法を獲得する。」「視覚補助具の特徴と基本的な活用方法を理解する。」の２点である。視力の評価方法，読書速度の評価方法，教育的視機能評価に基づく環境整備などを授業で取り上げ，視覚障害児者の教育評価に不可欠な諸検査の特徴と実施方法についてビデオや実習を通じて理解を深めた上で，教育的視機能評価に基づく視覚補助具の選択・助言等の具体的な支援技術について学ぶ。	
				聴覚障害者心理・生理概論	本授業では，聴覚障害者が生涯にわたって豊かなコミュニケーション生活がおくれることを願い，その支援方法を考案していくために聴覚障害者の心理及び生理の観点から論及する。また，各種の文献及臨床的自験例に基づき，聴覚障害者の心理及び生理の基本的事項を理解したうえで，聴覚障害者の多様な言語・コミュニケーション方法の在り方を検討し，聴覚障害者の心理・生理からみた聴覚障害者への支援の課題を把握する。	
				聴覚障害者病理概論	聴覚障害者のリハビリテーションでは医療と教育の連携が必要であり，そのためには病理学的知識が必要となる。本授業では，教育関係者が医療チームと連携を取るために必要な基礎知識を身に付けることを目指す。 （オムニバス方式／全８回） （236 別府 玲子／７回） 臨床事例に基づき，聴覚障害者に対するリハビリテーションの基本を理解したうえで，新生児聴覚スクリーニング，小児聴覚障害の原因と種類など，診断・検査・治療に関する基礎的事項を検討し，病理学的側面の課題を把握する。 （86 岩田 吉生／１回） 聴覚障害の早期発見と療育について取り扱う。	オムニバス方式
				聴覚障害者のアセスメント	本授業では，聴覚障害児の認知発達を中心に，知能，発達，言語，読み書きの能力の検査と結果の解釈，指導方法を身に付けることを目標とする。授業では聴覚障害児の聴力，発音，語彙力，文法能力，読み書き，知的能力のアセスメントとその指導を取り上げる。他の障害のアセスメントの講義と関連付けながら，検査道具や検査用紙を確認しながら，聴覚障害児の認知，言語，読み書きの能力をわかりやすく指導する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（特別支援教育専攻科目）	知的障害者心理・生理概論	本授業では，知的障害者への支援を実践するために必要な知識を，心理・生理面の観点から考究することを目標とする。知的障害者の心理面及び生理・病理面の様々な特性に関して，最新の研究知見に依拠した知識の習得を目指す。また，知的障害者への支援を実践する上での課題を把握する。授業においては，国内外の文献や授業担当者の療育実践に基づき，知的障害児・者の心理を理解した上で，その援助の手立てを検討し，実践的知識を把握する。	
			知的障害者病理概論	本授業では，知的障害をはじめとして，様々な発達障害などの最新知識を理解し習得することを目標とする。最近の医学的知見などに基づき，知的障害，自閉スペクトラム症，注意欠如多動性障害，学習障害，発達性協調運動障害などの発達障害の特性やその対応のポイントを理解し，併存問題や二次障害と社会資源など，特別支援教育として配慮すべき点を学ぶ。また，発達障害児を教育指導していくうえで必要な知識の習得を目指す。	
			知的障害者のアセスメント	本授業の目標は，「知能について理解を深める。」「各種発達検査・知能検査の特徴を理解し，実施方法を習得する。」「検査結果の解釈及び指導計画作成のための手立てについて理解する。」という３点である。授業においては，個別の指導計画作成に必要となる知的障害者の発達評価について学び，発達検査（KIDS，S-M社会生活能力検査）とWISC-Ⅳ知能検査の実習を通して，子どもの実態を正しく把握するアセスメントスキルを習得する。	
			肢体不自由者心理・生理概論	本授業では，脳性まひを始め，特別支援学校に在席する，様々なタイプの肢体不自由児について，特に心理・生理の視点からの理解を深めること，加えてそれらの子ども達への教育支援，発達支援の在り方について，教育現場での実践を特に踏まえた理解を目指す。授業においては脳性まひ，筋ジストロフィー症など，様々なタイプの肢体不自由児に関する障害の成り立ち等について，その概要，特に心理・生理の領域について解説していく。そして，特別支援学校の肢体不自由領域における教育的支援の在り方について，教育課程を踏まえながら広く解説する。なお，自立活動については，肢体不自由領域において多く実践されている，動作法を中心とした発達支援の在り方について解説する。	
			肢体不自由者病理概論	本授業では，肢体不自由児に関連する運動器，不自由の成因（原疾患），付随する疾患，運動機能の特徴，認知面･性格面･成育歴の特徴，必要とされる様々な治療などについての知識を得ることを目標とする。授業においては，まず運動器（筋・骨格･神経系）についての基礎知識を把握して上で，脳性麻痺，二分脊椎・筋ジストロフィーなどの肢体不自由児の原因疾患や医療・リハビリテーションについて取り上げ，肢体不自由児に付随する疾患・予後などについても理解を深めていく。	
			肢体不自由者のアセスメント	本授業では，肢体不自由児における実態把握と発達支援の課題設定について理解することを目標とする。授業においては，肢体不自由児の姿勢の捉え方，運動面，行動面，心理（認知）面，社会性の実態把握に必要となる視点について解説するとともに，様々な発達検査についても解説し，肢体不自由児の実態の把握の進め方について理解していく。また，これをもとに，発達支援の実践にける具体的な課題設定についても検討していく。	
			病弱者心理・生理概論	本授業は，病弱者の心理・生理・病理及び発達段階，病気が発達に与える影響についての理解および関心を高めることを目的とする。授業においてはまず小児慢性特定疾患について学び，出生・乳幼児期，児童期，思春期などの発達段階ごとに発見されやすい病気について概説し，病気が子どもの心に与える影響について講義，およびディスカッションする。また，病弱児の家族の心理的危機と課題についても取り上げる。	
			病弱者病理概論	本授業では，病弱者の教育を進めていくために必要となる教育・保健・医学の基礎知識を習得し，その理解に基づき「生涯教育（ライフステージ）にそった一貫した教育と医療・保健福祉分野との連携支援」の視点を深めることを目標とする。内外の文献及び小児神経の臨床的実際例に基づき，小児の慢性特定疾患，小児の慢性特定疾患などを取り上げ，病弱者の特性を理解したうえで，今後の病弱者の教育実践で検討すべき課題について教育課程を踏まえながら把握する。	
			視覚障害者の教育課程・指導法	本授業では，視覚障害の特性を適切に理解し，それらを踏まえた指導・支援のあり方について考える視点を明確に持つことを目標とする。盲児，弱視児それぞれに対する指導上の配慮事項に関する基礎的な知識を得た上で，各教科や自立活動等における具体的な指導法，教材・教具の工夫について学習を進める。教科書の内容に沿って講義を行うほか，指導場面等を視聴覚教材や実際の教具を用いて学習する。また，視覚障害の疑似体験や模擬授業を通して，指導上の配慮の要点を体験的に学ぶ。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（特別支援教育専攻科目）	視覚障害者の自立活動	本授業では，視覚障害児童生徒を対象とした自立活動の基本的な考え方を理解し，具体的な指導内容及び指導技術を習得することを目標とする。自立活動の指導について，盲児，弱視児それぞれに対する指導内容・方法等に関する基礎的な知識を得た上で，具体的な指導技術や教材・教具の工夫について学習を進める。各回の授業では，適宜，指導場面等を視聴覚教材や実際の教具を用いて学習する。また，指導案の作成，模擬授業の実施，討論という一連の活動を取り入れ，実践に役立つ指導力の習得を目指す。 （オムニバス方式／全15回） （87 青柳 まゆみ／10回） 盲児への指導について （147 相羽 大輔／５回） 弱視児への指導について	オムニバス方式
			点字の基礎	本授業の目標は，点字誕生の歴史的背景，点字の仕組み等の基本的事項を理解した上で，日本語五十音，英数字，記号類等の表記法の基礎を習得することである。授業においては，点字の歴史，点字の仕組み等の基本的事項を理解した後，日本語五十音，英数字，記号類等の点字表記を実習形式で学習する。また，毎回行う点字の読み書きの実習を通して，盲児童生徒に対する点字指導において必要な基礎的な知識・技術の習得を目指す。	
			聴覚障害者の教育課程・指導法	本授業は，聴覚障害の特性を適切に理解し，それらを踏まえた指導のあり方について考える視点を明確に持つことを目標とする。授業においては，聾・難聴児それぞれに対する指導上の配慮事項に関する基礎的な知識を得た上で，教科教育や自立活動等における具体的な指導法，教材・教具の工夫について学習を進める。また教科学習における留意点や課題について講義を行うほか，実際の指導場面等を，視聴覚教材を用いて学習する。さらに，聴覚障害の疑似体験を通して，指導上の配慮の要点を体験的に学ぶ。	
			聴覚障害者の自立活動	本授業では，聴覚障害児童生徒を対象とした自立活動の基本的な考え方を理解し，具体的な指導内容及び指導技術を習得することを目標とする。また，各回の授業では，適宜実際の指導場面等を，視聴覚教材を用いて学習する。 （オムニバス方式／全15回） （86 岩田 吉生／２回） 自立活動の指導について，ろう児，難聴児それぞれに対する指導内容・方法等に関する基礎的な知識を得る。 （145 大塚 とよみ／13回） 具体的な指導技術や教材・教具の工夫について学習を進める。	オムニバス方式
			手話の基礎	本授業では，手話とその教育的活用に関する基本的事項を理解した上で，日常会話や教科指導に必要な手話単語および文の表現を学ぶ。あわせて指文字や数字等の基礎的な表現も習得する。また手話の成り立ちや言語的特性，日本で用いられている指文字や数字の表現について学ぶ。これらをもとに，聴覚障害児者が日常生活や学校での生活でよく用いる手話単語や文レベルの表現の基礎を習得する。授業は実習形式で，手話の表現と手話の読み取り（理解）の両方のスキルを高めることを目指す。 （オムニバス方式／全８回） （145 大塚 とよみ／５回） 手話の基本的事項および日常生活における手話の活用 （86 岩田 吉生／３回） 教科指導における手話の活用	オムニバス方式
			知的障害者の教育課程・指導法	本授業では，知的障害者教育の歴史，現在の特別支援教育における知的障害者への教育課程及び指導法，知的障害者への支援の現状等について学ぶことによって，障害者を援助するにあたっての基本的な知識・心構えを身に付けることを目指す。広く授業テーマに関わる内容について，資料を配布した上でパワーポイントを用いて説明し，随時小テストを行い，知識の習得を確認する。また，映像資料を見せた上で，指導法について小グループディスカッションを行うなど，アクティブ・ラーニングの手法も取り入れて，実践的に学ぶ。また，ゲスト講師を招いて，知的障害者への地域福祉について学ぶ。	
			知的障害者の自立活動	本授業では，知的障害のある児童生徒に対する自立活動の重要性を理解した上で，実際の学校教育現場における自立活動の実践事例を通して，具体的な指導内容や指導方法，留意点などについて習得することを目標とする。知的障害のある児童生徒に対する自立活動の指導について，『特別支援学校学習指導要領』及び『特別支援学校学習指導要領解説　自立活動編』に沿って，指導内容・方法等に関する基礎的な知識を得た上で，個別の指導計画における目標設定の手続きや具体的な指導方法，教材・教具の工夫について学習を進める。また，知的障害特別支援学校における自立活動の指導事例などを取り上げ，実践的に「自立活動の時間における指導」や「学校教育全体を通して行う自立活動の指導」について学ぶ。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（特別支援教育専攻科目）	肢体不自由者の教育課程・指導法	本授業では，脳性まひを始め，肢体不自由特別支援学校に在籍する，様々なタイプの肢体不自由児の理解と，肢体不自由特別支援学校における教育課程について理解すること，またそれらの子ども達への教育支援，発達支援の在り方について，教育現場での実践を特に踏まえ理解することを目標とする。脳性まひ，筋ジストロフィー症など，様々なタイプの肢体不自由児に関する障害の成り立ち等について，その概要を解説した上で，特別支援学校の肢体不自由領域における教育課程について，また，教育支援，発達支援の在り方について，教育課程を踏まえながら広く解説する。なお，自立活動については，肢体不自由領域において多く実践されている，動作法を中心とした発達支援について解説する。	
			肢体不自由者の自立活動	本授業では，肢体不自由特別支援学校における教育活動の現状と教育現場で実際に行われている様々な教育実践に関する理解を深めること，特に，肢体不自由特別支援学校に多く在籍する重度重複障害児を中心としながら，様々な児童生徒へに対する自立活動の実践や，摂食指導など身辺自立に関する教育活動の実践の在り方について，現場での教育実践を踏まえた具体的な実践力を修得することを目標とする。肢体不自由特別支援学校における教育活動の現状に関して，ビデオ等を用いながら解説していく。また，教育現場での臨床演習を実施し，肢体不自由特別支援学校の教育現場における様々な教育実践，特に，重度重複障害児を中心としながら，様々な児童生徒へに対する自立活動の実践や，摂食指導など身辺自立に関する教育活動の実践の在り方について，教育実践を踏まえ，体験的に理解していく。	
			病弱者の教育課程・指導法	本授業が目標とするのは，「病弱教育の理念や課題，また対象となる幼児児童生徒の特長を理解できる。」「病・虚弱児への支援・指導のあり方について仲間と協働して検討できる。」「病・虚弱教育に携わる教員として必要な知識・技能・態度を培う。」の3点である。授業においては，病弱教育に関する基礎的な知識の習得から，実際の学校現場における指導方法および支援の方策について学ぶ。また参加者同士で体験したり，検討したりする中で，特別支援教育教員として必要な力量について考察する。授業担当者の元特別支援学校教員としての実務経験を踏まえ，学校現場における具体的な指導方法，指導計画および指導案の作成方法について検討を行う。	
			発達障害者教育総論	本授業では，発達障害の特性・心理・指導方法等についての幅広い知識を習得すること，および特別支援学級，通級指導教室，通常の学級などの現場における課題についての理解を深め，適切な指導・支援のあり方について考える視点を持つことを目標とする。自閉症スペクトラム障害や学習障害，注意欠如多動性障害などに代表される発達障害の心理的特性に関する基本的な知識を得た上で，具体的な指導法についての学習を進めていく。また，教育現場における取り組みの現状と課題，今後の方向性について展望する。上記の授業目標の内容に関して，発達支援の事例報告なども活用しながら講述し，適宜ディスカッションも行いながら考察を深めていく。	
			言語障害者教育総論	本授業は，言語障害者教育における生理・病理に関する基礎事項を理解した上で，言語障害や言語発達評価，言語障害・言語発達遅滞児の指導方法について習得することを目的とする。 また，言語に問題のある子どもの心理的な問題についても講述する。授業においては，言語・コミュニケーション支援におけるICTの活用，口唇・口蓋裂の子どもや吃音児，場面緘黙児の理解と指導・支援などを取り上げ，言語障害者教育における生理・病理，心理に関する概要を理解した上で，障害種別の問題と指導方法について講述していく。	
			重複障害者教育総論	近年，特別支援学校に在籍する児童生徒の障害状況は，重度化・多様化している。本授業では，様々な障害を併せ有する児童生徒の発達的・心理的特徴等を理解し，具体的な指導方法や環境整備の工夫等について学習することを目標とする。視覚障害や知的障害，発達障害などそれぞれの教育領域を専門とする教員がオムニバス方式で授業を担当する。複数の障害を併せ有する児童生徒の実態を紹介しながら，具体的な指導につながる理論，実践方法等について講義を行う。 （オムニバス方式／全15回） （87 青柳 まゆみ／３回） 視覚障害の重複について （88 飯塚 一裕／12回） 肢体不自由，病弱，知的障害，発達障害の重複について	オムニバス方式
		養護教育専攻科目	解剖生理学Ⅱ	医学の基礎である生理学の発展は目覚しく，日々多くの研究者により新知見が提供されている。 【解剖生理学Ⅱ】では，外界の変化に反応するための機能（動物性機能）を構成する，感覚機能，運動機能およびそれらを統御する中枢神経機能や内分泌機能を，疾患とも関連付けて理解することを目標とする。また，動物性機能に関わる神経・筋・感覚器の構造について把握することも目標とする。 主に動物性機能，およびそれらに関わる器官の構造について，通常の講義形式で講義する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（養護教育専攻科目）	生理学実習	1年次および2年次に学んだ【解剖生理学Ⅰ】および【解剖生理学Ⅱ】の知識を，実習を通してさらに確実なものとし，応用できるようにすることを目標にする。 基本的な生体機能について実習する。 主な実習項目は，レスピロメータによる肺機能の測定，血液検査（赤血球数，白血球数，Ht，Hb量の計測），安静時心電図，筋電図検査，脳波，眼電図検査，血圧検査（痩躯買い，座位，運動負荷，寒冷昇圧試験など），各種反射（深部腱反射等）及び簡易聴力検査神経伝達速度の測定等である。	
			保健統計	養護教諭成課程の選択科目として，保健・健康科学分野で調査・研究するために必要な「統計学」について概説する。この授業は，実際にパソコンを用いた実習を中心とした内容となっている。この分野に必要な最低限の「統計学」の理解を目指す。高度な数学的知識は全く必要ないが，パソコンなどを用いて実際に計算してみることが必要である。なお，毎回，各自のパソコンを準備する必要がある。主として，大学の情報処理センター経由で利用できる統計ソフト「ＳＰＳＳ」または，フリーソフトであるＥＺＲを利用して，統計手法を学ぶ。	
			学校保健実習	児童生徒の心身の発育発達や健康状態を的確に把握できるように，子どもへの配慮の仕方や機器の取り扱い方および測定の仕方について習得することができる（知識/技能）学校保健に関わる活動や方法について，専門機器の取り扱い方および測定の仕方等を実習を通して体験する。具体的に，保健管理に関わる実習としては，児童生徒の心身の発育発達や健康状態を的確に把握できるように子どもへの配慮の仕方や機器の取り扱い方および測定の仕方について習得する。保健教育の学習内容に関わる実習としては，ストレス反応や栄養状態および清潔行動を取り上げ，その考え方や行動の実践方法等について習得する。	
			養護活動実習Ⅰ	本授業は，「養護教諭論」「養護概説」における「知識・理解」や「関心・意欲」，「思考・判断」に関する学習を基盤として，「養護教諭の活動の実際」について実践的に学ぶことによって「技能」の体得を目的としている。 養護教諭の活動過程である計画・実施・評価・改善活動のプロセスをふまえて，仮想の小学校を設定して，そこに勤務している養護教諭の立場で種々の活動（学校保健計画，保健室経営計画，養護活動計画等）の原則を確認しながら養護実践の方法を学ぶ。	
			健康相談活動	養護教諭の活動として重要な健康相談活動を，その発展過程を理解するとともに， 心と身体の繋がりについて学ぶことを土台に，訴えられる身体症状の中に潜んでいる心的要因について理解しつつ，子どもたちの健康状態改善に向けた実際の相談活動が想定できるようになることを目標とする。 健康相談活動に必要な知識の獲得と，それを活用するための模擬的体験の両側面から，授業を展開する。 グループごとの討論，ロールプレイなどを取り入れていくので，一人一人が積極的に参加することを求める。	
			診断学Ⅱ	養護教諭養成課程の専門科目（必修）として，養護教諭に必要な疾病の概要とその診断法について，実例を交えて学ぶ（演習的内容を含む）。診断学Ⅰで取り上げられた以外の内科系の疾患に加え，整形外科，耳鼻咽喉科，眼科系等の外科系の疾患も取り上げる。 講義の項目は次の通りである。※毎回，１分野ごとに複数の疾患を選んで，その特徴，症状，診断のポイントに絞って講義および演習を行う。一部の回については，少人数班ごとで理解を深めるアクティブ・ラーニングの形式で授業を行う。	
			衛生学実習	「衛生学」で学ぶ水や空気などの身近な環境と人間の健康について，比較的容易に測定可能なものを取り上げて，自分たちのまわりの環境を知る手がかりをつかむことを目指す。さらに，できるだけ学校環境衛生の基準に沿った内容で実習を行うことで，学校保健を担う養護教諭として必要な同基準の内容の理解を深める。 実習内容は次の通りである。できるだけ授業時間内に実習を終え，レポートは各自作成して次回までに仕上げて提出すること。※なお，学外の場所における環境測定などは，授業時間以外に行うことがある。なお，最終週にはレポートの内容に関する口頭試問を行う。	
			環境衛生演習	これまでに学習した「微生物学」，「栄養学」をふまえ，実際の現場で行われている環境衛生に関しての理論的，実践的な演習を行う。 実際の各種行政及び企業（衛生研究所，食品製造業，飲料製造業，総合調理場等）で実施されている環境衛生活動に関して調査し，知見を深めるとともに各人がテーマを定めて報告する。 さらに，学校における環境衛生保全活動についてもその意義と役割を確認し，調査し，知見を深めるとともに各人がテーマを定めて報告する。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（養護教育専攻科目）	歯科衛生	養護教諭に必要な学校歯科保健に関する知識を広く習得するため，以下の項目を演習も加えた体験型学習を行う。 歯と口腔のさまざまな機能，歯とその解剖・歯の成長発育について概説できる。 う歯の成り立ちについて，児童・生徒のう歯の特徴と現状，予防方法と予防効果，甘味食品とメカニズムについて説明できる。 歯の保健教育の意義と方法，歯の健康診断・事後措置を説明できる。歯肉炎・不正咬合のの成り立ちと評価およびその予防方法，口腔内の清潔・清掃・歯磨き剤の効果と使用方法	
			養護活動演習	本授業は，「養護活動実習Ⅰ」及び「養護活動実習Ⅱ」における「知識・理解」や「思考・判断」，「技能」の学習を深化・発展させるものであり，各自の養護実習体験をもとに，「養護教諭の活動の実際」について健康診断の補助など実習も加えより実践的に学ぶことを目的とする。 学習内容の柱は，現代的な健康問題に対応して求められている養護教諭の能力である。これらの能力が確実に身につくことを目指し，演習の特性を生かして具体的且つ丁寧に学んでいく。	
			養護活動実習Ⅱ	本授業は，「養護活動実習Ⅰ」の学習を深化させるものであり，「養護教諭の活動の実際」について，仮想学校を舞台として，年間の活動計画や１日の活動計画などに基づいて展開される養護教諭の仕事を実践的に学ぶことを目的としている。 ３年生後期に行われる養護実習に生かすことのできる内容を計画し，養護教諭の活動過程にそった日常の活動を学校行事や日課，教職員の構成などを意識して実践的に学ぶ。したがって，様々な場面設定によるロールプレイや模擬対応を中心とした実習を進める。	
			栄養管理	１.栄養学に関する基礎知識を再確認するとともに，２.それぞれの年代や個人に適した栄養摂取を考案し（ケーススタディ），３.指導を前程とした報告を行うことを目標とする（プレゼンテーション，レポート作成）。 前半（１～８回）は講義形式で行い，指導を目的とした栄養管理の考え方を紹介する。後半は５人程度のグループでのケーススタディ，および30分程度での発表を行いつつ，各個人で担当したテーマについてのレポートを作成する。他科からの受講を妨げるものではないが，栄養学の知識が基礎になるため，「Sh栄養学（食品学を含む。）」の履修者に限定します。また，養護教諭養成課程以外の学生は，かならず事前に担当教員とコンタクトを取り，事前説明を受けること。	
			食品管理	１.食品に関する栄養学的な知識を再確認するとともに（講義），２.食品や栄養学にまつわる時事問題について考察し（ケーススタディ），３.ディベート形式で理解を深め，レポートで報告する（ディベート，レポート作成）。 栄養学を基にした食品に関する講義形式を７～８回（食品の劣化，食品の三次機能，植物性食品，動物性食品，食品の生産，給食の栄養・食事管理），およびグループワークで食品・栄養学に関する時事問題を考察し，ディベート形式で理解を深める。	
			微生物学実習	１.微生物学で得た基礎的な知識を再確認するために，２.実際の手技（顕微鏡観察，無菌操作，グラム染色，プラスミド抽出，電気誘導，手指・鼻腔の常在菌の分離等）を通じて微生物学を体感し，得られた知見（DNAとたんぱく，遺伝子と表現形，ヒトのアルコール分解酵素の遺伝子型の特定，靭帯の常在菌等）を報告することを目標とする。 微生物を扱う手技を体得・学習する実技実習となる。また，得られた知見を実験レポートとして提出する。	
			免疫学	１.養護教諭として備えるべき免疫学に関わる基礎的な知識の習得，及び２.基礎知識を基に実際の疾患における免疫の役割に対する思考，判断能力を養うことを目的とする。 講義形式で行う。１～８回までは「微生物学」で学んだ免疫と疾病の関わりを復習するとともに応用的な内容に触れ，９～15回では免疫系をより深く理解するための発展的な内容を学習する。 授業毎に単元の理解が得られているかどうか確認する為に，簡単な小テストを実施する。 他科からの受講を妨げるものではないが，微生物学の知識が基礎になるため，「Sh微生物学」を履修者に限定します。また，養護教諭養成課程以外の学生は，かならず事前に担当教員とコンタクトを取り，事前説明を受けること。	
			薬理概論	日本における医薬品の使われ方を概説し，いくつかの医薬品についてその効能や副作用について講義する。まず身近な薬である「大衆薬」（風邪薬，解熱，鎮咳，鼻炎，胃腸薬，ビタミン剤，外用薬（目薬，張り薬）等）の成分や効能について検討し，次に医療機関で処方される「医療用医薬品」（ステロイド剤，抗生物質，高血圧の薬，気管支喘息，狭心症，糖尿病治療薬，抗がん剤等）の薬理作用や副作用を考察する。さらに，最近話題となった医薬品にまつわる不祥事を取り上げて，その背景にある問題点についても考える。	

（専門教育科目）	（専攻科目群）	（養護教育専攻科目）	看護実習Ⅱ	１・知識/理解 養護教諭としての，専門性を高めるため，看護を理解し，習得した技術を他者に説明できる。 ２・思考/判断 事例を通して看護過程を展開できる。 ３・関心/意欲 現在の自分の到達度を把握し，養護教諭としての目標を立て，技術向上への意欲が示せる。 ４・技能/表現 事例を通し，看護知識を基盤とした看護実践能力を身に付ける。 5.その他 看護のポートフォリオを作成し，学習の成果を示すことができる。	
			母子看護学	妊娠・出産，新生児への看護活動に加え，次世代の健全育成を目指し，母性の一生を通じた健康の維持・増進，疾病予防を目的とした看護活動を支える知識・技術の習得する。 特に，近年注目されている多様なセクシュアリティの考え方，性感染症や避妊，家族計画など自己の今までの学習と価値感を確認しながら，養護教諭としての価値観を形成できるよう，演習形式も含めて授業展開を行う。 また，男女の生殖器の解剖生理を含めて，新生児の沐浴や脈拍・呼吸・身長・体重の計測など実習を通じて，妊娠・出産の経過を理解できるものとする。	
	教育実践開発科目群	義務教育開発科目	初等教科教育開発Ⅰ(国語)	小学校の教科（国語）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた小学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した小学校教科(国語)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			初等教科教育開発Ⅰ(社会)	教育実習へ向けた小学校の教科指導のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する演習を附属学校等の協力のもとで実施する。教科専門と教科指導法をつなぎ合わせた実践的な指導を行う。まず，実習の意義について考え，責任感と意欲をもって実習に臨む姿勢を身に付ける。次に，講義や演習を通して，実際の教育現場でのさまざまな学習指導（教材作り・授業作り等）方法を身に付ける。最後に， 模擬授業を行うことで，教材開発・指導案の書き方等トータルな授業実践力を身に付ける。	
			初等教科教育開発Ⅰ(算数)	小学校の教科（算数）に関して，指導の立案や実践における教師の判断・考慮事項について推測できること，また，それを指導に関する諸作法を利用し自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた小学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した小学校教科(算数)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			初等教科教育開発Ⅰ(理科)	小学校の教科（理科）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた小学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した小学校教科(理科)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			初等教科教育開発Ⅰ(生活科)	小学校の教科（生活科）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた小学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した小学校教科(生活科)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			初等教科教育開発Ⅰ(音楽)	小学校の教科（音楽）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた小学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した小学校教科(音楽)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	

（専門教育科目）	（教育実践開発科目群）	（義務教育開発科目）	初等教科教育開発Ⅰ(図画工作)	小学校の教科（図画工作）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた小学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した小学校教科(図画工作)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			初等教科教育開発Ⅰ(家庭)	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，授業構想に向けた教材開発を諸科学を駆使して探究し，小学校家庭科の目的・内容・方法について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題について，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
			初等教科教育開発Ⅰ(保健体育)	小学校の教科（保健体育）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた小学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した小学校教科(保健体育)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			初等教科教育開発Ⅰ(英語)	授業の到達目標は，教育実習を控え，授業で各領域の扱い方を学び，児童の理解を促す指導ができることを目指す。英語教育の理論と実践を見通した上で，教育実践との関わりを理解できる素地を養うことを目的とする。授業の概要は，教室現場で必要な授業題材の扱い方，授業で必要とする英語でのやり取りのあり方を，児童の発達段階に応じて実践に結びつくように掘り下げて学んでいく。	
			初等教科教育開発Ⅱ(総合学習)	小学校の教科や総合的な学習の時間で展開される総合学習の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校の教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，小学校の総合的な学習の時間に検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。PDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	
		中等教育開発科目	中等教科教育開発Ⅰ(国語)	高等学校の教科（国語）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた高等学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した高等学校教科(国語)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			中等教科教育開発Ⅱ(国語)	教科（国語）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校または高等学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。選択した教科（国語）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	
			中等教科教育開発Ⅰ(地歴)	高等学校地理歴史科の教科指導のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する演習を附属学校等の協力のもとで実施する。教科専門と教科指導法をつなぎ合わせた実践的な指導を行う。まず，実習の意義について考え，責任感と意欲をもって実習に臨む姿勢を身に付ける。次に，講義や演習を通して，実際の教育現場でのさまざまな学習指導（教材作り・授業作り等）方法を身に付ける。最後に，模擬授業を行うことで，教材開発・指導案の書き方等トータルな授業実践力を身に付ける。	
			中等教科教育開発Ⅰ(公民)	高等学校地理公民科の教科指導のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する演習を附属学校等の協力のもとで実施する。教科専門と教科指導法をつなぎ合わせた実践的な指導を行う。まず，実習の意義について考え，責任感と意欲をもって実習に臨む姿勢を身に付ける。次に，講義や演習を通して，実際の教育現場でのさまざまな学習指導（教材作り・授業作り等）方法を身に付ける。最後に， 模擬授業を行うことで，教材開発・指導案の書き方等トータルな授業実践力を身に付ける。	

（専門教育科目）	（教育実践開発科目群）	（中等教育開発科目）	中等教科教育開発Ⅱ(社会)	中学校社会科の教科指導のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する演習を附属学校等の協力のもとで実施する。教科専門と教科指導法をつなぎ合わせた実践的な指導を行う。まず，実習の意義について考え，責任感と意欲をもって実習に臨む姿勢を身に付ける。次に，講義や演習を通して，実際の教育現場でのさまざまな学習指導（教材作り・授業作り等）方法を身に付ける。最後に，模擬授業を行うことで，教材開発・指導案の書き方等トータルな授業実践力を身に付ける。	
			中等教科教育開発Ⅰ(数学)	高等学校の教科（数学）に関して，指導の立案や実践における教師の判断・考慮事項について推測ができること，また，それを指導に関する諸作法を利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた高等学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した高等学校教科(数学)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			中等教科教育開発Ⅱ(数学)	教科（算数・数学）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校または高等学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践的な演習を行う。選択した教科（数学）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に教科指導の資質・能力形成の進展を図る。	
			中等教科教育開発Ⅰ(理科)	高等学校の教科（理科）に関して，指導の立案や実践における教師の判断や考慮事項について推測ができること，また，指導に関する諸作法を習得し利用して自らの考えに基づいて表現できることを目指す。学校教育実習（主免実習）へ向けた高等学校の教科指導の資質・能力形成のために，授業分析や教材研究，授業立案を試行する体験的な演習を，附属学校等の協力のもとで実施する。選択した高等学校教科(理科)で，教科専門と教科指導法の講義の理解をつなぎ合わせた指導実務の検討・実施を意識して行動する。	
			中等教科教育開発Ⅱ(理科)	教科（理科）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校または高等学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。選択した教科（理科）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	
			中等教科教育開発Ⅱ(音楽)	教科（音楽）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。選択した教科（音楽）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	
			中等教科教育開発Ⅱ(美術)	教科（図画工作・美術）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。選択した教科（美術）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	
			中等教科教育開発Ⅱ(保健体育)	教科（保健体育）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。選択した教科（保健体育）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	
			中等教科教育開発Ⅱ(情報)	教科（情報）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。選択した教科（情報）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	

（専門教育科目）	（教育実践開発科目群）	（中等教育開発科目）	中等教科教育開発Ⅱ（技術）	教科（技術）の指導に関する自己課題の解決に向けてPDCAサイクルに基づく実践ができること，また，学校教育実習での課題に向き合い自己改善の意欲を持って活動に取り組めることを目指す。学校教育実習（主免実習）を終えて意識した，小学校での教科指導の資質・能力における自己課題の解決に向けて，中学校へ検討の場を移した上で，授業研究の視点を取り入れて実践演習を行う。選択した教科（技術）でPDCAサイクルによる指導実務の検討・実施・反省を通じて，体験的に資質・能力の形成の進展を図る。	
			中等教科教育開発Ⅱ（家庭）	授業では，子どもが直面する様々な生活課題を取り上げ，授業構想に向けた教材開発を諸科学を駆使して探究し，中学校家庭科の目的・内容・方法について検討します。家庭科が学びの対象とする私たちの生活は多面性をもち，多様に変化し，多くの現代的課題を抱えています。その理解に立ち，子どもの生活現実と発達課題に照らした家庭科の内容理解や教材研究を，個人・家族・地域・社会などの多様な関係における家族・家庭生活の実態と課題について，総合的・理論的・実践的に検討し探究することを目標とします。	
			中等教科教育開発Ⅰ（英語）	授業の到達目標は，教育実習を控え，授業で各領域を掘り下げて取り扱うことができることを目指す。英語教育の理論と実践を見通した上で，最新の知見を踏まえ教育実践ができる素地を養うことを目的とする。授業の概要は，理論として学んだ内容を教室実践で応用可能となるように実際の教科書を題材として扱い，授業での導入及び展開ができるように行う。	
			中等教科教育開発Ⅱ（英語）	授業の到達目標は，教育実習を終え，授業で各領域の扱い方を振り返り，学習者の理解を深める指導ができることを目指す。英語教育の理論と実践での経験を踏まえ，カリキュラムと教育実践との関わりを理解できる素地を養うことを目的とする。授業の概要は，教室現場で必要な授業題材の扱い方，授業で必要とする英語でのやり取りのあり方を，言語教育理論と実践との関わりを掘り下げて学んでいく。	
		学校教育実習の指導	学校教育実習の指導	教師が行う思考を理解して自らも実践での取り組みを表現できること，多様な子供達の成長に関心を持って関わりを持つ教職マインドを育むこと，生徒指導に関するスキル習得を意識し実践を通して獲得できることを目指す。学校教育実習（幼・小・中・高の主免実習，養護実習）へ向けて指導する立場へと入っていくために必要な実習前の準備と，実習後の振り返りで見出した自己課題の解決へ向けた探求や将来展望を体験的な学修で行わせる。なお，教科指導や養護活動に関する実践演習のための科目群や専攻科目群での学修による知見と関係付けながら展開することにより，スキル習得を効果的なものにしていく。	
		教育実習	学校教育実習（幼稚園）	幼稚園教育の実際について，①体験的・総合的な認識を得ること，②大学で習得した保育内容や教職に関する専門的な知識理解や理論，技術を幼児の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③保育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，幼稚園教諭としての能力や適性の自覚を得ることを主な目的とする。実習では教育実習の手引きを活用し，観察・参加・実習ごとに指導内容を定め，記録物の提出を求める。また，学修の評価は実習園とともに行い，各評価指標（子ども理解・幼稚園理解・指導計画・保育方法・実習態度）に関する評価が行われる。	
			学校教育実習（小学校）	小学校教育の実際について，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した教科や教職に関する専門的な知識理解や理論，技術を児童の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることを主な目的とする。実習では教育実習の手引を活用し，観察・参加・実習ごとに指導内容を定め，記録物の提出を求める。また，学修の評価は実習校とともに行い，各評価領域（生徒指導・学習指導・実習態度）に関する10の観点別評価が行われる。	
			学校教育実習（中学校・高等学校）	中学校・高等学校教育の実際について，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した教科や教職に関する専門的な知識理解や理論，技術を児童の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることを主な目的とする。実習では教育実習の手引を活用し，観察・参加・実習ごとに指導内容を定め，記録物の提出を求める。また，学修の評価は実習校とともに行い，各評価領域（生徒指導・学習指導・実習態度）に関する10の観点別評価が行われる。	
			学校教育実習（養護実習）	学校教育実習（小学校）と同様に，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した養護教諭の職務・役割や学校保健活動に関わる専門的な知識理解や理論，技術を児童の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることを主な目的とする。実習では教育実習の手引（養護実習編）を活用し，観察・参加・実習ごとに指導内容を定め，記録物の提出を求める。また，学修の評価は実習校とともに行い，各評価領域（生徒指導・学習指導・実習態度）に関する10の観点別評価が行われる。	

（専門教育科目）	（教育実践開発科目群）	（教育実習）	特別支援学校教育実習	特別支援学校教育の実際について，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した特別支援教育に関する専門的な知識理解や理論，技術を児童生徒の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることを主な目的とする。実習では教育実習の手引を活用し，観察・参加・実習ごとに指導内容を定め，記録物の提出を求める。また，学修の評価は実習校とともに行い，各評価領域（生徒指導・学習指導・実習態度）に関する10の観点別評価が行われる。	
			保育実習Ａ	実習は10月上旬に2週間，認可保育所において行う。入学後，初めての本格的な実習となる本実習では，保育所の生活・教育場面に実習生として参加することを通して，主として以下の２点について学ぶ。①乳幼児の成長・発達や生活の様子，遊び等への理解を深め，基本的な援助方法について学ぶ。②保育所の機能と保育士の職務・役割，保育士としての職業倫理等について学ぶ。具体的な実習方法は配属園によって異なるが，実習前には事前訪問を実施し実習に向けた打ち合わせと準備を行う。実習初日からは各配属クラスで保育に参加し，遊びや生活場面の援助や，絵本・紙芝居・手遊び等の実習の他，40分程度の部分実習を指導案を作成して実施する場合もある。実習終了後は実習記録の提出を行う。	
			保育実習指導Ａ	保育実習Ａを効果的に実施するための事前事後指導を行う。保育実習Ａは，入学後に初めて本格的に行う保育所実習であるため，事前に様々な内容を学習し準備しておく必要がある。内容を大別すると，①保育所実習の目的・内容等に関する事項，②保育所の生活の理解と子どもへの基本的な援助に関する事項，③保育における遊びに関する事項，④記録作成・指導案作成に関する事項，⑤事務的な手続き・書類作成に関する事項，⑥実習生としてのマナーや基本的注意事項等である。実習後は事後指導としてグループで事例を検討する等，経験を振り返るとともに自己課題を明確化する。	
			保育実習Ｂ	児童福祉施設の役割や機能に実際に理解する。観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深める。既習の教科目の内容をふまえて，子どもの保育及び保護者への支援について総合的に理解する。保育の計画・観察・記録及び自己評価について実際的に理解する。施設保育士の業務内容や職業倫理について理解する。具体的には，施設における子どもの生活と施設保育士の援助や関わり，子どもの観察とその記録による理解，子どもの発達過程の理解，子どもへの援助や関わり，保育の計画に基づく保育内容，子どもの生活や遊びと保育環境，子どもの健康と安全，記録に基づく省察・自己評価，施設保育士の業務内容，職員間の役割分担や連携・協働，施設保育士の役割と職業倫理を内容とする。	
			保育実習指導Ｂ	施設実習の意義・目的を理解する。実習の内容を理解し，自らの実習の課題を明確にする。実習施設における子どもの人権と最善の利益の保障，プライバシーの保護と守秘義務について理解する。実習の計画・実践・観察・記録・評価の方法や内容について理解する。実習の事後指導を通して，実習の総括と自己評価を行い，今後の学習に向けた課題や目標を明確にする。具体的には，施設実習の目的，実習の概要，実習の内容，実習の課題，子どもの人権と最善の利益の保障，プライバシーの保護と守秘義務，実習生としての心構え，実習における計画と実践，実習における観察，記録及び課題の明確化，事後指導を通して実習の総括と自己評価を内容とする。	
			保育実習Ｃ	各地域保育所において，２週間の期間，乳幼児への援助の「ねらい」「内容」のもち方，活動の準備・実践・展方法，指導案の作成方法，子育て支援活動などについて実習する。特に，参加実習・指導実習（責任実習）の実施を通して，保育士の職務についての理解を深め，保育実践力の向上を目指す。評価の観点は，①保育所の役割や機能の具体的展開，②観察，づく保育理解，③子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会等との連携，④指導計画の作成，実践，観察，記録，評価，保育士の業務と職業倫理，⑤自己の課題の明確化，とする。	
			保育実習指導Ｃ	保育所実習Cへの事前・事後指導として，実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ，保育について総合的に理解し自己課題をもつ。事前事後指導を通して保育に対する課題や認識を明確にし，保育の実践力を習得する。特に参加実習・指導実習（責任実習）の実施に向けて，実習記録の書き方と深め方，仮想指導案の作成，模擬保育，研究保育の振り返りを通して保育内容を実践的に学修する。それらを踏まえ，保育士の職務についての理解を深め，保育実践力の向上を目指す。	
			小学校教育実習	学校教育実習（小学校）と同様に，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した教科や教職に関する専門的な知識理解や理論，技術を児童の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることという目的に加え，主免実習の経験を深化・拡充することを主な目的とする。指導内容や学修評価も学校教育実習（小学校）と同様だが，実習をより効果的なものとするため，小学校に特化した校種別の事前指導と事後指導を行う。	

（専門教育科目）	（教育実践開発科目群）	（教育実習）	中学校教育実習	学校教育実習（中学校・高等学校）と同様に，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した教科や教職に関する専門的な知識理解や理論，技術を児童の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることという目的に加え，主免実習の経験を深化・拡充することを主な目的とする。指導内容や学修評価も学校教育実習（中学校・高等学校）と同様だが，実習をより効果的なものとするため，中学校に特化した校種別の事前指導と事後指導を行う。	
			高等学校教育実習	学校教育実習（中学校・高等学校）と同様に，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した教科や教職に関する専門的な知識理解や理論，技術を児童の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることという目的に加え，主免実習の経験を深化・拡充することを主な目的とする。指導内容や学修評価も学校教育実習（中学校・高等学校）と同様だが，実習をより効果的なものとするため，高等学校に特化した校種別の事前指導と事後指導を行う。	
			中学校教育実習（保健）	学校教育実習（中学校・高等学校）と同様に，保健体育科の保健分野（科目保健）において，①体験的，総合的な認識を得ること，②大学で習得した教科や教職に関する専門的な知識理解や理論，技術を児童の成長発達に適用する実践的能力の基礎を形成すること，③教育実践に関する問題解決や創意工夫に必要な研究的な態度と能力の基礎を形成すること，④教育者としての愛情と使命感を深め，教員としての能力や適性の自覚を得ることという目的に加え，主免実習の経験を深化・拡充することを主な目的とする。指導内容や学修評価も学校教育実習（中学校・高等学校）と同様だが，実習をより効果的なものとするため，中学校に特化した校種別の事前指導と事後指導を行う。	
		教職実践演習	教職実践演習	本演習では，以下の四項目（①使命感や責任感，教育的愛情等に関する事項，②社会性や対人関係能力等に関する事項，③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項，④教科・保育内容等の的確な指導力に関する事項）について，少人数でのグループ討論・ロールプレイング等の実践を通じて，教職に必要とされる知識・技能を確認・修得していく。さらに，教育現場の現状に即した実践（適宜，模擬授業，学校見学等）を踏まえて，教育実践能力の基礎を確認，修得していく。	
			教職実践演習(養護)	本演習では，以下の四項目（①使命感や責任感，教育的愛情等に関する事項，②社会性や対人関係能力等に関する事項，③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項，④教科・保育内容等の的確な指導力に関する事項）について，少人数でのグループ討論・ロールプレイング等の実践を通じて，教職に必要とされる知識・技能を確認・修得していく。さらに，教育現場の現状に即した実践（適宜，模擬授業，学校見学等）を踏まえて，養護教諭として必要な教育実践能力の基礎を確認，修得していく。	
		卒業研究	卒業研究	大学での学修成果を基盤に取り組む卒業制作として，専攻・専修等の専門分野において個々の学生が課題意識に基づいて進める研究活動である。担当教員による継続的な指導により，先行研究資料の収集・読解，調査や作品制作の計画・実施，情報の分析・整理，成果発表や他者とのディスカッション，ゼミ学生相互の協働などのスキルを高める。研究課題の選定では，学校現場で実際に体感したことに基づく着想を重視し，実践力を高めることに資する分析が行えるものを研究対象に据えることを推奨する。卒業研究の発表形式は，論文の執筆か，または作品制作とその制作報告書の執筆とする。	
自由科目		学校図書館司書教諭科目	学校経営と学校図書館	現代の学校教育における学校図書館の位置づけを「学校図書館法」などの法令を学ぶ中で学校図書館の理念やその教育的意義，学校図書館が担う役割，教育活動の内容を理解する。また，教育行政と学校図書館の関わりを歴史的な背景やそれぞれの時代の政策から学ぶ。学校経営における学校図書館の位置づけ，学校図書館が機能するための資源や活動内容を，司書教諭の役割から考える。さらに学校図書館支援センターの取り組みなど，学校図書館ネットワークについても理解する。	
			学校図書館メディアの構成	学校図書館の基盤となるメディアには印刷メディア，視聴覚メディア，電子メディアがあり，それぞれのメディアがどのようなメディアであるのかその特徴や特性を理解する。そしてそのメディアの選択，収集，構成のしかたや学校図書館での効果的な配架のしかた，サインや展示について司書教諭の役割から考える。また，各メディアの目録，分類，件名についても知る。さらに学校図書館の機能と共に理解し，管理・運営の方法や活用のしかたについての利用指導も理解する。	
			学習指導と学校図書館	教育課程の展開に寄与する学校図書館にするために，司書教諭は学校図書館の体系的な活用と情報リテラシー教育を指導しつつ，探究的な学習活動を展開する役割を理解する。今までの「座学」という学習形態から自ら学ぶ学習形態に変わる必要性を理解する。また，生涯学習において，児童生徒が主体的な学習者になるよう，そのために必要な知識とスキルを身に付けるためのプログラムがどのようなものかを学ぶ。受講者自身が演習の中で，探究的な学習活動における，課題の設定，情報の収集，選択，新しい知識としての発信，共有などの学習プロセスの理解を深める。	

（自由科目）	（学校図書館司書教諭科目）	読書と豊かな人間性	子どもの読書離れが言われている現代において，読書教育の理念と方法を理解する。読書は子どもたちの心を育むと共に「読む」という行為を習慣づける重要な学びの基礎であると考え，読書指導や読書教育を学校教育の中にきちんと位置づけていく必要性を理解する。また，司書教諭は校種や子どもたちの発達段階に応じて読書環境としての学校図書館を整備することを理解する。さらに，国の政策に基づいて読書指導や読書教育を進め，地域社会とも連携して，子どもたちの読書を推進していく担い手としての司書教諭の果たす役割を生涯学習の視点を踏まえ理解する。	
		情報メディアの活用	「情報」とは何か，その媒体であるメディアを再確認し，学校図書館における多様な情報メデイアの特性と活用方法を司書教諭の役割と共に考える。また，高度情報社会における基本的なリテラシーである情報リテラシーの育成について，子どもたちの発達段階を考慮し，情報モラルも含めて理解する。さらに学校における探究学習と情報メデイアの活用のあり方について，課題設定，思考力，判断力，表現力の育成と共に生きる力を身に付け，生涯学習に繋ぐという学校図書館の役割を考える。	
	幼稚園教諭二種免許状取得科目	幼児教育課程論Ａ	幼稚園教育要領及び小学校教育との接続を踏まえ，各園において編成される教育課程と指導計画について，その意義や編成・作成方法を理解すると共に，各園の実情に合わせてカリキュラム・マネジメントを行う意義を理解することを目的とする。そのためにまず，幼稚園教育要領等の性格及び位置付けを知り，園において教育課程を編成することの意義や目的，社会的役割，機能等について学ぶ。また，編成の基本的原理や保育実践と教育課程・指導計画との関係性を理解し，保育内容等を組織的かつ計画的に編成・作成するための具体的な知識・技能を習得する。さらに，より質の高い保育に改善していくための記録及び評価方法とカリキュラム・マネジメントの考え方について理解を深める。	
		領域健康の指導法	領域健康（健康な心と体を育て，自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う）のねらい及び内容，育みたい資質能力について，その背景にある理論や現状の課題と関連させて理解を深める。具体的には，領域「健康」の全体構造，幼児期の生活習慣，保育場面における危険な場所，危険な遊び方，災害時などの行動の理解，多様な運動経験のための遊びなどの指導上の留意点，評価の考え方，小学校との連携を，実践の参観や観察，具体例を示した資料やICT教材をもとに理解する。それらを踏まえて，幼児の心情，認識，思考，動き等を視野に入れた指導案を作成し，模擬保育とその振り返りを通して，保育におけるPlan（計画） Do（実行）Check（評価）Act（改善）サイクルの意義と体得する。乳幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの実現の過程を踏まえた具体的な指導場面を想定して，指導方法及び保育を構想する方法を身に付けることを目指す。	
		領域人間関係の指導法	領域人間関係（他の人々と親しみ，支え合って生活するために，自立心を育て，人とかかわる力を養う）のねらい及び内容，育みたい資質能力について理解を深める。幼児は，自ら周囲の環境に働きかけて様々な感情を体験し，試行錯誤しながら自らの力で行うことの充実感を得るが，これらの行動は，教師との信頼関係が基盤となっていることを理解し，幼児と信頼関係を築くことの重要性について学ぶ。また，幼児同士が関わりを深めて協同的に遊ぶようになるため力を育成するにあたって必要な教師の関わりについて理解を深める。	
		領域環境の指導法	領域「環境（周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり，それらを生活に取り入れていこうとする力を養う）」のねらい及び内容，育みたい資質能力について理解する。具体的には，領域「環境」の全体構造，身近な動物・植物，自然，生活の中で様々な物，季節の変化，数量や図形，簡単な標識や文字，生活に関係の深い情報や施設などの教材開発，指導上の留意点，評価の考え方，小学校との連携を，実の参観や観察，具体例を示した資料やICT教材をもとに理解す。それらを踏まえて，幼児の心情，認識，思考，動き等を視野に入れた指導案を作成し，模擬保育もしくはフィールドワークとその振り返りを通して，保育におけるPDCAサイクルの意義と機能を体得する。	
		領域言葉の指導法	領域「言葉」の指導の基盤となる，幼児が豊かな言葉や表現を身に付け想像する楽しさを広げることができるために必要な，専門的事項に関する知識や理論を学ぶことを目的とする。言葉は乳幼児期に著しく発達するが，それには周囲の大人（保育者）との関わりが非常に重要である。その点を理解し適切な援助ができるようになる基盤として，まず，人間にとっての言葉の意義や機能，言葉の獲得や発達を支える様々な要因，日本語の特性等を学び，生涯にわたる人格形成の基礎が培われる幼児期の援助の重要性について理解する。さらに，言葉の感覚を豊かに育てる児童文化財等についても基礎的な知識や技術を学ぶ。	
		領域表現の指導法	領域「表現（感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。）」のねらい及び内容，育みたい資質能力について理解する。具体的には，生活の中で様々な音，色，形，手触り，動きなどに気付いて楽しんだり，様々な出来事の中で感動したことを伝え合う楽しさを味わったり，いろいろな素材に親しむとともに工夫して遊んだりする過程を実際に経験しながら，子どもたちの発達に応じた表現活動の内容，表現活動のための環境整備等について理解を深めていくとともに，表現活動に関する教材の開発，指導上の留意点，教育評価の意義と目的等についても学ぶ。	

（自由科目）	（幼稚園教諭二種免許状取得科目）	幼児と健康Ａ	領域健康の指導に関する，幼児の心身の発達，基本的な生活習慣，安全な生活，運動発達などの専門的事項についての知識を身に付ける。具体的には，乳幼児期の健康課題と健康の発達的意味，身体の諸機能の発達，乳幼児期の運動における体・心・環境の関連，生活習慣の形成，安全教育と健康管理，幼児期の運動発達の特徴についての基礎的な理論を理解する。それらを踏まえて具体的な事例と理論を関連づけて説明し，課題の発見や解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。	
		幼児と人間関係Ａ	領域人間関係の指導に関する理解と具体的な方法を学ぶ。幼児は，自ら周囲の環境に働きかけて様々な感情を体験し，試行錯誤しながら自らの力で行うことの充実感を得る。これらの主体的な行動は，幼児と教師との間に構築される信頼関係が基盤となっていることを理解し，幼児と信頼関係を築くことの重要性について学ぶ。また，幼児同士が相互に関わりを深めて協同的に遊ぶようになるため力を育成するにあたって必要な教師の関わりについて理解を深める。	
		幼児と環境Ａ	領域環境の指導に関する，幼児を取り巻く環境や，幼児と環境との関わりについて専門的事項における感性を養い，知識，技能を身に付ける。具体的には，乳幼児を取り巻く環境の諸側面（物的環境，人的環境，社会的環境）と発達における重要性，乳幼児期における物理的，数量・図形との関わり，生物・自然との関わり，標識・文字の環境，情報・施設への関わりにおける発達的特徴，また幼児期と小学校期の連携・接続の必要性と可能性やアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの背景と実際を理解する。それらを踏まえて，事例と理論を関連づけて説明し，課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを経験する。	
		幼児と言葉Ａ	領域言葉の指導の基盤となる，幼児が豊かな言葉や表現を身に付け想像する楽しさを広げることができるために必要な，専門的事項に関する知識や理論を学ぶことを目的とする。言葉は乳幼児期に著しく発達するが，それには周囲の大人（保育者）との関わりが非常に重要である。その点を理解し適切な援助ができるようになる基盤として，まず，人間にとっての言葉の意義や機能，言葉の獲得や発達を支える様々な要因，日本語の特性等を学び，生涯にわたる人格形成の基礎が培われる幼児期の援助の重要性について理解する。さらに，言葉の感覚を豊かに育てる児童文化財等についても基礎的な知識や技術を学ぶ。	
		幼児と表現Ａ	子どもたちを指導するにあたって必要な表現領域の内容を考察したり計画を立てたりできるような表現領域に関する指導能力の育成を目指す。子どもたちの表現活動の援助に必要な力を培い，基礎的知識や技能の習得と，保育者自身の表現力を高める。保育者として必要な視点や能力について学ぶことによって，実践的な能力を養う。子どもたちが感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにすることができるために，保育者として必要な表現力を高めるとともに子どもたちにとって必要な表現に関する知識の習得並びに指導できる能力の育成を目指す。	
		幼児の理解と指導Ａ	幼稚園教育を学ぶ際の基本となる幼児理解について，基本的な知識を学び，幼児に対する態度を身に付ける。具体的には，幼児の心身の発達の全体像と相互の関連について概観し，それをふまえた指導計画等についての理解を深める。また，幼児に特有の心的特性の発達過程を理解すると共に，その発達段階に基づいた，幼児同士の仲間関係の構築過程や具体的な在り様を知り，仲間関係の構築を支える教師としての役割について学びを深める。	
	社会教育主事	社会教育の基礎Ⅰ	社会教育，生涯学習，生涯教育などの基本概念を，実践に即して理解を深めることが第一のねらいである。そのために，社会教育施設・事業を見学・参加し，社会教育に関わる諸概念の具体的なイメージ形成を目指す。社会教育施設見学，社会教育実践への参加を取り入れた授業となるので，授業の会場は社会教育施設（豊田市，名古屋市等）で行う。	
		社会教育の基礎Ⅱ	生涯学習及び社会教育の本質と意義を力することを目標とする。生涯学習・社会教育における基礎的・歴史的な事項について理解するとともに，その背景にある生涯にわたる発達の権利の保障の意義を理解し，研究・実践の中核的価値として尊重することができるようになることを目指す。授業者が今後，生涯学習・社会教育学を学ぶにあたって必要となる，生涯学習・社会教育に関する理論，法・制度，実践に関する基礎的な事項を学ぶことを目的とし，講義・グループワーク・事例検討など多様な学習方法を用いる。	
		生涯学習支援論Ⅰ	多様な学習者の主体性を引き出す生涯学習支援の理論について考えを深める。また，多様な学習者の主体的な参画を促す生涯学習支援の実践的技法を追求する。生涯学習支援に関する教育理論，効果的な学習支援方法，参画型学習の実際とファシリテーション技法について，理論面の理解と実践面の検討の両面から学習することを通して，学習者の多様な特性に応じた学習支援に関する知識と技能を深める。	
		生涯学習支援論Ⅱ	多様な学習者の特性に応じた主体的な参画を促す生涯学習支援プログラム編成に関する知識と技能を深める。また，生涯学習の支援者に求められる力量形成のあり方について追求する。生涯学習支援の学習プログラムの編成と視点，学習支援者の力量形成について，理論面の理解と実践面の検討の両面から学習することを通して，多様な学習者の特性に応じた主体的な参画を促す学習支援の技法とプログラム編成に関する知識と技能とともに，そうした知識と技能とその形成についての視点について深める。	

（自由科目）	（社会教育主事）	社会教育経営論Ⅰ	社会教育・生涯学習事業の組織化において，多様な主体と連携・協働を図りながら，学習成果を地域課題解決や地域学校協働活動につなげていくための知識及び技能の習得を図ることを目的とし，特に事業の運営をめぐる基本的手法・戦略の理解を深めることを目標とする。社会教育職員が現場で求められる，実践や事業を組織・運営する力量を形成するために，事業運営の一連の流れと基本的手法・戦略を学ぶ。また，現代における社会教育の課題と社会教育職員の役割を考える。	
		社会教育経営論Ⅱ	社会教育・生涯学習事業の組織化において，多様な主体と連携・協働を図りながら，学習成果を地域課題解決や地域学校協働活動につなげていくための知識及び技能の習得を図ることを目的とし，特に自治体社会教育行政の経営と社会教育計画策定について理解を深めることを目標とする。自治体社会教育行政の機能，経営戦略を学ぶ。また，自治体社会教育計画の意義と一連の策定手順を学び，実践的にその手法を身に付ける。	
		社会教育特別講義	①「多文化共生」の基本概念を理解し，社会教育的視点から「多文化共生」の推進プランを提案できること，②グループワークを通じ，コミュニケーションおよび相互理解の能力を向上することを，目標とする。「多文化共生」に関わる行政やNGOの取組みを参考にしながら，「多文化共生」推進プランの策定を通じて，「多文化共生」推進にむけた社会教育の課題や可能性について考える。	
		社会教育実習Ⅰ	社会教育団体が実施する学齢期の子供を対象としたキャンプ活動に参加し，指導者としての実践的力量の形成を目指す。具体的には，事前研修や実習を通じて学齢期の子供たちの実相を知るとともに，自然体験活動の基礎的知識や技術を習得するほか，社会教育指導者に求められる指導方法及び安全管理の能力向上を目指す。	
		社会教育実習Ⅱ	社会教育実践の計画・実施・総括の全過程に参加することによって，社会教育の実践的課題について追究するとともに，実践的力量の形成を目指す。名古屋市昭和区役所で開催する「こどものまち」の取り組みの計画・実施・総括を通して「子どもにやさしいまちづくり」を目指すプログラムを実施する。準備は，名古屋市白金児童館を会場とし，当日は昭和区役所にて実施するが，必要に応じて学内でも打合せを行う。受講者は，子ども実行委員，児童館職員等と協働して「こどものまち」の計画，実施に取り組み，毎回実践記録を作成する。	
		社会教育演習Ⅰ	学習主体別に社会教育実践を学び，最終的に学習課題の把握から分析，学習者の特性に応じたプログラム構築ができるようになることを目指す。その際，グループワークやワールドカフェ，プレゼンテーションなどを通して，社会教育活動に携わるうえで必要となるファシリテーション応力やプレゼンテーション能力を身に付ける。学習主体として，子ども・障がい者・学齢超過者等を取り上げ学習を通した生活課題の解決とは何かについて考える。その中から学習主体を選択し，学習主体に応じた学習プログラムを編成する。	
		社会教育演習Ⅱ	社会教育活動に携わるうえで必要となる学習課題の把握・分析能力，学習者の特性に応じてプログラムを構築する学習環境設計能力を身に付ける。具体的には，若者（大学生）を学習対象者と設定し，学習課題の把握・分析から，学習プログラムの編成，実施，成果報告までを行い，社会教育活動に携わるうえで必要となるファシリテーション応力やプレゼンテーション能力を身に付ける。グループに分かれ，若者（大学生）を対象とした学習プログラムの企画立案からプログラム実施まで行い，成果報告会を開催し，相互評価する。	
	単位互換授業科目	海外教育演習	急速な勢いでグローバル化する社会では，複雑で相反する多様な価値観が存在する中，事実を丁寧に理解した上で，相互に寛容な姿勢をもって接することがすべての成員に求められる。とりわけ，次世代の市民を育てる学校教育においては，人権感覚や市民的資質を備えた教員や教育支援専門職の養成が不可欠となっている。そこで本授業では，次の４点を目標に授業を実施する。（１）「日韓の教員養成に必要な市民的資質とは何か」をテーマに受講生自身が問いを立て，問題意識をもって授業に参加する。（２）小学校等の教育機関での授業観察・実践，協議会を通して，子ども理解に努め，授業が果たす役割や意義について考察する。（３）現代の教育課題について日韓の共通点や差異点に着目しながらディスカッションを行い，他者との考え方の差異について吟味する。（４）日本の歴史文化体験を通して，異文化や歴史的な背景について理解を深める。	

（自由科目）	朝鮮語	朝鮮語Ⅰ	朝鮮語Ⅰでは韓国･朝鮮語の基礎段階（文字と発音，基本的な文法と表現）を総合的に学習していきます。まずハングル（韓国・朝鮮文字）の習得と運用能力（「読む」「書く」「話す」「聞く」）の向上を目指し，バランスのとれた語学力が身につくような形での指導をめざします。この言語は韓国，北朝鮮，中国東北地方，モンゴル，ロシアまで広がる広大な地域に使用人口が存在する言語ですが，本授業では大韓民国（韓国）での発音，綴りを中心に授業をすすめます。	
		朝鮮語Ⅱ	朝鮮語Ⅱは，朝鮮語Ⅰと同様，テキストをもとに授業をすすめます。ハングル（韓国・朝鮮語文字）と発音の仕方を確認しながら様々な文型と表現を学んでいきます。各課本文の会話練習，文型練習の応用としてパートナー練習もしていきます。また授業進度に合わせ，映像教材を用い，韓国の文化にも理解を深めていきます。授業で自分の好みやしたいことを表現する，自分のしたことを表現する，自分の予定や推測をいってみる，自分の気持ちや周りの様子を表現する，相手の意志を尋ねてみる，相手を誘ってみるなどです。	
	初習外国語Ⅲ	ドイツ語Ⅲ	ドイツ語Ⅲはドイツ語Ⅰとドイツ語Ⅱで勉強した文法を繰り返します。特にドイツ語を聞きとり，話せるようにします。教科書のパターンを見て，グループやパートナーと様々な会話をして，その上で正しく書き取りができるようにします。内容は自己紹介，家族，職業，数字，買い物，約束，趣味などがです。文法は動詞，名詞，助動詞，現在完了形などを勉強します。後半はドイツ語のプレゼンテーションの準備します。最終回は学生がドイツ語を話しながらプレゼンテーションをします。	
		フランス語Ⅲ	フランス語Ⅲは，フランス語Ⅰ・Ⅱで学んだことをもとに，様々なシチュエーションでの会話に対応できるようになることと，基本的な文法事項を完全に習得することを目指します。練習の合間にフランスの文化を学ぶことでフランスへの関心がさらに高まるような授業にしていきたいと思います。会話の台本を自分たちで作り，実際に会話の練習をします。そのなかで発音に磨きをかけ，文法の理解をさらに深めていきます。内容は買い物，注文，病院，薬局，家庭，交友などです。	
		中国語Ⅲ	中国語Ⅲは演習形式で行い，中国語の基礎を固め，中級程度の中国語力を身に付けることを目標とする科目である。中国語Ⅰ・中国語Ⅱで習得した発音と文法の基礎の定着をはかりながら，さらに語彙力を高め，より多くの表現を多様な場面で使いこなすことができるようになることを目指す。会話練習や文法・語法を理解するための練習問題，より高度な文章の読解，作文などを通じて，実践的な中国語の能力を身に付け，さらに中国の言語文化への関心を高める。	
		ポルトガル語Ⅲ	ポルトガル語Ⅲは，ポルトガル語Ⅰ・Ⅱで習得した初級レベルのブラジル・ポルトガル語能力を中級レベルに引き上げることを目的とする。具体的には，不完全過去形や完全過去形，未来形，口語表現などを学び，学校や地域など日常生活の中で使えるポルトガル語能力を身に付けることを目指す。授業では，受講生同士でペアを作り，練習を重ね，日常会話ができるように支援する。またポルトガル語でメール作成などを行うなど，実践力向上を図る。	
	日本語科目	日本語Ⅰ	上級レベルの学習者を対象に，「未解決」「非常識」「かぜ気味」「読みにくい」などの接頭辞や接尾辞，「出しきる」「話しかける」などの補助動詞の学習をとおして日本語の語彙力の向上をはかるとともに，「～したうえで」「～にさいして」「～における」など書き言葉的な語句や表現の使い方を練習しながら，論説文の読解能力を身に付けることを目標とする。また，会話体のテキストと論説文を読み比べることにより，日本語の話し言葉と書き言葉のちがいを習得することも目指す。	
		日本語Ⅱ	上級レベルの学習者を対象に，さまざまな分野の論説文を読みながら，日本語語彙力を向上させることを目標とする。特に専門的な漢語語彙（草食性，猿人，歯茎音など）や外来語固有名詞に注目し，漢字の音訓に関する知識を増やし，外来語のカタカナ表記の原理を習得することを目指す。また，受講者が論説文にふさわしい語彙や文体を用いて日本語で自分の専門領域，あるいは自分の国の文化について解説文を書けるようになることを目標に，作文の練習も行う。	
		日本語Ⅲ	日本における外国人労働者の受け入れの拡大や実態，少子高齢化，教育現場の課題，虐待，多文化共生社会に向けての取り組みなど，最近の社会問題等を新聞記事やニュースなどを使って取り上げる。それらの問題について，自分の国のデータを探して比較したり，違った見方で見るなどして，客観的に捉える力を養う。こうした社会問題について，自分の意見を論理的に述べたり，相手の意見を理解したり，質問に対して適切に答える練習を行う。	
		日本語Ⅳ	大学の勉学・研究に必要な日本語能力のうち，この授業では特に日本語の読解力と表現力の向上に重点をおく。日本語の新聞記事や一般書が自由に読めるような練習を行う。さまざまな文体や構文に慣れ，書き言葉を中心とした語彙・表現の習得と増強が，第一の目標である。また，読解した内容をまとめ，短い文章を書き，説明する練習を行う。さらに，ディスカッションや口頭発表をさせることにより，内容の理解を深めるようにする。このような訓練を通じて，大学でのアカデミック・スキルの習得を目指す。	

（自由科目）	６一コース専攻科目	6一教科横断型協働学習Ⅰ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。本授業ではその転換の方向として，「既存の領域を横断し，つなげる力」と「異年齢・異学年集団での協働する態度」の育成に注目する。 この二点を踏まえ，本授業では学部１年生から４年生までの４学年による協働学習の場を愛知県内のへき地学校に設定して，総合的学習の時間と関わらせて教科横断型授業を作る。学部１年次では，他学年とともに授業づくりに参加し，教科横断的な視点による授業づくりの基礎を学ぶ。本授業は集中形態で実施する。	
		6一ゼミナールⅡＡ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。本授業では，その転換に際して指摘されている課題の一つである「自ら考え抜く自立した学び・探求」の必要性に注目する。 具体的には，専門教科・領域の異なる授業者と受講生が，義務教育段階における各教科・領域における探求的な授業の先進事例を題材として対話し，「自ら考え抜く自立した学び・探求」に通底する要素や必要条件について考え，迫ることを目標とする。	
		6一ゼミナールⅡＢ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。学びの在り方を変革する上で，現状の課題として，基礎的な学力を確実に定着させる点が不十分であると指摘されている。また，家庭環境，情報環境の変化の中で，文章や情報の意味を理解し，思考する読解力に課題があるとの指摘もされている。 そこで，本授業では，Society5.0時代において，義務教育段階のすべての子ども達に求められる基礎的な力とは何かについて，専門教科・領域の異なる授業者と受講生が多様な問いを立て，対話を繰り返したり，テキストを精読することを通して考える。そのプロセスにおいて，自身の読解力や批判的思考力，コミュニケーション力を養う。	
		6一教科横断型協働学習Ⅱ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。本授業ではその転換の方向として，「既存の領域を横断し，つなげる力」と「異年齢・異学年集団での協働する態度」の育成に注目する。 この二点を踏まえ，本授業では学部１年生から４年生までの４学年による協働学習の場を愛知県内のへき地学校に設定して，総合的学習の時間と関わらせて教科横断型授業を作る。学部2年次では，他学年とともに教科横断的な視点による授業づくりに参加しながら，へき地校の現状を理解し，授業実践の意味づけができる感性や倫理観を養う。本授業は集中形態で実施する。	
		6一ゼミナールⅢＡ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。学びの在り方を変革する上で，現状の課題として，高等学校の多くの生徒が，特に第２学年以降，文系・理系に分かれ，特定の教科については十分に学習していない傾向があることが指摘されている。 そこで，本授業では，専門教科・領域の異なる授業者と受講生が，「文理分断からの脱却」や「学際的思考の必要性」について，対話や関連文献の読解などを通して考え，分野の枠にとらわれない学際的な思考力を養う。	
		6一ゼミナールⅢＢ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。学びの在り方を変革する上で，課題の一つとして，様々な学問分野において必要となる確率・統計や基礎的なプログラミングをはじめ，理科と社会の基礎的分野の確実な習得が不十分であると指摘されている。 そこで，本授業では，専門教科・領域の異なる授業者と受講生が，義務教育段階における教科横断的な授業の具体例を基に対話したり，関連文献を基に議論することを通して，「文理両方を学ぶ人材の育成」についての理解を深める。	

（自由科目）	（６一コース専攻科目）	6一教科横断型協働学習Ⅲ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。本授業ではその転換の方向として，「既存の領域を横断し，つなげる力」と「異年齢・異学年集団での協働する態度」の育成に注目する。 本授業では，この二点を踏まえ，学部１年生から４年生までの4学年による協働学習の場を愛知県内のへき地学校に設定して，総合的学習の時間と関わらせて教科横断型授業を作る。学部３年次では，自分の専門教科と他教科を総合的学習の時間と関わらせて教科横断型授業を作る中心者となり，他学年との話し合いの中で，板挟みとなる経験をしたり，想定外の事態と向き合ったりすることで，現実的な課題を調整する力を養う。本授業は集中形態で実施する。	
		6一ゼミナールⅣＡ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想されるしている。Society5.0に向けた学びの在り方を変革する上で，高校における文理分断の改善や，社会のニーズ及び国際トレンドを背景に，今後多くの学生が必要とするデザイン思考などの教育が十分に提供できるよう，大学における教育プログラムの見直しを促進する必要性が指摘されている。 そこで，本授業では，発散思考によって（実行可能・不可能を問わず）多くの解決を想像し，その後に収束思考によって最高の解決を選びとり現実化する「デザイン思考」に着目し，専門教科・領域の異なる授業者と受講生が，「デザイン思考による授業改善」をテーマに問いを立て，対話を繰り返すことを通して，実践的かつ創造的な問題解決もしくは解決の創造について，将来に得られる結果をより良くする力を養う。	
		6一ゼミナールⅣＢ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。学びの在り方を変革する上で，地元の自治体と高等教育機関，産業界と連携して，福祉や農林水産，観光などの分野が学習できるよう環境整備を行い，地域人材の育成を推進する必要性が指摘されている。 そこで，本授業では，地域に関する産業や文化等に関する特色ある事例を検討し，専門教科・領域の異なる授業者と受講生が，「地域の良さを学びコミュニティを支える人材の育成」をテーマに問いを立て，探究的な学びを通して，問題発見力や問題解決力を養う。	
		6一教科横断型協働学習Ⅳ	Society5.0の社会は，AI技術の急速な発達により，定型的業務や数値的に表現可能な業務はAI技術により代替可能となり，産業構造や働き方の変化を引き起こすことが予想される。現代の日本においても，Society5.0に向けた人材育成が求められており，学びの在り方の転換を図る必要性に迫られている。本授業ではその転換の方向として，「既存の領域を横断し，つなげる力」と「異年齢・異学年集団での協働する態度」の育成に注目する。 本授業では，この二点を踏まえ，学部１年生から４年生までの４学年による協働学習の場を愛知県内のへき地学校に設定して，総合的学習の時間と関わらせて教科横断型授業を作る。学部４年次では，教科横断的な視点による授業づくりのリーダーとして，1，２，３年生をチームとしてまとめるとともに，責任をもって遂行する力を養う。本授業は集中形態で実施する。	
	プログラミング教育	プログラミング教育の指導法	学校におけるプログラミング教育について，目的，意義，手法，評価方法について学ぶ。小学校プログラミングに関しては，低学年，中学年，高学年向けの指導についても理解する。また，中学校・高等学校へのシームレスなプログラミング教育についても理解を深める。プログラミング教育の低年齢化に伴う様々な問題点を理解するとともに，低学年向けに開発されたプログラミング環境や教育手法について学ぶ。いくつかのアンプラグドプログラミングを体験し，また，ブロック型のビジュアルプログラミング言語についても体験実習を行う。さらには，教科との連携を視野に入れたハードウェアについても理解を深める。	